

**カガヤン河下流域の考古学調査  
狩猟採集民と農耕民の相互依存関係の歴史過程の解明**

**Archaeological Research on the Lower Cagayan River  
- Study on the Historical Process of Hunter-Gatherer/Farmer Interdependent Relationship.**

**(課題番号：11691012)**

**平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金(基盤 A(2))研究成果報告書  
Report for the Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research)  
The Ministry of Education, Science, Sports and Culture**

**平成 14 年 3 月  
研究代表者 小川 英文  
東京外国語大学・外国語学部  
Hidefumi Ogawa  
Tokyo University of Foreign Studies**

## 研究組織

研究代表者	小川英文(東京外国語大学・外国語学部・助教授)
研究分担者	青柳洋治(上智大学・外国語学部・アジア文化研究所・教授)
研究分担者	小池裕子(理学博士・九州大学・大学院・教授)
研究分担者	松村博文(理学博士・国立科学博物館・人類研究部・研究官)
海外共同研究者	ウィルフレド・ロンキリオ(フィリピン国立博物館・考古学部門・部長)
海外共同研究者	ユセビオ・ディソン(文学博士・フィリピン国立博物館・考古学部門・首席研究員)
海外共同研究者	エンジェル・パウティスタ(フィリピン国立博物館・考古学部門・動物考古学科・主任研究員)
海外共同研究者	アマリア・デラ・トーレ(フィリピン国立博物館・考古学部門・主任研究員)
海外共同研究者	アメ・ガロン(フィリピン国立博物館・考古学部門・研究員)
研究協力者	田中和彦(上智大学・文学部・講師)
研究協力者	樋泉岳二(早稲田大学・文学部・講師)
研究協力者	奥野充(福岡大学・理学部・地質学科・助手)
研究協力者	山崎純男(福岡市教育委員会・文化財部・埋蔵文化財課・課長)

## 研究経費

平成11年度	6,200千円
平成12年度	5,600千円
平成13年度	5,900千円
計	17,700千円

## 間接経費

1,770千円	
計1,770千円	合計19,470千円

## 研究発表

### (1)学会誌等

青柳洋治(Aoyagi, Y.)

- 1999a 「南海の陶磁貿易」『季刊 考古学』66: 55-59
- 1999b 「陶磁貿易史からみた東南アジア」『入門東南アジア研究』: 75-87.
- 2001 「黒潮文化」『海のアジア』6、岩波書店
- 2002 「クメールとチャンパの陶磁 - 生産と流通」、第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『東南アジア考古学最前線』: 120-128、クバプロ

De la Torre, A.

- 2000a Preliminary Report of the Lal-lo, Cagayan, Archaeology Project: Clemente Irigayen Property Site (II-1995-O), Santa Maria, Lal-lo, Cagayan. 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』20: 67-110.
- 2000b Lal-lo, Cagayan Archaeology Project 2000. Typescript, Manila: National Museum.
- 2002 Cagayan Valley Archaeology Project 2001: Area A, San Lorenzo III Site (Siliban), San Lorenzo, Lal-lo, Cagayan. Typescript, Manila: National Museum.

Garong, A. M.

- 2001 Culture in Trash. An Archaeological Excavation of Conciso Property Shell Midden Site, Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley, Northern Philippines. 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』21: 120-145.
- 2002 Archaeological Exploration and Excavation in Cagayan Valley, Northern Philippines. Typescript, Manila: National Museum.

Garong, A. M. and T. Toizumi

- 2000 Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan. In Ogawa, H. (ed.) *Excavations of Lal-lo Shell Middens - Archaeological Studies on the Prehistory of the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines*: 50-78, Report presented to the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Tokyo.

三原正三、奥野充、小川英文、田中和彦、中村俊夫、小池裕子(Mihara, S., M. Okuno, H. Ogawa, K. Tanaka, T. Nakamura and H. Koike

- 2002 「フィリピン・カガヤン河貝塚群出土遺物のAMS<sup>14</sup>C年代」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』12: 205-213、名古屋大学年代測定総合研究センター、(AMS <sup>14</sup>C age of Cagayan shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines. In T. Nakamura (ed.)

*Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University* 12: 205-213, In Japanese)

小川英文 (Ogawa, H.)

- 1999a The Comparison between Southeast Asian and Japanese Shell Midden Sites. *Quaternary Journal of Archaeology* 66: 29-34. In Japanese. 「東南アジアと日本の貝塚の比較」『季刊 考古学』66: 29-34
- 1999b Archaeologist's Image Representation of Hunter-Gatherers in Southeast Asia. *The Japanese Journal of Ethnology* 63-2: 192-202. In Japanese. 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』63-2: 192-202
- 1999c Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学 (Journal of Southeast Asian Archaeology)』19: 93-114.
- 1999d Natural settings and Subsistence in Southeast Asia. In Institute of Asian Cultures, Sophia University (ed.) Introduction to Southeast Asian Studies, New edition: 23-35. Tokyo: Mekong. In Japanese. 「自然と生業」上智大学アジア文化研究所編『新版 入門東南アジア研究』: 23-35、めこん
- 1999e Southeast Asian Archaeology – its history and issues. In S. Yoshimura (ed.) *Ankhor and Borobudur*. Tokyo: Heibonsha. In Japanese. 「東南アジア 発掘の歴史と考古学の課題 - 「古代」への「あこがれ」がとり結ぶイデオロギーの磁場」、吉村作治編『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』: 75-89、平凡社
- 2000a Prehistoric Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers - special reference on the interdependency. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*: 266-295. Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese. 「狩猟採集社会と農耕社会の交流 - 相互関係の視角 -」、小川英文編『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店
- 2000b Introduction - Perspectives in Archaeology of Interaction. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*: 1-20. Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese. 「総論 交流考古学の可能性」、小川英文編『交流の考古学』: 1-20、朝倉書店
- 2000c Hunter-Gatherers. In M. Anzai (ed.) *Method and Theory in Archaeology Today* Vol.3: 131-141, Tokyo: Dohseisha, In Japanese. 「狩猟採集民」、安斉正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: 131-141、同成社
- 2000d Nationalism. In M. Anzai (ed.) *Method and Theory in Archaeology Today* Vol.3: 187-198, Tokyo: Dohseisha, In Japanese. 「ナショナリズム」、安斉正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: 187-198、同成社
- 2000e Civilization. In M. Anzai (ed.) *Method and Theory in Archaeology Today* Vol.3: 227-234. Tokyo: Dohseisha, In Japanese. 「文明」、安斉正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: 227-234、同成社
- 2000f (ed.) *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*. 269 pages. Report for the Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research) of The Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Monbusho). 『ラロ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査 -』文部省科学研究費報告書
- 2001 Archaeological Research on the Lal-lo Shell Middens and Chronological Context of the Sites. 「ラロ貝塚群の発掘調査とその年代」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』12: 6-16、名古屋大学年代測定総合研究センター、(Archaeological Research on the Lal-lo Shell Middens and Chronological Context of the Sites. In T. Nakamura (ed.) *Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University* 12: 6-16)
- 2002 「フィリピン、ラロ貝塚の人びとと暮らし」、第 15 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『東南アジア考古学最前線』: 22-33、クバプロ

田中和彦(Tanaka, K.)

- 1999a 「フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果」『季刊考古学』66: 75-78
- 1999b The Archaeological Excavation of Bangag I Shell Midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』19: 71-92
- 2000 Long Distance Trade and Process of Social Integration in the Philippine Lowland Society. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*. Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese. 「長距離交易とフィリピン低地社会の社会統合過程」、小川英文編『交流の考古学』、朝倉書店
- 2002 「フィリピン、ルソン島北部の土器」、第 15 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『東南アジア考古学最前線』: 34-45、クバプロ

樋泉岳二(Toizumi, T.)

- 1999 「Batissa childreni の季節的成長パターンと死亡季節査定の可能性(予察)」『東南アジア考古学』19: 57-69. (Identification of the Seasonal Growth Pattern and Death Season of *Batissa childreni*. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 19: 57-69, In Japanese)

## (2) 口頭発表

青柳洋治

- 2001 「クメールとチャンパの陶磁 - 生産と流通」、第 15 回「大学と科学」公開シンポジウム『東南アジア考古学最前線』、福岡イムズホール

小川英文

- 1999a 「東南アジアと日本の貝塚の比較」、東南アジア考古学会 第 23 回大会、東京大学
- 1999b 「東南アジア考古学：フィリピン・ベトナム・カンボジア」、早稲田大学オープンカレッジ
- 1999c 「歴史の回復としてのフィリピン考古学」、国際交流基金アジア理解講座「フィリピン」
- 1999d 「フィリピン出土の貿易陶磁」、町田市博物館
- 2000a 「フィリピン考古学」、早稲田大学オープンカレッジ
- 2000b 「フィリピンの先史時代」、山口県立萩美術館・浦上記念館
- 2000c 「フィリピン考古学」、世界考古学発掘アカデミー夏期講座
- 2001a 「ラロ貝塚の人びとの暮らし」、パネルディスカッション「東南アジアの考古学はおもしろい」、第 15 回「大学と科学」公開シ

- ンポジウム『東南アジア考古学最前線』、福岡イムズホール
- 2001b 「フィリピン、カガヤン州ラロ貝塚群の発掘調査と年代測定」、第13回名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウム特別講演、名古屋大学年代測定総合研究センター
- 2001c Archaeology and Archaeologists' Image Representation for the Past. Paper presented at the Tokyo Philippine Studies Seminar 2001. May 12, Sophia University.
- 三原正三(九州大)、奥野充(福岡大)、小川英文(東京外大)、田中和彦(上智大)、中村俊夫(名大)、小池裕子(九州大)
- 2000a 「フィリピン、ラロ貝塚群遺跡の14Cクロノロジーとその意義」Radiocarbon-chronology for Lal-lo shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines. 第四期学会、国立歴史民俗博物館
- 2000b 「AMS<sup>14</sup>C年代にもとづくフィリピン、カガヤン河貝塚群遺跡の編年」、第54回日本人類学会大会、東京大学
- 2001a AMS<sup>14</sup>C age of Cagayan shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines. 「フィリピン・カガヤン河貝塚群出土遺物のAMS<sup>14</sup>C年代」、第13回名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウム、名古屋大学年代測定総合研究センター
- 2001b 「AMS<sup>14</sup>C年代にもとづくフィリピン、カガヤン河貝塚群遺跡の編年」、第55回日本人類学会大会、京都大学
- 2001c 「フィリピン、カガヤン河貝塚群の<sup>14</sup>C年代測定および食性分析」、第四期学会、鹿児島大学
- 2002 「フィリピン、ラロ貝塚群の編年とAMS<sup>14</sup>C年代」、第14回名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計シンポジウム、名古屋大学年代測定総合研究センター
- 田中和彦
- 2001 「フィリピン、ルソン島北部の土器」第15回「大学と科学」公開シンポジウム『東南アジア考古学最前線』、福岡イムズホール

### (3) 出版物

- 小川英文
- 2000 「書評『八重山の考古学』」、『季刊考古学』72: 89
- 2001a 「フィリピン民族博物館」、大野拓司・寺田勇文編『現代フィリピンを知るための60章』:55-60、明石書店
- 2001b 「都市と地方の生活」、大野拓司・寺田勇文編『現代フィリピンを知るための60章』:106-109、明石書店

## 緒言

本報告書は、平成11年度から13年度の3年間における、フィリピン、ルソン島北東部カガヤン河下流域所在ラロ貝塚群を中心とする遺跡群の考古学調査の成果である。本調査の目的は、フィリピン、カガヤン河下流域の考古学調査によってまず当該地域編年体系を精緻化し、さらに自然環境の変化を捉えることによって生業の基本的条件を確定すること。そして民族考古学の方法をもちいて農耕開始以降から現在に至るまでの狩猟採集社会と低地社会(農耕社会・貝採集社会)の相互依存関係の歴史過程を解明し、文明へとは向かわなかった狩猟採集社会の人類史の一面を明らかにすることである。

東南アジアにおける狩猟採集社会が今日に到るまで現存するという問題は、人類史の大きな課題として長い間取り組まれてきた。かつては他集団からの隔離によって「石器時代の生き残り」として説明されてきたが、最近では狩猟採集社会と農耕社会間の経済的・社会的・政治的相互依存関係によってこの問題を説明しようとするモデルが提示されている。調査地域にはイタ族と呼ばれる狩猟採集民が現在もカガヤン河下流域に接する丘陵地帯を基盤とし、農耕社会との相互関係をもちながら生活している。これら両社会の関係が歴史的にどのくらい古いものであり、歴史の過程においてどのように変化してきたかを明らかにし、狩猟採集社会の歴史がなぜ、文明へとは向かわなかった、人類史の別の一面となったのかという問題を解明するには、人類の過去の問題を総合的に取り扱う考古学の方法が必要不可欠である。

それでは狩猟採集社会と農耕社会の相互依存関係の歴史を解明するためにはどのような考古学的アプローチが必要であろうか。そのためにはまず当該地域の遺跡全体を総合的に調査する必要がある。そこで80年代後半からカガヤン河下流域に点在するラロ貝塚群の分布・発掘調査を開始し、それぞれの遺跡から出土する遺物の編年体系構築の基礎研究を行った。しかし従来の東南アジアにおける考古学調査では、ひとつの遺跡を集中的に調査することはあっても、ひとつの地域全体に分布する遺跡すべてを総合的に調査した例はほとんどない。本研究は東南アジア考古学における方法論自体にも新たな方向性を提起することによって、研究目的を達成しようとするものである。広範囲な地域全体に分布する遺跡の調査という方法に基づいて、低地と山地の遺跡群をそれぞれ分布・発掘調査し、古地形と古環境調査によって先史時代の生業活動の基本的条件を確定する。さらに現在の狩猟採集社会と農耕社会の相互関係に焦点を当てた民族考古学調査の結果を総合することによって、狩猟採集社会がはたして外部世界から隔離されてきたのか、あるいは相互依存をもちながら共に社会変化を繰り返してきたのかという問題を考古学的に検証し、どのような要因が狩猟採集社会に農耕社会との関係を保ちながらも、文明とは異なる道を歩ませたのかを解明するという研究成果が期待される。

こうした目的のもと、まず平成7年度から3年間科研費によってカガヤン河下流域40km四方の調査を行った。調査にあたっては、フィリピン国立博物館・考古学部門・部長のロンキリオを中心とする調査隊が編成され、われわれ日本人がこの調査隊に参加した。その結果、カガヤン河の河岸段丘上貝塚、内陸低地貝塚、石灰岩台地上洞穴などの立地条件の異なる遺跡の発掘調査を行い、出土土器の編年体系の精緻化により、遺跡ごとの年代推定が可能となった。さらに地質・生態調査の結果を加えて、遺物や遺跡立地に時代ごとの消長パターンを見出すことができた。この調査によって構築された編年試案は、有文赤色土器 無文赤色土器 有文黒色土器 無文黒色土器である。しかし発掘調査によって実際に検証された各文化層の先後関係は、無文赤色土器 有文黒色土器、そして無文赤色土器 無文黒色土器の二者関係のみであった。

本報告のベースとなった平成11年度から13年度の3年間にわたる科研調査では、引き続きカガヤン河下流域両岸に位置する河岸段丘上の貝塚遺跡内に営まれた集落址、墓地遺跡の発掘調査を継続するとともに、東岸内陸10kmに位置する洞穴遺跡群の分布・発掘調査をとおして人工・自然遺物資料を比較検討し、それぞれの遺跡と遺物を編年の枠組に組み込みながら、狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の歴史過程解明を試みた。

カガヤン河東岸の貝塚調査では、カタヤワン貝塚コンシソ遺跡で貝層形成過程の再構成のための発掘調査をより広範囲に、貝層最下層までより深く実施した。西岸ではサンロレンソ貝塚シリバン遺跡を900㎡にわたって広範囲に発掘し、貝層廃棄パターンの解明に努めると同時に、3期にわたる埋葬形式の変遷を捉えることができた。すなわち土器を副葬する伸展墓葬 陶磁器を副葬する伸展墓葬 甕棺墓葬である。またラロ貝塚群南北端の未調査貝塚の分布調査、発掘調査を継続し、これらの貝塚の年代をこれまでに完成されている編年体系に組み込んだ。発掘調査をあらたに行った貝塚遺跡には、東岸南部のドゥモン貝塚ガエラン遺跡、西岸南部のアグネタン貝塚、東岸のラロ・セントロ貝塚、同ドゥゴ貝塚コルテス遺跡、西岸のサンロレンソ貝塚ミラフエンテ遺跡(埋葬址)、カトゥガン貝塚ドンブリケ遺跡、同マラナウ貝塚、同ファブリカ貝塚、そして東岸内陸低地のダラヤ貝塚があげられる。これら貝塚の発掘に先立っては、発掘区設定のために貝層深度を確認したが、これは同時に貝塚全体の貝層堆積の実態把握に役立つことになった。

ドゥモン貝塚ガエラン遺跡では赤色スリップ土器と剥片石器が共に出土する貝層と、その下の剥片石器のみが出土するシルト層が確認された。赤色スリップ土器片は文様をもつものが確認されていないが、出土した Bowl Type 土器の口縁形態はマガビット貝塚の有文赤色スリップ土器群の Bowl Type 口縁に類似しており、本遺跡の剥片石器から土器への変化を考慮すると、ラロ貝塚群における赤色スリップ土器出現の様相を知ることができ、得たことになる。

西岸南部のアグネタン貝塚では河岸段丘面から 1.5m 深度で厚さ 30cm の貝層が河岸 50m にわたって広がっていることが発掘と断面観察で確認された。この貝塚からは無文黒色土器の完形品が採集されていることから、発掘で確認できなかったが、これまでサンロレンソ、サンタマリア、カタヤワン貝塚貝層下のシルト層中で検出された伸展葬墓と同時期の埋葬址が存在するものと予測される。

東岸のラロ・セントロ貝塚はかつてスペインの北部ルソン島経営の中心が置かれ、ヌエバ・セゴビアと呼ばれていた都市が建設されていた場所にあたる。その後、植民地経営の中心はルソン島西岸のピガンや現在のカガヤン州都トゥゲガラオに移り、現在ではかつての政治的・経済的・宗教的中心の面影を残すのみとなっている。ここでは市街地のなかでの調査となり、スペイン期のレンガ壁体や現在の住宅を避けながらの発掘となった。貝層は 3 m 近くにおよぶ深度をもち、当初予想したサンタマリア、カタヤワンなどの大規模貝塚に特有の無文黒色土器ではなく、有文黒色土器を出土することが明らかとなった。

またドゥゴン貝塚コルテス遺跡の調査では、長さ 400m にわたる規模をもつ貝塚であることがボーリング調査で明らかとなったが、幅は他の大規模貝塚(サンタマリア、カタヤワン、ラロ・セントロ)とは異なって 50m と狭く、短期間のうちに貝が河岸から川に向けて廃棄された様相をうかがうことができた。このことは同時に幅が 100m 以上確認されている大規模貝塚の形成過程を考える上で貴重な調査となった。また出土土器は有文の黒色土器であった。

西岸のカトゥガン貝塚ドンブリケ遺跡の再発掘では、貝層から出土する土器が有文の黒色土器であることが確認された。これまでの調査結果では、貝塚下層から有文黒色土器、上層から無文黒色土器が出土し、2 枚の文化層が 1 つの遺跡で確認できる貝塚との認識をもっていた。しかし本報告にもあるように、カタヤワン貝塚コンシソ遺跡出土の無文黒色土器の分析結果とドンブリケ遺跡の出土土器を比較すると、ドンブリケ遺跡は有文黒色土器のみを出土する貝塚であることが明らかとなった。また西岸ファブリカ貝塚では河岸段丘上に段丘面比高 3 m、径 20m の貝層マウンドが 3 基確認されており、ラロ貝塚群中にはこれまで見られない貝塚形成の様相を確認することができた。

カガヤン河東岸を遡り、調査地域の南限を知るための分布調査によって、シルト層から無文赤色土器を出土するラプガン遺跡を確認し、さらに南のナシピン遺跡では河岸段丘上で陶磁器、土器を表採することができ、16、7 世紀の埋葬址の存在を予測することができた。当該遺跡はカガヤン河とチコ川との合流地点にあたり、先史時代から交通・交易の要衝であったことがうかがわれる。

カガヤン河東岸の丘陵地における洞穴・開地遺跡の調査に関しては、遺跡の分布調査を継続したが、未だ 1ヶ所の洞穴遺跡しか人間居住の証拠を示す遺跡を発見していない。今後、洞穴管理を行っている天然資源省(DENR)の協力の下に調査を継続する計画である。

発掘を中心とする調査に併行して、自然科学的調査も小池裕子を中心として継続している。人骨を資料とする安定同位体による古食餌研究と動物骨を資料とする C14 年代測定は発掘件数の増加と共にその重要性が増している。カガヤン河下流域全体の古環境、生業に関する調査では、当該地域の古地形の復元調査を継続中である。また貝採集社会の生業基盤としての稲作の存在を予測し、貝塚遺跡の後背低地において、古水田面を検出する調査を行っている。すでに貝塚遺跡のすぐ背後で、3ヶ所の発掘が行われ、複数枚の古水田面を検出した。各水田面からはプラントオパール(植物化石)の分析資料を採取し、稲作が行われていた検証作業を続けている。動物考古学者は貝層から出土する骨の同定作業を継続している。貝層のウォーターセパレーション、フローテーション作業を経て検出された植物遺体については、未だ同定作業が進んでおらず、同定可能な研究者、研究機関を探している段階にある。

本報告は以上のような 3 年間の調査成果をふまえ、研究を分担した人びとそれぞれが抱えた問題点を議論・整理し、過去 3 年間に公刊した論文や報告をまとめたかたちとなっている。最後になったが、本報告をまとめるために、これまで 3 年間にわたる調査をわれわれに継続させてくれたフィリピンと日本の多くの方々へ深く感謝する次第である。そのお陰をもってこれまで 15 年にわたるラロ貝塚群の調査が可能となり、フィリピンと日本の考古学者が共に同じ遺跡を発掘し、多くの成果を共有することができた。その成果は今後の調査に活かされ、さらに多くの知見を共有できることが期待される。(小川英文)

## CONTENTS 目次

黒潮文化 Prehistoric Cultures along Black Current	青柳洋治 Aoyagi, Y.	1
Culture in Trash. An Archaeological Excavation of Conciso Property Shell Midden Site, Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley, Northern Philippines	Garong, Ame	11
Archaeological Exploration and Test Excavation in Cagayan Valley, Northern Philippines	Garong, Ame	33
Lal-lo, Cagayan Archaeological Project 2000: Archaeological Exploration of Sites	De La Torre, Amalia	69
Chronological Study on the Red-slipped Pottery of Lal-lo Shell Middens	Ogawa, Hidefumi	79
Chronological Context of Non-Decorated Black Pottery Phase of Lal-lo Shell Middens - Analyses of the Black Pottery from Conciso Site in the Lal-lo Shell Middens	Ogawa, Hidefumi	103
AMS <sup>14</sup> C age of Cagayan shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines	Mihara, S., M. Okuno, H. Ogawa, 117 T.Tanaka, T. Nakamura, T. H. Koike	
考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ	小川 英文 Ogawa, H.	125
東南アジア 発掘の歴史と考古学	小川 英文 Ogawa, H.	133
東南アジアの自然と生業	小川 英文 Ogawa, H.	139
東南アジアと日本の貝塚の比較	小川 英文 Ogawa, H.	147
フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果	田中 和彦 Tanaka, K.	153
交流考古学の可能性	小川 英文 Ogawa, H.	157
フィリピンにおける交易時代研究の展開 - 長距離交易と複合社会の発展 -	田中 和彦 Tanaka, K.	165
狩猟採集社会と農耕社会の交流：相互関係の視角	小川 英文 Ogawa, H.	183
狩猟採集民	小川 英文 Ogawa, H.	199
ナショナリズム	小川 英文 Ogawa, H.	203
文明	小川 英文 Ogawa, H.	209
ラロ貝塚群の発掘調査とその年代	小川 英文 Ogawa, H.	213
フィリピン民族博物館	小川 英文 Ogawa, H.	221
都市と地方の生活	小川 英文 Ogawa, H.	223
Archaeology and Archaeologists' Image Representation for the Past. 考古学、考古学者そしてそれらが表象する過去	Ogawa, Hidefumi	225

## 黒潮文化

Prehistoric Cultures along the Black Current

青柳洋治 Aoyagi, Yoji

ヒトと文化の移動の媒体として海流の果たす役割は小さくない。なかでも、日本列島と黒潮との関係は、太古の昔から切っても切れない関係にある。常時南から北へ流れる黒潮が、南方系文化を日本列島に運ぶ通路となりえたとしても不思議ではない。しかし、はたしてそうであろうか。ここでは、日本基層文化にみられる南方的文化要素に黒潮ルートがどのようにかかわっているかを考えてみたい。

まず、黒潮の流れを追ってみよう(図1)。黒潮は、熱帯太平洋の北緯10度あたりを東から西へ流れる北赤道海流の延長上にある。この北赤道海流がミクロネシアの島々を洗ったのち、フィリピンのルソン島東岸に触れて北転する。北転するあたりの強い海流が黒潮の直接の源とみなされている。

フィリピン東方沖で誕生した黒潮は、北進してバシー海峡を通過し、台湾東岸沿いに進み東シナ海に入る。その流れは南島(八重山諸島、宮古諸島、沖縄本島、奄美諸島)西岸沿いをさらに北進する。奄美大島の北西で日本海に入る対馬海流を分岐したのち、本流は種子島、屋久島の南、トカラ列島あたりで東に方向を変える。トカラ海峡から太平洋岸に出て、九州、四国の東岸を洗い、潮岬の南を通り、伊豆諸島の御蔵島と八丈島の間を抜け、房総半島の犬吠崎沖へと、時には流速4ノットの速さで強く流れる。犬吠崎沖から日本沿岸を離れて、さらに北東に進み、北太平洋海流に移行し、アメリカ大陸におよんでいく。

このように雄大な黒潮海流のうち、本章では、黒潮本流の洗うルソン島、台湾、南島、九州、四国、本州を黒潮列島とよび(図2)、黒潮列島の諸地域にみられる南方の植物や動物、またはヒトの眼にみえる文化と眼にみえない文化を黒潮のベルトにのせてみよう。特に黒潮列島の文化基地というか、根っこにあたるルソン島を通して、東南アジア島嶼部にも眼をむけてみたい。

### 1. 柳田国男と「海上の道」

日本基層文化の南方的要素のひとつとして、稲作がある。稲作の日本への渡来ルートをめぐっていくつかの説があるが、黒潮列島の島伝いに伝わったとするいわゆる南島経由を提唱したのは柳田国男である。柳田が、稲作と稲作をめぐる信仰の渡来ルートとしての「海上の道」説を唱えたのは1950年代の初めである。国分直一の考証によると、それは、柳田がまだ大学の2年生、つまり1897(明治30)年の夏、三河の伊良湖岬の突端に遊んだとき、いわゆる「あゆの風」に吹きよせられた椰子の実をみて以来、半世紀を超えて胸にはぐくみ、あたため続け、晩年の情熱を傾けて展開してみせた稲の伝来をめぐる仮説であった[国分、1976]。佐々木高明は、柳田の仮説の要旨を次のように簡潔にまとめている。

島国である列島への最初の移住が漂流、漂着であったこと。漂着のあと宝貝の産することを知ったこと。宝貝の魅力にひかれ、再び大陸から南島へ移住したこと。南島へ移住してきた日本人の祖先は稲をたずさえてやってきたこと。

彼らは稲の栽培適地を求めて、南東の島々を北上し、日本本土に達したこと。彼らは海の彼方にニライカナイと呼ぶ浄土の存在を考える海洋民的来世観をもつこと。稲の産屋を建て、稲の魂の再生を祈る祭りや信仰を有していたこと[佐々木、1997]

だが、現在までのところ、日本への稲作の渡来が問題となる時期、つまり縄文晩期から弥生期のコメなどの考古学的遺物が南島からは発見されていないこともあり、南島経由説は支持されてこなかった。しかし、国分直一は、南島にみられる踏耕(蹄耕。家畜の踏みつけによる水田の準備)などの東南アジアの島々とながら稲作技術が黒潮列島を北上していた可能性に古くから注目している[国分、1972]

近年、農学者の渡部忠世は、アジア各地での精力的なフィールドワークに基づいて、インドネシア、フィリピン、台湾など熱帯島嶼域を主な分布とするブル系の稲を八重山の在来種の中に見出した。しかもこの品種が南島を北上し、日本本土に達した時期は、「縄文晩期をさらにさかのぼる時代」と主張する[波部、1987]

ブル系の稲とは、インディカでもジャボニカでもなく、ジャワ島に多いためジャバニカ *Javanica* と呼ばれることもある品種で、日本では赤米として知られる。その痕跡は、たとえば、種子島の宝満神社の神田で栽培される稲にいまもみることができる[波部、1987、佐々木、1997]。渡部忠世説は、日本に連なる幾本もの「稲の道」のうち、最古のものとし



て、柳田国男がロマンの香り豊かに想定した黒潮列島經由説を改めて考えさせるものがある。

また最近では、栽培種の遺伝学の立場から、稲作の日本への渡来経路をめぐって、「海上の道」説を再考する必要が唱えられている。佐藤洋一郎は、稲の遺伝的な多型性や遺伝子の地理的分布に関する遺伝学上の研究成果から(図3)、Hwc-2と hwc-2 という二つの遺伝子が日本の稲作の系統を考えるうえでマーカーになるという。そして日本の在来品種には、Hwc-2 が九三%、hwc-2 が七%という割合で混在している。これらの遺伝子の分布を追求すると、日本の在来種の大部分を占める Hwc-2 の遺伝子をもつ温帯日本型の稲(従来のジャポニカ型稲)は、長江下流域から朝鮮半島南部と日本列島に分布している。他方、hwc-2 の遺伝子をもつ熱帯日本型の稲(従来のジャバニカ型稲)は、インドネシアやフィリピン、琉球列島に存在しており、熱帯島嶼(フィリピンや琉球列島を含む)を経て、九州南部に伝わったと主張する[佐藤、1990]。

このように、日本の稲作にとって、決してメインの流れではないが、黒潮列島を経由する稲作の流れを読みとることができる。しかし、いつ頃日本に伝来したか、時間の深さが課題として残っている。

## 2. 黒潮列島の考古学一見えてきた広がり

### フィリピン考古学の発展

フィリピン考古学の曙はスペイン統治下時代まで遡る。その後、1901年にフィリピン国立博物館が開設され、この研究機関を通じて、はじめのうちは多くの人類学者によって非キリスト教徒グループの民族誌的な調査・研究が行われた。考古資料も集められていたが、考古学に関する本格的な取りくみはペイヤー H. O. Beyer の研究活動によって始まった。1920年代のことである。その後、ソルハイム W. G. Solheim、フォックス R. B. Fox、エヴァンゲリスタ A. E. Evangelista などの精力的調査活動によって発展してきた。

スペイン勢力進出以前のフィリピン文化の歴史的枠組みは、ペイヤーやフォックスの発掘資料を基礎にして編年されている。大枠は、旧石器時代(数10万年前から1万年前)、新石器時代(1万年前から2000年前)、金属器時代(2000年前から1000年前)、陶磁器時代(交易の時代ともいう。9世紀から1521年)の四期に大別される。

この編年のうち旧石器時代の文化要素は更新世に遡る。カバルワ型石器、リワン型石器、タボン型剥片石器である。

カバルワ型石器とは、ルソン島北部カガヤン渓谷西部カバルワ段丘(図4)で、1950年代にフォン・ケーニヒスワルト von Koenigswald によって発見された礫石器(チョッパー、チョッピング・トゥールの類で、河原石のような石の塊の一部を打ちかいて刃をつけた石器)である。カガヤン渓谷のカバルワ段丘は、古くから象や犀の化石骨が見つかる地域として知られていた。ジャワ人(ピテカントロプス二号)の発見者としても著名なケーニヒスワルトは、何度かカガヤン渓谷を踏査し、更新世中期の「標準化石」であるステゴドン象の歯や他の大型獣の化石骨と共に石器類も集め、これらの石器を更新世中期のカバルワ型石器として報告した。しかし、化石人骨は未発見に終わった。

その後、1970年9月、カバルワ段丘上のリワン地区の住人から、大雨のあとの崖崩れで「巨人の骨」が見つかったという連絡が国立博物館に届いた。国立博物館は3人の研究員を同地に派遣した。「巨人の骨」は象の骨であったが、このとき、リワン地区に新たに大型動物の化石骨や石器の散布地を多数発見した。散布地のひとつ、マドリガル放牧地区で採集した遺物は、動物化石として、象・ステゴドン象・犀・ワニ・大亀・猪・鹿を認め、石器は、礫石器(56点)使用痕のある剥片石器(60点)および剥片の破片(361点)を数えた。この地区からはケーニヒスワルトが報告した石器と同類のチョッパー、チョッピング・トゥールの礫石器も含まれるが、他に大量の多様な剥片石器が存することが判明した。調査者のフォックスは、この地区の石器の文化的特徴を少量の礫石器と大量の剥片石器からなる石器文化としてとらえ、遺跡名(リワン遺跡)にちなんで、リワン型石器文化と名づけた。その後、国立博物館は象の解体場と考えられるエスピノサ第四地区、剥片の破片が大量に散在していることから剥片石器製作址と考えられるエスピノサ第一地区の組織的な発掘調査を実施した。しかし、同一地層で動物の化石骨と石器の共存関係(同時存在)を確認するまでには至らなかった。また化石骨や石器の出土する地層そのものの年代や地層全体の中の位置づけも課題として残った。

タボン型剥片石器文化とは、パラワン島のタボン洞穴群遺跡(図4)出土の石器組成を指し、更新世後期から完新世初期にかけてのころの剥片石器文化である。この石器文化に類似する文化要素は、黒潮列島の台湾や奄美大島、徳之島の同時期の遺跡からも近年報告されている(後述)。

タボン洞穴はパラワン島西海岸ケソン区のリブウン岬にある洞穴群のひとつで、フィリピン国立博物館が1962年以来、調査を続けている遺跡である。岬の突端部周辺はところどころ石灰岩の岩肌が露出し、注意してみると海上からも、高いところにタボン洞穴、低いところにグリ洞穴の開口部をみることができる。少し離れたドゥヨン洞穴を含めてすでに 30

基以上の洞穴遺跡の調査が済み、旧石器時代から陶磁器時代までの考古資料を入手している。出土品はこの地域のみならず、フィリピン先史時代の文化相を復元するうえで貴重な資料となっている。

タボン洞穴から出土した石器群には、剥片系、石核系、礫系があり、多種多様である。中でも不揃いの剥片石器が主体を占める(図5)。これらの石器は下層の石器も上層の石器も器形や製作技法に変化はほとんどみられない。調査者のフォックスは、タボン洞穴の剥片石器の包含層をアッセンプリッジと呼び六つに分類し、このうち4つの層の放射性炭素年代を得ている。6つの包含層は、剥片アッセンプリッジ I-A、I-B、II、III、IV、V と名づけられている [Fox, 1970]。下層のアッセンプリッジ IV から 30500 年前、中層の III から 23200 年前、上層の I-B から 9250 年前の測定値がでた。タボン型剥片石器の年代は、放射性炭素年代に基づいて 30500 ~ 9250 年前、更新世後期から完新世初期の頃と想定したのである。これらの剥片アッセンプリッジはいずれも剥片を主体とするものであるが、アッセンプリッジ III に帰属する包含層からチョッパーやハンマー・ストーンの礫石器が伴っている。また、鳥・コウモリ・イノシシの骨が出土している。これらの動物を食糧にしていたと推測されている。

ここではオランウータンの骨や人骨も検出されている。通称「タボンマン」と呼ばれるヒトは、2000 年になって国立博物館から 16500 年前という修正年代が発表された。従来、この人骨は攪乱層から発見されたこともあってどのアッセンプリッジに帰属するか問題があった。かつて調査者はアッセンプリッジ III に関連づけて、22000 ~ 24000 年前の年代を発表していた。新しく発表された年代は人骨(頭蓋骨)そのものの測定値である。現在、フィリピン国立博物館が学術資料として持つ最古のヒトである。

「タボンマン」は、マレーシアのニア洞穴人(ボルネオ島)、インドネシアのワジャク人(ジャワ島)、黒潮列島の港川人(沖縄島)と同じく新人(現代型新人)に位置づけられている。港川人の年代は約 17000 年前で、「タボンマン」とほぼ同時代になる。また、港川人はジャワ島のワジャク人との類似や、歯の形態に東南アジアの人びとに似た特徴を有すると指摘する説もあり、スンダランド起源の南方モンゴロイドとの関連が考えられている [松村, 1996]。「タボンマン」も同系統と考えられるが、人類学的研究はこれからである。

## 完新世の剥片石器

タボン洞穴群の石器群は、少数の礫石器と多数の剥片石器で構成され、更新世後期から完新世初頭にかけてのころのフィリピンの石器文化を特徴づけている。特に多数を占める不揃いの剥片石器は、完新世に入って土器や金属器が登場しても、フィリピン各地の遺跡にその痕跡を残している。東南アジアの石器研究に業績を残した清水比呂之はフィリピン完新世の剥片石器について、表1に示すようにルソン島北部、パラワン島リブウン岬、サマル島と生態環境の異なる三つの地域の石器群をとりあげ、地域ごとの生態環境に応じた展開を明らかにした。

ルソン島北部内陸部に位置するペニャブランカ石灰岩台地上のムサン洞穴では、剥片文化層(下層文化、8000 年前)が形成されたのち、新石器後期あるいは金属器時代(上層文化、2000 年前)に入っても、土器に伴って剥片石器が出土する。パラワン島のリブウン岬では、グリ洞穴の剥片文化層(下層文化、1 万年前)の後、剥片に石刃が加わり、剥片、石刃文化層(ドゥヨン洞穴下層文化、7000 年前/グリ洞穴上層文化、4000 年前)が形成される。サマル島の南部ではソホトンI洞

穴で、剥片に骨角器が伴う文化層(下層文化、15000 年前)が形成されたのち、新石器時代後期あるいは金属器時代の土器に伴って剥片と骨角器が存続する。サマル島のマケダ湾(44 A 遺跡、44 B 遺跡)では小型剥片、小型石刃文化が展開する [清水, 1984]

このようにフィリピンでは、剥片石器文化の伝統は後期更新世の3 万年以上前よりおよそ 4000 ~ 2000 年前まで保持されている。この間、晩氷期、後氷期の気候変化や生態環境の違いにより地域的な展開は多様であるが、生活形態を大きく変えるものではなかった。木製や竹製の狩猟具や採集具をつくる道具としての役割も持つと考えられる剥片石器は、フィリピン基層文化の生活面の一端を語る文化要素である。更新世にさかのぼる古い伝統をもつこの剥片石器文化をフィリピン周辺に求めると、東南アジア海域世界に広くみられるとともに、黒潮列島の台湾や南島にもみられる。

## 黒潮によって広がる不定形剥片石器文化

「2 万年前の奄美大島笠利町土浜ヤーヤ遺跡、喜子川遺跡出土の不定形剥片石器は、東南アジア島嶼部で生まれ拡散したものであり、完新世初期の徳之島伊仙町天城遺跡の剥片石器群も南シナ海北部地区に由来する」。この文章は加藤晋平

の「南西諸島における土器以前の石器文化」[加藤、1996b]の冒頭の一節である。土浜ヤーヤ遺跡の調査は、一九八六年に行われた。背後に小起伏の山地をひかえ、南に黒潮本流を望む河岸段丘に立地したこの遺跡で、マージと呼ばれる赤褐色粘土上に堆積した層から40点の石器群が出土した。発見された石器類は磨製石器を含む不定形剥片石器類で、年代は包含層中に介在した広域火山灰(始良 Tn 火山灰、24000～25000年前)と炭化物の放射性炭素年代測定で約二万年前とされた。土浜ヤーヤ遺跡は奄美諸島で最初の旧石器時代遺跡の発掘調査で、琉球列島での初めての旧石器の発見である[安里・小田、1998]。

1987～1999年の調査で、同じ笠利町の喜子川遺跡の下層から不定形剥片石器が出土した。遺跡地は標高一六メートル前後の黒潮本流を望むマージ台地に形成された砂丘上に立地する。年代は始良 Tn 火山灰の介在と炭化物の放射性炭素年代測定で約25000年前とされている[加藤、1996a、安里・小田、1998]。

天城遺跡は鹿児島県大島郡(徳之島)伊仙町の標高40～50mの丘陵中の台地先端部に位置する。石器群はマージ層の上に堆積した二次的自然層から出土している[安里・小田、1998]。小田静夫は「原位置としての不安は残るが、旧石器の様相を呈した石器群である」[小田、1999]とし、加藤晋平は「土器を伴わない完新世前半期の石器群」[加藤、1996b]でないかと述べている。出土したチャート(石英)製台形状剥片石器は、フィリピンのルソン島北部ベニヤブランカ石灰岩台地に立地するラトゥ・ラトゥ洞穴の石器を主体とする第1文化層(10000～6000年前)出土のチャート製剥片石器に類似していると指摘されている(図6)[加藤、1996b、小川、1984]。

台湾の東海岸、黒潮の洗う長浜郷八仙洞洞穴群でも不定形剥片石器を伴う石器群が発見されている。長浜文化と呼ばれ、更新世から完新世にかけてのころの石器文化である。八仙洞洞穴群の発掘は、1968年に台湾大学の宋文薫らによって行われた。台湾で確認された最初の旧石器時代の遺跡である。放射性炭素年代によって、15000～5000年前の石器文化と想定されている。石器群は、当初、チョッパー、チョツピング・トウールの礫石器群が注目された。1980年代に入って、石器群の主体は礫石器群より不定形剥片石器群にあることが判明した[加藤、1990]。今日、長浜文化は、若干の礫石器群を含む不定形剥片石器文化と認識されている[小田、1999]。フィリピンのタボン型剥片石器文化と年代も重なり、石器群もきわめてよく似た石器文化である。長浜文化は、土器を伴わないが、骨製の釣り針やヤスが発見され、魚骨(イソマグロ、ハリセンボン、ミナミクロダイ)も多数出土しており、黒潮本流での漁撈活動の一端を語っている。東南アジア海域世界のどこかに起源をもつタボン型剥片石器文化は、黒潮列島の台湾、奄美大島、徳之島で明らかにされた不定形剥片石器文化として拡散したものと考えられる。

日本の基層文化にみられる東南アジアの雰囲気その根源は、タボン型剥片石器文化の担い手によって三万～二万年前の更新世の時代にすでに運ばれていたと推測できるのだ。

### シャコガイ製貝斧

フィリピン新石器時代の代表的な遺物として、シャコガイ製の貝斧がある。パラワン島のタボン洞穴群のひとつドゥヨン洞穴やスルー海、サンガサンガ島のバロボック岩陰遺跡で発見されている。よく似た貝斧は黒潮列島の石垣島の名蔵貝塚や宮古島の浦底遺跡で多量に出土している(図4)。

フィリピンでは、この種の貝斧は、石製のオノとともに、カヌー(丸木舟)をつくる道具、手斧(チョーナ)と考えられている。一般にシャコガイと呼ばれる貝は、シャコガイ科に属し、太平洋中南部やインド洋のサンゴ礁域に生息する大型の二枚貝である。種類としてシャゴウ、オオジャコ、ヒレナシジャコ、ヒレジャコ、シラナミ、ヒメジャコの六種類が知られている。オオジャコは殻長1.4m、重さ230kgにもなるものがある。フィリピン出土の貝斧はオオジャコ *Tridacna gigasno* 蝶番部を利用した貝斧で、大型のものは最大長28センチ、最大幅7センチ、小型のものは最大長9センチ、最大幅4センチである。黒潮列島の貝斧もオオジャコ製で、製作部位も形状もほぼ同じである(図7)。

ドゥヨン洞穴の文化層は四層確認され、貝斧は第二層と第三層で発見された。第二層では成人男性の屈葬人骨の副葬品として磨製石斧とともに出土した。年代は放射性炭素年代によって4600年前と測定された。第三層は5600年前の年代がでている。宮古島浦底遺跡では、200本の貝斧が出土している。最古の年代は2500年前である。

パラワン島やスルー海でカヌーをつくる道具として使われたと考えられるオオジャコ製の貝斧は、東南アジア海域世界と黒潮列島との交流を実証する具体的な物証となり得るが、年代上の大きな差異が課題として残っている[大浜、1999]。

### 根っこでの発掘

黒潮文化の文化基地、あるいは黒潮列島の「根っこ」とも注目されるルソン島北部、カガヤン川下流域で貝塚の調査がすすめられている。ラロ貝塚群遺跡である（図4、図8・9）。

カガヤン川はフィリピン屈指の河川で、流域に広大な沖積平野を擁するカガヤン渓谷を形成する。河口にはアバリ港があり、16世紀には南シナ海の重要な交易拠点であり、日本人町があった。貝塚群は河口から50キロにわたって川の両岸に分布する。

貝塚の分布する地域には、現在もアエタ族という狩猟採集民が、川沿いの農村や貝採集の村や町の人びとと、食糧の交換や田畑の手伝いなど日常的な交流をもちながら生活している（図10）。

ラロ貝塚は、1971年5月5日、私たちがカガヤン渓谷リワン遺跡の調査中、アバリの町へ資材調達に出かけた折、たまたま発見した貝塚である。1980年代後半からフィリピン国立博物館との国際共同調査として調査が行われ、現在も続いている。これまでに確認された貝塚は21カ所で、このうち七遺跡、11カ所の発掘調査が行われた。これらはその性格によって、河岸の貝塚群、河岸の伸展埋葬群、河岸石灰岩台地上の貝塚、石灰岩丘陵上の洞穴遺跡に区分できる。河岸段丘上の貝塚の規模は、最大のもので長さ500メートル、幅100メートル、深さ2メートルで、東南アジア屈指の規模をもつ貝塚である。貝塚の上では現在も貝採集を行っている人びとの生活が営まれている。河岸段丘の後ろには、平野が数キロ続き、水田として利用されている。低地平野部は河岸から五キロの地点から南北に走る石灰岩丘陵へと徐々に移行する。発掘された洞穴遺跡は河岸から約10キロの石灰岩丘陵上に立地する。剥片石器が出土している。発掘結果を総合すると、遺跡全体の年代は、立地、文化層の層位、石器・土器・陶磁器などの遺物の出土状況から、相対的に四期に区分できる。古い順に並べると、剥片石器と赤色スリッパ土器層、赤色スリッパ土器層、黒色土器層、貿易陶磁の時代である。赤色スリッパ土器層は2800年前、黒色土器層は1000年前の放射性炭素測定年代がでている。貿易陶磁は16～17世紀の福建省、広東省の青花磁が中心である。

赤色スリッパ土器層の文化期のマガビット貝塚の遺物群は、磨製石斧、土製装身具、土製円盤、石製けつ状耳飾り、スリッパのない褐色叩き目土器などである。図9の5のけつ状耳飾りは台湾の卑南遺跡で類品が出土している。また、マガビット貝塚の土器群とマイクロネシアのマリアナ赤色土器、メラネシア、ポリネシアのラピタ土器との類似点を指摘する者もいるが、否定する意見もある〔Kirch, 1995/高山, 2000〕比較研究はこれからの課題である。

3000年前、特異な石製けつ状耳飾りを身につけた人たちが、黒潮によって台湾と交流をもっていたことは確かかと思われる。黒潮文化の精髓を求めてラロ貝塚の発掘はさらにすすめられるであろう。

## おわりに

黒潮海流の洗う黒潮列島には、さまざまな民族が住んでおり、その文化も決して一様ではない。今にいたるも狩猟採集社会に生きる人もいれば、アワやイモを中心とする焼畑農耕の伝統を保っていきいきと生きている人たちもいる。黒潮列島をつなぐ黒潮の流れは、時には「イモの道」「貝の道」「稲の道」となり、東南アジア海域世界のヒトと文化の通路となっている。「国民国家」を前提とした歴史的枠組みでは、黒潮文化は理解できない。

## 文献目録

安里嗣淳

1994 「シャコ貝製貝斧文化の発生と展開 - パロボク岩陰遺跡と発掘調査の成果を中心に」『沖縄文化の源流を探る - 環太平洋地域の中の沖縄』「復帰20周年記念沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会

安里嗣淳・小田静夫

1998 『港川人と旧石器時代の沖縄』（財）沖縄県文化振興会公文書館

大浜永巨

1999 『八重山の考古学』先島文化研究所

小川英文

1984 「不定形剥片石器考 - フィリピンルソン島ラトゥ・ラトゥ洞穴の石器群の分析」『史観』111、早稲田大学史学会

小田静夫

1999 「琉球列島旧石器文化の枠組みについて」『人類史研究』11

2000 『黒潮圏の考古学』第一書房

加藤晋平

1990 「長浜文化的若干問題」『人類学報』9、科学出版社（中国）

1996a 「南西諸島への旧石器文化の拡散」『地学雑誌』105-3

- 1996b 「南西諸島における土器以前の石器文化」『月刊地球』18-8  
黒潮文化の会編  
1977 『日本民族と黒潮文化 - 黒潮の古代史序説』角川書店  
国分直一  
1972 『日本民族文化の研究』慶友社  
1976 『環シナ海民族文化考』慶友社  
佐々木高明  
1997 『日本文化の多重構造』小学館  
佐藤洋一郎  
1990 「日本におけるイネの起源と伝播に関する一考察 - 遺伝学の立場から」『考古学と自然科学』22  
清水比呂之  
1984 「島嶼東南アジアの完新世に展開された剥片石器文化 - フィリピン、スラヴェシを中心として」『上智アジア学』2  
田中和彦  
1999 「フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果」『季刊考古学』66  
高山純  
2000 「南方起源説の検討 - 特に九州隼人のインドネシア起源説を中心に」『琉球・東アジアの人と文化』下、高宮廣衛先生古稀記念論集  
松村博文  
1996 「ピテカントロプスから始まるアジア人の進化」『ピテカントロプス展』国立科学博物館  
渡部忠世  
1987 「アジアの視野からみた日本稲作 - その黎明の時代」『稲のアジア史』3、小学館  
Fox, R. B.  
1970 *Tabon Caves, Manila: National Museum*  
Kirch, P. V.,  
1995 *The Lapita Culture of Western Melanesia in the context of the Austronesian origins and dispersals*, Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica

## CULTURE IN TRASH. AN ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION OF CONCISO PROPERTY SHELL MIDDEN SITE, CATAYAUAN, LAL-LO, CAGAYAN VALLEY, NORTHERN PHILIPPINES

Ame Garong

### I. INTRODUCTION

Shell middens are important clues in understanding patterns of human behavior. It provides concrete evidence on the prehistoric diet of the people, how the people utilized the resources they have, how they responded to the food supply and demand their population requires. Through the other faunal materials embedded within the trash, information such on the different animals people hunted and killed to supplement their protein need aside from the shells will be understood. Associated artifacts in the midden can also give us clues as to the types of tools or vessels used in preparing their foods or for other related purposes. Generally, shell middens are reflections of man's adaptation to their environment as they find ways and means to survive.

### II. BACKGROUND

In 1985, an extensive archaeological survey and exploration were conducted along the Lower reaches of Cagayan Valley, Northern Philippines (Figure 1) covering four municipalities namely: Gatarran, Lal-lo, Camalaniugan and Aparri (Ogawa & Aguilera Jr.: 1992). During the exploration, a total of 21 shell midden sites were identified. Based on the result of the archaeological reconnaissance, the middens were mostly assemblage of bivalve freshwater shells locally known as *kabibe* (*Batissa* sp.). Other type of shells, both bivalve and gastropods were also found associated within. Black and red-slipped pottery sherds were also found intact in the midden.

Shell mounds as high as 3 meters were also found and were systematically excavated. These were the Magapit (Aoyagi, et.al.: 1993) and Bangag (Tanaka 1997) shell midden sites. During the 90's, several shell midden sites were also systematically excavated. All excavations were aimed at understanding how the shell middens/mounds were formed and deposited. Such archaeological undertakings were focused at generating information about the prehistoric setting of Lal-lo.

One of the shell middens found in Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley is the Conciso Property Shell Midden site (Figure 2). This is one of the middens included in the 3-year CagayanValley Archaeological Project 1999-2001. The first systematic archaeological excavation was conducted in 1996 by Mr. Takeji Toizumi, Japanese Archaeologist and Ms. Ame M. Garong, Museum Researcher Archaeology Division. But due to time constraints and the techniques involved in data processing of the excavated materials, only a 1x 0.50 meter part of the 4x4 meter square (N2W2) was excavated. Only 2 layers of the 1.5 meters high deposit was excavated. Given the said limitations of the project in 1996, it was deemed that future excavation of the rest of the layers will be done in the near future. Sacks of sand were placed on the squares to protect it from collapsing as well as to preserve the square itself. All materials excavated were processed through water separation and flotation. All the specimens found from segregation were partially identified.

Four years later, in 15 May - 13 June 2000, the plan to continue the excavation of Conciso Property Shell Midden site materialized. But due to prolonged dormancy of the research area, several natural calamities had occurred resulting to massive erosion of the site including the square dug in 1996.

The site was re-mapped again and new excavation units were laid down. 3 2x2 meter square were opened: N5E3, N6E3 and N6E2 respectively. Each square was excavated in two different methods: one by layer and the other by 20 cms arbitrary-level.

This report will discuss the results of the two months excavation conducted by Museum Personnel from Archaeology Division in Conciso Property Shell Midden Site. The second field season was conducted in 05 September - 04 October 2000. Another square (N6E2) was opened aside from the 2 squares previously dug. The conduct of auger coring on the western part of the site to assess the depth and the distribution of the shell midden was also intended for this season.

### A. OBJECTIVES:

The main objective of the project is to understand the shell midden deposit through archaeological method.

Specifically, the research aims to:

1. Expose all the different cultural layers composing the midden;
2. Retrieve all cultural, faunal and floral materials associated with the midden
3. Plot all the specimens found in situ and process all the deposits (shells and soil) by water separation and flotation processes; (thus understanding the cultural component of the shell midden)
4. Conduct auger coring in order to check the horizontal distribution of the shells
5. Understand if the site was only a midden or if there were other ways they were utilized.

## **B. SCOPE AND LIMITATIONS**

The manner of retrieval of all the materials associated within the midden varied. Excavating a shell midden posed many considerations. For the purpose of this research, the usual technique used in excavating shell midden which includes retrieval of all the specimens and all the shells removed from the square were not applied due to time constraints and considering the tremendous volume of the shells recovered from the two 2x2 meter square opened.

All specimens found will be collected. Shell samples removed from each layer/ level will not be collected but they will be all dried and screened. Screened materials will then be processed for water separation aside from the 5 kilos collected for water flotation.

## **III. METHODOLOGY**

### **A. EXCAVATION AND COLLECTION OF SAMPLES**

1. Map the area/site using the Alidade.
2. Establish the Datum Point using the cadastral marker (mojon) as well as excavation units using the Mini Transit. Each square had a standard size of 2 x 2 meter.
3. Preparatory to the excavation, strings were laid to connect the stakes (North-South, East-West).
4. Cleaning was done before actual excavation. Plants, roots, grass and other debris were cut.
5. The systematic excavation of the shell midden was conducted with Square N5E3 by layer and Squares N6E2 & N6E3 by 20 cms arbitration.
6. Measurements were taken from both squares after exposing each layer/level. Features, pits and depth were noted. Each layer/level were photo-documented.
7. Each shell deposit sample taken from the excavated layer/level was dried under direct sunlight. Proper labeling was done on each layer for easy retrieval and avoid confusion.
8. After drying, all samples were screened using 3 mm mesh screen to separate the shells from the soil sample. All the soil sample components were collected from each level/layer while the kabibe shells were thrown. Other types of shells were collected.
9. A 5 kilos soil sample from each level/layer was collected for water flotation process. The rest of the soil samples were treated in the river using water separation process.
10. For the specimens retrieved from excavation of squares N5E3, N6E3 and N6E2, they were washed, accessioned, recorded and properly labeled.

### **B. DATA EXTRACTION PROCESS**

#### **1. WATER SEPARATION PROCESS**

Wash the soil samples using 1.5 mm mesh screen. Washing was done in the river. Dry the samples completely and segregate the dried samples according to cultural and organic materials (bones, pot sherds, seeds, shells etc.)

#### **2. WATER FLOTATION PROCESS**

2.a. The extraction of **Light Fraction**. Using buckets, make holes on both sides of the upper portion of the bucket. Insert the metal tubes on the holes enabling the water containing the light/floating materials pass through the tubes. Collect the materials using a very fine mesh screen. Put the collected light fraction material in a cloth and dry it.

2.b. The extraction of **Heavy Fraction**. For materials that settled in the bottom of the bucket after collecting the light fraction, screen the soil using 1 mm mesh, put the screened samples in the newspaper and dry it.

After processing all of the soil samples, segregate each sample accordingly.

#### IV. DATA PRESENTATION

Three 2x2 meter square were opened (Figure 3). All were oriented towards North. Given the whole perimeter area of the Conciso site the chosen area for excavation was considered based on the best preserved part and least exposed to erosion- unlike the location of the square excavated in 1996 which was exactly the southwall of the site. The square was 17 meters away from the Cagayan river.

In treating the square, two techniques were applied: excavation by layer and excavation by 20 cms arbitrary-level. Excavation by-layer posted some difficulties. Problems such as distinguishing one layer from the other, boundary between two layers, shell arrangement and distributions were encountered during the excavation. In defining the boundaries between layers, the following factors such as shell sizes and its distribution, presence of soil or clay and its color were observed and considered. Arbitrary level was used to “create small groupings of strata before the material is removed and destroyed”. Since excavation by natural levels might yield an non-ending exposure of the layer, arbitrary digging was used to give borders.

All specimens and features found in situ were plotted using Excavation Form A. Bagging Slips were used for specimens found in-situ as well as for providing informations to all materials recovered.

##### A. Square N5E3

This square was excavated by layer. Basically, the main objective here was to determine the natural stratification of the shell midden. Factors such as change in soil color, shell sizes and its extent were considered to determine the different layers. Layer 1 was considered as disturbed layer since its the present soil layer. All the materials found were collected and 5 kilos soil sample was set aside fro water flotation.

A total of 12 layers were identified during the excavation.

LAYER/DESCRIPTION	SOIL COLOR (Munsell Color Chart)	APPROXIMATE DEPTH OF EACH LAYER (Measurement taken from the Local Datum Point which is 50 cms above Datum Point)
Layer I/Top soil/Soil Layer	10 YR 2/1 Black (disturbed)	06 - 27 cms
Layer II/Soil Layer	10 YR 2/1 Black (disturbed)	27 - 30 cms
Layer III/ Shell Layer with clay Mixture of whole and fragmented kabibe	10 YR 3/1 Very Dark Gray	30 - 46 cms
Layer IV/ Shell Layer with soil Mixture of whole and fragmented kabibe	10 YR 2/1 Black	46 - 60 cms
Layer V/ Shell Layer with soil (Whole Shell)	10 YR 2/5 Black	60 - 62 cms
Layer VI/ Shell Layer with soil (clay) Pure shell layer with clay	5 YR 2.5/1 Black	62 - 80 cms
Layer VII/ Shell Layer w/ soil Mixture of whole and fragmented kabibe mixed with soil (clay)	10 YR 3/3 Dark Brown	80 - 104 cms
Layer VIII/Pure Shell Layer (not homogenous throughout the whole square; appeared like a spot in the northern quadrant)	10 YR 3/2 Dark Grayish Brown	104 - 112 cms



Layer IX/Shell Layer with soil Mixture of whole and fragmented kabibe	10 YR 3/3 Dark Grayish Brown	112 - 118 cms
Layer X/ Pure Shell layer	no soil	118 - 137 cms
Layer XI/Clay layer with shells Mixture of whole and fragmented kabibe	10 YR 3/3 Dark Brown	137 - 144 cms
Layer XII/ Shell Layer with clay (Unfinished)	2.5Y/2.5/1 Black	144 - 165 cms

Summary of the general finds found from each layer that were plotted and retrieved during the excavation. Others came from the segregation of the soil/shell samples processed through water separation.

**LAYER ARTIFACTS ASSOCIATIONS (MATERIALS/FINDS)**

Layer I	earthenware sherds, porcelain sherds, bone fragments, deer antler's fragments, plastics, roots, glass, iron fragments
Layer II	earthenware sherds, metal fragments, rusted can, stones, small bottle (perfume container)
Layer III	earthenware sherds, bone fragments, stones, rusted can & bottle cap, plastic and fragment, burnt clay
Layer IV	earthenware sherds, metal fragments, bone fragments, glass fragments, stoneware fragments, can fragment land snails, bivalve shells (tulya & unnok)
Layer V	earthenware sherds, charcoals, bivalve shells (tulya), agurong,
Layer VI	earthenware sherds, burnt clay, bone fragments, pumice, fish bones, charcoals, bivalve shells ( tulya & unnok), beads, gastropods (agurong & snails)
Layer VII	earthenware sherds, pig jaw fragment, fish vertebra, burnt clay, bone fragments, pebbles, carabao tooth, pig tusk, pig canine, bivalve shells (tulya & unnok), bead, charcoal, gastropod (agurong)
Layer VIII	earthenware sherds, parts of an earthenware oven, bone fragments, burnt clay, pig teeth
Layer IX	earthenware sherds, bone fragments, piece of limestone, beads, gastropod (agurong), bivalve shells (agurong & tulya)
Layer X	earthenware sherds, whole and restorable black pots, burnt clay, beads, bivalve shells (tulya), gastropod (agurong), pebbles, 1 whole earthenware pot and 1 restorable earthenware pot
Layer XI	earthenware sherds, bone fragments, pig tusk, fish bone, burnt clay, pebbles, bivalve shells (tulya & agurong), marine gastropod, beads
Layer XII	beads, human skeleton (unretrieved) Burial #2

The south-eastern wall of square N5E3 was disturbed resulting to a Pit. The depth of the Pit from the Local Datum Point (LDP) is 65 cms. It is actually an extension of Layers I & II. A rusted tin can was found 65 cms from the LDP. Presence of roots is one factor to consider for the disturbance. Also, during the conduct of the excavation, several pits were identified within each layer. Two black pots were found in this square. A small pot was found at 123 cms from the DP and another black pot which was broken but restorable was found 136 cms from the DP. Both pots were found within Layer X : Pure shell layer; no other associated materials were found. The shell and soil inside these pots were collected and processed through water separation. Upon reaching Layer XII, a human skeleton was found. Only the tibio-fibula and the foot parts were exposed (Figure 4). Carnelian bead was found in the right foot of the burial. Exposing the whole skeleton would have required opening another square, square N5E2. Due to time constraints, the exposition of the whole skeleton did not materialize. Sand was used to cover the remains and to protect the bones before backfilling. The deepest depth reached for this square was only up to 165 cms from the LDP (Figure 5).

## B. Square N6E3

Excavation by an arbitrary interval of 20 cms on this square. For every level excavated, soil color, changes in shell distribution, pits, and features were observed and plotted in the Excavation Form A (Grid Location Form). Though arbitrary levelling was used in treating this square, careful observation, description and recording of all the pits and features were properly observed.

Below is a summary of the description of each level exposed.

LEVEL	DEPTH	DESCRIPTION and SOIL COLOR (Munsell Color Chart)	ARTIFACTS ASSOCIATION
I	0-20 cms	Top soil/Present soil Soil Layer with Shells 10YR 2/1 Black	earthenware, porcelain & stoneware sherds, stones, modified deer antler, metal object/fragments, bone & glass fragments, button, clay lumps, agurong, snails,
II	20-40 cms	NW/SW: still Level I NE/SE: Pure Shell Layer 7.5 YR 2.5/1 Black	earthenware & porcelain sherds, stone, metal object, part of an earthenware oven, bone & deer antler fragments, part of a battery, agurong, snail,
III	40-60 cms	Soil layer with mixture of whole and fragmented shells. Two pits appeared both having Pure shell layer 2.5 Y 3/1 Very Dark Gray	earthenware sherds, modified bone (needle-like), stone, bone fragments, agurong, snail,
IV	60-80 cms	a. Shell layer with coarse fragmentation of shells: 60-76 cms 2.5 Y 2.5/1 black b. Soil layer with mixture of whole and fragmented shells: 76-80 cms 10 YR 3/2 very dark grayish brown	earthenware & porcelain sherds, stone, burnt clay, bone fragments, tulya, agurong, snails, tusk fragment
V	80-100 cms	Soil with shell fragments 10 YR 2/2 Very Dark Brown; Pits appeared all with very fine fragmentations	earthenware sherds, burnt clay, stones, bone fragments, limestone fragment, landsnail, charcoals
VI	100-120cms	Clay layer with fragments of shells 10 YR 4/3 Dark Brown 3 Pits were found all with whole kabibe shells	earthenware sherds, burnt clay, stones part of an earthenware stove, part of a glass bracelet(blue-green), snail, bone fragments, pig jaw fragment with teeth, beads, agurong, unnok
VII	120-140cms	Clay with Shells 10 YR 3/3 Dark Brown 3 Pits were found all containing charcoals with medium fragmentation of kabibe shells	earthenware sherds, bone fragments, snail, agurong, unnok, glass bead
VII	140-160cms	Silty Clay 10 YR 3/3 Dark Brown 6 Pits made up of clay and very fine fragments of shells Pit 1: clay layer with coarse fragmentation of shells Pit 2: clay layer with fine fragmentation of shells Pit 3: clay layer with medium fragmentation of shells Pit 4: clay layer with coarse to fine fragmentation of shells	red-slipped pottery, fish bones, stone earthenware sherds charcoal and ashes earthenware sherds, charcoals, ashes, river pebbles

		Pit 5: clay layer with coarse to fine fragmentation of shells (Refer to Figure 6)	river pebbles, earthenware sherds earthenware sherds
VIII	160-180cms	Silty clay (only the NW/SW quadrants were excavated)	earthenware sherds, stone, human skull
IX	180-200	Silty clay	human skull (burial #1)

The shell layer completely disappeared at Level VIII. Though there were still pits of fine fragments of kabibe shells, clay was already visible in the whole square. Fewer specimens were found composed of black and red-slipped potteries. Such limited number of artifacts influenced the idea of excavating only half of the square, the North-West & South-west quadrants respectively. While digging the SW quadrant a human skull appeared while the rest of the body was in square N6E2. Excavation ended at this depth concentration was devoted in sq. N6E2.

### C. Square N6E2

This square was excavated during the second season of the fieldwork. 20 cms arbitrary level was used to expose the square.

Below is the summary of all the specimens unearthed from N6E2.

LEVEL	DEPTH	DESCRIPTION & SOIL COLOR (Munsell Color Chart)	ARTIFACTS ASSOCIATION
I	0-20 cms	Top/Present Soil Layer Soil Layer with shells 10 YR 2/1 Black	earthenware & porcelain sherds, glass fragments, net weight, clay lumps, snail, agurong,
II	20-40cms	Top/Present Soil Layer Soil Layer with shells 10 YR 2/1 Black	earthenware & porcelain sherds, glass fragments, net weight, clay lumps, snail, agurong,
III	40-60cms	Shell layer with soil 10 YR 2/1 black	earthenware & porcelain sherds, bone & glass fragments, part of an earthenware oven, snails, agurong, stone
IV	60-80cms	Shell layer (mixture of whole and augmented shells)with soil	clusters of earthenware sherds mixed with bone fragments (some were burnt), pig tooth, fragment of carabao's jaw with teeth, snails, clay lump
V	80-100cms	Soil layer with shells 10YR 3/2 Very Dark Grayish Brown Pit 1: Mixture of Powderized shells & ash	earthenware sherds, bone fragments, stones, pig tusk, clay lumps, burnt deer antler
VI	100-120cms	Soil layer w/ pure shell pit	restorable earthenware pot, earthenware sherds, bones, stone, teeth
VII	120-140cms	Soil layer w/ 2 pits of pure shell Pit 1 Pure shell layer Pit 2 Burial pit	whole black earthenware pot, restorable earthenware black pot, bones, stones, earthenware sherds, fragment of deer antler
VIII	140-160cms	Shell layer with soil	whole black pot, modified bone, Burial # 3 with rusted knife, beads, earthenware sherds, charcoal
IX	160-180cms	Clay with fragments of shells; 4 Pits Pit 1: Pure shell pit mixed with clay and charcoals Pit 2: Shells are fragmented mixed with charcoal & clay. Contained beads Pit 3: Clay pit with whole and	whole black pot, earthenware sherds, bones



porcelain sherds in levels 0-40 and layers 1 and 2 only proved that the level/layer is still contemporary - mixed associations of materials. Porcelain sherds were mostly the 17th to 18th century type. Earthenware sherds ranged from plain, brown and black type of pottery. A clay net weight was also found in this level. Concentration of black potteries were very much visible from 60 cms - 150 cms. It is an extensive range but the actual distributions were visible from this depth. On the otherhand, red-slipped pottery sherds were present in Levels 8 - 9 (160-200 cms) although the numbers were very little.

Six whole and 1 restorable earthenware black pot were found (Figure 12). Two vessels came from square N5E3. Pot seven with accession number II-96-V2- 2578 was found in the north-west quadrant, 123 cms from the LDP and pot eight with accession number II-96-V2-2579 was found in almost the same location but was 136 cms deep from the LDP. Both were found within the shell layers. The rest of the five vessels came from square N6E2. The two pots were found from level 6 and 7 (pot 9 & 10), two pots were associated with Burial #3, both having an almost same size (pot 11 & 12) and the last vessel was associated with Burial #1 (pot 13). All of the pots have traces of being used before they were deposited in the midden.

Four out of the seven vessels did not have direct association with any features. These pots might have relevance or significance in ritual rites or religious belief. It was purposively placed in the midden. People do throw broken pieces of pots or vessel in the midden but not the whole one because practically, they can still use it.

2. **SHELL ASSOCIATED WITH THE MIDDEN.** Shells ranging from gastropods to bivalve freshwater type were found within the midden. Until now, these shells were being gathered and eaten by the people in the area except for the snails. For the illustrations and scientific names, refer to Figure 13.

3. **ANIMAL BONES FOUND.** Majority of the bone found from the three squares mostly belonging to pig. Buffalo bones and teeth were also unearthed but mostly from layers/levels 1 & 2. Although several fish bones were retrieved from water separation and flotation processes. Deer antler were also found but mainly used as a tool or had been modified for other purpose.

**B. BURIAL PITS AND GRAVE GOODS ASSOCIATIONS.** Three burial pits were found from each square. Burial #1 was relatively the oldest since she was found in silty clay layer which happened to be the last layer. Black pot and glass bead were the grave goods associated with the pit. The sex of the skeleton was determined by Mr. Angelo P. Bautista, Senior Researcher of the Archaeology Division, using the eye socket. While the two pits were both found within the shell layers. In burial #2, 2 carnelian beads were the only grave goods found associated but exposing only from the knee down to the toe bones. Burial #3 (refer to Figure 15), has the most number of grave goods found. These included the knife, modified bone, possible handle but was unfinished and the 2 whole black pots. Based from the measurements taken from the 2 vessels their proximity to the burial pit as well the depth where they were retrieved showed the possibility that they were associated with the burial.

The different glass beads found were manufactured during the late Developed Metal Age to early Contact Period (Figure 12. 2-5). Majority of the beads vary from drawn to wound type of manufacturing. Such type of beads appeared in the Philippines from Early Metal Age (ca.500 - 200 BC), Developed Metal Age (ca.200 BC - AD 1200), Early and Middle Age of Trade & Contact (ca. AD 1200-1450) and Late Age of Trade and Contact with the East (ca. AD 1450 - 1600). The dates are relative to the development of Philippine Prehistory (Francis:1989). Identification and description of the different beads were provided by Mr. Rey Santaigo, Museum Researcher of Archaeology Division.

<b>BURIAL #/Accession Number Assigned</b>	<b>TYPE OF BEADS/DESCRIPTION</b>	<b>RELATIVE DATING</b>
Burial #1/II-96-V2-6352 II-96-V26353	wound translucent green glass bead bone bead (heavily fragmented)	Early type/12th-15th century?
Burial #3/II-96-V2-6345	Agate stone bead; shape:barrel;color: dark brown w/ white bond; flat end;drilled from	Late Metal Age

both ends.

II-96-V2-6346	Carnelian bead (same with II-96-V2-6350 -6351)	Late Metal Age
II-96-V2-6347	Carnelian bead; by-faceted (5 pairs of facets); color: translucent orange; drilled from both end	Late Metal Age
II-96-V2-6341	Glass bead; color: translucent blue; drawn; short cylindrical with flat ends deformed perforation	Developed Metal Age
II-96-V2-6343	Glass bead; highly weathered opaque yellow wound glass coated w/ patina	12th - 15th century
II-96-V2-6348	Bone bead	?

**C. CARBON-14 DATING RESULTS.** Eight animal bone samples and one human bone sample were dated by C-14. The analysis was done at Kyushu University Laboratory of Material Information in Fukuoka, Japan by Mr. Shozo Mihara. The following are the dates obtained from the C-14 dating.

Accession Number	Sample Used	Square	Layer	Depth(cms)	C-14 date (calBP)
II-96-V2-1058	animal bone	N5E3	Shell layer	35	1056-957
II-96-V2-1993	animal bone	N5E3	Shell layer	70	1059-962
II-96-V2-2038	animal bone	N5E3	Shell layer	80	1174-1058
II-96-V2-2466	animal bone	N5E3	Shell layer	98	1173-1057
II-96-V2-2508	animal bone	N5E3	Shell layer	105	1161-1050
II-96-V2-3949	animal bone	N5E3	Shell layer	122	1189-1063
II-96-V2-4149	animal bone	N5E3	Shell layer	135	1189-1062
II-96-V2-5284	animal bone	N5E3	Shell layer	146	1174-1060
II-96-V2-6327	human bone	N5E3	Shell layer	165	1384-1294

\* C-14 in calibrated date

**D. STRATIGRAPHIC PROFILE.** There are seven layers composing the midden while some have sublayers depending on the variation of shell size or fragmentations. Pits were considered disturbances. Square N6E2 (Figure 16) showed the stratigraphic profile of the north, west and south walls. East was removed during the excavation.

LAYER	DESCRIPTION
IA	Present soil surface/ Soil Layer with fragmented kabibe shells
IB	Soil Layer with whole kabibe shells Presence of Pits in south wall
II	Pure shell layer
III	Soil layer with fine fragmentation of kabibe shells
IIIA	Soil layer containing ashes mixed with fine fragments of kabibe
IIIB	Soil layer with fine fragmentation of kabibe
IIIC	Soil layer mixed with clay and fragments of shells
IV	Soil layer with whole kabibe shells
V	Pure shell layer
VA	Pure shell layer with medium to fine fragmentation (west wall)
VI	Clay layer with shells
VIA	Clay with whole shells
VIB	Clay with coarse fragmentations of kabibe shells
VIC	Clay only (especially in the South wall)
VII	Silty Clay layer

Pattern of accumulation can be summarized in this manner:

Disturbed layer - Shell layer - Soil layer with fragments of shells - Soil layer with whole shells - Pure shell layer - Silty clay layer

Each layer represents certain period or time. Presence of soil in the layer as well as the fragmentations of shells can be an indication that the layer had been used or occupied by people or even by animals. Pure shell layer was an indication of continuous disposal of shells by people.

## VI. CONCLUSION

The huge and extensive formation of shell midden in Conciso Property was gradually formed as people continues to collect and gather kabibe from the river for their food consumption. Prior to this shell gathering activity, the site was utilized as a burial ground before people start filling-up shells. Silty clay was not the only medium used in burying their dead but also the kabibe shells.

Stratigraphic profiles shows three layers that reflect a possible occupation period. These are layers I, III, and IV: soil layer with heavy fragmentation of kabibe shells together with earthenware sherds and animal bones. The sequence has been interrupted by the pure shell layer indicating a continuous disposal of shells (Layer II & V). Layer VII which is the clay layer has been used for primary burial. Excavation of Clemente Irrigayen site in Sta. Maria and Siriban site in San Lorenzo, Lal-lo reveal a primary burial practice using the silty clay layer. While the Fausto Sison site in Catayauan and Dumbrique site in Catugan, Lal-lo showed the used of shells in burying their dead. Although it is still a primary burial, but in Conciso site, both the shell and the clay were used as a burial pit.

Porcelain sherds of 17th - 18th century type was normally found associated with Layer I. Black pots and sherds were the most abundant type of ceramics unearthed in the site and was commonly found within the shell layers. Red-slipped pot sherds though has limited numbers were found within the silty clay layer.

Although carbon-14 samples generally came from one square N5E3 only, but nevertheless, the results were somehow consistent. Carbon-14 results of the human bone from Burial #3, square N5E3 essentially associated with the Developed Metal Age of Philippine Prehistory. The different animal bones analyzed were also dated within the range of the Late Metal Age Period to the Late age of Contact. This is also true with the relative dates obtained from the different beads collected from the three burials.

The Lal-lo shell midden is indeed fascinating and unique in its vast and extensive accumulation and formation along the lower reaches of the Cagayan Valley. It took lots of molluscs gathering activity by human to leave an accumulation as such that was seen thousands of years later. Massive shellfish collection became very intensive. Whether there was a shortage on animals for hunting or an increase in population density occurred during those times, kabibi (*Batissa sp.*) has become an important source of food and probably livelihood for the people living near the river.

## REFERENCES CITED

- Aoyagi, Y., M.L. Aguilera, Jr., H. Ogawa and K. Tanaka  
1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell Middens in Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9:127-155.
- de la Torre, Amalia  
2000 Preliminary Report of the Lal-lo, Cagayan Archaeological Project: Clemente Irrigayen Property Site (II-1995-O), Sta Maria, Lal-lo, Cagayan. In H. Ogawa (ed.) *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*. Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research) The Ministry of education, Science, Sports and Culture.
- Francis, Peter, Jr.  
1989 *The Type Collection of Beads From Archaeological Contexts in the Philippine National Museum*. Center for Bead Research, New York.
- Garong, Ame M.  
1996a A Report on the Archaeological excavation in Fausto Sison Sr. Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Manuscript. National Museum, Manila.  
1996b Progress Report on the 1996 Archaeological Excavation of the Conciso Property Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript. Manila, Philippines: National Museum.  
1998 The Development of Shell Midden Archaeological Researchers in the Philippines. Typescript, Manila, Philippines: National Museum.
- Garong, A. M. & Toizumi T.  
2000 The Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan. In H. Ogawa (ed.) *Excavation of the Lal-lo Shell Middens*. Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research). The Ministry of Education, Science, Sports and Culture.
- Ogawa, H. & Aguilera, M. Jr.

1992 Data Report on the Archaeological Exploration in the Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. *Journal of the Institute for the Study of Religion & Culture*. 3 (10: 41-113). Kokushikan University, Tokyo.

Tanaka, Kazuhiko

1997a Preliminary Report of the Excavation of Catugan Shell Midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology*. 17: 210-225.

1997b The Kite Photography of Bangag I Shell Midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology*. 17: 197-209.

1998 Preliminary Report of the Archaeological Excavation of San Lorenzo III Shell Midden (Siriban Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. Unpublished.



# ARCHAEOLOGICAL EXPLORATION AND TEST EXCAVATION IN CAGAYAN VALLEY NORTHERN PHILIPPINES

**Ame M. Garong**  
Museum Researcher, National Museum of the Philippines

## BACKGROUND

The Cagayan Valley Project has been continuously undergoing archaeological exploration for the past 6 years in order to further understand the prehistoric environmental settings and cultural development of Lal-lo Municipality and its neighboring town. Identification of all the possible archaeological sites using shell midden as the key factor became the main concern of the research for this year. The research area was not only confined within Lal-lo but also to its neighboring municipality namely Gattaran and Camalaniugan. Concurrent with this undertaking, an auger coring was conducted in order to check the vertical distribution of shell midden in areas that were explored.

This paper will present the preliminary result of the one and one-half months of continuous archaeological exploration and test pit excavations in the three municipalities of Cagayan Valley, Northern Philippines from 08 August -20 September 2001.

## METHODOLOGY

Areas to be explored were already identified before the actual fieldwork. These sites are from Lal-lo, Gattaran and Camalaniugan municipalities of Cagayan Valley. Some of these sites were earlier excavated but needs further research in order to verify the previous findings. While other sites were discovered through the conduct of auger coring, some were reported by Mr. Carlito Conciso who had been helping and assisting the Archaeology personnel and Japanese archaeologists for a long time and the rest were already identified from the exploration made by Messrs. Hidefumi Ogawa and Melchor Aguilera Jr. in 1985.

A 2 x 2 meter square has been standardized in all the sites that were chosen for test pit excavation. After establishing or relocating the datum point, the site was map or remapped and grid square was laid down. Spit system was used in the excavation as well as in the collection and bagging of specimens. Each spits and features were documented properly using the Archaeology Division Excavation Form A. All soil/shell removed from the excavation were screened using 7 mm mesh. Stratigraphic profiling of each walls were also done before the backfilling of the square.

Auger coring has been simultaneously accomplished while the excavation was being done. Auger coring was not only confined within the chosen site to be excavated but to the entire neighborhood within the area. The conduct of the coring will continue until such time that the excavation was finished. Normally, each house will have one hole or one auger coring but that still depends on the size of the property.

The used of auger was considered for this year for the following considerations. First, it will provide information about the vertical profile and distribution of shells/soil and the cultural and faunal materials imbedded in the shell midden even without the conduct of a systematic excavation. This on the other hand will contribute in the interpretation or verification of the different materials retrieved from the excavation in a particular area. Second, auger coring will be helpful in giving clues as to whether the site is archaeologically significant or not based from the materials that will be retrieved. Thus, it will also aid the archaeologist/researcher in deciding whether to conduct a systematic digging as well as help in estimating the time frame that will be devoted in case a systematic excavation will be pursued. Given a very limited time, auger became a "tool" that efficiently helps the research to achieve its objective.

## RESULTS AND DISCUSSIONS

Four sites were systematically excavated. These were the (1) Gaerlan Property Shell Midden Site, Dummon, Gattaran, Cagayan: II-2000-U; (2) Marcelina Dumbrique Property, Catugan, Lal-lo, Cagayan: II-1995-Q4; (3) Rosalio Cortez Property Site, Camalaniugan, Cagayan: II-1980-J and (4) Conrado David Property, Centro, Lal-lo, Cagayan: II-2001-O3. A total of 30 sites were revisited and discovered. These are:

**I. Dalaya, Lal-lo, Cagayan II-1986-O**

1. Dalaya Shell Midden Site (Vicente Ulet Property)

**II. Lapugan, Gattaran, Cagayan**

2. Rogelio Oli Property II-2001-F3

**III. Nassiping, Gattaran, Cagayan**

3. Fred Corpuz Property II-2001-G3

**IV. Catugan, Lal-lo, Cagayan**

4. Antonio Cumador Property II-2001-H3

5. Nestor Bona Property II-2001 -I3

6. Kasio Tesalona Property II-2001-J3

7. Samuel Mariano Property II-2001-K3

8. Dolores Sumawang Property II-2001-L3

9. Cesmundo Ramos Property II-2001-M3

10. Sufronio Tomas Property II-2001-N3

11. Renie Narag Property II-2001-I5

12. Conrado Padilla Property II-2001-J5

**V. Dugo, Camalaniugan, Cagayan**

13. Rosita Urbi Property II-2001-K2

14. United Methodist Church II-2001-L2

15. Dela Cruz Property II-2001-M2

16. Ubias/Germinia Fajardo Property II-2001-N2

17. Emmanuel Artates Property II-2001-O2

18. Leon Ibe Property II-2001-P2

19. Lope Ojero Property II-2001-Q2

20. Primo Oandasan Property II-2001-R2

21. Efren Udarbe Property II-2001-S2

22. Samuel Costales Property II-2001-T2

**VI. Centro, Lal-lo, Cagayan**

23. Federico Rosales Property II-2001-U2

24. Jimmy Siriban Property II-2001-V2

25. Leonila Siriban Property II-2001-W2

26. Conrado David Property II-2001-O3

27. Cherry Castillejo Property II-2001-X2

28. Virgilio Vargas Property II-2001-P3

29. Paquito Rosales Property II-2001-Q3

**VII. Catayauan, Lal-lo, Cagayan**

30. Patrocenio Mayor Property II-2001-F5

**1. VICENTE ULET PROPERTY, DALAYA SHELL MIDDEN SITE, DALAYA, LAL-LO, CAGAYAN**

This archaeological site was discovered in 1986 (Ogawa and Aguilera: 1992). The site is actually on the eastern side of the Cagayan Valley road/highway going to Aparri. Ricefield can be seen everywhere. A creek that is a tributary of Cagayan River separates the main road and the Vicente Ulet Property or the Dalaya shell midden site. The deposit can be characterized as a shell mound where kabibe or *Batissa sp.* is basically the predominant freshwater gastropod shell that made up the midden. Instead of conducting an archaeological excavation, an auger coring was done. A north-south and east-west lines were followed in the conduct of the auger (See site map of Dalaya site).

The shell midden distributions based from the auger coring conducted along the north-south line were not so deep. The depth varies from 106 -150 cms from the datum point (DP). With exception to hole - A on the eastern side of the site which is 410 cms from

DP. It has the highest point of elevation. Majority of the finds from the 16 holes that were made consisted of stones, charcoals, bone fragments of fishes and rodents and shells. Potsherds possibly of red pottery type were found in auger D-north and an andesite flake was also found in auger A-north. Based from the relatively few finds found from the coring, test pit was not considered.

## **II. A. ROGELIO GAERLAN PROPERTY SHELL MIDDEN SITE, DUMMON, GATTARAN**

This archaeological site was discovered last year (de la Torre: 2001) and a 2 x 2 test pit was excavated. The test pit yielded artifactual materials such as earthenware sherds and stone flake tools (andesite and chert types). These materials were found associated with bones and of course shell - predominantly kabibe (*Batissa sp.*).

The main concentration of the shell midden is located at the backyard of the property where the Cagayan river is on its western side, a tributary of the river on the north and the National Highway on the east (see site map). The need to conduct another test pit and auger coring on the entire property in order to verify the results of the 2001 excavation and check the horizontal and vertical distribution of shells were aimed. Datum point was relocated and 2 x 2 meter square, N1E4 was established, a 2-meter distance from the square excavated last year (N3E4).

Four cultural layers constituted the stratigraphy of square N1E4 excluding the topsoil or the surface layer (see stratigraphic profile of Gaerlan Site). Shell midden deposit has an approximate height of 180 cms from the local datum point. Layer 1 is a shell layer mixed with soil. Kabibe shells were fragmented. Materials found associated within this layer were animal bones belonging to fishes, snake - python, pig, deer and other medium to small-size mammals, some bones showed cut marks; earthenware sherds, flake stone and several flake stone tools (andesite and chert type). Layer 2 is a soil layer (sandy-silt) mixed with whole and fragmented kabibe shell. Several burnt fish bones including shark, pig and deer bones and teeth were found. A bone bead was also retrieve. This layer has the most number of flake stone tools. Layer 3 has no kabibe shells. Its completely soil layer which has a color of dark yellowish brown. Stones, burnt bone fragments and human tooth were found together with flake stone tools. Kabibe shells appeared again in Layer IV. Flake stone tools were still recovered on this layer. A stone with hematite, an andesite grinding and chopping tools, andesite and chert cores were also found together with bones and pig's teeth. Layer 5 is a soil layer (sandy clay). No cultural materials were found on this last layer except for a piece of stone.

Five holes were opened for auger coring. The depth of the deposition of shells varies (see auger coring for Gaerlan site). The distribution of shells as well as the presence of soil layer in square N1E4 is also observable in hole C and D. Though the shells were completely disappeared in hole E but interestingly, it appeared again after an almost 2 meters deposit of soil. Such depth is almost the end layer of square N1E4. Few pieces of earthenware sherds were found from a 20-60 cms depth from the soil surface while fish bone was retrieved in auger A and deer bone in auger D.

Based from the stratigraphic profile of square N1E4, shells were not continuously dumped but rather have an interval in between each disposal. Layer 1, 2 and 4 showed this dumping activity. Majority of the archaeological finds consisted of flake stone tools and with almost no earthenware sherds found associated. As compared to the different shell middens found in the riverbank of Cagayan River in Lal-lo area where earthenware sherds were really enormous. Presence of stone tools can be a good indication of a possible Paleolithic site but it is still too early to conclude unless an intensive archaeological excavation will be conducted to be able to establish a good chronological sequence of these kind of artifactual materials.

## **B. ROGELIO OLI PROPERTY, LAPUGAN, GATTARAN**

The site was reported by Mr. Carlito Conciso and based from his account, black and red-slipped potsherds were found within the property especially on the exposed cut of a trail leading to Cagayan River. He also brought with him samples of these types of specimens.

Based from his report, the team decided to check the reported site. Auger coring was conducted within the periphery of the property. The site is approximately 5 meters away from the riverbank. And shell midden were completely absent in this area. Materials found were mainly earthenware sherds of the same descriptive characteristics of those found in Magapit site e.g. red slipped pottery sherds with thick surface and sandy paste.

### C. FRED CORPUZ PROPERTY SITE, NASSIPING GATTARAN

This site was also reported by Mr. Conciso. The site was near the public cemetery of the barangay. A foot-survey was conducted within the property (which was also near the riverbank). Porcelain, stoneware and earthenware sherds were collected.

### II. CONRADO PASCUA PROPERTY SHELL MIDDEN SITE, FABRICA, LAL-LO

This site was also a part of the archaeological exploration conducted in 2000 (De la Torre:2000). The site is actually located on the western side of the Cagayan River, which is a bit elevated and forested. The kabibe shell midden formation here can be characterized as a mound with an approximate height of 2 meters. Upon relocating the datum point used last year, excavation units were laid down. A 2 x 2 meter square was established (see site map). The idea was to make a trench from S2W2, which is the most elevated part of the site/mound down to S2W3, the sloping part of the mound leading towards what used to be an abandoned road. Only the south quadrants (SE and SW) of these squares were excavated.

The whole formation was composed of almost pure shell. This nature posed problem for the conduct of auger coring. Auger had a hard time penetrating the shells. This has led to failure to do auger coring in the site. Ten layers made-up the stratigraphic profile of the site. Gastropods freshwater shells such as *Thiara winteri*, *Thiara rudis*, *Melanoides maculata* were also found in enormous number in almost all the layers excavated.

#### SOIL/SHELL LAYER DESCRIPTION

Layer I	Pure shell layer. Mostly whole and fragmented kabibe
Layer II	Pure shell layer (whole)
Layer III	Pure shell layer. Mostly whole and fragmented
Layer IV	Pure shell layer (whole)
Layer V	Shell layer with ashes and charcoals. Shells are heavily fragmented
Layer VI	Pure shell layer (whole)
Layer VIIa	Shell layer with soil (silty clay). Mixture of whole and fragmented shells
VIIb	Shell layer with soil (silty clay). Mostly whole kabibe
Layer VIII	Pure shell layer. Mainly whole mixed with fragmented shells
Layer XI	Soil layer with fragmented shells (Intrusion)
Layer Xa	Soil layer with few fragments of kabibe
Xb	Silty Clay layer (10YR 3/6 dark yellowish brown)

Cultural materials retrieved during the excavation were of metal fragments, glass fragments, earthenware sherds (brown, black and red pottery types), andesite and chert flakes and modified stone. Presence of metal and glass fragments in layer 4 and 5 can be attributed to the sloping nature of the square. Bone fragments belonging to fish, pig and human were also found.

### IV. A. MARCELINA DUMBRIQUE PROPERTY SHELL MIDDEN SITE, CATUGAN, LAL-LO

The site was excavated 1996 by Mr. Kazuhiko Tanaka (Tanaka:2000). A 2 x 2 meter square was systematically excavated on the eastern cliff of the property (riverbank). Human bones and broken parts of earthenware jars and bowls that have brown, black and red surfaces were among the finds.

A re-excavation of the site was conducted this year. This time it was on the interior part of the property. New datum point was established and square N2E8 was formed. Four (4) layers composed the shell midden excluding the surface layer. These are:

#### SOIL/SHELL LAYER DESCRIPTION

1. SURFACE LAYER / Soil layer with fine shell fragments
2. Layer 1 Shell layer Mixture of whole and fragmented kabibe shells
3. Layer 2 Shell layer with soil The square was divided into two types. Almost half of the square (North-south) has fragmented kabibe shells while the other has whole kabibe shells

4. Layer 3 Soil (silt) layer with fragmented shells
5. Layer 4 Soil layer (silt layer)
6. DISTURBANCES (Appeared in Layer 2 up to Layer 4)
  - 1 Shell layer with soil. Fragments of shells ranging from fine to medium in size
  - 2 Shell layer with soil. Mixture of whole and fragments of shells ranging from fine to medium in size
  - 3 Shell layer with soil. Mixture of whole and fragments of shells ranging from fine to medium in size
  - 4 Shell layer with soil. Fragments of shells ranging from fine to medium in size

Earthenware sherds found were mostly of black pottery type. Majority of the sherds has plain surface. Other sherds have impressed and incised design particularly those found from Layer 3. Red slip pottery type also appeared in Layer 4 but mixed with black and brown type. Sherds found vary from jar to bowl type. Blue and white porcelain sherds from surface layer and layer 1 were of Ming type. Deer and pig jaws, teeth and bones were retrieved almost in all layers.

Two features became visible upon exposing layer 1. These are Feature 1, which is a broken earthenware Jar burial and Feature 2, also a broken earthenware pot with a cover. These two features were found associated with a complete European wine bottle. Human bones inside Feature 1 were fragmented and some were powdered although skull and jaw part with teeth was still recognizable. Deer bones were also found mixed with human bones. Feature 2 contains fish bones and other animal bones. A wooden-post was unearthed upon excavating layer 2, spit 1.

## **B. AUGER CORING**

### **1. Northern Side of Dumbrique Property**

Eleven (11) holes were made. The auger was extended up to the point where kabibe shells were no longer present. A 2-meter depth was set for each hole made aside from the fact that the auger used has a capacity of 2-meter only. Shell layers on this side normally appeared after the soil layer, which is approximately 20 cms from the surface except for hole C and F.

HOLE	PROPERTY OWNER
A	Marcelina Dumbrique
B	Dolores Sumawang
C	Samuel Mariano
D	Samuel Mariano
E	Cesmundo Ramos
F	Sufronio Tomas
G	Sufronio Tomas
H	Renie Narag
I	Renie Narag
J	Conrado Padilla
K	Conrado Padilla

Materials found in the conduct of auger coring consisted mainly of earthenware sherds of black pottery type and animal bones particularly pig bones and teeth. Cesmundo Ramos site aside from the materials collected from the auger coring donated all the materials recovered while a septic tank was being excavated. Earthenware sherds, an almost complete earthenware pot, human bones, deer bones (jaw) and teeth and a metal chain were given. Hole J and K still have cultural materials such as earthenware sherds even if kabibe shells were not present.

### **2. Southern side of Dumbrique Property**

Nine (9) holes were made. Results of auger coring revealed that shells were not entirely present on this side of the riverbank. Holes E, H and I showed the absence of shells.

HOLE	PROPERTY OWNER
A	Antonio Cumador
B	Antonio Cumador
C	Nestor Bona
D	Kasio Tesalona
E	Kasio Tesalona
F	Kasio Tesalona
G	Kasio Tesalona
H	Kasio Tesalona
I	Kasio Tesalona

Broken pieces of earthenware pottery of black and brown types were normally found in the auger. Red type pottery sherds (plain and with incised design) were recovered from Nestor Bona site. Majority of the finds from Kasio Tesalona property consisted of earthenware sherds. Black and brown types usually found between 20 -100 cms from the soil surface while the red type appeared from 100-140 cms.

#### **V. A. ROSALIO CORTEZ PROPERTY SHELL MIDDEN SITE, DUGO, CAMALANIUGAN**

The site was first excavated in 1980 (Orogo:1980). Three squares were dug and among the materials unearthed from this excavation were two burials - one complete and one disturbed, a clay effigy head, earthenware sherds, animal bones and stoneware and porcelain sherds.

Re-excavating the site for this year, a new datum point was established and a 2 x 2 meter square, S1W2 was dug up (see map). The square was heavily disturbed. After removing the soil surface, Disturbance 1 appeared that extend all throughout out the square. Layers 2 and 3 were both shell layers. While Layers 4 and 5 were both silty clayey layers (see stratigraphic profile of Sq. S1W2). There were only two layers that made up the soil stratigraphy excluding the Surface/soil layer. Layer 1 is a shell layer with dark brown soil. Materials find included black earthenware sherds with incised and dot punctation designs and animal bones. Similar earthenware sherds from the 1980 excavation were recovered in Layer 1 spit 2. This sherd has incised and effigy head designs. Blue and white porcelain sherds from Surface layer and layer 1 were of Ching Dynasty type (18th AD). Contemporary and European type porcelain sherds were also found. Human bones were found on Layer 1, spit 3 - east wall (see illustration). Layer 2 is a clayey silt layer. The upper portion of this layer still have some spots of fragments of shells but was completely disappeared after removing spit 1. Red-slipped pottery sherds were found on this level.

#### **B. AUGER CORING**

##### **1. CORTEZ PROPERTY SHELL MIDDEN SITE**

Six (6) holes were made within the property (see illustration for auger coring). The deepest hole made was in Hole E which is 240 cms from the soil surface. Water level was reached in Auger B, E and F. The same cultural materials were found. These were the broken pieces of glass, stoneware, earthenware pots (black, brown and red types), metal and bone fragments.

##### **2. SOUTHERN SIDE DISTRIBUTION**

An ocular inspection was conducted before the actual auger coring was made. Surface finds were collected on the entire areas where shell midden was still visible in the surface. Each property boundary and owner were identified. A total distance of 214 meters was completed from the datum point.

HOLE	PROPERTY OWNER
A	Rosita Urbi

B	United Methodist Church
C	Dela Cruz
D	Dela Cruz
E	Ubias/Germinia Fajardo
F	Emmanuel Artates
G	Emmanuel Artates
H	Leon Ibe
I	Lope Ojero
J	Lope Ojero
K	Lope Ojero

Vertical distribution of shells on this side range from 40 cms to 185 cms in depth. The usual brown and black pottery sherds were mostly the finds found from the auger. Emmanuel Artates site yielded some interesting finds both from the surface and auger. Earthenware sherds with dot punctation and incised designs and red slip pottery sherds from Hole G were found from 100 -160 cms from the surface within silty clay layer. Red slip pottery sherds were also found from Leon Ibe and Lope Ojero properties within 1 meter depth.

### 3. NORTHERN SIDE DISTRIBUTION

An approximate distance of 92 meters was finished for the auger coring. Six (6) holes were made. The deepest recorded shell midden was at 120 cms from Efren Udarbe Property.

HOLE	PROPERTY OWNER
A	Primo Oandasan
B	Primo Oandasan
C	Efren Udarbe
D	Efren Udarbe
E	Samuel Costales
F	Samuel Costales

Porcelain sherds were commonly found on the surface. Earthenware sherds of black and brown types were found within 40-100 cms depth while the red-slipped pottery sherds were used to uncover at 100-140 cms depth.

### VI. A. AUGER CORING IN LAL-LO CENTRO SHELL MIDDEN SITE, LAL-LO, CAGAYAN

Shell midden along the riverbank of Lal-lo Centro is quite different from the Catayauan and Sta. Maria midden. Although they are all situated along the riverbank, the Lal-lo Centro site is presently populated. Houses were built on top of the midden. This posted some problems in the conduct of auger coring. Since a hole will be bored inside their property, owners were a bit hesitant to allow the team to do the coring. Nevertheless, after explaining to them the process, the team was allowed to conduct auger coring.

Auger coring activity was first conducted. This was purposely done in order to select an ideal site that will suit the limited time left. Nine (9) holes were made. Shell deposit range from 40 cms to more than 3 meters deep. Shell midden from Conrado David property has an approximate height of only 2 meters. This factor was considered in selecting the site to be excavated. Materials retrieved from the auger were mostly porcelain sherds ca. Age of Contact as well as some Europeanware sherds. Bricks, stoneware and earthenware sherds of black type, slags and bone fragments were also found.

HOLE	PROPERTY OWNER
A	Federico Rosales

B	Federico Rosales
C	Jimmy Siriban
D	Leonila Siriban
E	Conrado David
F	Conrado David
G	Cherry Castillejo
H	Virgilio Vargas
I	Paquito Rosales

## **B. CONRADO DAVID PROPERTY SHELL MIDDEN SITE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION**

Square S14W33 was excavated. Four layers made up the stratigraphic profile. Removing the surface layer, bone fragments belonging to pig and deer were found as well as bricks, metal objects, tiles and stoneware, porcelain and earthenware sherds. A huge disturbance (D) was exposed after removing surface layer. One of the finds were bone fragments with pigment that belongs to a large bovid. Layer 1 is a soil layer with fragments of kabibe shells. Porcelain and stoneware sherds, ca. Age of Contact (16th - 18th century) were enormous in number. Associated with these were contemporary materials such as bricks, tiny bottle of coca-cola and glass debris. Fragments of bones belonging to deer, chicken, fish as well as human were also recovered from this layer. Layer 2 is a shell layer with yellowish brown soil. Earthenware sherds and bone fragments were retrieved. Layer 3 - clay with sand, followed. Shells were completely disappeared from this layer except for Pit 1. The pit was exposed at -205-225 cms from the local datum point used and was surrounded by shell fragments while the pit which could be a possible post remains was full of sand. Materials collected to explain the possible used of the rectangular hole were still insufficient. Earthenware sherds and pig bones were found inside the pit while stoneware and potsherds, fish jaw and bone fragments were recovered from this layer. Fragmented kabibe shells appeared in Layer 4. This layer is a silty clay layer mixed with shells. In layer 5, shells were completely gone and no cultural materials were found both from layer 4 and 5.

### **SUMMARY**

Sites explored and excavated yielded different cultural materials that will help in establishing the relative chronology of Lal-lo municipality and its vicinities. Although the materials obtained from the conduct of auger coring were somehow limited since it will greatly depend on the capacity of the auger but nevertheless, the research tried to verify and check the distribution of these artifactual and faunal materials through the conduct of a systematic excavations.

Black type pottery has always been found associated within the shell layer while the red slipped pottery were in many cases retrieved from the silty clay layer. Conrado Pascua site presented a mixed association of the black, brown and red-slip pottery types. Dumbrique site on the other hand, yielded a very interesting find especially on black pottery both plain and with design. Cortez site also has both black, brown and red-slip pottery types. Black and brown types were mostly found together in shell layer while the red types appeared in silty clay layer. Cultural materials found from Gaerlan site indeed, are very much different from the other sites. Flake stone tools were mostly recovered both from shell and clay layers with very little potsherds. Lal-lo Centro sites revealed a much younger types of cultural materials that were mostly belonging to ca. Age of Contact.

Relatively, these materials are remains and reflections of their own time; specific layers have specific cultural materials associated within. However, this may not be applicable at all times. Based from the systematic excavation and auger coring conducted, black, brown and sometimes, red-slip potteries were found together in shell layer. But it is still too early to generalize. More auger coring and test excavations are needed to have a clear chronological order based on the distribution of artifacts recovered from each site, from each layer.

### **Acknowledgement:**

We would like to acknowledge the assistance provided by Messrs. Angel P. Bautista, Alfredo Orogo, Jose Santiago, Dante Posadas, Domingo Pagulayan, Eustaquio Larios and Augusto Borlasa.

### **REFERENCES CITED:**



De la Torre, Amalia

2000 Brief Report: Lal-lo, Cagayan Archaeological Project 2000. *Typescript*. Manila, Philippines: National Museum.

Ogawa, Hidefumi

2001 Introduction: The Excavations of Lal-lo Shell Middens Research Rationales and Brief History of the Project. In Ogawa, H. (Ed.)  
Excavations of Lal-lo Shell Middens - Archaeological Studies on the Prehistory of the Lower Cagayan River, Northern Luzon,  
Philippines: 1-13, Report presented to the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Tokyo.

Ogawa, H. & Aguilera, M. L. Jr.

1992 Data Report on the Archaeological Explorations in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. *Journal of Institute  
of Religion and Culture* 10:41-113. Kokushikan University, Tokyo.

Orogo, Alfredo B.

1980 The Archaeological Excavations at the Cortez site, Camalaniugan, Cagayan. *Typescript*. Manila, Philippines: National Museum.

## Chronological Study on the Red-slipped Pottery of Lal-lo Shell Middens

### - Special Reference on the non-decorated Red-slipped Pottery under the Shell Middens

Hidefumi Ogawa

#### Summary

The non-decorated red-slipped pottery in the Lal-lo Shell Midden sites are usually revealed from the silty clay layer under the shell deposit on the river bank of the Lower Cagayan River. This pottery group shares some characteristics with the decorated red-slipped pottery revealed from the Magapit Shell Midden Site, in the paste, surface color and firing. By the result of the analyses of non-decorated red-slipped pottery from Irigayen Site in Santa Maria Shell Midden Site, it becomes clear that this pottery group has the types of Jar, Bowl with ring-foot and stove, and the some rim shapes of these types of pottery differs from the ones of the decorated red-slipped pottery group.

The C14 datings of the non-decorated red-slipped pottery indicate that it lasts from 2972 to 3461calBP (Table 1). The datings indicate also the non-decorated red-slipped pottery is older than the one of the decorated red-slipped pottery,  $2800 \pm 140$ BP from the Magapit Shell Midden Site. As the method and accuracy of the C14 datings are different, we cannot conclude at this moment the chronological positions of these pottery groups. The chronological problem between these two pottery groups will be resolved with the further excavations of the sites, geological study on the changing ecological settings of the Lower Cagayan River and the change of the utilization of the river resources.

**Keywords:** Lal-lo Shell Middens ラロ貝塚群, non-decorated red-slipped earthenware 無文赤色スリップ土器, decorated red-slipped earthenware 有文赤色スリップ土器, Magapit Shell Midden マガピット貝塚, Santa Maria Shell Midden, Irigayen Site サンタマリア貝塚イリガエン遺跡,

#### Introduction

The red-slipped pottery from the Lal-lo Shell Middens has been revealed in the beginning of the archaeological research in this area. The first red-slipped pottery of the Lal-lo Shell Middens was found in the Magapit Shell Midden which is located on the limestone hill, beside the Cagayan River, about 50 meters above mean sea level (M.S.L.). The feature of the red-slipped pottery from Magapit is the decoration by the comb-like dot dentations on the rim, neck, body and ring-foot of the jar and bowl type pottery (Cabaniilla 1972, Aoyagi 1977, Thiel 1989). But when the other shell middens have been excavated, it becomes clear that the decorated red-slipped pottery is so far particular only to the Magapit Shell Midden – it is not revealed yet from other shell middens, the other shell middens located on the Cagayan River bank produce the decorated and non-decorated Black Potteries (Aoyagi and Tanaka 1985, Aoyagi et al. 1986, 1988, 1989, 1991, 1993, Ogawa and Aguilera 1992), and the non-decorated red-slipped pottery forms the cultural layer for more than one meter in the silt layer under the shell middens located on the Cagayan riverbank (Bautista 1996-97, De la Torre 1995-2000, Garong 1996a, b, 2001, Garong and Toizumi 2000, Orogo 1995, Tanaka 1997-99, Ogawa 1998, 1999b, 2000c).

The C14 datings of those cultural layers of Lal-lo Shell Middens are also gradually clear (Mihara et al. 2001). The datings of the decorated red-slipped pottery from Magapit Shell Midden are two;  $2800 \pm 140$ BP(N-5396),  $2760 \pm 125$ BP(N-5397), and the datings of the non-decorated red-slipped pottery from Irigayen site in Santa Maria Shell Midden are 2972 to 3461 calBP. Also the C14 datings of the non-decorated black pottery from the shell layers of Conciso site in the Catayauan Shell Midden are 957 to 1189 calBP (Ogawa 2001, Mihara et. al. 2001).

The characteristics of each cultural layer from Lal-lo Shell Middens gradually become clear, but the chronological relationships of all those cultural layers cannot be recognized stratigraphically. So far, the stratigraphically recognized chronological order of those cultural layers is the transition from the non-decorated red-slipped pottery (from silt layer) to the decorated or non-decorated black pottery (from shell layer). This chronological transition can be seen in the riverbank shell middens. But the transition from decorated red-slipped to non-decorated red-slipped pottery is not yet recognized stratigraphically. Formerly I assumed those cultural phases transit such as the decorated red-slipped pottery non-decorated red-slipped pottery decorated black pottery non-decorated black pottery (Ogawa 1998, 2000c). But this will be verified through C14 dating results from each cultural layers.

Another issue on the cultural layers of archaeological sites is the difference of subsistence between the people who made the decorated red-slipped and non-decorated red-slipped pottery. The former is derived from the silty layer, but the latter comes from the shell layer. Although both potteries share the same characters such as its shapes, types of vessel, and paste, people who made the non-decorated red-slipped pottery didn't practice the shell gathering. But also the non-decorated red-slipped pottery also revealed in the shell deposit of Mabangog Cave, 10km away from the riverbank shell middens (Ogawa 1996b). The pottery data from Mabangog

Cave contradict with the subsistence data from the riverbank shell midden sites. But as long as the number of data is limited at this moment of research, we cannot rush to the conclusion.

Based on those current knowledge of cultural phases in the shell midden sites, the purpose of this article to make clear the similarities and differences of characteristics between the decorated red-slipped pottery and non-decorated red-slipped pottery. Actually at first, I present the result of analyses on the non-decorated red-slipped potteries from the silt layer of Irigayen Site, Santa Maria Shell Midden. Second, by the comparison of the similarity and difference between the decorated red-slipped pottery and non-decorated red-slipped pottery, I will show that the non-decorated red-slipped pottery has not as much variation in vessel types and shapes as the decorated red-slipped pottery, even though both share the same features of paste, red-slip, polishing and firing.

## 1. Excavation of Irigayen Site Maria Shell Midden and the non-decorated red-slipped pottery

Santa Maria Shell Midden is located on the Cagayan River bank, 22 to 24km away from the river mouth. Shell midden extends intermittently one kilometer in the southern part of Santa Maria Village. The distribution of Santa Maria Shell Midden is sparse and spotted, not like the deposit of shells seen in the Catayauan Village (500 meters long, 100 meters wide and two meters deep), you can find the shell mound about 10 meter diameter and one meter deep on the riverbank. And after 50 to 100 meter south, you will see another shell midden. The Black Pottery is produced in shell middens. In the northern part of Santa Maria Village, shell midden disappears, and the silt layer exposed on the surface ground, then you can find the non-decorated red-slipped pottery sherds from the surface. The extended burials are recognized under shell midden in the Irigayen Site from silt layer during the exploration.

The purpose of excavation of Irigayen Site was to verify the relationship between shell middens and human burials. During the burial excavation under shell layer in the Irigayen Site, the red-slipped pottery sherds were revealed from silt layer. The detail of the excavation in Irigayen Site was reported already by De la Torre (2000, Ogawa 2000c), the following would draw the brief sketch of the excavation.

The Irigayen Site is located on the Cagayan Riverbank about seven meters above MSL (Fig. 2). The extended area of shell has about 50 meters diameter from the riverbank edge to the inner area. In 1986, during the exploration, the extended human burials were seen on the wall of the edge of the riverbank, in the silt layer under the shell layer, at the site (Ogawa and Aguilera 1992). But in 1995, when the excavation begun, we could not find the any trace of burials on the wall of silt layer. The burials must have been carried away by flood during typhoon.

Based from the 1995 excavations, the following data were gathered: it becomes clear that the shell deposit is 40 to 50cms thick, the burial pit found in silt layer was dug by people who made and used the non-decorated black pottery, and that the non-decorated red-slipped pottery sherds are excavated from silt layer.

Figure 2 shows the distribution of the excavated squares. The excavation squares are two 4 x 4 meters grid (N5W8, N3W6), two 4 x 2 meters grid (N6W8, N6W7), and two 2 x 2 meters grid (N5W9, N4W9) were opened. After the 40 to 50cms thick shell layer was exposed, we continued to excavate the burial pit where human bone and the cultural layer of non-decorated red-slipped pottery appeared. The depth of excavation in each square is shown in Table 2.

The stratigraphy of Irigayen Site is divided in four layers;

**Surface:** Black soil. 10cm thickness

**Layer 1:** Shell layer with black soil. Percentage of mixture of shell is lower than Layer 2.

**Layer 2:** Shell layer with dark brown soil. Thickness of shell is 40 to 50cm.

**Layer 3:** Yellowish brown silt layer. This layer was dug until two meters deep when the non-decorated red-slipped pottery sherds became sparse.

The features like hearth and pits were revealed mostly at the boundary of shell and silt layer. After removed shell layer, the plan of features can be recognized by the shell remained on the surface of silt layer. Those features revealed at the boundary of shell and silt layer belong to the non-decorated red-slipped pottery cultural phase. In the silt layer, the distributions of burned soil and piles of charcoal were recognized, but its plane of hearth was not defined. The features from the non-decorated red-slipped pottery phase are

described as follows;

**Hearth:** it was revealed on the surface of silt layer in the square of N5W8. The hearth was covered by burnt soil and shell, ash and charcoal. The size of hearth is 50cm of diameter, 20cm deep. The wall of hearth was applied by clay. Microbeads made of clay about 1.5mm diameter are found in this hearth.

**Pits:** Eleven pits were revealed near the hearth in square N5W8 on the surface of silt layer. Some of those pits were believed to be post pits by the patterns of its depth and distribution.

**Burial:** the plan of extended burial was recognized in the silt layer (Layer 3) in square N6W7, 60cm below surface and 30cm below the surface of silt layer. The shape of plan is oval, 2.3 meters long, 80cm wide, and 20cm deep. Male human skeleton was remained in the pit, and one small jar, its cover and one bowl with ring foot were found on the wrist of his right hand. Two glass beads also revealed from the wrist of right hand. The burial was found in silt layer, but the non-decorated red-slipped pottery sherds are not found associated with the burial from this pit. And the non-decorated black potteries were buried as grave goods. Also the shell was not revealed from this pit. It means that prior to the disposal of Kabibi shells, this area was used as a cemetery.

## 2. Analyses of the non-decorated red-slipped pottery

After studying and analyzing the different features exposed from the surface of silt layer where the black pottery cultural phase were observed, excavation of the non-decorated red-slipped pottery cultural phase in the silt layer followed. As mentioned above, it was difficult to recognize the plans of feature in silt layer, we have to record the artifacts three-dimensional measurements. The materials found from the non-decorated red-slipped pottery cultural phase in silt layer included more than ten thousand non-decorated red-slipped pottery sherds, two broken pieces of polished stone adze, one chert flake, one broken piece of ling-ling O made of stone, one broken piece of stone ornament with round hole, tree broken earthenware ling-ling O, one whetstone and one grinding stone. The limited number of ecofacts like animal and fish bones are also revealed from silt layer. Table 2 shows the non-decorated red-slipped pottery sherds distribution by depth and excavation square.

Since the non-decorated red-slipped potteries in the Lal-lo Shell Middens are not yet analyzed, it is difficult to infer the typological characteristics, or vessel types at this time. Given such limitation, analyses of the non-decorated red-slipped pottery sherds will be based on the experience I had with the Magapit decorated red-slipped pottery studies (Aoyagi et. al. 1991). Such as sorting of vessel type according to its kind e.g. Jar, Bowl, Ring-foot, Stove. Using those categories of vessel types, I will extract the features of vessels as follows.

### 2-1. Jar Type (Fig. 3 ~ 5)

This type of vessel has a widely opened mouth, externally everted mouth rim, maximum diameter at the middle of body and round base. The thickness of the pottery is thin, the outer surface of the pottery is covered by the red slip made of ocher from the clay, and after red slip had been applied, surface was polished. The firing of this type of pottery is good, but the paste is sandy, but it doesn't contained small stones are not contained, so that the surface of pottery is easily worn out. The decorated pieces are limited, decorated by dots punctuation, mostly the potteries have no decoration. The function of this type of pottery must be for boiling.

The rim sherds of this type pottery can be classified into eleven (Fig. 3 to 5; J-1 to J-11). From J-1 to J-10, they have an everted rim shape, and J-11 has no rim. All of these sherds are covered by red slip and polished horizontally its outer surface.

**J-1:** This type of rim is not thickened and externally everted from the neck of vessel but gently vented to inside at the lip (Fig. 3: 1-24). The red slip covers on the entire outer surface and until the neck in the inner surface. The polish is also applied on the same area of vessel.

**J-2:** This type of rim is also externally everted from the neck and gently vented the lip to inside, but, comparing with **J-1**, the lip of rim is largely vented (Fig. 3: 25-31).

**J-3:** This rim is externally everted, not thickened and not vented to inside (Fig. 4: 32, 33).

**J-4:** This rim also externally everted and not vented to inside like **J-3**, but the outer lip is made thin (Fig. 4: 34-37).

**J-5:** This type of rim is also externally everted from the neck and gently vented the lip to inside, but, the outer lip is made thin like **J-4** type of rim (Fig. 4: 38-45).

**J-6:** This type of rim is also externally everted and gently vented the lip to inside, but the lip is vented again to the outside like a letter S shape (Fig. 4: 46, 47).

**J-7:** This type of rim is thickly made and externally everted (Fig. 4: 48, 49).

**J-8:** This type of rim is externally everted, but outer part of rim is thickened, so that the horizontal ridge is made clearly just at the upper part of neck (Fig. 4: 50-56).

**J-9:** This type of rim is also thickened at the outer part and has a horizontal ridge at the middle of rim, but the lip is made in flat (Fig. 4: 57).

**J-10:** This type of rim is thickened from both side of surface (Fig. 4: 58). So that a horizontal canal is made on the lip.

**J-11:** This type of rim has no neck (Fig. 5: 59-71). The rims shown in Fig.59 to 65 are slightly everted to outside and the lips are made roundly, but the lips from 66 to 70 are made sharply. No. 71 is thickened prominently and the lip is made in flat.

The sherds No. 72 to 74 (Fig. 5) are parts of neck and carination parts of body of Jar Type pottery. Sherds No. 75 to 78 are decorated rims (Fig. 5). Those are decorated by the accumulation of single punctuations at the outer surface of rim. No. 79 is a body sherd remains the traces of the cut end of a board used to smooth the surface of pottery. The traces show the direction of body smoother, from upper to lower and left to right (Fig. 5: 79). No. 80 is a flat bottom of Jar Type (Fig. 5: 80). Mostly the bottom of jar is supposed to be round, but this sherd is collected only one, but it shows there exist the flat bottle of jar together with round one. The wall of vessel is thin,

## **2-2. Bowl Type (Fig. 5 ~ 6)**

The Bowl Type vessels from Irigayen Site have widely everted body and rim, and as showed in figures, mostly this type of vessel must have an everted ring-foot under the body. The inner and outer surface of body and outside of ring-foot are covered by red slip, and finished by polish. Same as Jar Type potteries, the wall of Bowl Type vessels is thin, and those are made by good firing and sandy paste. The only one piece of decorated rim sherd by dot punctuations is revealed. Most of this type of pottery has no decoration except round perforation on the ring-foot. The function of this type of vessel is supposed to dish up foods. This type also can be classified into several subtypes by rim shapes.

**B-1:** This type of bowl has a step at portion under the rim (Fig. 5: 1-2, 6, 3-10). The step connects the rim and body unevenly. No. 1 of Figure 5 remains the ring-foot everted with three round perforations.

**B-2:** This type of rim makes lip everted (Fig. 6: 11-20). The sherds No. 11 to 13 are made flat the inner surface of rim, but the sherds No. 14 to 20 remains step at the inner surface. This step is similar to the one of B-1 Type, but not so prominent. The sherd No. 19 is decorated by the accumulated single punctuations in the shape of reversed triangle. This triangles must to be arranged horizontally.

**B-3:** This type of sherd is similar to No. 11 of **B-2** Type, but the lip is not so everted (Fig. 6: 21).

**B-4:** This type of bowl has a small size, and the rim is vertically pinched up (Fig. 6: 22-25). The small ring-foot has an everted foot rim.

**B-5:** This type of rim is pinched at the lip to inside (Fig. 6: 26, 27).

**B-6:** This type of rim has a widely thickened lip (Fig. 6: 28-30). No. 29 has dot punctuations on this wide lip.

**B-7:** This type of rim is vented to inside at the lip (Fig. 6: 31).

**B-8:** The lip of this type of everted rim is thickened (Fig. 6: 32).

**B-9:** This type of rim is not thickened and everted (Fig. 6: 33).

## **2-3. Ring-foot (Fig. 6 ~ 7)**

The ring-foot is attached to the body of Bowl Type vessel like Figure 5, No. 1. But some of the ring-foot has a possibility to be attached to the body of jars (Fig. 741-46). The wall of ring-foot is thin, and the outer surface is red-slipped and polished. The inner

surface is mostly wiped, but some of them are red-slipped and polished. The firing is good, and the paste is sandy. This type is classified into three subtypes.

**R-1:** This type of ring-foot is everted and must be attached to the Bowl Type body (Fig. 6: 34-40). The sherds of No. 34, 35 and 39 have thin at the foot end. But the sherds No. 36, 37 and 40 have thick and thickened foot end. No. 39 is decorated by the horizontal dot punctuations. No.40 is applied a pitch of clay vertically.

**R-2:** This type of ring-foot is short and vented to inside (Fig. 7: 41-44). Same type of ring-foot is found also from Magapit Shell Midden. This type is not yet found together with the body. So we cannot decide if it belongs to Jar or Bowl Type. This ring-foot is short and vented to inside, so it might be supposed to be a flat base jar. No.43 is thickened at the foot end, and decorated by dot punctuations. No. 44 has the horizontal round perforations.

**R-3:** It is difficult to identify whether this type can be called a ring-foot or not. The clay coil with triangular section is applied to the bottom of vessel body (Fig. 7: 45, 46). The height of this ring-foot is one centimeter.

#### **2-4. Stove (Fig. 7)**

The stove is a daily cooking utensil and widely utilized until now. The shape of stove is normally round and oval. Both types of stove have three lumps of clay at the top to sustain the cooking pots put on the stove. The mouth of firebox of round shape stove is small but oval shape of stove has a widely opened mouth. The origin of stove must to be a hearth with three stone to sustain the pots.

The sherds of stove found in Irigayen Site are three pieces (Fig. 7: 47-49). No. 47 is a clay lump to sustain cooking pots. The surface is ripped off because of secondary firing. No. 48 is a part of body. The trace of cut end of a board used to smooth the surface. No.49 is a part of rim, vented to inside. The lip is made in flat.

#### **2-5. Others (Fig. 7)**

The handles and lumps are also revealed (Fig. 7: 50-53). The pieces of broken sherds reformed to oval shape using for child game, locally called Pamato, are also found (Fig. 7: 55-58).

### **3. Discussion**

The non-decorated red-slipped potteries from Irigayen Site are analyzed and described, based on the studies of the decorated red-slipped potteries from Magapit Shell Midden. As a result of analysis, it becomes clear that both red-slipped potteries have the basic similarities such as typological characteristics. Those similarities can be seen in the types of potteries like jar with wide opened mouth, bowl with ring-foot and stove, the firing, paste, red slip and polish. But at the same time, there are also differences between those two red-slipped potteries, such as the presence of decoration, variations of types and shapes of pottery.

#### **3-1. Absence of Decoration**

At this moment of research of Lal-lo Shell Middens, the decorated red-slipped pottery cultural phase is found only at Magapit Shell Midden. The decorated pottery sherds from Magapit are 766 out of 21000 pieces of potsherds recovered. But in Irigayen Site, the decorated sherds are only eight of 12000 pieces found. The method and composition of decoration are also different between those two pottery phases. In Irigayen Site, the single dot punctuations form the horizontal line or reversed triangle, but in Magapit, the dot punctuations compose the comb-like lines, the serrate lines, S-Shape lines, and the cut lines are used for the boundary of decorations.

The decorated pottery types and its portions have some patterns. On the decorated red-slipped pottery from Magapit, the Jar Type pottery has the decorations on the lips, inner and outer rims and carinations, and the Bowl A Type pottery have the decorations on the lips, outer rims and joint part of body and ring-foot (round perforations), inner and outer rim of ring-foot, and Bowl B Type has the paddle marks on the outer surface (Aoyagi et. al. 1991: Fig. 8-41). But on the non-decorated red-slipped pottery from Irigayen Site, the limited decoration can be seen on the outer rim of the Jar Type pottery (Fig. 5: 75-78), the decorations of Bowl Type pottery can be seen on the outer rim, joint part of body and ring-foot (round perforations) and outer rim of ring-foot. The Bowl B Type with paddle marks from Magapit is not found in Irigayen Site. The decorated jar rims (Fig. 5: 75-78) are single rim, not thickened, so that

it is hard to distinguish whether if those are jar rim or foot rim of ring-foot. In this paper, those are classified into jar rim, although there is a possibility that it belong to the ring-foot rim. If those decorated Jar Type rims belong to Bowl Type rims, Jar type pottery from Irigayen Site becomes to have no decorated rims. But from Magapit also, same type of jar rims like everted rim and rim with no neck, have not decorations. In this point, they have the similarity. Bowl Type Ring-Foot also has a similarity in the decorated portion, round perforations on ring-foot and dot punctuations on ring-foot rim. But the ring-foot classified in **R-2** type ring-foot, the decoration method is different, such as round perforation and dot punctuations in Irigayen Site, but round hole is perforated in Magapit.

### **3-2. Similarities on Paste, Firing, Polish and Surface Color**

The similarities between decorated and non-decorated red-slipped potteries can be observed in the paste, firing, polishing on the surface and surface color. The paste contains quartz or feldspar grains of one millimeter diameter. The firing is good, the surface of vessels are red-slipped and polished. The color of surface is reddish brown. Those common characteristics show the similarity of two pottery phases.

But in the Magapit the decorated red-slipped pottery phase, there exist the one pottery group different in decoration, paste and color. The decoration of this group of pottery is applied on the outer rim of hyperbolic shape vessel or on the carination of jars, and the decoration elements are composed with fine nail shape incision, small round impression and fine and short incision. The paste is coarse, contains quartz or feldspar grains of two millimeter diameter, but the firing is good. The outer and inner surface is red-slipped and polished. The color of surface is blackish red to black. The number of this kind of pottery sherds is limited comparing with other common type of sherds in Magapit, but those are revealed from any levels or layers in the 5.5 meters deposit of shell. The whole shape of hyperbolic vessel and carination part applied this kind of decoration elements is unknown yet. In the non-decorated red-slipped pottery phase from Irigayen Site, this kind of pottery is not found.

### **3-3. Variations of Types and Shapes of vessels**

In the non-decorated red-slipped pottery, the variation of types and shapes of vessels is limited comparing with the decorated red-slipped pottery phase. Bowl Type B of the decorated red-slipped pottery phase is absent in the non-decorated red-slipped pottery phase. Also in one vessel type, the variation is limited in the non-decorated red-slipped pottery phase. For example, the variation of jar rim has only two kind, such as the everted, excurved rim from the neck and the rim without neck, but in the decorated red-slipped pottery phase, the kind of rim shapes are nine.

### **3-4. Difference in Rim Shape**

The difference between the non-decorated red-slipped pottery phase and the decorated red-slipped pottery phase can be seen also in the vessel and rim shapes. These differences can be discussed in the presence or absence of the decorated red-slipped pottery phase and the non-decorated red-slipped pottery phase as follows;

#### **a. Present in the decorated red-slipped pottery phase but absent in the non-decorated red-slipped pottery phase**

##### **a-1. Variable Bowl Type rims absent in the non-decorated red-slipped pottery phase**

In the decorated red-slipped pottery phase, the shapes of lips of Bowl A Type vessels are variable. Mostly the rims of Bowl A Type vessels are incurved and thickened and the lips are made in broad. The decorations are formed on this broad lip. But in the non-decorated red-slipped pottery phase, the lip variations of Bowl Type are not prominent. The reason must be an absence of decoration on the lips. On the contrary, in the non-decorated red-slipped pottery phase, the rims of Bowl Type vessels have a tendency to emphasize the outer portion of rim.

##### **a-2. Ring-foot variations.**

In the decorated red-slipped pottery phase, the ring-foot shapes are variable, comparing with the ones of the non-decorated red-slipped pottery phase. In Magapit, the height of ring-foot varies from low to high, but in the non-decorated red-slipped pottery

phase, there exist only low ring-foots.

**b. Present in the non-decorated red-slipped pottery phase but absent in the decorated red-slipped pottery phase.**

**b-1. Jar Type rim shape absent in the decorated red-slipped pottery phase.**

The rim shape that the outer lip is made thin as mentioned at J-4 (Fig. 4: 34-37) and J-5 (Fig. 4: 38-45) of Jar Type doesn't exist in the decorated red-slipped pottery phase.

**b-2. Bowl Type rim shape absent in the decorated red-slipped pottery phase.**

The B-2 and B-4 type rim shapes don't exist in the decorated red-slipped pottery phase. The rim shapes belong to B-2 (Fig. 6: 11-20) type are thickened or excurvated at the outer lip. The rim shape of B-4 (Fig. 6: 22-25) type makes pinch up the lip. This type of small bowl doesn't exist in the decorated red-slipped pottery phase of Magapit Shell Midden.

**b-3. Ring-foot shape absent in the decorated red-slipped pottery phase.**

R-3 type ring-foot which the clay coil with triangular section is applied to the bottom of bowl body (Fig. 7: 45, 46) and the ring-foot shown at No. 40 in Fig. 6 which a pitch of clay is applied vertically on the outer surface don't exist in the decorated red-slipped pottery phase.

**c. Difference in the stepped rim of Bowl Type.**

The rim shape of B-1 type bowl has a step at portion under the rim (Fig. 5: 1-2, 6, 3-10). The step connects the rim and body unevenly. This type of bowl was recognized since during the exploration of northern Santa Maria Village. Santa Maria Shell Midden extends about one kilometer at the southern part of the Village. But in the northern part of the village, shell midden disappears and the silty soil extends on the surface ground (Ogawa and Aguilera 1992). The non-decorated red-slipped pottery phase is not only revealed from silt layer under shell midden, but also collected from the surface ground at the northern part of Santa Maria Village on the Cagayan River bank. At the beginning, it is inferred that the stepped bowl is same as the one from Magapit. But the detail is different between those two. The stepped bowl of the non-decorated red-slipped pottery phase from Irigayen Site has a step at the upper portion of body, near the rim, but the one of the decorated red-slipped pottery phase from Magapit Shell Midden has a step at the lower portion of body.

**3-5. Comparison with the non-decorated red-slipped potteries from Mabangog Cave.**

The characteristics of non-decorated red-slipped potteries from Mabangog Cave must be discussed together with the vessels from Magapit and Irigayen Site. Mabangog Cave is located on the limestone hill 50 meters above mean sea level, 10 km away from the Cagayan River bank (Ogawa 1999b). The size of cave measures 28 meters long, 10 meters wide at the entrance. The two excavation grids of 2 x 1 meters are set at the entrance of the cave. The sherds from a vessel supposed to belong to the non-decorated red-slipped pottery phase, the non-decorated black pottery phase and the decorated red-slipped pottery phase are revealed from the shell layers of 30 cm thick cave deposit together with lithic flakes, flake of polished stone adze, animal bones. The shells from the cave deposit are same species of shell middens along the Cagayan River.

Five pieces of red-slipped pottery sherds from Mabangog Cave are shown in figure 7 (Fig. 7: 1-5). No. 1 and 2 are Jar Type rims and three others belong to Bowl Type. On the two jar rims can not be discussed whether if those belong to the decorated red-slipped pottery phase or the non-decorated red-slipped pottery phase. In the three pieces of bowl rims, No. 3 sherd belongs to B-2 type bowl of the non-decorated red-slipped pottery phase. But No. 4 and 5 sherds are found in the decorated red-slipped pottery phase, and show the characteristics of the thickened and incurved lip. In those two cultural phases of red-slipped potteries, we cannot discuss about the chronological context, because No. 4 and 5 are revealed from the disturbed layer.

**3-6. C14 Datings of the non-decorated red-slipped pottery cultural phase.**

As mentioned above, I inferred the chronological order of cultural phases as follows; the decorated red-slipped pottery the



non-decorated red-slipped pottery the decorated black pottery the non-decorated black pottery. (Ogawa 1998, 2000c), But the changes from the decorated red-slipped pottery phase to non-decorated red-slipped pottery phase, and the decorated black pottery phase to non-decorated black pottery phase are not recognized stratigraphically. So far we recognized stratigraphically the transitions from the non-decorated red-slipped pottery phase to the decorated black pottery phase (shell layer), and also from the non-decorated red-slipped pottery phase to the non-decorated black pottery phase (shell layer). As long as we cannot establish the chronology of those four cultural phases by stratigraphy, C14 dating must be used.

C14 datings collected from Lal-lo Shell Middens until 1980's are limited. From Magapit, we have two C14 dating;  $2800 \pm 140\text{BP}$  (N-5396),  $2760 \pm 125\text{BP}$  (N-5397), and from Catayauan, the non-decorated black pottery phase, one C14 dating;  $1060 \pm 290\text{BP}$  (N-5398). Recently, new C14 datings are acquired (Mihara et. al. 2001, Table 1). From Irigayen Site, four C14 datings are measured. Those samples are revealed from -80 to -135cm in the silt layer. Those datings have range from 2972 to 3461 calBP. This range of datings can be supposed the duration of the non-decorated red-slipped pottery cultural phase.

#### 4. Conclusion

Comparing with the decorated red-slipped potteries from Magapit Shell Midden, I have analyzed and discussed the characteristics of the non-decorated red-slipped potteries. As a result, the non-decorated red-slipped pottery has similarities of paste, firing, polish, vessel types and shapes with the decorated red-slipped pottery except decorations. But the variation of vessel types and shapes, details of rim shapes show differences between two pottery phases. The variation of vessel types and shapes of non-decorated red-slipped pottery is little comparing with the decorated red-slipped pottery. For example, the Bowl B Type, shallow bowl with paddle marks on the outer surface, doesn't exist in the non-decorated red-slipped pottery. And the variation of rim shapes of Jar and Bowl Type vessels of the non-decorated red-slipped pottery phase are limited comparing with the decorated red-slipped pottery phase.

Several samples for C14 datings were collected from the Lal-lo Shell Middens excavated. However, the C14 datings of those two pottery phases are still insufficient to discuss its chronological relationships. Also the difference of subsistence base of those cultural phases is still unresolved yet; the non-decorated red-slipped pottery phase is revealed from the silt layer without shells, but the decorated red-slipped pottery phase is found from shell layer. The cultural context of Mabangog Cave is also discussed, and its pottery sherds contain the characteristics of the non-decorated red-slipped pottery phase and the decorated red-slipped pottery phase. So that at this phase of research, I couldn't conclude for the chronological position of Mabangog Cave. The subsistence base of people lived in the Cave also needs the further research and analyses.

#### References.

- Aoyagi, Y.  
1977 「研究史・ルソン及びその周辺諸島の考古学」、黒潮文化の会編 『日本民族と黒潮文化-黒潮の古代史序説-』、角川選書 (Archaeology of Luzon and its adjacent area. Black Current Culture Study Group (ed.) *Japanese and Black Current Culture-Introduction to the Prehistoric Culture of Black Current-*. Kadokawa Books, in Japanese)
- Aoyagi, Y., M. Aguilera, jr., H. Ogawa and K. Tanaka (青柳洋治・M. L. Aguilera, Jr.・小川英文・田中和彦)  
1988 「ラロ貝塚群の発掘」 『上智アジア学』 6:63-104 (Excavations of Lal-lo Shell Middens. *Journal of Sophia Asian Studies* 6:63-104 in Japanese with English summary)  
1989 「ラロ貝塚群の発掘(2)」 『上智アジア学』 7:101-131 (Excavations of Lal-lo Shell Middens(2). *Journal of Sophia Asian Studies* 7: 101-131, in Japanese with English summary)  
1991 「ラロ貝塚群の発掘(3)」 『上智アジア学』 9:49-137 (Excavations of Lal-lo Shell Middens(3). *Journal of Sophia Asian Studies* 9:49-137, in Japanese with English summary)  
1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell Midden in Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9: 127-155.
- Aoyagi, Y., H. Ogawa and K. Tanaka (青柳洋治・小川英文・田中和彦)  
1996 「フィリピン北部、マガピット貝塚の発掘と出土装身具」、国分直一先生米寿記念論文集 劉茂源編 『ヒト・モノ・コトバの人類学』 :pp372-383、慶友社 (Magapit Shell Midden Excavation and its Ornaments. In Ryu Mogen (ed.) *Anthropology of Man, Material and Language*.:372-389. Keiyusha, Tokyo, Special Issue for the Eighty eight years anniversary of Dr. Kokubu, Naoichii, in Japanese)
- Aoyagi, Y. and K. Tanaka (青柳洋治・田中和彦)  
1985 「カガヤン川流域の貝塚土器をめぐる二、三の問題」 『上智アジア学』 3: 81-129 (On the Pottery from Shell Middens in the Lower

Cagayan River, *Journal of Sophia Asian Studies* 3:81-129, in Japanese)

- Bautista, A.  
1996a Animal/Human Remains from Bangag I, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
1996b Animal Remains from Dombrique Site, Catugan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
1996c Field Report on Lal-lo Archaeology Project, August-September 1996. Typescript, National Museum, Manila.  
1997 Zoo archaeological materials from Bangag Archaeological Site. Typescript, National Museum, Manila.
- Cabanilla, I.  
1972 Neolithic Shellmound of Cagayan: The Lal-lo Excavation. Field Report #1, Archaeology Division, National Museum of the Philippines, Manila.
- De la Torre, A.  
1995 Brief Report: The Lal-lo, Cagayan Archaeological Project 1995. Typescript, National Museum, Manila.  
1996 Brief Report: Cagayan Valley Archaeological Project, Santa Maria, Lal-lo, Cagayan from February 7 to March 3, 1996. Typescript, National Museum, Manila.  
1997 Rapid Cave Assessment Report of Mabangog Cave located at San Mariano, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
2000 Preliminary Report of the Lal-lo, Cagayan, Archaeology Project: Clemente Irigayen Property Site (II-1995-O), Santa Maria, Lal-lo, Cagayan. 『東南アジア考古学 (Journal of Southeast Asian Archaeology)』 20: 67-110.
- Garong, A. M.  
1996a A Report on the Archaeological Excavation in Faust Sison Sr., Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
1996b Progress Report on the 1996 Archaeological Excavation of the Conciso Property Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
2001 Culture in Trash. An Archaeological Excavation of Conciso Property Shell Midden Site, Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley, Northern Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 21: 120-45.
- Garong, A. M. and T. Toizumi  
2000 The Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan. In Ogawa, H. (ed.) *Excavations of Lal-lo Shell Middens - Archaeological Studies on the Prehistory of the Lower Cagayan River, Northern Luzon*, Philippines: 50-78, Report presented to the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Tokyo.
- Mihara, S., M. Okuno, H. Ogawa, K. Tanaka, T. Nakamura and H. Koike (三原正三・奥野充・小川英文・田中和彦・中村俊夫・小池裕子)  
2001 AMS <sup>14</sup>C age of Cagayan shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines. *Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University* (XII): 205-213. In Japanese with English summary. 「フィリピン・カガヤン河貝塚群出土遺物の AMS<sup>14</sup>C 年代」 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XII)』 : 205-213、名古屋大学年代測定総合研究センター
- Ogawa, H. (小川英文.)  
1997 「貝塚洪水伝説 - フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」 『東南アジア考古学』 17: 119-166 (Shell Midden was made by the Noachian Deluge.-Ethnoarchaeology of the Shell Middens and Shell Gatherers in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines-. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 17: 119-166. In Japanese)  
1998 Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest - 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』 18: 123-166.  
1999a 「東南アジアと日本の貝塚の比較」 『季刊 考古学』 66: 29-34 (The Comparison between Southeast Asian and Japanese Shell Midden Sites. *Quaternary Journal of Archaeology* 66: 29-34. In Japanese)  
1999b Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学 (Journal of Southeast Asian Archaeology)』 19: 93-114.  
2000 (ed.) 『ラロ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査 - Excavation of the Lal-lo Shell Middens』 269 pages、文部省科学研究費報告書 (Report for the Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research) of The Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Monbusho), In English).  
2001 「ラロ貝塚群の発掘調査とその年代」、 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XII)』 : 6-16、名古屋大学年代測定総合研究センター、(Archaeological Research of the Lal - lo Shell Middens and the Chronology of the Sites. *Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University* (XII): 6-16.
- Ogawa, H. and M. L. Aguilera, Jr.  
1992 Data Report on the Archaeological Explorations in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. *Journal of the Institute of Religion and Culture* 10: 41-113, Kokushikan University, Tokyo.
- Orogo, A.  
1980 Archaeological Excavation at the Cortez Site, Camalaniugan, Cagayan. Typescript. Archaeology Division, National Museum of the Philippines, Manila.  
1995 Preliminary Report: Result of Archaeological Exploration and Excavation conducted at Lal-lo, Cagayan Province, July 28 to August 26, 1995. Typescript, National Museum, Manila.
- Snow, B. A. and R. Shutler, Jr.  
1985 *The Archaeology of Fuga Moro Island*. Cebu: San Carlos University Press.
- Tanaka, K. (田中和彦)  
1993a 「フィリピン完新世・先鉄器文化編年研究序説」 『東南アジア考古学会会報』 13:173-209. (The Chronological Study of the Pre-Iron

- Cultures of the Philippines during the Holocene - A review and a perspective-. *Journal of Southeast Asian Archaeology*13:173-209. in Japanese)
- 1993b 「ルソン島中部、墓地遺跡出土の交易陶磁器と土器—15世紀後半から16世紀前半の南部タガログ地方の様相—」『貿易陶磁研究』No. 13:65-86 (Trade Ceramics and Pottery Excavated in the Cemeteries in Central Luzon-Aspects of Trade Ceramics and Pottery of the Latter Half of the 15th Century to the Former Half of the 16th Century in Southern Tagalog Region-. *Journal of Trade Ceramics Studies No. 13*:65-85. in Japanese)
- 1996 「ルソン島北部における方角石斧に伴う土器の検討—沈潜による連続菱形文土器の検討—」『東南アジア考古学』16:149-160 (The Typological Analysis of the Pottery associated with the Quadrangular Stone Adzes excavated in Northern Luzon - The analysis of the pottery with the incised diamond pattern and a circular impression in each diamond pattern-. *Journal of Southeast Asian Archaeology 16*:149-160. in Japanese)
- 1997a 「カトゥガン貝塚の発掘調査」『東南アジア考古学』17:210-225 (Preliminary Report of the Excavation of Catugan Shell-midden, Lal-lo Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology 17*:210-225, in Japanese)
- 1997b The Kite Photography of Bangag I Shell-midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology 17*:197-209.
- 1998a Preliminary Report of the Archaeological Excavation of Catugan Shell-midden (Dombrique Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『千葉敬愛短期大学初等教育科紀要』第20号:149-177
- 1998b 「サンロレンソ III 貝塚(シリバン遺跡)の発掘調査とその問題」『東南アジア考古学』18: 263-289, (In Japanese, Excavation of San Lorenzo Shell Midden (Siliban Site). *Journal of Southeast Asian Archaeology 18*: 263-289.)
- 1998c Problems and Excavation of San Lorenzo III Shell Midden (Siriban Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Bulletin of Showa Academia Musicae 18*: 109-135.
- 1998d 「ルソン島北部ラロ貝塚群バガッグ I 貝塚の発掘調査と若干の問題」『上智アジア学』16: 171-211. (Excavation of Bangag I Site, Lal-lo, Cagaya, Northern Luzon. *Sophia Asian Studies 16*: 171-211, in Japanese)
- 1998e 「ルソン島北部カガヤン川中流域サンタマリア町キナビガン村の土器作り」『環境情報研究』6: 123-152. (In Japanese, Pottery Making of Kinabingan, Santa Maria, Isabella, Middle Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. *Ecological Information Studies 6*: 123-152.)
- 1999a 「フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果」『季刊考古学』66: 75-78, (In Japanese, Lal-lo Shell Middens, Philippines - Excavations and Results of Mega Shell Middens. *Quaternary Journal of Archaeology 66*: 75-78.)
- 1999b The Archaeological Excavation of Bangag I Shell Midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学(*Journal of Southeast Asian Archaeology*)』19: 71-92
- 2000 「フィリピンにおける交易時代研究の発展 長距離交易と複合社会の発展」小川英文編『交流の考古学』: 95-133, 朝倉書店 (Cultural Development in the Age of Commerce of the Philippines - Long Distance Trade and the Development of complex societies. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*: 95-133 (Archaeology Today Series Vol. 5), Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese).
- Thiel, B.
- 1989 Excavations at the Lal-lo Shellmiddens, Northern Luzon, Philippines. *Asian Perspectives 27*-1: 71-94.
- Toizumi, T. (樋泉岳二)
- 2000 「Batissa childreni の季節的成長パターンと死亡季節査定の可能性(予察)」『東南アジア考古学』19: 57-69. (Seasonal Growth Line Patterns of *Batissa childreni* and the Possible identification of its Death Season. *Journal of Southeast Asian Archaeology 19*: 57-69, In Japanese)

フィリピン・カガヤン河貝塚群出土遺物の AMS<sup>14</sup>C 年代  
AMS <sup>14</sup>C age of Cagayan shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines

三原正三<sup>1)</sup>、奥野充<sup>2)</sup>、小川英文<sup>3)</sup>、田中和彦<sup>4)</sup>、中村俊夫<sup>5)</sup>、小池裕子<sup>1)</sup>  
Shozo MIHARA<sup>1)</sup>, Mitsuru OKUNO<sup>2)</sup>, Hidefumi OGAWA<sup>3)</sup>, Kazuhiko TANAKA<sup>4)</sup>,  
Toshio NAKAMURA<sup>5)</sup> and Hiroko KOIKE<sup>1)</sup>

- 1) Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University  
2) Faculty of Science, Fukuoka University  
3) Dept. of Philippine Studies, Tokyo University of Foreign Studies  
4) Keiai University  
5) Chronological Research Center, Nagoya University

## はじめに

フィリピン、ルソン島の北東部を流れるカガヤン河は、流域面積が 34.5 km<sup>2</sup> とフィリピン有数の河川であり、その下流域には、貝塚の数と規模において東南アジア有数の貝塚群が発見されている(東南アジア考古学会, 1994)。貝塚遺跡群はその立地条件によって、(1) 標高 50m の石灰岩台地上、(2) 標高 7~10m の河岸段丘上、(3) 河岸から 1~2 km の内陸低地、の 3 つに分類されている(小川, 2000)。(1)の貝塚からは、有文の赤色土器や方角石斧などの人工遺物と、動物骨や種子などの自然遺物が出土している。(2)の貝塚からは鉄器時代に属する黒色土器が出土するほか、埋葬人骨、動物骨、植物遺体などが得られている。(3)の貝塚はまだ詳しい年代は分かっていないが、土器や方角石斧などの磨製石器が出土しておらず、この地域の土器出現以前に形成された可能性が高い(小川, 1997)。

フィリピンの先史時代は、先鉄器(新石器)、鉄器、陶磁器の各時代が確認されている。本地域の貝塚から出土する土器は、赤色土器と黒色土器および褐色土器に大別される。赤色土器は後期先鉄器(新石器)時代、黒色土器は 2000 年前から 1000 年前まで続く鉄器時代のものと考えられており、赤色土器、黒色土器ともに、有文のものから無文のものへとという編年的変化が想定されている(小川, 1998)。共存する遺物には、赤色土器期の層からは石製ビーズ、方角石斧、土製耳飾、土製ペンダント、骨製装飾品など、黒色土器期の層からはガラス製ビーズ、方角石斧、土製耳飾などが出土している。また、地表面近くの貝層から出土する褐色土器は近年まで使用されていたもので、14 世紀以降の中国・タイ、チャンパの陶磁器片とともに出土する(小川, 1998)。

そこで筆者らは、フィリピンの先史文化を知る上での重要な手がかりとなる貝塚遺跡から出土した人骨、獣骨および炭化木片の年代測定を進め、貝塚群の編年を試みた。

## 試料と出土地点

今回分析した試料は、カガヤン河下流域の河岸段丘上の貝塚であるカタヤワン貝塚ファウスト・シゾン遺跡、同貝塚コンシソ遺跡、カトゥガン貝塚マルセリナ・ドンブリケ遺跡、サンタマリア貝塚クレメンテ・イリガエン遺跡から出土した人骨それぞれ 1 点、カタヤワン貝塚コンシソ遺跡から出土した獣骨 8 点、サンタマリア貝塚クレメンテ・イリガエン遺跡から出土した炭化木片 6 点の計 18 点である(図 1)。カタヤワン貝塚はこの貝塚群最大の貝塚で、深さ 2m、幅 100m、長さ 500m にわたって貝塚が形成されている。ファウスト・シゾン遺跡の人骨は貝層中の墓坑(地表面下 30~60cm)より出土した。コンシソ遺跡の獣骨は地表面下 35~146cm の各地点から、人骨はその下の墓葬址(地表面下 165cm)から出土した。カトゥガン貝塚はカタヤワン貝塚の対岸に位置し、幅 30m、長さ 100m ほどの貝塚である。地表面下 20~60cm の貝層中から人間の上腕骨、下顎骨、大腿骨が出土しているが、墓坑は確認されていない(田中, 1997)。サンタマリア貝塚は上記の 2 貝塚と異なり、1km の範囲内で直径 100m、深さ 1m ほどの地点貝塚が点在している。貝層下のシルト層中から墓坑が検出されており(地表面下 80~102cm)、人骨は無文黒色土器、ガラス製ビーズとともに出土した(de la Torre, 2000)。炭化木片は、2 点が貝層中、4 点が墓坑の下のシルト層中から出土した。

## 試料の分析

試料は、骨試料に関しては、骨中の硬タンパクであるコラーゲンをういた。試料調製法はおもに酸に不溶性のコラーゲンをえることを目的とし、有田ほか(1990)、中村ほか(1996)、小池ほか(1991)、Chisholm and Koike (1996) 等の方法に基づいて検討・設定した。まず人骨試料のなかから保存状態の良い、緻密質の厚いものを選別し、デンタルドリル、ピンセット等で試料表面の汚れを丁寧に除去した。次に試料を蒸留水で超音波洗浄して表面の細かな汚れを除去した。カタヤワン貝塚ファウスト・シソン遺跡、カトゥガン貝塚、サンタマリア貝塚の人骨については、試料を 5mm 程度の大きさに砕き、0.1N の NaOH 溶液によりフミン酸などのアルカリ可溶成分を除去した後、蒸留水で洗浄して凍結乾燥し、乳鉢で細かく粉碎した。カタヤワン貝塚コンシソ遺跡の骨試料については、凍結乾燥、粉碎を行った後にアルカリ処理をおこない、蒸留水で洗浄した。これをプラスチック製の遠心チューブに入れ、0.1N の HCl 溶液を加えてローテータで 30 分ほど攪拌した後、遠心して上澄みを捨てるという行程を繰り返して脱灰した。得られたコラーゲンを蒸留水で洗浄して HCl を除去し、凍結乾燥した。こうして得られたコラーゲン試料を ANCA-mass (Automated Nitrogen and Carbon Analysis mass spectrometry, Europa Scientific 社) を用いて炭素、窒素含有量と C/N 比、 $^{13}\text{C}$ 、 $^{15}\text{N}$  を測定し、コラーゲンの精製状況を検証した。一方、炭化木片は、蒸留水中で超音波洗浄した後、1.2N の HCl 溶液と NaOH 溶液を用いて AAA (酸 - アルカリ - 酸) 処理を行った。

このように調製した試料を酸化銅、銀線とともに (炭化木片は酸化銅のみ) バイコール管に真空封入して 850 で 4 時間加熱し、生じた気体を液化窒素 (-196 ) および液化窒素で冷却したエタノール (-115 ) を用いて、真空ラインで精製して  $\text{CO}_2$  ガスを得た。これを名古屋大学で水素還元法 (Kitagawa et al., 1993) によりグラファイト化し、タンデトロン加速器質量分析計 2 号機 (HVEE 社製, Model-4130 AMS) で  $^{14}\text{C}$  年代測定をおこなった (Nakamura et al., 2000)。 $^{14}\text{C}$  濃度の標準体として NBS 蔞酸 (HOx II) を用いた。なお、試料の同位体分別効果を補正するため、得られた  $\text{CO}_2$  の  $^{13}\text{C}$  値を気体用質量分析計 (Finnigan MAT 社製, MAT-252) により測定した (中村, 1995)。

## 結果

人骨コラーゲンの精製状況を確認するには C/N 比を用いた。カトゥガン貝塚の人骨が 2.9、カタヤワン貝塚及びサンタマリア貝塚の人骨 3 点が 3.0 であった。コラーゲンの標準的な C/N 比は  $3.2 \pm 0.5$  であり (Hare and von Endt, 1990)、このことから、コラーゲンの精製状態はほぼ十分であると考えられる。カタヤワン貝塚コンシソ遺跡の獣骨 8 点については、C/N 比が若干大きいものがあった。これらはフミン酸等の除去が十分でなかった可能性があり、今後の試料調製法の検討課題である。

$^{14}\text{C}$  年代は、Libby の半減期 5568 年を用いて算出した。測定誤差は  $\pm 1$  で示した。また、これらの  $^{14}\text{C}$  年代を、コンピュータ・プログラム Calib ETH (Niklaus et al., 1992) により、暦年代 ( $\pm 2$ ) に較正した。

$^{14}\text{C}$  年代測定の結果を表 1 に示す。人骨に関しては、カタヤワン貝塚ファウスト・シソン遺跡が  $1145 \pm 20$  BP (1069 ~ 979 cal BP)、コンシソ遺跡が  $1460 \pm 25$  BP (1384 ~ 1294 cal BP)、カトゥガン貝塚が  $1880 \pm 20$  BP (1876 ~ 1736 cal BP)、サンタマリア貝塚が  $1635 \pm 20$  BP (1560 ~ 1488 cal BP) という年代がえられた (図 2)。カタヤワン貝塚コンシソ遺跡の獣骨 8 点は、貝層深度 35 ~ 146cm の各層位でそれぞれ  $1115 \pm 25$  BP (1056 ~ 957 cal BP)、 $1125 \pm 25$  BP (1059 ~ 962 cal BP)、 $1220 \pm 25$  BP (1174 ~ 1058 cal BP)、 $1215 \pm 25$  BP (1173 ~ 1057 cal BP)、 $1185 \pm 25$  BP (1161 ~ 1050 cal BP)、 $1240 \pm 25$  BP (1189 ~ 1063 cal BP)、 $1240 \pm 25$  BP (1189 ~ 1062 cal BP)、 $1225 \pm 25$  BP (1174 ~ 1060 cal BP) という年代がえられた。上部の 2 試料、およびその下位の 6 試料はそれぞれ誤差範囲内でほぼ一致した (図 3)。

サンタマリア貝塚の炭化木片は、貝層中の 2 点が  $1510 \pm 20$  BP (1411 ~ 1334 cal BP) および  $1490 \pm 35$  BP (1418 ~ 1297 cal BP)、シルト層中の 4 点はそれぞれ  $2925 \pm 20$  BP (3089 ~ 2972 cal BP)、 $3165 \pm 25$  BP (3417 ~ 3344 cal BP)、 $3025 \pm 20$  BP (3270 ~ 3149 cal BP)、 $3185 \pm 25$  BP (3461 ~ 3360 cal BP) という年代がえられた。

## 考察

河岸段丘上の貝塚では、貝層からは黒色土器、その下のシルト層からは無文の赤色土器が出土している。今回測定した 4 点の人骨は、いずれも鉄器時代に属する無文黒色土器を含む貝層とシルト層中に構築された墓葬址より出土したものである (図 2)。これまで、黒色土器の文化層は 2000 BP ~ 1000 BP の範囲と考えられていたが、今回の人骨の  $^{14}\text{C}$  年代からは、無文黒色土器の文化層のみでも 1900 BP ~ 1100 BP の範囲にわたることが分かった。有文黒色土器の文化層もあることを考慮すると、黒色土器の文化層はより古さかのぼる可能性が高い。

カタヤワン貝塚コンシソ遺跡において、35cm～146cmの深さから出土した獣骨が1250 BP～1100 BPという<sup>14</sup>C年代を示した(図3)。これらの較正暦年(表1)から、この貝塚は1200 cal BPごろから約250年の間で厚さ150cmにおよぶ貝層が形成されたと推定できる。

サンタマリア貝塚での較正暦年は、貝層中の炭化木片2点が1420～1300 cal BP、シルト層中に掘り込まれた墓坑から無文黒色土器とともに出土した人骨が1560～1490 cal BP、シルト層中の炭化木片4点は3460～2970 cal BPとなり、層位的にみて問題のないものであった。

土器編年上の問題に関しては、すでに得られている石灰岩台地上のマガピット貝塚からの有文赤色土器の<sup>14</sup>C年代が、炭化木片から2720±140 BP(N-5396)および2680±125 BP(N-5397)とえられており(小川, 1997)、今回得られた測定結果では、サンタマリア貝塚の貝層下シルト層中の無文赤色土器が3450～3000 cal BPという較正暦年を示した。小川(1998, 2000)によると、赤色土器の変遷を有文から無文へと想定しているが、今回の測定結果はこの結果が逆転する可能性を示唆しており、無文赤色土器の年代は有文赤色土器の年代より古くさかのぼる可能性が確認された。今後、この編年上の問題を解決するため、新たな測定試料をマガピット貝塚から採取し、より精度の高い測定結果をもとにして、有文赤色土器の年代を再検討する必要がある。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、名古屋大学年代測定総合研究センターの皆様には様々なご教授、ご協力を頂きました。また、試料を提供していただいたフィリピン国立博物館考古学部門のウィルフレド・P・ロンキリオ部長をはじめ、博物館のスタッフの皆様にはフィリピンで大変お世話になりました。この研究には、文部省科学研究費補助金(国際学術研究、代表者:小川英文、課題番号:07041006)の一部を使用しました。誌面に記して謝意を表します。

## 引用文献

- 青柳洋治, M. L. Aguilera, Jr., 小川英文, 田中和彦  
1988 ラロ貝塚群の発掘. 「上智アジア学」6, 63-104.
- 有田陽子, 中井信之, 中村俊夫, 亀井節夫, 秋山雅彦, 沢田健  
1990 哺乳類化石のコラーゲン抽出法とそのAMS法による<sup>14</sup>C年代測定. 「名古屋大学古川総合研究資料館報告」, No. 6, 45-54.
- Chisholm, B., Koike, H.  
1996 Reconstructing prehistoric Japanese diet using stable isotopic analysis. International Symposium, 1996, 199-222. International Research Center for Japanese Studies.
- de la Torre, A.  
2000 Preliminary report of the Lal-lo, Cagayan Archaeological Project: Clemente Irigayen Property Site (II-1995-O), Sta. Maria, Lal-lo, Cagayan. 「東南アジア考古学」, 20, 67-110.
- Garong, Ame M. and Toizumi, T.  
2000 The Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan. H. Ogawa (ed.) *The Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan*. (ラロ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査 - ), 平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書, 50-78.
- Kitagawa, H., Masuzawa, T., Nakamura, T. and Matsumoto, E.  
1993 A batch preparation method for graphite targets with low background for AMS 14C measurements. *Radiocarbon*. 35, 295-300.
- 小池裕子, Chisholm, B., 岩崎純子  
1991 古人骨の<sup>13</sup>Cリスト(1) 九州大学解剖学教室保管標本を中心とした西南日本古人骨の<sup>13</sup>C値. 「埼玉大学紀要(自然科学編)」, 第27巻, 19-31.
- 中村俊夫  
1995 加速器質量分析(AMS)法による<sup>14</sup>C年代測定の高精度化および正確度向上の検討. 「第四紀研究」, 34, 171-183.
- 中村俊夫, 大塚裕之, 奥野充, 太田友子  
1996 東シナ海の大陸棚および琉球弧の海底から採取された哺乳類化石の質量分析法による<sup>14</sup>C年代測定. 「地学雑誌」, Vol.05, No.3 (946), 306-316.
- Nakamura, T., Niu, E., Oda, H., Ikeda, A., Minami, M., Takahashi, H., Adachi, M., Palis, L., Gott dang, A. and Suya, N.  
2000 The HVEE Tandatron AMS system at Nagoya University. *Nuci. Instr. and Meth. in Phys. Res., B* 172, 52-57.
- Niklaus, T. R., Bonani, G., Simonius, M., Suter, M. and Wolfli, W.  
1992 Calib ETH: an interactive program for the calibration of radiocarbon dates. *Radiocarbon*. 34, 483-492.
- 小川英文  
1997 貝塚洪水伝説-フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学-. 「東南アジア考古学」, 17, 119-166.  
1998 Problems and Hypothesis on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines. 「東南アジア考古学」, 18, 123-166.  
2000 (ed.) *The Archaeological Excavation of the Shell Midden Sites in Lal-lo, Cagayan*. (ラロ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査 - ), 50-78.平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書 東京外国語大学

Ogawa, H. and M. L. Aguilera, Jr.

1987 Data Report on the Archaeological Explorations on the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. Field report of the National Museum of the Philippines.

Stuiver, M. and Pearson, G.

1993 High-precision bidecadal calibration of the radiocarbon time scale, AD 1950-500 BC and 2500-6000 BC. Radiocarbon, 35,1-23.

田中和彦

1997 カトゥガン(Catugan)貝塚の発掘調査. 「東南アジア考古学」, 17,209-226.

東南アジア考古学会 (編)

1994 「貝塚データベース」東南アジア考古学会

## AMS <sup>14</sup>C age of Cagayan shell-midden sites, Northern Luzon, Philippines

Shozo MIHARA<sup>1)</sup>, Mitsuru OKUNO<sup>2)</sup>, Hidefumi OGAWA<sup>3)</sup>, Kazuhiko TANAKA<sup>4)</sup>,  
Toshio NAKAMURA<sup>5)</sup> and Hiroko KOIKE<sup>1)</sup>

1) Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

2) Faculty of Science, Fukuoka University

3) Dept. of Philippine Studies, Tokyo University of Foreign Studies

4) Keiai University

5) Chronological Research Center, Nagoya University

The lower Cagayan basin has more than 30 shell-middens. On river terrace, two cultural layers are recognized; the upper one is shell midden and the lower one is silt layer. The shell middens produce the black pottery, and the silt layers produce the red pottery. It is thought that Black Pottery Phase belongs to Iron Age, and Red Pottery Phase belongs to Pre-metal Age. The AMS <sup>14</sup>C age was obtained using four human bone samples (from Catugan and St. Maria, and two samples from Catayauan), eight animal bones from Catayauan and six charcoal samples from St. Maria.

Bone samples were belonging to the Black Pottery II Phase. Charcoal samples from St. Maria were divided into two phases. Two samples were collected from shell layer (the Black Pottery II Phase) and four samples were from silt layer (the Red Pottery II Phase).

The results of dating summarizes as following,

(1) Calibrated years range for four human bone samples, from Catugan, Catayauan and St. Maria were belonging to the Black II Pottery Phase from 1900 cal BP to 1000 cal BP.

(2) Calibrated year range for eight animal bone samples from Catayauan was from 1190 cal BP to 960 cal BP. At Catayauan, shell layer was made since about 1200 cal BP, and grew about 150 cm for about 250 years.

(3) Consequently the Black Pottery II Phase at St. Maria was dated allowed from 1420 cal BP to 1300 cal BP. The Red Pottery II Phase was from 3450 cal BP to 2970 cal BP. And human bone from burial pit between two phases (accompanied with Black Pottery II) was dated from 1560 cal BP to 1490 cal BP.

## 考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ

Archaeologists' Image of hunter-gatherers in Southeast Asian Archaeology.

小川英文 Ogawa, Hidefumi

### 要約；

考古学は東南アジアの狩猟採集社会のイメージを、博物館展示やモデルなどの場で生産してきた。これらのイメージの変遷を検討すると、研究の枠組みや方法論の変化があつたにもかかわらず、現在でも考古学は狩猟採集社会を「非文明」イメージのなかに「隔離」してきたことが理解できる。しかし先史時代の狩猟採集社会と農耕社会との間に相互依存関係が存在したとする最近の仮説は、カラハリ論争における修正主義者の論点と同様に、狩猟採集社会に対する「非文明」イメージの虚構性に再考を迫るものであった。本稿では考古学者が東南アジアの狩猟採集社会に対して抱いているイメージの虚構性を打破し、狩猟採集社会の「歴史の回復」をめざす理論的枠組みの可能性について考察する。

**キーワード：**相互依存関係、隔離性、時空間の均質化、イメージの虚構性、歴史の回復

### 目次

はじめに

1. 博物館展示によって再生産される「狩猟採集社会=非文明」イメージ
2. 隠蔽された歴史：狩猟採集社会と農耕社会の相互関係
3. 東南アジア狩猟採集社会研究における「カラハリ論争」
4. おわりに

### はじめに

東南アジアの熱帯雨林に生活する狩猟採集社会は、先史時代から今日に到るまで、農耕社会との交換をベースとした経済的、社会的相互依存関係を維持してきた、という仮説が考古学に提示されてからすでに 20 年以上が経過している (Hutterer 1976, Peterson and Peterson 1977, Headland and Reid 1989)。今日まで東南アジアの狩猟採集社会が存続してきたことからすれば、先史時代においても農耕社会と同時に存在し、なんらかのかたちの交流をもっていたことは容易に予測される。また相互依存関係の仮説は、狩猟採集社会と農耕社会が交換を行っていた可能性を示唆する考古資料の存在のほか、両者の言語的類縁関係、そして炭水化物獲得が困難な熱帯雨林の環境特性などによっても支持される (Headland and Reid 1989)。しかしながら、「外部世界」から「隔離」された、「純粋」で「自立的な (self-sufficient)」、そして「野蛮な他者」としての狩猟採集社会イメージが考古学者の間にいまなお根強く残り、この仮説支持に多くの考古学者が消極的であることも確かである (例えば、Brosius 1991, Endicott and Bellwood 1991)。このように狩猟採集社会の「隔離性」や「原始的」イメージが根強く支持されている背景には、研究者自身がそうしたイメージづくりに深く関与し、博物館などでのイメージの再生産に寄与していることがその一因と考えられる。同時に、「文明から取り残された」狩猟採集社会イメージの生産と消費には、植民地主義や国民国家もまた、大きな役割を果たしている。

以上の議論を踏まえ、ここでは、東南アジアの狩猟採集社会のイメージが、考古学者によってどのように生産されてきたか、そしてそのイメージを乗り越え、狩猟採集社会と農耕社会の相互依存関係の歴史をどのように再構成するかについて考察する。具体的には、イメージ生産の場として博物館をまずとりあげる。次に東南アジア先史時代における狩猟採集社会と農耕社会の相互関係についての説明としてこれまでに提出されてきたモデルを歴史的に批判、検討する。この検討の過程で、「自立的」で「純粋」な狩猟採集社会イメージがどのように生産され、変化してきたか、さらにそれらのイメージ生産に関わってきた考古学者の責任の所在を明らかにしていく。最後に、抑圧されている狩猟採集社会の現実を直視し、国民国家、植民地主義の相対化、脱自然化の議論に参加することによって、農耕社会との相互関係の歴史を生きた狩猟採集社会イメージを再構築する理論的枠組みへの可能性が拓けることを提示する。

### 1. 博物館展示によって再生産される「狩猟採集社会=非文明」イメージ

東南アジアの博物館で展示された狩猟採集社会は、民族学コーナーでは多民族国家の一員として勇ましく展示されている。それに対して考古学コーナーでは、その国の歴史の初源、すなわち考古展示の最初のガラスケースに登場し、石器や骨格標本、当時の生活の想像図やジオラマとともに展示されている。しかしそれ以降の時代に関しては展示に登場することはまずない。現在の国家における、多様な民族の一端を担う国民として、民族学コーナーに展示される狩猟採集社会も、考古展示では農耕開始以降の歴史には登場してこない。たしかに民族学コーナーでも展示されるのはいわゆる少数民族が



中心で、現代を生き、国民の大半を構成するマジョリティの人々が展示されることはほとんどない。民族学や考古学のコーナーで展示されるのは、現在の国民を形成している「伝統」であり、今日の姿にたどりつくまでの国民の来歴である。アンダーソンが述べているように、博物館が国ごとに造られ、そこで国民の来歴の物語を展開するかたちが制度として成立して以来、国民文化的な神話の生成と流通に重要な役割を果たしてきた(アンダーソン 1997:第 X 章)。「固有な」国民性は、「過去に向かって掘り進めれば進むほど」(西川 1995:156)純化されていく。抽出された国民性のエッセンスは、少数民族の「伝統」や考古遺物のなかに今日的残滓として保存されており、それを国民全員が共有していることを、博物館を訪れる人々に認識させる。博物館は、固有な来歴をもつ国民が共に暮らす、均質な空間を創出する強力な媒体として存在してきた(Russell 1997)。

しかしここで問題となるのは、国民の初源となるべき狩猟採集民が、現在の国民国家において、実際はその固有の位置を認められず、抑圧された、周辺的位置に追いやられているという現実である。考古展示で強調されるのは、国民文化の「純粋性」が歴史を遡って発見されるのとは逆に、むしろ、初源の「原始性」からいかにして今日の文明へとたどり着いたかという道程の方である。国民文化が希求する「純粋性」、「固有性」は、現在の狩猟採集社会の周辺的位置にも、そして過去の「原始性」にも帰着することはない。狩猟採集社会が国民の歴史の最初のガラスケースに登場する姿は、ただその国の興りの古さを強調するために展示されているかのようである。「はじまり」と「現在」以外の時間においては、「歴史」の存在を認められていない狩猟採集社会研究の現状は、植民地主義そして国民国家の枠内における考古学研究の限界を露呈している。すなわち、農耕社会に歴史の主役の座を譲って以降、「文明」への方向性をもたない狩猟採集社会の今日までの足跡は、国民国家の歴史から排除、隠蔽され、研究のための理論的枠組みすら構築されていない状況にある。「文明」へと方向づけられた国民の歴史によって、狩猟採集社会は「非文明」、「文明の対極」の代表として蔑まれてきたのである。そして狩猟採集民は、ホップスとルソーの昔から現在に至るまで、「残虐な野蛮人」と「高貴なる野蛮人」の振幅のなかで対極的なイメージとして描かれてきたが、いずれのイメージを背負わされたにしても、「文明」の埒外の「他者」として表象されてきたのである。

考古学研究の場で取り上げられ、議論されてきた遺物は一般に、考古学者によって「文明」の方向性をもつと解釈された遺物である場合がほとんどである。考古学では遺跡から出土した遺物全体の中からある特定の遺物のみが取り上げられ、再構成されるが、その際「文明」の方向性に沿った遺物の取り上げ方、技術の進歩の方向性に沿って選択された遺物のみが強調されているのが現状である。では逆に考古学者の取捨選択の網の目にかからなかった、たとえば、ここで問題としている農耕社会出現以降の狩猟採集社会の歴史過程における遺物の再構成の方法や理論的枠組みについては、これまでほとんど議論されることがなく、まさにこれからの課題であるといえる。たしかに発掘された遺物を時間の経過にそって並べてみた場合、遺物に反映される技術的变化は発展的な様相を示すのが一般的であるが、考古学者が遺物の技術的变化を発展の連鎖として提示するとき、「文明」への方向性のなかで技術や社会を位置づけようとする無意識の意図を見出すことができる。このように遺物を発展の連鎖の図式のなかでとらえ、技術的優劣の差異に位置づけようとする、これまでの考古学の議論の中心であった研究の方向性の陰で、東南アジアの先史時代においては、古い技術体系を保存するメカニズムが存在していることを示す遺物やその出土状況があることも確かである。

東南アジアの先史時代に出土する剥片石器や礫器を例にとると、これらの石器は単純な技法で製作されており、その技法を反映している形態的特徴を、特定の時期に限定することが困難である。そのため東南アジアの石器はホモエレクトゥス(Homo erectus)の昔から現在まで、時間の流れが止まったかのように変化しなかったと考えられてきた(小川 1996, n.d.)。先史時代の人々の生活の残滓である石器の様相から、考古学者はその担い手である狩猟採集民の社会自体をも、「変化のない社会」として表象してきた。さらに、現存する狩猟採集社会までも、これらの石器を残した先史時代の狩猟採集社会と直接に結びつけられ、人類の最も古い段階の文化を現在に伝える「最後の生き残り」(Heine-Geldern 1958:13)として位置づけてきた。何万年の時間が経過しても変化のない「原始的な社会」が東南アジア全域に存在していたとする、「時空間の均質性」(homogeneity in time and space; Russell 1997:232)の概念のなかで、狩猟採集社会のイメージが考古学者によって語りつがれてきた。

サイドは、こうした「原始性」の概念が植民地主義によって構築され、とくに西欧の研究者は対象地域の文化を、均質で、劣った、対極的なものとして表象してきたことを問題としている(サイド 1978 [1993])。過去と現在の狩猟採集民の世界は、「他者が占める想像の時空間」として描かれてきた。博物館で提示される狩猟採集民の過去と現在、そして考古学者が描く狩猟採集社会のイメージも、時間的な変化がなく、静的な、社会構造の多様性のない、相互の交流をもたず

影響を与え合うことのない、均質なものとして提示されてきた。トリガーはかつて「植民地における考古学や文化史の目的は、原住民の先史時代が静的であり続け、社会を発展させる力に欠けることを証明することによって、原住民社会を侮辱することにあった」と述べている(Trigger 1984:362)。「文明」の側が一方的に掌握している支配的パラダイムのなかで、考古学者が東南アジアの狩猟採集社会の歴史を語ることで、狩猟採集社会を静的な、均質なイメージに凍結させることに加担してしまうこととなる。しかしこのような現状に対して、世界の狩猟採集社会をはじめとする少数民族は、自らの「歴史の回復」を主張し始めている。そして彼らの権利の主張に対して、これまで博物館やテキストなどで研究対象のイメージ生産に携わってきた考古学者や民族学者は、植民地主義、ポスト植民地主義そしてナショナリズムにおける支配的パラダイムの見直しと問題点の抽出、さらに今後の新たな研究の方向性の模索を始めている(Molyneux 1997, Diaz-Andreu and Champion 1996, Lane 1996, Simpson 1996, Skotnes 1996, Schmidt and Patterson 1995, Kohl and Fawcett 1995, 吉田 1998)。

これまで考古学者が、「野蛮な他者」の占める変化のない、均質な時空間に存在するものとして狩猟採集社会のイメージを生産してきたことによって、抹消され、隠蔽されてきた歴史がある。キージグが述べているように、「数千年間にわたって狩猟採集社会は周囲の農耕社会、牧畜社会、王国や帝国との交易などをとうした政治経済的関係を保ちながら、複雑な地域システムの一部をなしていた」(Keesing 1981:122)とすれば、これまで考古学者によって狩猟採集社会のイメージのなかに脈々と生き続けてきた「隔離性」や「時空間の均質性」は虚構であったことになる。博物館やテキストでのイメージ生産によって忘れ去られた狩猟採集社会の歴史は、農耕社会などのより複雑な社会と相互関係をもち、影響を与え合いながら、それぞれ特殊なコンテクストごとに多様な生業戦略と社会構造を構築してきた狩猟採集社会の歴史として、新たに生成されなくてはならない。

## 2. 隠蔽された歴史：狩猟採集社会と農耕社会の相互関係

東南アジアの先史時代における狩猟採集社会の歴史は、「隔離性」や「時空間の均質性」によって隠蔽されてきた。しかし狩猟採集社会が現存するという事実を前にして、考古学者はこれまで狩猟採集社会と農耕社会が同時に存在してきた歴史的経過を説明するために、さまざまなモデルを提示してきた。植民地時代にはじまった東南アジア狩猟採集社会の考古学では、文化史的研究方法が主流で、現在でもその傾向はほとんど変わっていない。文化史的アプローチは、経験主義的パターン化という性格をもっている。すなわち出土した考古遺物を記述、分類して、特定の、境界線が明確な時空間に関連づける。さらにこの領域には社会的な実体が存在すると想定する。そして考古遺物の背後に想定された、境界線が明確な時空間の領域と、その領域内に生活する人間集団の社会的実体は「考古文化」と呼ばれている。文化史的考古学者の手のなかに実体として存在する遺物は、過去における特定の人間集団のエスニック・アイデンティティを表象するものと考えられてきた。そのため現在の特定の「民族集団」や「国民」は、特定の「考古文化」と安易に結びつけられやすいという危険性も指摘されている(Veit 1989:42, Jones 1997:3-5, Härke 1998:56) (註)。

東南アジアの狩猟採集社会が植民地宗主国の人類学者や植民地行政官などによって「停滞論」のコンテクストで語られるなかで、狩猟採集社会が今日まで存続してきたことについてはじめて説明を与えたのはハイネゲルデルンの「隔離モデル(isolate model)」であった。狩猟採集社会と農耕社会は互いに隔離された状態のまま、相互に交流をもたず、「自立的(self-sufficient)」に存続してきたという説明である(Hutterer 1976 より引用)。「隔離モデル」はキージグが「モザイク・ステレオタイプ(mosaic stereotype)」と呼ぶように(Keesing 1981:111)、狩猟採集社会を明確な領域をもつ時空間に閉じこめてしまうものであった。民族のモザイクの各領域は均質で、時間の流れが止まっている。そしてモザイクの境界線を越えて民族間の交流が行われることはない。そこには「石器時代の生き残り」が保存されている。今日、狩猟採集民が利用する農耕技術や鉄器などは、「純粋(pure)」で「真生な(authentic)」狩猟採集社会の文化要素には元来含まれないもので、「文明」との接触によってもたらされた文化的「汚染」とみなされる。このように「隔離モデル」には過去を表象する際の文化史的研究の特徴が明確にみられる。植民地主義の時代に成立した文化史的考古学研究の枠組みは、ポスト植民地主義の現代にも受け継がれ、考古学者による狩猟採集社会の「野蛮な他者」イメージの生産と消費は依然として博物館やテキストで続けられているのが現状である。

記述的で、経験主義的な文化史のアプローチから抜けだそうとする試みは、60年代の北米の考古学者によって始められた(Binford 1962, Binford and Binford 1968)。のちにプロセス考古学(processual archaeology)と呼ばれるこのアプローチの特徴は、文化人類学の影響下において、文化をひとつの機能的システムとしてとらえ直すことにあった。文化人類学、文化

生態学、新進主義の理論に依拠しながら社会変化のプロセスの分析やその説明モデルの構築を主題とする考古学的アプローチである。プロセス考古学は文化人類学の理論的枠組みのなかで、生業などの経済的適応戦略、交換システムや社会構造の変化の分析に貢献した(Hodder 1991:6)。

プロセス考古学の枠組みに依拠した北米出身の考古学者が東南アジアで調査、研究を行うようになると、上で述べたような石器にみられる形態変化の乏しさを、狩猟採集社会の「隔離性」や「停滞性」の反映として理解するよりも、熱帯という自然環境を利用する際の、特殊なコンテキストとの機能的関連のなかで理解しなくてはならないという研究の方向性が提示されるようになった(例えば Hutterer 1976, 1982)。さらに狩猟採集や農耕といった技術的背景が異なる社会集団が、同じ時代に近接して生活してきたことがなぜ可能であったのかという問題が提起され、生業技術の多様性を助長してきたメカニズムの研究が、東南アジアにおけるプロセス考古学の中心課題のひとつとされるようになった。そして東南アジアの各地で、狩猟採集社会と農耕社会との相互関係の歴史を探る調査が開始されるようになった(例えばマレーシア：Dunn 1975, タイ東北部：Kennedy 1977, 中部フィリピン：Hutterer 1976, Hutterer and Macdonald 1982)。

この問題に対して明確にモデルを提示して答えようとしたのはピーターソンらであった。フィリピン、ルソン島北東部のパラナン(Palanan)で狩猟採集民アグタ(Agta)の民族・考古学の調査を行っていたピーターソンらは、アグタと農耕民との間にみられる食料、労働力、土地の交換による相互依存関係をモデル化して、狩猟採集社会が先史時代から現在まで存続してきた歴史過程を説明しようとした(Peterson and Peterson 1977, 小川 1996)。これは「交換適応(exchange adaptation)」モデルと呼ばれ、狩猟採集社会と農耕社会それぞれがもつ技術によって、競争(competition)を避けながら異なった自然環境(低地と山地)を利用し、互いに不足する資源を交換によって補い合うという生業戦略で、結果的に2つの社会が適応、存続していくというものである。交換を媒介として互いに労働投下量を低く抑え、技術革新を推し進めることなく、生産の絶えざる集約化から免れ、低い技術レベルで人口を環境収容量(carrying capacity)内に維持することが可能となる。この適応戦略によって狩猟採集社会と農耕社会はひとつの共存のシステムをつくりあげ、結果として狩猟採集社会が現在まで存続したとピーターソンらは説明する。交換適応モデルは、ボズラップが提示した、農耕と定住の結果増加した人口を支えるため、絶えざる技術革新と労働の集約化を必要とする、農耕社会の発展モデル(ボズラップ 1967)とは際立った違いをみせている。農耕を開始した人類はその後「文明」を築き上げることになるが、生産の集約化という絶えず「膨張」するシステムを維持し続けなくてはならなかった。一方、交換適応モデルでは狩猟採集社会と農耕社会がひとつのシステムとして「膨張」を抑えた、経済的、社会的均衡(equilibrium)状態を描き出している。

しかしこのモデルの問題点は、狩猟採集社会を安定的で、静態的な、変化のない社会としてのイメージを生産している点である。交換を媒介とする相互依存関係は、農耕社会との間で実践されるため、これまでの「隔離モデル」とは違って、狩猟採集社会と外部との機能的関係を説明しているようにみえるが、実際は狩猟採集社会と農耕社会をともにひとつの閉鎖系のなかに関り込んでいる。交換適応モデルは、プロセス考古学の新たな研究の枠組みによる「隔離モデル」の乗り越えという目的をもっていたにもかかわらず、相互依存関係で結ばれたふたつの社会を、ひとつの安定した、長期間にわたって均衡状態を保つシステムとして提示しただけで、そのシステム外部との影響関係を論じていないという点では、かたちを変えた「停滞論」「時空間の均質性」の提示と考えることができる。「停滞論」を打破しようとして構築された交換適応モデルが提示したものは、結局、文化史的考古学と同じ「時空間の均質性」であり、かたちを変えた「隔離モデル」であったと考えることができる。

この理由には 70 年代の狩猟採集民研究の潮流を考慮する必要がある。この時期(あるいは現在でも)、*Man the Hunter* (Lee and De Vore 1968)でリーらによって提示されたブッシュマン社会のモデルが考古学者に与えた影響力は大きい。このモデルが生み出した、狩猟採集社会が低い労働投下量で高い生活水準を享受し、自然環境の諸条件に密接に適応するかたちで柔軟に構成された平等主義的共同体であるというイメージは、考古学者に広く受け入れられ、世界各地の先史狩猟採集社会のイメージに重なり合うようになった。また同時に、リーらは現在の狩猟採集社会を「石器時代の生き残り」とすることは慎重に避けながらも、過去から現在までの過程を変化のない社会とみなす時間の観念(timeless sense)でとらえていた(Shott 1992:845)。同時期にプロセス考古学によってはじめられた民族考古学(ethnoarchaeology)が生み出したモデルも、当初からカラハリ・モデルの影響を強く受けており、交換適応モデルもその一例と考えることができる。またより大きな時代的影響として考えられるのは、ベトナム戦争以降の、輝かしいはずの「文明」へ投げかけられた疑問や幻滅である。これによって人類学者のみならず、多くの考古学者が「非文明世界」における自然と人間との調和的關係にユートピア像を描く原因となり、「高貴なる野蛮人」イメージを狩猟採集社会に重ね合わせるようになったものと考えられる。

「文明」社会に幻滅や疑問を感じるようになって、狩猟採集社会は依然として自己(文明)と対峙する「野蛮な他者」の世界として表象されてきた。プロセス考古学によって新たな理論的枠組みと方法が導入されたが、狩猟採集社会と農耕社会が同時に存在し、相互関係を保持してきた可能性のある数千年間の歴史は隠蔽されたままであった。狩猟採集社会の「隔離性」や「均質な時空間」の虚構性に対する議論が活発になるには(例えばカラハリ論争のように)、これまで科学的客観主義によって研究対象とされてきた狩猟採集社会自体から、一方的な表象のあり方に対する異議申し立てが盛んとなり、それに対して研究者が反応するようになる時期までまたなければならない。

### 3. 東南アジア狩猟採集社会研究における「カラハリ論争」

東南アジアの考古学において、狩猟採集社会の「隔離性」や「均質な時空間」の虚構性が議論されるようになるのは、ヘッドランドらによる問題提起以降のことである(Headland and Reid 1989)。フィリピン、ルソン島北東部カシグラン(Casiguran)のアグタに関する言語学的、人類学的調査を長年にわたって行ってきたヘッドランドらは、アグタ社会と農耕社会の間には相互依存関係にみられるような頻繁な交流があるにもかかわらず、一般にはアグタは「文明」から「隔離」された「野蛮」な状態にあるとされており、タイラーやモルガンがその進化主義のなかで定式化した、「野蛮」「未開」段階から「文明」段階へと人間は文化的に進化するという虚構の図式が、いまだに信じられていることに対して疑問を提示した(Headland and Reid 1989:50)。そして「隔離性」の虚構を打破するために、アグタが農耕社会と相互依存関係を長い間保持してきたことを、言語学、生態学、考古学、民族誌、古文書などの資料をもとに検討した(小川 1996)。その結果、ヘッドランドらは約 3000 年前までにはすでに農耕社会との相互依存関係が成立していたとする仮説を提示した。考古学的には複数の社会間に交流が存在したか否か、さらには相互依存関係のような交流のあり方にまで踏み込んで検証することは、考古遺物のみからはひじょうに困難である(Jones 1997, スチュアート・松本 n.d.)。しかしヘッドランドらが提示した仮説が根拠に乏しいというなら、同時に現在まで通用している狩猟採集社会の「隔離性」を考古学的に検証することも困難である。他の研究者がこの仮説を受け入れるには、考古資料以外のさまざまな状況証拠で仮説の補強をはかると同時に、「隔離性」の虚構に疑問を呈する時代的風潮も必要である。その後、この仮説に対して世界の熱帯雨林狩猟採集社会を研究する考古学者、人類学者が賛否両論の論争を展開し(Headland and Bailey 1991)、あたかも同時期に行われていたカラハリ論争(Shott 1992, 池谷 1996 参照)と類似した様相を呈していたが、ほとんどの研究者はヘッドランドらの仮説に否定的であった(Bahuchet, McKey and de Garine 1991, Brosius 1991, Dwyer and Minnegal 1991, Endicott and Bellwood 1991, Stearman 1991)。しかしこれら 2 つの論争はいずれも、狩猟採集社会イメージの虚構性を打破し、隠蔽された歴史を回復するという共通の目的のもとにはじめられたものであった。残念ながら東南アジアではカラハリ論争ほどの活発な議論は生まれなかったが、論争の帰結は相互依存関係を歴史的に検証する唯一の分野である考古学にゆだねられている。しかし東南アジア考古学がこの期待に応えるには、これまで自らが作り上げてきた狩猟採集社会イメージを大きく変革する作業を続けて行かなくてはならない。

### 4. おわりに

東南アジアの狩猟採集社会に対して考古学が生産してきたイメージを、博物館展示と考古学のモデルの変遷を追って検討してきた。その結果、それらのイメージは現在でも「隔離性」や「野蛮な他者」を表象するかたちで生産されてきたことが明らかとなった。このため狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の歴史も「均質な時空間」に閉じ込められたままであった。狩猟採集社会の「歴史の回復」の動きは、カラハリ論争と同じく、狩猟採集社会イメージの虚構性を打破する目的のもとに東南アジアでも開始されたが、カラハリの考古学者がこの問題に対してかかえるほどの切実さをもっては迎えられなかった。これらの論争の決着は考古学に期待されているが、複数の社会間に交流が存在したことを考古資料だけで検証することは困難である。そのため考古学の枠組みにそって自然科学分野の資料や民族考古学から構築されたモデルなどを援用しながら、交流のコンテキストを歴史的に明らかにする必要がある。同時に、狩猟採集社会のイメージを「均質な時空間」に閉じ込めてきた、植民地主義や国民文化の相対化、脱自然化の議論に考古学者が参入し、抑圧された狩猟採集社会の現実を視野に入れた「歴史の回復」をめざさなくてはならない。こうした作業によって、農耕社会との相互関係を生きた、新たな狩猟採集社会イメージを生産する考古学の理論的枠組み構築の可能性が拓けるものと考えられる。

**註** :日本考古学を例にとると、文化史的考古学者によって、縄文土器から「縄文人」や「亀ヶ岡式土器人」が実体として語られるのはこのためである。またドイツでは文化史的アプローチが、ナチによる領土拡大や人種政策に正当性を与える根拠となったことが論じら

れている(Veit 1989, Härke 1998)。しかし奇妙なことに、これまで「考古文化」は民族概念を暗示しているにもかかわらず、政治的イデオロギーとは無縁のものとされてきた(Veit 1989:42)。

## 文献目録

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、NTT 出版

Bahuchet, S. D. McKey and I. de Garine

1991 Wild Yams Revisited: Is Independence from Agriculture Possible for Rain Forest Hunter-Gatherers? *Human Ecology*, Vol.19: 2: 213-243

Binford, L. R.

1962 Archaeology as Anthropology. *American Antiquity* 28: 217-225.

Binford, S. R. and L. R. Binford (eds.)

1968 *New Perspectives in Archaeology*. New York: Academic Press.

ボズラップ, E.

1967 [1975] 『農業成長の諸条件』安沢秀一, 安沢みね子訳 ミネルバ書房 (The Conditions of Agricultural Growth. Chicago: Aldine.)

Brosius, J. P.

1991 Foraging in Tropical Rain Forests: The Case of the Penan of Sarawak, East Malaysia (Borneo). *Human Ecology* Vol.19: 2: 123-150.

Diaz-Andreu, M. and T. Champion (eds.)

1996 *Nationalism and Archaeology in Europe*. London: UCL Press.

Dunn, F. L.

1975 *Rain-forest collectors and traders: A study of resource utilization in modern and ancient Malaya*. Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, Monograph 5.

Dwyer, P. and M. Minnegal

1991 Hunting in Lowland, Tropical Rain Forest: Towards a Model of Non-Agricultural Subsistence. *Human Ecology* Vol.19:2: 187-212.

Endicott, K. and P. Bellwood

1991 The Possibility of Independent Foraging in the Rain Forest of Peninsular Malaysia. *Human Ecology* Vol.19:2: 151-185.

池谷和信

1996 「伝統主義者」と「修正主義者」とのあいだの論争をめぐって-カラハリ・サン研究の事例-』『民博通信』No.73: 64-77

Härke, H.

1998 Archaeologists and Migrations. *Current Anthropology* 39: 19-46.

Headland, T. N. and R. C. Bailey

1991 Introduction: Have Hunter-Gatherers Ever Lived in Tropical Rain Forest Independently of Agriculture? *Human Ecology* Vol.19:2: 115-122

Headland, T. N. and L. A. Reid

1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30: 43-66.

Heine-Geldern

1932 Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier. *Anthropos* 27: 543-619.

Hodder, I.

1991 Archaeological Theory in Contemporary European Societies: the emergence of competing traditions. In I. Hodder (ed.) *Archaeological Theory in Europe*: 1-24. London: Routledge.

Hutterer, K.

1976 An Evolutionary Approach to the Southeast Asian Cultural Sequence. *Current Anthropology* 17: 221-242.

1982 Interaction between Tropical Ecosystem and Human Foragers: Some General Considerations. Working Paper. Environment and Policy Institute, East-West Center. Honolulu.

Hutterer, K. L. and W. K. Macdonald (eds.)

1982 *House Built on Scattered Poles*. Cebu: University of San Carlos Publication.

Jones, S.

1997 *The Archaeology of Ethnicity. Constructing identities in the past and present*. London and New York: Routledge.

Keesing, R. M.

1981 *Cultural Anthropology: A Contemporary Perspective*. 2d edition. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Kennedy, J.

1977 A Course toward Diversity; Economic Interaction and Cultural Differentiation in Prehistoric Mainland Southeast Asia. Unpublished Ph.D dissertation. University of Hawaii.

Kohl, P. L. and C. Fawcett (eds.)

1995 *Nationalism, Politics, and the Practice of Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lee, R. B. and I. De Vore (eds.)

1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine

Lane, P.

1996 Breaking the mold? Exhibiting Khoisan in Southern African museums. *Anthropology Today* Vol. 12 No. 5: 3-10.

Molyneaux, B. L. (ed.)

1997 *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology*. London and New York: Routledge.

- 西川長夫  
1995 『地球時代の民族 = 文化理論 - 脱「国民文化」のために』新曜社
- 小川英文  
1996 「狩猟採集民ネグリの考古学 - 共生関係が提起する諸問題 - 」スチュアート ヘンリ編 『採集狩猟民の現在』: 183-222, 言叢社  
2000 「狩猟採集民と農耕民の交流 - 相互関係の視角 - 」小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店
- Peterson, J. T. and W. Peterson  
1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In Allen, J., J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul*: 567-599. New York: Academic Press.
- Russell, L.  
1997 Focusing on the Past. Visual and Textual Images of Aboriginal Australia. In Molyneux, B. L. (ed.) *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology*. London and New York: Routledge.
- サイド、エドワード  
1978 [1993] 板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳 『オリエンタリズム』上・下、平凡社ライブラリー (*Orientalism*. New York: Pantheon.)
- Schmidt, P. R. and T. C. Patterson  
1995 Introduction: From Constructing to Making Alternative Histories. In Schmidt, P. R. and T. C. Patterson (eds.) *Making Alternative History. The Practice of Archaeology and History in Non-Western Settings*. Santa Fe: School of American Research Press.
- Shott, M. J.  
1992 On recent trends in the anthropology of foragers: Kalahari Revisionism and its Archaeological Implications. *Man* 27(4): 843-872.
- Simpson, M. G. (ed.)  
1996 *Making Representations - Museums in the Post-Colonial Era*. London and New York: Routledge.
- Skotnes, P.  
1996 Introduction. In Skotnes, P. (ed.) *Miscast. Negotiating the Presence of the Bushman*: 15-23. Cape Town: University of Cape Town Press.
- Stearman, A. L.  
1991 Making a Living in the Tropical Forest: Yuqui Foragers in the Bolivian Amazon. *Human Ecology* Vol.19: 2: 245-260.
- スチュアート ヘンリ・松本拓  
2000 「極北地帯のチュレ文化にみる交流の読み方」、小川英文編 『交流の考古学』: 21-49、朝倉書店
- Trigger, B.  
1984 Alternative Archaeologies: Nationalist, Colonialist, and Imperialists. *Man* 19: 355-70.
- Veit, U.  
1989 Ethnic Concepts in German Prehistory: a case study on the relationship between cultural identity and objectivity. In S. J. Shennan (ed.) *Archaeological Approaches to Cultural Identity*: 35-56. London and New York: Routledge.
- 吉田憲司  
1998 「民族学展示の現在 - 表象の詩学と政治学」 『民族学研究』 62-4: 518-536.

### Summary

#### **Archaeologists' Image of hunter-gatherers in Southeast Asian Archaeology.**

Ogawa, Hidefumi

**keywords:** interdependent relationships, isolation, homogeneity of time and space, fiction of image, making alternative history

Southeast Asian archaeology has produced the images of hunter-gatherer societies in the museum display or archaeological models. Examining the productions of these images in the archaeological history, archaeologists still convey the idea that hunter-gatherers had been isolated from the other societies into these images, even the changes of analytical frameworks and methods of archaeology. But the interdependent symbiotic model on the relationships between hunter-gatherers and farmers in Southeast Asian prehistory challenges to the archaeological representation of ideas on the hunter-gatherer societies. Sharing the issues with the Kalahari revisionists, the model provokes the reconsideration of fiction of "isolated hunter-gatherers". I discuss the possibility to reconstruct the analytical framework for making alternative history of hunter-gatherers in Southeast Asia, overcoming the illusion of their isolation.

## 「東南アジア 発掘の歴史と考古学 - 「古代」への「あこがれ」がとり結ぶイデオロギーの磁場」

Southeast Asian Archaeology – its history and issues.

小川英文 Ogawa, Hidefumi

### 目次

- はじめに：「フィリピンに遺跡があるのか」という問い  
I. 植民地時代以前の考古学：アン・チャン 1 世による復興事業  
II. 植民地時代東南アジアの考古学：なぜ「文明」の資格を与えたのか？  
III. 国民文化としての東南アジア考古学  
おわりに

### はじめに - 「フィリピンに遺跡があるのか?!」

わたしが調査しているフィリピンの考古学の話をもとにすると、「フィリピンに遺跡があるのか」という問いかけがしばしば帰ってくる。この場合聞き手は、東南アジアの「遺跡」をアンコール・ワットやボロブドゥールといった、著名な、世界遺産に登録されるような「石造建築」遺跡をイメージしているにちがいない。フィリピンで世界遺産に登録されているのは、ルソン島山岳地帯に生活するイフガオ族によって築かれたライステラス(棚田)、海底のサンゴ礁などで、考古学がとりあつかう「遺跡」とはなじみの浅いものばかりである。同じように日本の世界遺産にも原爆ドーム、姫路城、屋久島など、考古学との親和性の低い遺産物件が多くみられる。日本でもフィリピンでも、考古学となじみの深い「遺跡」は、石造建築遺跡ではなく、縄文、弥生時代の住居・貝塚・墓地遺跡などである。にもかかわらず日本人が「外国の遺跡」としてイメージするのは、いまでは崩れ落ち、訪れる人もない、鬱蒼とした密林や砂漠のなかに取り残されている石造遺構の姿である。そしてこの遺跡のイメージによって、わたしたちは「古代文明」の神秘と謎にひと時浸り、過去への想像力を膨らませているのである。いっぽう地上に石造遺構が残っていない日本の縄文や弥生時代の集落址では、例えば三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡などのように、物見櫓や萱葺きの住居群などが予想復元され、実体化されなければ、過去へ想いを馳せるきっかけがなかなかつかめないのである。筆者がこれまで調査してきたフィリピンの遺跡(貝塚や洞穴)も、日本の縄文や弥生時代の遺跡同様、石材で構築された上部構造をもっていない遺跡である。フィリピンの遺跡は日本人がイメージする「外国の遺跡 = 石造遺構」から大きく逸脱し、「フィリピンに遺跡があるのか」という疑問が提示されるのである。

誤解のないように述べておくと、ここでわたしは世界遺産に登録されるような石造建築こそが考古学的に価値があり、それに比べて日本やフィリピンの遺跡は劣っているのだということを主張したいのではない。本稿の主題は、なぜわたしたち日本人はアンコール・ワットなどの石造建築遺跡をどうして、「古代文明」の謎や王朝の興亡に憧憬をいだき、想像力を膨らませ、ひと時過去へ自らを回帰させようとするのか、という問題を東南アジアの発掘や考古学の歴史をたどりながら考えてみようというものである。このようなわたしたちの過去へのあこがれや古代文明の謎を追い求めるのと同じかたちで、実は東南アジアの考古学研究自体が投企され、過去の「掘り起こし」が文字どおり始まったのである。読者にはわたしがなぜこのような当たり前の問題設定をするのかと疑問に思うかもしれない。過去の人々の生活や営為の痕跡が忘れられた状態で現前することに謎を抱き、それを追求することから学問が始まるというのは当然のことである。しかしわたしたちの日常生活のちょっとした間隙で投げかけられる過去への遠い想いは、エキゾチシズム(あるいはオリエンタリズム)という一定の政治的枠組み抜きには成立しないし、またそれによって遺跡を資本とする観光産業も成立しているというのが現実である。さらに、わたしたちの過去への想いを実体化する考古学自体が、近代以前には成立していなかったということとも切り離して考えることはできない。このような問題を検討する材料として、以下では東南アジア考古学史を植民地時代以前と以降、そして独立後の3つの時期に分け、各時代の「過去へのあこがれ」をめぐる発掘物語をとりあげる。

### I. 植民地時代以前の「考古学」：アン・チャン 1 世によるアンコール・ワットの復興

現在、日本で最初の学術的考古学調査に位置づけられている黄門さま(徳川光圀)の発掘は、格さん(安積澹泊、講釈では渥美格之丞で登場)を発掘主任に据えて、元禄 5 年(1692)に那須の古墳(上侍塚、下侍塚)で始まった。中国の正史と同じ紀伝体の体裁をとり、本紀と列伝で編集された漢文の日本史である『大日本史』に着手していた黄門さまは、大友皇子の即位を認め、また南朝を正統として本紀に列するなど、皇統に独自の解釈を展開した。その史料の収集には格さん、助さん

(佐々十竹、講釈では佐々木助三郎)を京都や奈良などに派遣していた。天皇の正統な系譜に関心をもつ黄門さまが、京都・奈良に分布し、皇室家の墳墓として伝えられる古墳群について、実際に見聞してきたであろう格さん、助さんから話を聞き、水戸藩領内の古墳を自ら発掘して、被葬者が誰であるかを知りたいと思うのは自然のなりゆきであろう。

黄門さまの発掘よりも 150 年ほど前、16 世紀半ばのカンボジア王国では、荒れるにまかされていたアンコール・ワットの修復が、当時の王様によって開始された。王様の名前はアン・チャン 1 世といい、密林のなかに眠るアンコール遺跡群を探し当て、祖先の王たちが嘗々と築き上げてきたアンコールの都の跡を目の当たりにするのである。アンコールの都は 15 世紀前半にタイ人によって破壊されたが、これ以降のカンボジアの歴史は近代まで一般に年表から姿を消すため、あまりなじみがない。その後のカンボジア史と大陸部東南アジア情勢を概観しよう。

12 世紀末から 13 世紀初めにかけて、ジャヤバルマン 7 世の治下で最大版図を築き上げたアンコール朝クメール王国も、その後は衰退期に入る。14 世紀後半からアンコール朝は、西隣するタイ人の新興国家アユタヤ朝(1351 ~ 1767 年)によってたびかさなる圧迫、侵略を受け、ついに 1432 年、アンコールの都を放棄して南へ退くこととなった。しかしアユタヤ朝はその後も侵略の手を休めず、1474 年にはカンボジアを従属国化する。このような覇権をめぐる力と力のぶつかり合いは、それまでもカンボジア内外で起きていた。王たちは力で相手をねじ伏せ、最終的に権力を掌握した者が、「王のなかの王」として東南アジア大陸部に君臨してきた。ジャヤバルマン 7 世までのアンコールの外敵は、東のチャンパ、西のモン族であった。これらの外患を平定し、国内で熾烈な王位継承の争いに勝ち残った者のみが、「王のなかの王」として神と一体化し、力による正義を四方に敷衍することが可能であった。内憂外患を取り除いたアンコールの王たちは、さらに国家安寧の祭儀を執り行い、世界の中心となるべき大寺院の建立と新たな都城の造営にはげみ、国家の栄光と王としての自らの実力を誇示した。こうして 600 年にわたり、アンコールの地を中心として、現在のタイ、ラオス、ベトナムにわたる広大な帝国を支配することが可能であった。

しかし絶対にみえたアンコールの支配もジャヤバルマン 7 世が没して以降、翳りをみせる。13 世紀後半から、アンコールの力の安定を打ち破る新興勢力が各地に現れ、東南アジア大陸部の勢力図を刷新することになった。これらの新興勢力とは西のビルマ、タイ、東のベトナムの諸民族で、北から徐々に南下し、まずタイのアユタヤ朝がアンコールを脅かすこととなる。かつてスールヤバルマン 2 世が、ベトナム、当時の李朝大越国と戦いを交えたが(12 世紀後半)、当時はむしろチャンパ王国のほうがアンコール朝にとっての脅威であった。しかし黎(レ)朝大越国が 1471 年にチャンパの都ヴィジャヤ(現在のベトナム、ピンディン省クイニョン郊外)を陥落させると、それ以降、ベトナム人は南下を始め、メコンデルタをめぐる対峙することになる。またビルマ人は南部のモン族が建てたペー朝を滅ぼし(1531 年)、その後アユタヤ朝と長年にわたって戦いを繰り返すこととなる。この間、アンコールやチャンパが東南アジア大陸部に築いてきたヒンドゥー的世界は、上座仏教(ビルマ、タイ、カンボジア)や中国文化(ベトナム)の影響を受けた世界へと変わり、現在の東南アジア大陸部世界の原型が形成されていく。そしてこの東南アジア大陸部世界の大きな転換期と、アンコール朝の衰退期とが一致する。まさに歴史の主役の交替であった。

アンコール陥落の約 100 年後、1526 年にアン・チャン 1 世が即位し(~ 1566 年)、現在のブノンペンの北 65km のロヴェックに新たな都を造営した。そして 1550 年ごろ、アンコールの旧都を密林の中に発見するのである。アンコールの王たちが嘗々と築きあげてきた大寺院や都城が、いまや廃墟となった姿を目の当たりにするのであった。しかし、この廃墟のなかでアンコールワットだけは、いまだ民衆の信仰の対象である仏教聖地として崇められていた。その後、アン・チャン 1 世は 1564 年に、アンコール・ワットの壁面レリーフの未完成部分である、第 1 回廊北面と東面北側の作業継続を発令した。そしてその完成は、アン・チャン 1 世の逝去と同じ年、1566 年に迎えることになる。その 10 年後に即位したサータ 1 世(1576 ~ 1594 年)は、旧都アンコールに住人を移住させ、アンコール・トム内の建造物を改修・修復し、アユタヤ朝に奪われた旧領回復に努めた。アン・チャン 1 世からサータ 1 世にかけての約半世紀は、カンボジアを圧迫していたタイのアユタヤ朝が、新興勢力であるビルマのタウングー朝(1531 ~ 1752 年)に都を占領されるなど、一時的にアユタヤ朝の力が衰えている時期でもあった。しかしカンボジアの平穏も長くは続かず、16 世紀末にはふたたびアユタヤ朝との戦いが始まり、首都ロヴェックが陥落する。それ以降、カンボジアは二度とアンコール期のような国力を回復することはできず、タイ、ベトナムに圧迫され、19 世紀にはフランスに植民地化されるのである。

長々と東南アジアの歴史情勢を解説したが、前節で提起した本題に立ち戻ると、アン・チャン 1 世、サータ 1 世は、なぜアンコール旧都の改修・修復を行ったのか、それにどのような意義があったのか、ということについて議論が必要である。そしてその議論は、わたしたちの日常生活の間隙で行われる過去へのあこがれとの比較を軸に展開されなくてはなら



ない。さて、アン・チャン1世が密林のなかに眠るアンコールの遺跡群を目の当たりにした時、なにを考えたであろうか。さぞかし自らにつながる祖先の王たちが嘗々と築き上げてきた大寺院と都城址を前にして、その偉業の数々に身を震わせ、その血を受け継ぐ者としての重い責務を感じ取ったのではないだろうか。そしてかつてのアンコール朝の栄光を今一度、自らの手で四方に行き渡らせたいと思ったのではないだろうか。折りしもこの頃、アユタヤ朝はビルマの新興勢力との戦いに専念しており、カンボジアに対する支配力が緩んできた時期であった。タイに奪われたカンボジアの領土と栄光を取り戻すためには、武力で支配領域を押し広げると同時に、アンコールの王たる者に課せられた寺院建立を実施し、国家安寧の祭儀を執り行い、王の栄光と威厳を国内外に誇示することが必要である。しかし長年にわたるアユタヤ朝からの圧迫で、かつての国力を回復することができていない状況では、大寺院の建立は不可能である。そこでアンコールの偉大な王、スールヤバルマン2世の遺業を受け継ぎ、完成させることで、アンコールの王たちの血を受け継ぐ者としての自らの責務を果たそうと考えたのではないだろうか。アン・チャン1世の「過去へのあこがれ」は、未完成の状態にあったアンコール・ワット壁面レリーフを完成させることによって、かつての王たちの栄光を自らの手で取り戻すことを意味していたのである。王としての正統性の主張と過去の栄光の回復をめざしたアン・チャン1世の「想い」は、アンコール・ワットの回廊に刻まれて今に偲ぶことができるが、王朝の栄光の回復は未完に終わった。一方、冒頭でふれた黄門さまの想いはどのように位置づけられるだろうか。皇統の正統性を糾し、天皇を中心とする国家秩序を築こうとした黄門さまの想いは、その後「水戸学」に結実し、幕末には政治実践の精神的支柱となった。そして明治維新後、考古学は西欧から移入した科学的客観主義のなかで、新たに建設される国民国家の「正統性」、「固有性」を主張するためのイデオロギー装置としての性格を帯びていくことになるのである。

## II. 植民地時代東南アジアの考古学 - 植民地の古代になぜ「文明」の資格を与えたのか？

2つめの発掘物語は、カンボジアがフランスの植民地になった時代、フランス極東学院がインドシナの考古学調査の中心的役割を果たしていた頃の話である。

サータ1世のアンコール修復によって活気を取り戻したカンボジアであったが、それもつかの間、ビルマとの戦いに勝利を収めたアユタヤ朝によってふたたび占領されることとなる。それ以降、カンボジアには失地を回復する勢いは失われてしまう。19世紀にはベトナム阮朝に併合され、さらにフランスの植民地となる。こうしてアンコール遺跡群は密林の奥深くに眠り、アンコール・ワットなどの一部の寺院は民衆によって崇められてはきたが、世界からは長い間忘れ去られた存在となってしまった。

その後アンコール遺跡群が世界に知られるようになるのは、1860年アンリ・ムーオの報告が世に出てからである。西欧世界はアンコール遺跡群の規模の壮大さと芸術性の高さに驚嘆し、この世紀の大発見に心を奪われる。1907年、フランス・シャム条約によってアンコール遺跡群がタイ領から仏領インドシナに組み込まれると、フランス極東学院による本格的な調査・修復が開始されることになる。フランス極東学院は仏領インドシナなどの植民地をはじめとする東アジアの歴史・文化・民族の総合研究機関として1900年ハノイに設置された。アンコール遺跡群での研究活動は、遺跡の調査・保存・修復の過程で、碑文や美術様式の研究を行いながら、遺跡全体を史跡公園として管理・整備するというかたちで推進されてきた。碑文の発見・解読の進展によって、各遺跡の建造と王の在位の年代が徐々に明らかとなっていった。碑文が残されていない遺跡については、美術様式の変化に基づく相対編年によって、各時期に位置づけられていった。これらフランス人研究者によって行われた膨大な数にのぼる研究成果は『フランス極東学院紀要(BEFEO)』に発表され、古代カンボジアの歴史・考古・美術・宗教などに関して細密な知見が新たに構築されるようになった。フランス極東学院で活躍した研究者の名を挙げると、碑文研究により、古代タイ、カンボジアの歴史再構築に多大な貢献を成すとともに、スマトラ、マレー半島にかつてスリウィジャヤ王国が存在したことを明らかにし、長く極東学院院長を務めたセデス(G. Coedes)、中国文献の研究からアンコール碑文資料の欠落を補ったペリオ(P. Pelliot)などをその代表として挙げるができる。この他にもバルマンチエやグロリエなど多くの優秀な研究者が極東学院を本拠として成果を発表していった。このような極東学院を中心とした組織的で緻密・詳細な調査・研究と膨大な資料の蓄積によって、アンコール遺跡群をはじめとする古代カンボジア史の再構築が可能となり、現在わたしたちはアンコールの歴史や美術様式と遺跡の変遷についての年表を手にすることができるのである。

西欧人によって発せられたアンコールの崇高さ、壮大さに対する驚きや疑問は、わたしたちの過去への「想い」を遠い過去に回帰させたり、じかに遺跡を訪れてその「想い」を満たしてくれるだけにはとどまらない。西欧宗主国はひとつの巨大

な知のシステムである『東洋学』を組織し、植民地の歴史・言語・文学・建築についての細密で膨大な研究成果を積み重ね、植民地の過去を自らの知の領域のなかに対象化することによって、「古代文明」への驚きと疑問を解消していった。こうして植民地の過去を掘り下げ、歴史の新たな「発見」に興味が注がれ、東南アジアの「古代世界」を再構成するに足る膨大で、緻密な知識が蓄積されていった反面、研究者がそこで生きる植民地の、現在の社会や文化が生成するダイナミズムにはアカデミックな関心は払われなかった。西欧宗主国のアカデミズムの関心は、社会的、文化的、そして経済的に「停滞した」植民地の現状ではなく、宗主国が今日的に達成しえた「輝かしい文明」と同等の価値を与えるに足る、植民地の「古代文明」にあった。

ここで疑問なのは、宗主国フランスが19世紀に国民国家を形成していく過程で構築した「文明」という概念が、なぜ植民地の「古代」という特定の時期にのみ適用されるのかという点についてである。フランスにとって「文明」概念は、自由や平等と同様に、国民国家の崇高な理念として規定されてきた。しかしフランスに限らず西欧宗主国は一般に、一方で植民地の現実に対しては「停滞」や「未開」という負の価値を与え続けたにもかかわらず、他方で植民地の過去には自らが誇る理想としての「文明」という価値を付与してきた。この理由はいったいどこに求めることができるであろうか。そこには宗主国が知の領域において植民地の過去を現在と切り離して自らのものとする意志を感じることができる。その知の行為は、西欧宗主国がかつて、自国の領域からは遠く離れたギリシャ・ローマの古代遺跡を発掘し、自らの「輝ける過去」として発見して、その歴史を自分たちの現在に結びつけた時と同質の行為として論じられなければならない。このように遠く離れた場所の、あるいは植民地の「他者」の過去を、横滑りさせながら自らのものにしていく知的行為は、19世紀に創出された「国民」の新たな来歴を構築していくという「発明」的行為として位置づけられると同時に、植民地の過去の遺産の「真の価値」を見出し、植民地の現状としての「貧困」や「無知」を克服して、「文明化」への道を達成するという、帝国主義的支配の正当化のレトリックとしても作用する。そしてこのように宗主国と植民地で繰り広げられた、過去からの来歴、あるいは「伝統」をめぐる知の方法として考古学が構築されたのである。しかしいったん来歴や「伝統」が知のシステムのなかに関わり込まれると、いつしかそれらは遠古から実体として存在してきたかのように振る舞い、たかだか百年余前の19世紀に「発明」されたという経緯は、わたしたちの記憶の彼方に埋没してしまったのである。

### III. 国民文化としての東南アジアの考古学

最後の発掘物語は東南アジアが植民地支配から脱して、国民国家を形成・維持する現代の物語である。具体例を挙げて説明する紙幅の余裕がないので要点だけ手短かに述べたい。ここまでの話で理解できるように、わたしたちの過去へのあこがれが、ひとたび知のシステムと結びつくと、実はとても政治的な領域へ踏み込んでしまうということが明らかになった。わたしたちのあこがれの行き着く先は、過去のファンタジックな世界であるが、その場は同時に、保存すべき遺産と利益を生む文化的資本をめぐって政治的、経済的思惑が交錯する場でもある。すなわちファンタジーの生成を喚起する古代遺跡は、現実の欲望へとひとびとを引きつけるイデオロギーの磁場でもあるのだ。またそれ以上に、政治や経済などの現実の「粗雑な」領域とは異なり、これまで知の特権の世界として欲望の入り込む余地もないと考えられてきたが故に、わたしたちの過去へのあこがれをファンタジックに彩る正当性を与えてきた学問的世界もまた、権力やイデオロギーに深く関与してきたことを忘れることはできない。

植民地支配を脱して独立を達成した東南アジアの国々における考古学は、新たに自らの国民国家を建設する過程で、ヨーロッパの植民地宗主国が文明化という未来予想図をもとにしながら過去をギリシャ・ローマに求めたように、自らの「来歴」の構築に寄与したのである。その作業はまず植民地宗主国に横領された過去の輝きを自らの現在へと引き戻すことから始まった。それによってかつての栄光の時代への回帰が、植民地時代の苦しみや政治的、経済的現状の悲惨さに対する「心の癒し」となって立ち現れることとなる。自らの過去が輝きに包まれていた「史実」を発見し、それを歴史的に「正しく」位置づけ、「事実」として国民に流布する役割を担ったのが、国民国家に寄与する考古学である。こうしたナショナリズムの枠組みのなかで、東南アジアのみならず日本の考古学も生まれ、「国民文化」の形成母体のひとつとして制度化され、そして現在でもカンボジア人や日本人、フィリピン人という国民的アイデンティティの形成と維持のために機能しつづけている。現在の苦境の乗り越えのひとつの手段として、栄光の過去へ回帰し、現状を癒し、未来への希望とする。このようなかたちで国民国家の時代の考古学は、「想像された共同体」の感情を共有する国民に、将来の指針を提示するのである。

おわりに

考古学が対象とする遺跡はすでに植民地時代から観光産業の文化的資本という性格も付与され、わたしたちの過去へのあこがれを満たしてくれている。しかし現在の東南アジアの国々における遺跡は、「想像された国民」を政治的に統一する装置として機能していることも忘れることはできない。ここまで述べてきて、フィリピン考古学者であるわたし自身の課題が浮上する。すなわち国民を統合する政治的装置として、そして過去へ回帰したひとびとの心を癒し、栄光や輝きを提示し、未来への指針や勇気を与えてくれる「国民的」なモニュメントや「史実」が存在しないフィリピンにおいて、アンコール・ワットやボロブドゥールに代わる過去の輝きをどこに求めてきたかという問題を追求しなくてはならない。

## 参考文献

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳 NTT 出版

イ・ヨンスク

1995 『国語という思想 近代日本の言語認識』岩波書店

石沢良昭

1996 『アンコール・ワット』講談社現代新書

石沢良昭・生田滋

1998 『東南アジアの伝統と発展』中央公論社

小川英文

1999 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』63-2:192-202

小熊英二

1995 『単一民族神話の系譜 - <日本人>の自画像の系譜』新曜社

小田亮

1996 「ポストモダン人類学の代価 - ブリコールルの戦術と生活の場の人類学」『国立民族学博物館研究報告』21-4: 807-875

加藤剛

1993 「族誌と地域研究 - 「他者」のまなざし」矢野暢編『地域研究の手法』: 97-140、弘文堂

サイド、エドワード

1993 『オリエンタリズム』上・下、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社

1998 『文化と帝国主義』1、大橋洋一訳、みすず書房

坂井隆・西村正雄・新田栄治

1998 『東南アジアの考古学』同成社

酒井直樹

1996 『死産される日本語・日本人 - 「日本」の歴史-地政的配置』新曜社

清水展

1998 「植民地支配の歴史を越えて - 未来への投企としてのフィリピン・ナショナリズム」西川長夫・山口幸二・渡辺公三編『アジアの多文化社会と国民国家』: 148-172、人文書院

ダジャンス、ブリュノ(石沢良昭監修)

1995 『アンコール・ワット - 密林に消えた文明を求めて』創元社

中川敏

1996 『モノ語りとしてのナショナリズム - 理論人類学的探求』金子書房

西川長夫

1995 『地球時代の民族=文化理論 - 脱「国民文化」のために』新曜社

1997 『国民国家の射程 - あるいは<国民>という怪物について』柏書房

山下晋司・山本真鳥

1997 『植民地主義と文化 - 人類学のパースペクティブ』新曜社

## 東南アジアの自然と生業

Natural settings and Subsistence in Southeast Asia

小川英文 Ogawa, Hidefumi

ここでは、東南アジアの人々が自然をいかに資源として利用し、地域的に独自の生業形態を確立しているかを概観する。自然環境を論じる際には、地形、土壌、気候（気温、降雨）動植物相を視点とし、生業は、東南アジアで主要な生業活動である狩猟採集、焼畑耕作、水稲耕作を取り上げる。

### 地質・地形

東南アジアは地形的に大陸部と島嶼部に分けられる。大陸部は、北部がヒマラヤから伸びる山地帯の一部にあたる隆起山脈をなし、その南には隆起運動のなかった平原が広がっている。海岸地帯には、イラワジ、チャオプラヤー、メコンの大河によって、広大な沖積低地、デルタが形成されている。島嶼部は、火山島が、スマトラ、ジャワを経て小スンダ列島からフィリピン諸島まで連なっている。これらの火山島の外周には6000メートルをこえる海溝がある。この火山島と海溝は大陸部のユーラシア・プレートと北進するオーストラリア、インド・プレート、そして西進する太平洋プレートがぶつかりあう地点に生成されたものである。火山島の内側にはマレー半島、ボルネオを中心とする非火山島地域がある。これらの島々の内海は浅く、いわゆるスンダ陸棚が形成されており、氷河期には現在よりも100m以上も海面が低かったと言われている。すると陸地は現在の2倍広がっていたことになるが、1万年以降の完新世に入って海進が進み、徐々に水没した。その後、小規模の海進・海退がくりかえされ、沿岸部にはマングローブの生い茂る低湿地が形成されていった（図1-1）。

### 土壌

地質由来する土壌の肥沃度は、資源としての動植物や農作物の成長に大きく影響する。火山性土壌は日本ではやせ土の代名詞であるが、東南アジアでは速やかな風化で養分となる塩基が絶えず放出されて肥沃である。山地部と非火山島は花崗岩、頁岩を主要岩石として構成されており、中程度の肥沃度をもつ。デルタは、山地からの土砂が岩石に含まれる養分を損なうことなく運ばれ堆積した地域である。それゆえ、デルタの肥沃度は山地のそれと同程度とすることができる。平原部は石英質岩で構成されているが、この地域の土壌は長い間地表に曝され、鉱物が風化し、養分が流し出されてしまっている。低湿地は土砂の供給がない地帯で、ここに生えているマングローブやニッパヤシの植物遺体層（泥炭層）で構成されており、陸化して水分がなくなると強酸性土壌となる。これは問題土壌と言われ、栄養分に乏しい土壌である。

### 気候

気候は地球システムとしての太陽放射量、水の循環（蒸発、発散、上昇、凝結、降雨）や大気循環が密接に絡み合って作り上げられたものである。東南アジアは熱帯という気候帯にあって、高温、多雨な地域であるが、この地域全体が一樣に同じ気候ではない。上にあげた気候の諸要素に加え、緯度、経度、そして高度などの地理的条件も複雑に関連し合っ、気候の地域性を作り出している。この地域性は湿潤熱帯気候の島嶼部とモンスーン熱帯気候の大陸部に区別されている。湿潤熱帯は通年高温で、赤道下20地点での年平均最低気温は23.2、最高気温は28.4で、月平均の最高と最低気温の変動幅は小さい。むしろ1日の変動幅の方がこれを上回っている。降雨も通年多雨で、年平均2000ミリ以上、ところによっては6000ミリに達する地域もある。降雨のピークはフィリピンの西岸を除いて、北半球の冬期（11月～1月）にやってくる。島嶼部でも、東ジャワ以東は雨の少ない乾燥した月が多く見られる（図1-2）。

モンスーン熱帯では乾期と雨期の区別が明瞭で、月平均気温の変動は大きくなる。月間降雨量40ミリ以下の月が3か月以上続く地域が大陸部に分布している。乾期（12月～5月）は3月に暑さのピークを迎え、雨の降らない日が続くが、逆に雨期（6月～11月）の9、10月には雨が各地に洪水を起こす。山地部は緯度、高度とも高いため、温度も低く、亜熱帯モンスーン地域である。

## 生物相

生物全体は上記の諸条件に影響されながら、1本の樹木や1匹の動物でさえも他の生物群と複雑な関連を持ち、一つの生態系を形成している。東南アジアの生態系について、以下では熱帯多雨林とモンスーン林を取り上げる(図1-3)。

熱帯多雨林は湿潤熱帯地域に分布している。空から見る多雨林は、青々とした緑一色の世界が隙間なく一面に広がっている。そしてこの緑は一年中変ることがない。森の中はこの緑の樹冠によって太陽の日差しは遮られ、薄暗く湿気の多い空間になっている。木々は枝を出さずに伸び、日差しが届く先端部で枝葉を広げている。葉は落ちてはすぐに芽を出し、緑の絶える間がない。木の幹にはツタ植物や地面に根を張らない着生植物が絡み合っている。地表面にはところどころにコケやキノコなどの地衣類が見られる。草本類は樹冠が途切れて日当たりがよい川辺によく分布している。

多雨林では木本類が草本類に卓越し、高さ40~50メートルの巨木から高木、低木、そして地衣類まで、3~4層に分かれる垂直構造をなしている。各層の資源は特定の動植物相が利用し、種間競争がないように、棲み分けが行なわれている。

また、多雨林は、種の多様性と膨大な生物量(バイオマス)によっても特徴づけることができる。ボルネオの例では、1.5ヘクタールに胸高直径20センチ以上の樹木だけで183種見られた。これは他のどんな生態系よりも多様である。一ヶ所に、多様な種が混在し、同一種は群棲せず、分散している。種が最も多様性を示すのは樹木と着生植物である。生物量については1ヘクタールあたりの植物総量が数百トンにも達する。動物についても種の多様性や分布は同様の傾向を示すが、生物量は植物に比べ非常に小さい。しかもそのほとんどは有機堆積物を食料とする昆虫類であり、イノシシ、シカなどの草食獣は全体の数パーセントを占めるにすぎない。

多雨林の生態系では、栄養循環のサイクルが非常に速いという点も大きな特徴である。多雨林では枝葉などの一次生産力が高い。そのため地面には落葉・落枝による有機堆積物層ができるが、元来土壌に栄養が乏しいため、植物はこの有機物層を速く分解して栄養を摂取している。多雨林の植物の一見きわめて速い生産・成長力は、このように限られたエネルギーを速く、十全に循環させることによって達成されたものである。このようにシステムの安定性を達成した生態系は「極相 クライマックス」と呼ばれる。

このような安定したシステムにおいては、再生産においても特有の方法が見られる。すなわち子づくりよりも自己の成長により多くのエネルギーを使うという生態戦略で、これを生態学では「k戦略」と呼んでいる。多雨林では種子や果実、そして根、地下茎などの地下組織に栄養を蓄えず、樹木の木質部に蓄えられるのはこのためである。草食獣が少ないのもこれに起因している。草食獣の食料となる葉や果樹は少なく、しかも樹冠の上にはしか見られない。その上タンニン、アルカロイドという有毒成分を含み、動物による消費に対抗している。こうした条件は草食獣にとって食物獲得上、大きな抑圧(stress)となっており、食物連鎖の上位にある肉食獣や人間にも影響をおよぼしている。植物の成長が速く緑豊かな熱帯多雨林は、いわば見かけだけで、森林伐採のような集約的開発による生態系外へのエネルギーの持ち出しは森にとって壊滅的な打撃となる。

一方、熱帯モンスーン林はマレー半島北部から大陸部に広がっており、高緯度になるにつれて半常緑林から落葉季節林に変化していく。ここでは降雨量が限られる。多雨林との比較において、種の多様性や生物量も小さくなり、純生産量も減少する。森全体の高さも低くなり、樹木の幹はより細くなる。着生植物は減り、草本類が増加してくる。森林内の垂直構造もより簡潔になり、生態的地位(ニッチ)の多様性は減少する。

生態系内におけるエネルギー循環も多雨林とはかなり異なっている。土壌の栄養が乏しいのは多雨林と同様であるが、ここでは年間降雨量の減少が乾期と雨期の季節性を生み出している。乾期の間、植物は成長を止め、養分を地下組織に蓄積しておき、雨期になって一斉に葉を出し、実を結ぶ。再生産もより多くの個体を産出し、子孫を増やす方法、「r戦略」へと変わる。動物相においても植物に呼応した変化が見られる。植物の栄養が地下組織に蓄積される分だけ、草食獣が地上部の葉を採食できるようになる。このため徐々に群棲有蹄類、ゲツ歯類などの草食獣の数は増加する。また再生産(子づくり)についても植物同様、季節的サイクルを持つようになる。

自然の諸条件は特定の生態系を作り出しており、さらに一つの生態系の中では、これら諸条件の下でさまざまな動植物が相互に複雑な関係を結んで生息している様子を概観してきた。次は、人間による東南アジアの自然利用のあり方(生業)を、狩猟採集、焼畑耕作、そして水稻耕作を例にして概観する。

## 狩猟採集

狩猟採集民とは、主として自然界に分布する資源を利用し、ときに農耕や動物飼育によって生計を立てている人間集団

を指す。人類はその誕生から約1万年前に農耕を開始するまでの約500万年の間、狩猟採集を唯一の生業手段としていた。しかし現在では、狩猟採集民は世界中で農耕民の進入を阻む境界に追いやられている。

東南アジアでは、狩猟採集民はフィリピン諸島、マレー半島、アンダマン諸島のネグリトを中心として、熱帯多雨林の中で生活している。フィリピン、ルソン島北東部のネグリトはアグタやイタと呼ばれ、シエラマドレ山脈を生活の場としている。アグタはシエラマドレから流れ出る幾筋もの川に沿って居住地を営んでいる。彼らは20~30人で、血縁関係をベースにした集団を形成し、川筋を移動しながら生活している。生業活動は、イノシシ、シカ、サルなどの弓矢や散弾銃による狩猟、モリと水中メガネを用いた川魚の漁撈、野生食用植物、ハチミツ、籐、樹液、そして薪の採集、陸稲、トウモロコシ、イモ、タバコ、野菜などの焼畑耕作からなり、さらに自分たちの生産物と農耕民の作物との交換、農作業への労働力の提供によって農作物、生活雑貨などを入手する。このように彼らは幅広い経済活動によって生計を維持している。

狩猟採集経済は自然の資源に依存しているため、その諸特性は生業戦略に大きく影響する。先に述べたように、熱帯多雨林では動植物の種が多様であるにもかかわらず、食料や道具の原材料として利用可能な特定の種の分布は非常に疎である。草食獣も群棲せず、個別に生息している。これらを利用する際には、特定の資源間の移動とそれに対応する道具の携帯が必要となる。また極相林(一つの生態系として安定性を達成した森林)の栄養循環のメカニズム上、膨大な生物量と成長の速さに対して、人間が利用できる果実、種子や根茎類は非常に少ない。樹木の種子や果実はあっても高い樹冠の上である。人間にとってより利用しやすい草本類は樹冠によって日差しや雨が遮られない川辺などの特定の場所にしか生えていない。このため植物から得られる炭水化物の欠乏は、多雨林を生活の場としている狩猟採集民にとっては死活問題である。

一方モンスーン林では、乾期と雨期の気候の違いによる植物生産の季節性が、生業戦略を大きく左右する。資源分布は多雨林にくらべて密になるが、雨期には一斉に再生産が行なわれる。その一方で乾期の間は資源が欠乏する。そのため熱帯モンスーン林にすむ狩猟採集民は、年間を通じて食料が確保できるようにスケジュールを組み、さまざまな微小環境をキメ細かく利用する必要がある。

東南アジアの狩猟採集民は熱帯の生態系の一部として生活してきたが、近代以降は森林伐採や低地民の入植などによって生活圏が脅かされている。これに対して狩猟採集民は山で取れる籐や薪の市場での販売、あるいは農業労働者としての現金収入などによって生業の幅を広げることによって対応している。

## 焼畑耕作

焼畑耕作は、森を焼いて開地とし、その灰を養分として作物を育て、数年間焼畑を続けて土地が痩せると移動し、他の場所に畑を開くという耕作方法である。水稲耕作のように集約的とは言えない。したがって生産性も低い。しかし焼畑は熱帯の自然と人間の技術との間にある生態学上のバランスをよく保って成立している。日本ではほとんど見られなくなったが、東南アジアでは山間部や低湿地を中心に広く行なわれている生業形態である。現在大陸部では陸稲(オカボ)やシコクビエ、アワ、ヒエなどの雑穀類を、島嶼部では陸稲、バナナ、そしてタロ、ヤムなどのイモ類が栽培されている。

焼畑はまず森を伐採して数カ月間乾燥させることから始まる。そして雨が降り出す前に火入れをする。火入れの後には灰が地面を覆い、焼け残った倒木や切り株がころがっており、はじめて目にするとその粗放さに唖然とさせられる。作物の成長にかかわるリンやカリウムなどの栄養分は、森を焼いた灰の中に含まれており、焼かれていない森の土壤に含まれている量の約2倍が得られる。またチッソは土壌中の有機物に取り込まれているが、そのままのかたちでは植物は吸収できない。しかし火入れの際の高温によって植物が吸収可能なアンモニウム・イオンに変わる。これは焼畑の焼土効果と呼ばれている。その後雨で地面が湿ると掘棒で穴をあけ、種子やたねイモを植える。鍬や鋤は使わず、不起耕が原則である。焼畑の不起耕栽培方式は風雨による灰や土壌の侵食を最低限におさえるはたらきをもっている。また、これによって樹木の切り株も掘り起こされずに残り、休閑期に入ると、残った切り株から新しい芽が出る。こうして二次林の再生が可能になるという効果も持っている。

その後は作物の成長を待つが、焼畑は自然の森の状態に近いために雑草の進入も多い。雑草の進入を許せばそれだけ作物の発育は妨げられる。そこで収穫期までには数回の除草が必要である。収穫後2、3年は作付けが続けられるが、その後は耕地を移動する。移動の主要因は雑草の繁茂である。耕地の休閑期間は10年から15年が一般的である。この作付けと休閑のサイクルは焼畑耕作の大きな特徴で、安定した生産量を持続させるには、短い作付け期間と長い休閑期間によって十分な二次林の再生を待つ必要がある。

伝統的焼畑耕作による人口支持力は10~20人言われているが、人口が増加している現在では可耕地も狭まり、生産性を高めるには作付け/休閑のサイクルを短くするしかない。しかしこのサイクルを短縮させると地味は低下し、二次林の十分な再生は妨げられ、耕作に必要な養分が得られなくなる。生産量は自ずと下降し、さらに集約化を進めると森は半永久的に再生できなくなってしまう。このように、焼畑耕作は元来、集約化には耐えられない農耕のシステムなのである。

現在、焼畑による熱帯多雨林の破壊が世界的に問題となっているが、それは焼畑耕作の長所と短所を十分に理解しない入植者によって焼畑や放牧が続けられていることによるものである。しかし人口増加率は簡単には抑えることができないので、現在、増加する人口を養いようような新たな耕作方法の研究が急がれている。

## 水稲耕作

水稲耕作は焼畑よりも集約的な、生産性の高い農耕システムである。しかしそれには、水田をつくるための土木技術と、それに伴うより収量の多い稲の品種、労働力、そして多くの人間を組織する社会構造を必要とする。水稲耕作は、本来湿地に自生する植物である稲を栽培種として馴化すると同時に、湿地の擬似環境を水田という形で作り出すことによって、湿地以外の環境下でも栽培することを可能にした耕作方法である。

水田は焼畑と違って、何年も同じ場所で連作することが可能である。それは、田に畦を作って3カ月から半年の間、つねに水を張っている状態が、作物に必要な栄養を供給していることによるものである。灌漑用水中にはカルシウムやカリ等の養分が溶け込んでいる。また冠水した嫌気性の環境下では、チッソやリン酸が植物にとってより利用しやすい状態に分解される。水田の別の利点は、土地が均平化され畦に囲まれているため、雨による土壌侵食を防ぎ、さらにその雨を捕捉できるという点にある。

東南アジアの水稲耕作は現在、山地部から平原、デルタ、そして低湿地まで広く分布している。これら水田地帯で生産される米は東南アジアの全穀物生産量の約90%を占めている。また東南アジアは、稲作の原郷といわれるアッサム、雲南地域を大陸部北部に控え、イネの品種も陸稲、水稲、インディカ、ジャボニカ、ジャパニカ(ブル)、ウルチ、モチ、浮稲と非常に多様である。

地域的な自然条件の違い、歴史的経過の違いによって、水稲耕作の基本的な技術要素である水利、耕耘、栽植、収穫、脱穀の形態、そして道具や稲の品種にも、幅が見られる。この概略を表1-1に示した。山地部では支谷、盆地の小規模な河川に井堰をかけて灌漑を行っている。水不足に悩む平原部では、雨や溜池の水を利用する天水田に直接籾を散播している。デルタでは8月の雨期最盛期に起こる洪水の水を利用する。洪水で水深は数メートルに達するため、稲の品種も水没しない長穂の浮稲である。マングローブの沼地が広がる島嶼部低湿地では、水路を川まで掘って強酸性の黒い水を抜き、満潮時に川の水が流入することを利用した潮汐灌漑が行なわれている。ジャワ、スラウェシ、フィリピンにかけての島嶼東部では、井堰や湧水を利用した灌漑が行なわれている。ジャワを除いたこの地域では、田拵えは湛水した田に水牛を追い込んで踏ませる蹄耕である。山間の斜面を利用した棚田(ライス・テラス)の発達もこの地域の特徴である。

またこれらの技術は歴史的な経過をたどってきたものでもある。平原、デルタの犁耕、散播、鎌、そして牛に踏ませて行なう牛蹄脱穀はインドからの影響と考えられる。一方、島嶼部低湿地の不起耕、掘り棒、穂摘みなどの技術は焼畑技術の残存をうかがわせる。さらにスラウェシ、フィリピンなど島嶼部東部に見られる蹄耕、苗代から本田への移植、そして穂摘みは東南アジア独自の要素と考えられる。

東南アジアの自然と生業について、資源利用と技術の観点から概観してきた。熱帯という自然環境は豊かそうな外観をしているが、それを人間が利用することは容易ではない。しかし人々はこの自然に対して、さまざまな技術で対処している。しかもそこには人類史上最も古い狩猟採集から、より新しい技術と社会を形成している水稲耕作まで、レベルの異なる技術が同時に存在している。この古い技術の保存、累積と新たな技術との共存によって、東南アジア世界の多様性はいっそう助長されている。

## 文献目録

小川英文

1986 「東南アジアの初期農耕論をめぐって」、スチュアート ヘンリ編『世界の農耕起源』:175-224、雄山閣出版

1996 「狩猟採集民ネグリの考古学」、スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在』:183-222、言叢社

吉良竜夫

- 1988 「シリーズ：東南アジアの植生と熱帯農業」『学術月報』Vol. 39, No. 8- Vol.41, No.12, 日本学術振興会  
久馬剛
- 1984 「焼畑農業の生態学」『サイエンス』14-4.  
佐々木高明
- 1970 『熱帯の焼畑』古今書院  
高谷好一
- 1985 『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房  
1986a 「東南アジア大陸部の稲作」、渡部忠世『稲のアジア史』2、小学館  
1986b 「東南アジアの生態史的枠組」、石井米雄編『東南アジア世界の構造と変容』、創文社  
中尾佐助
- 1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店  
古川久雄
- 1987 「熱帯島嶼部の稲作文化」、渡部忠世編『稲のアジア史』2、小学館  
渡部忠世（編）
- 1987 『稲のアジア史』1-3、小学館  
1983 『アジア稲作の系譜』、法政大学出版局  
カール・ハッター（西村正雄訳）
- 1986 「東南アジアにおける農耕の生態系と進化」、スチュアート・ヘンリ編『世界の農耕起源』:137-174、雄山閣出版



## 東南アジアと日本の貝塚の比較

The Comparison between Southeast Asian and Japanese Shell Midden Sites.

小川英文 Ogawa, Hidefumi

### 東南アジアと日本の貝塚の類似と相違

東南アジアと日本の貝塚を比較するとき、以下ではまず貝塚の立地、規模、貝種、共伴遺物と年代などを視点として、その類似と相違を比較してみたい。

東南アジアの貝塚を概観するためには、東南アジア考古学会編の『東南アジア・南中国貝塚遺跡データ集』(1994)が、全体を見渡す大まかな情報を与えてくれる。東南アジアで貝塚の分布密度が高い地域を遺跡地図で見てみる。東南アジア大陸部では、ベトナムの北部マ川デルタと中部海岸地帯、タイはシャム湾に面したチャオプラヤデルタと内陸の東北部盆地、そしてマレー半島ではマラッカ海峡側とその対岸のスマトラ北東部海岸地域にみられる。東南アジア島嶼部では、スラウェシ島、ティモール島、ボルネオ島の内陸部、そしてフィリピン全域に分布している(図1)。

この貝塚分布密度の低さを見て、読者は縄文の貝塚と比較することが可能なのかという疑問を抱くかもしれない。たしかに各国の遺跡調査の密度や貝を動物骨や植物遺体とともに自然遺物として認識し、文化層中の共伴遺物として取り上げているかという問題点があり、われわれが貝塚遺跡として認定する遺跡数はこれよりも増えるものと考えられる。しかしながら絶対数の少ない完新世前半の遺跡や、海進とその後の沖積作用で埋没してしまって、その存在が知られていない遺跡などのような考古学的状況については、相対的に日本の状況と同じと考えられるため(遺跡の絶対数は別として)現時点で大まかな比較を行うための遺跡情報量としては許容できるものと考えたい。実際、完新世はじめの海進によって陸地の二分の一が水没したと考えられる東南アジア地域では、南シナ海沿岸部の海底に多くの遺跡が水没している可能性が高い。以上のような制約があることを念頭に入れた上で、東南アジアの貝塚遺跡の検討をはじめたい。まずその分布と立地を見てみると、東南アジアの貝塚遺跡は内陸の石灰岩洞穴や河川沿いの微高地、そして海岸付近の石灰岩洞穴やデルタの微高地、海浜砂丘とその後背微高地に分けることができる。

### 内陸貝塚

#### 内陸洞穴貝塚

内陸の洞穴内貝塚には、大陸部では北部ベトナムの紅河デルタの南側に位置するホアビン山地(ホアビン洞穴群)および北部(スピリット洞穴)・西部タイ(サイヨク岩陰、バンカオ洞穴群)の石灰岩山地、島嶼部では、フィリピン諸島のルソン島北東部(ペニャブランカ洞穴群)とバナイ島内陸部、ボルネオ島北東部(マダイ洞穴群)と西部(ニア洞穴群)、そしてスラウェシ島南部(ウルリアン洞穴群)がある。大陸部の洞穴貝塚はそのほとんどが完新世前半以前のいわゆるホアビニアン(Hoabinhian)文化期の遺跡で、遺物としては土器を伴わず、石器群を出土する。ただしタイ西部の洞穴群は、ホアビニアンから新石器時代前半(BP4000年以前)まで継続し利用されている。一方、島嶼部の洞穴貝塚は年代幅が広く、C14年代によると更新世末から数百年前のものまでみられる。しかし大陸部・島嶼部ともに共通する点は、貝種がいずれも淡水産貝を主体としている点である。内陸という海から離れた環境にあって、海進の影響を受けることなく、洞穴近郊の河川で淡水産の巻貝・二枚貝を採集して食料レパートリーの一部としていたものと考えられる。ホアビン洞穴群のソムチャイ(Xom Trai)洞穴の貝層は堆積密度の高さで知られている。またスラウェシ島のリアンブルン2(Leang Burung II)洞穴では更新世の25000年前にタニシなどの淡水産貝を利用していたことが報告されている。

#### 内陸開地貝塚

一方、内陸の東北タイでは新石器から金属器時代にわたる開地貝塚が知られている。それらのなかでバンチェン(Bang Chian)遺跡は、新石器時代から鉄器時代まで継続して居住されていた遺跡である。この遺跡の貝層は土器を出土する最下層に集中し、淡水産貝によって構成されている。遺跡は川に面した低位段丘上に立地し、付近の川で貝とともに魚、川エビ、カエル、ミズガメなどを採捕していたものと考えられる。バンチェン遺跡をはじめとする当該地域で発掘調査されたノンノクター(Non Nok Tha)やバンナディ(Ban Na Di)遺跡などは、東北タイにおける新石器時代のはじまりとその後の青銅器、鉄器時代への発展過程についての活発な議論に対して、これまで多くの資料を提供してきた。バンチェン遺跡で

は最下層のBP4000年頃には、貝をはじめとする淡水産動物とともに、ネコ科やネズミなどの小動物、そしてシカ、イノシシ、スイギュウ、ウシなどの陸上動物などの骨も出土している。しかしパンチェン遺跡の後半期にあたる鉄器時代になると、河川に生息する動物や陸上の小動物の利用は相対的に減少し、陸上大型獣の比率が増えるようになる(小川 1986: 図 2)。このような自然遺物の変化を生業パターンの変化としてとらえ、狩猟・採集・漁労から徐々に焼畑、そして水田耕作へと生業の主体を変化させていったプロセスとして考えることも可能である。しかしパンチェン遺跡の調査報告が出た当初は、古いC14年代のみを根拠として、東南アジア農耕文化の初源、青銅器文明の初源などと取り沙汰されていたが、80年代以降の調査件数の増大や大陸部の新石器時代遺跡の相互比較研究の進展により、その年代は下方修正されている。農耕文化の初源を示すかどうかの問題は北部ベトナムやタイのチャオプラヤデルタの新石器時代遺跡との比較が必要であるが、パンチェン遺跡の長期にわたる居住と文化・自然遺物の資料は、東北タイにおける生業の変化、農耕社会への発展過程を考える上で重要である。フィリピン、ルソン島北東部のラロ貝塚群については本号の田中氏の論考に委ねる。

### 海岸付近の貝塚遺跡

つぎに海岸付近の貝塚遺跡に目を転じると、その立地は内陸の貝塚遺跡よりも多様で、石灰岩台地やデルタの微高地、海浜砂丘とその後背微高地に貝塚遺跡を見出すことができる。

#### 海岸洞穴貝塚

海岸線付近の洞穴貝塚遺跡はタイ南部、インドネシアのティモール島北東部、フィリピンのパラワン島のタボン洞穴群やスルー諸島に見られる。これらの洞穴はいずれも海に面した石灰岩台地に立地するもので、貝種は鹹水産・汽水産貝を主体としている。

タイ南部、マレー半島のくびれ部分の西側に位置するパンガ湾(Phang Nga)には石灰岩洞穴群にホアピニアン文化期以降の居住が認められ、貝層形成が見られる。この貝層は洞穴付近に広がるマングローブ林で採集される汽水産貝を主体としている。C14年代は得られていないが、調査にあたったタイ芸術局の見解では、ホアピニアンから新石器段階にいたる遺跡群とされている。さらにこの海岸線を南に下ると、同様の立地を示す洞穴遺跡が調査されている。ランロンリエン(Lang Rongrien)岩陰、モーキエウ(Moh Khieu)洞穴も一万年以前のホアピニアン文化期以降、新石器時代まで居住が続く遺跡で、貝種も汽水産、鹹水産貝を主体としている。

インドネシア、ティモール島北東部石灰岩洞穴群ではBP8000年からBP1000年までの長期にわたる文化層をもつ貝塚遺跡が報告されている。貝種は汽水産・鹹水産を主体としている。BP5000年の文化層からは土器とともに有舌ポイント、貝斧、貝製釣針、貝製ビーズなどの人工遺物、そしてアワ、ヒョウタン、ココナッツなどの植物遺体の検出も報告されている。

フィリピン、パラワン島の南シナ海側海岸線に面した石灰岩台地に立地するタボン洞穴群は更新世末から金属器時代にかけて居住が続けられ、最近まで墓地として利用されてきた遺跡群である。その中のタボン洞穴はBP30000年から完新世はじめのBP9000年までの剥片石器群を主体とする文化層が確認されて、BP20000年の年代をもつ、いわゆるタボンマンの頭骨もこの洞穴から出土している。貝が多く出土するのは上層で、BP9000年頃の文化層である。これらの貝は淡水産で、鹹水産のものは含まれていない。現在洞穴の開口部は海に面しているにもかかわらず、当時は海岸からかなり離れていたものと予測される。60年代末からタボン洞穴の発掘を行っていた青柳洋治(上智大学教授)によると、当時の海岸線がタボン洞穴からどのくらい離れていたかを計測するために、ロープを使って水深100mの地点を計測したという。その結果は洞穴から16kmの距離があったとのことである。完新世はじめのスンダ陸棚の広がりや想像させるものとして興味深い。一方、タボン洞穴群のなかでも、完新世に入ってから居住を示す他の洞穴貝塚では、鹹水産の貝を主体としている。グリ(Guri)、デュヨン(Duyong)洞穴からは完新世前半の剥片石器群やBP4600年のC14年代をもち貝斧や貝製耳飾を副葬された人骨が報告されている。貝層の主体は最下層の剥片石器群を出土する層にある。両洞穴からはその後の鉄器時代包含層からは、中・南部ベトナムとの交流を示唆するネフライト製梨状耳飾やソケット状の青銅斧の陶製鋳型が出土している。

タボン洞穴群のあるパラワン島から南下し、ボルネオ北東岸に接する、スルー海のサンガサンガ島のバロボック岩陰も海に面し、鹹水産の貝で構成された貝層をもつ。ここではBP8000からBP5000までの上下2つの文化層が検出され、剥片石器、土器、貝斧などが報告されている。また60年代の調査では、ソケット状青銅斧が表面採集されている。

つぎにデルタに立地する貝塚遺跡はベトナム北部マ川デルタ、タイのチャオプラヤデルタに見られる。両デルタの開地

貝塚群は、それぞれの地域の実進・海退や農耕の開始を考える上で重要な遺跡群である。

### デルタ開地貝塚

ベトナム北部マ川デルタの小河川に接した微高地の縁辺に位置するダブート貝塚(Da But)は、貝層深度 5m、貝層範囲 1400 m<sup>2</sup>が確認されている巨大貝塚遺跡である。同時にここからは BP6400 年の年代をもつ土器が出土している。この貝塚からやや北の山地に立地するホアビニアン文化期の洞穴貝塚遺跡群については上で紹介したが、そこからダブート貝塚のある開地への進出は、新石器段階への移行、新たな生業としての農耕を想像させる。この遺跡は現在海岸線から 20km ほど距離があるが、貝層は汽水産・鹹水産の貝で構成されており、当時海岸線がこの付近まで及んでいたことを示唆している。土器とともに局部磨製石斧やスイギュウ、ウシなどの動物骨の出土は、当該地域のホアビニアンから新石器段階への移行を示す重要な資料と考えられている。

タイのチャオプラヤデルタ東部に位置するコックパノムディ遺跡(Khok Phanom Di)は、BP4000 年頃から約 500 年間にわたる、墓域を含む居住を示す遺跡である。遺跡形成当初は海岸線に近く、デルタ支流の川の河口付近に位置していた。その当時、貝種は汽水産貝で構成されていたが、その後の海退により徐々に淡水産貝種が主体となっていく。魚骨の出土状況も貝と同様に海退の過程を物語っている。海岸近くの河口に広がるマングローブ林に生息する動物種は、海岸線とともに後退し、淡水に生息する動物種に替わっていく。人工遺物では、土器や方角石斧・有肩石斧とともに、墓の副葬品として貝製・石製の腕輪も出土している。また骨製の銃頭や釣針も見られる。コックパノムディ遺跡はタイにおける新石器時代の開始とその後の発展について考えるとき、上述の東部のバンチェン、西部サイヨクとバンカオの両洞穴群とともに、新石器段階の人工遺物の比較、生業変化を示す自然遺物の検討が相互に行われることが、今後重要性を増すものと考えられる。

### 海岸開地貝塚

海岸低地に立地する開地貝塚の代表的な遺跡として、ベトナム北部、マラッカ海峡両岸のスマトラ島北東部、マレー半島西岸部、フィリピン、ミンダナオ島北東部に分布している貝塚を紹介したい。

ベトナム北部紅河デルタ北部のハロン湾に浮かぶカットバ島(Cat Ba)のカイベオ遺跡は前面に岩礁性の海岸が広がる湾内の砂丘上に位置する。貝の出土は少ないが、魚骨が大量に出土しており、海に依存した生業の様子を如実に示している。文化層は上下 2 層に別れ、下層が BP5600 年、上層が BP3800 年の C14 年代が得られている。下層からは量的に少ないが土器が出土し、局部磨製石斧が共伴する。上層では土器の増加し、方角石斧、有肩石斧、有肩有段石斧、石製腕輪等が出土する。新石器段階の遺物を有するが、遺跡の立地と自然遺物の出土傾向は、海に依存した生業を示している。

カイベオ遺跡から海岸線を南に下ったゲアン省(Nghe An)北部の海岸に位置するクインバン遺跡群(Quynh Van)は、海岸低湿地に面した微高地に立地している貝塚群である。20 ヶ所前後の遺跡が確認されているが、発掘調査の結果得られた C14 年代は、この貝塚が BP5000 から BP4000 年頃に形成されたことを示している。貝層は汽水・鹹水産貝によって構成されており、貝層範囲 100m、深度 6m に達する純貝層も報告されている巨大貝塚遺跡である。しかしクインバン貝塚群はほとんどの貝が口を閉じた状態で堆積しているため、自然形成されたとも言われている。筆者が偶然立ち寄った、海岸線から 6km ほど内陸に位置する国道 1 号線の道路の下に堆積する貝層では、4m 以上の二枚貝、巻貝数種で構成された純貝層が厚く堆積していたが、人工遺物は見られなかった。しかし純貝層の中に打製の礫石器や土器等と共に、破碎貝層、動物骨や炭化物を含む層が見られると報告されている(西村 1993:29)。この貝塚群が自然か人工的に形成されたものか、今後大きな課題として残されている。

マラッカ海峡の両岸、スマトラ島北東岸と対岸のマレー半島南西岸のムダ川(Muda)河岸には、貝層深度 5m 以上にも及ぶ開地貝塚群の存在が知られている。これらの貝塚遺跡はいずれも現在、海岸線から 10 キロほど離れた、標高数 m の河岸に位置しており、規模は径 15 ~ 30m で、貝層深度は 4 ~ 7m に達する。貝塚の形成年代は、スマトラ島側ではホアビニアン期に限られるが、マレー半島側ではホアビニアン期から新石器時代にわたる。ホアビニアン期のスマトラリスという片面加工の礫石器の名称は、スマトラ島側の貝塚遺跡に由来している。これらの貝塚群の中で一点のみ C14 年代がスマトラ島側で得られており、BP8000 年の年代を示している。貝塚の貝種はハマグリを主体とした汽水・鹹水産貝で構成されている。人工遺物はスマトラ島側ではホアビニアン期の石器群、マレー半島側ではホアビニアン期の石器に加えて、土器の出土も見られる。また両者とも埋葬人骨が出土している。スマトラ島側のピンジャイ タミアン貝塚(Bindjai-Tamiang)では剥離面にカキや藻が付着した石器が検出されており、このことから貝塚形成後に貝塚は海進によっていったん水没したものと考えられており、マラッカ海峡の海水準変動曲線に準拠した最大海水面の時期である BP6000 年以前にこの貝塚は形

成されたものと推定されている(川名 1993:15)。またこれらの貝塚の利用形態については、ベースキャンプとしての集落が後背河岸段丘に存在し、貝採集を行うためのキャンプという機能を貝塚遺跡がもっていたという指摘もある(ibid:20)。このような東南アジアの貝塚形成の諸問題を解決するために、再調査が行われることが期待される。

以上、東南アジアの貝塚遺跡をその立地条件に依拠して概観してきた。縄文時代の貝塚遺跡をよく知る読者に対して、東南アジアと縄文貝塚を比較するのは筆者の任ではないので、特記すべき点をいくつか挙げるとすると、まず内陸の洞穴および開地貝塚に淡水産の巨大貝塚が見られる点、マラッカ海峡両岸で見たように巨大貝塚が最大海進以前に形成されている点、さらに新石器段階に入っても海岸付近では貝塚が形成され続ける点などが指摘できる。最後の点については、農耕と貝採集が生業活動全体の中でどのように関係づけられていたのか、今後の興味ある課題である。また日本の貝塚調査で行われる貝層形成過程復元のための調査方法などは、現在、東南アジアの貝塚調査で定式化していないという現状では、読者の関心に十分応える比較材料も提示できないが、現在でも貝採集が行われているところがあり、過去における貝塚形成を考える上で興味深い示唆を得られるという点は東南アジアの利点でもある。そこで以下では筆者が調査したラオ貝塚群カタヤワン貝塚の貝採集活動を簡単に紹介し、結びにかきたい。

カタヤワン貝塚は100m×最大500m、深度最大2mの巨大な規模をもち、貝塚の上には現在の村が営まれている。しかも貝採集活動が現在でも継続されており、ほぼ100世帯によってカガヤン河に生息する淡水産二枚貝3種が採集されている。貝採集の代表的な方法は、図3にあるような三角形の籠に柄のついたもの(タク)を河底に沈め、リギックと呼ばれる竹で編んだ戸板をボートの両舷に取り付け、川の流れを受けて、その力でタクを引き、河底を浚うという方法である(図2)。この方法で採集される貝種は3種であるが、現地でカビビと呼ばれる二枚貝が集中的に採集される傾向にある。カガヤン河の河口から20kmの地点にあたるこの村では、潮位の変化の影響を受け、それに採集活動も左右されている。干潮時は河の流れによってタクを引き、満潮時には潮の逆流の力を利用する。貝の平均収量は一人一日平均3kgであるが、これは貝殻ごとすぐに女の仲買人に売る。仲買人は次の日の朝、村から100km以内のさまざまな市場へ売りに行く。このため現在では貝塚に貝殻が供給されていない(小川1997)。カタヤワン貝塚の形成期間は現在のところ1000年間ほどと考えているが、その貝のほとんどはカビビで構成されている。発掘結果では1.2立米に13万固体のカビビを確認した。発掘個所の混貝率は90%近い(青柳他1988)。貝殻がこれほどの貝塚を形成するには採集者の自家消費をはるかに上回る収量を予測できるが、貝を剥き身に加工して干貝にして交易を行っていたことが想定される。このような問題は日本の貝塚で最近報告されている三河湾東岸の大西、水神貝塚や東京湾の中里貝塚のような巨大貝塚との比較検討が課題となる。

## 文献目録

青柳洋治・M.L.アギレーラ・小川英文・田中和彦

1988 「ラオ貝塚群の発掘」『上智アジア学』6:63-104.

川名広文

1993 「マラッカ海峡沿岸の先史貝塚」『東南アジア考古学会会報』13:10-24.

中島広顕・保阪太一

1996 「東京都北区中里貝塚」『日本考古学年報』49:489-493.

西村昌也

1993 「ヴェトナム・タイの貝塚遺跡」『東南アジア考古学会会報』13:25-50.

小川英文

1986 「アジアの初期農耕論をめぐって」、スチュアート ヘンリ編『世界の農耕起源』:175-223.

1996 「貝塚洪水伝説-フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」『東南アジア考古学』17:119-166.

東南アジア考古学会編

1994 『東南アジア・南中国貝塚遺跡データ集』

豊橋市教育委員会

1994 『大西貝塚』豊橋市埋蔵文化財調査報告第19集.

1998 『水神貝塚(第2貝塚)』豊橋市埋蔵文化財報告書第44集.

『交流の考古学』総論:  
「交流考古学の可能性 - 考古学の表象責任をめぐって」  
Introduction - Perspectives in Archaeology of Interaction.  
- on the political problems of representation of the past -

小川英文 Ogawa, Hidefumi

目次

はじめに

1. 「交流」の考古学とグローバリゼーション
  2. 「交流」の考古学と本質主義
  3. 「交流」の考古学と「カラハリ論争」
  4. 「交流」の考古学と政治的ジレンマ
- おわりに

はじめに

考古学における「交流」の問題を考えるにあたって、ここでは日本の考古学自体が文化を研究する隣接諸分野との「交流」を果たしていない現状を問題として提示する。さらに隣接する文化研究諸分野との「交流」をとらえて、考古学の新たな研究分野を拓く可能性を提示する。現在における「交流」を契機として、考古学にどのような新たな可能性を提示することができるかという問題にアプローチすることによって、本書の総論にかきたい。

80年代以降の冷戦構造の崩壊や地球規模の環境破壊、貧困をめぐって政治・経済・文化・環境まで多岐にわたる問題を包括する南北問題などの惹起によって、現実世界の大きな変貌とそれに対応する転換・再編の動きは、人びとの世界観を大きく揺り動かし、それまで自然なものとして受け入れてきた市民、国民、教育・教養、健康、科学性、国家、イデオロギーなどの制度や価値観、権力関係などの近代の所産に揺らぎを生じさせてきた。こうした転換は当然ながら学問諸分野にも大きな動揺を与え、それまで支配的であったパラダイムの転換が迫られている。こうした転換の時代のなかで、近代の知の機制を批判する立場としてポスト構造主義やカルチュラル・スタディーズが注目されるようになった。同時にこうした批判的立場と交錯するかたちで、そして植民地の抑圧経験をとおして登場したオリエンタリズム批判やポストコロニアル批判と共存するかたちで、サバルタン研究やディアスポラなどの研究視角も生まれている。このことは今日の時代的転換を端的に示すグローバリゼーションの浸透とともに、現実世界の変化を反映するかたちで学問の再編成が行われていることを示している。しかし日本の考古学はこうした時代の転換に連動した隣接学問分野の営みを自らに内在化し、考古学自体のあり方の再検討・再編成を行っているとはいえない難しい状態にある。

隣接諸分野では近代の再検討の過程で、研究者と研究対象の関係がけっして他の影響を受けない透明な関係ではありえず、世界システムや国民国家などの近代の機制によって規定された経済的・政治的な関係を内包する権力関係の影響を受けることを明らかにしてきた。考古学が過去をめぐって歴史を再構成する行為は、これまで無批判に「非政治的」なものであり、われわれもそのことを自然なものとして受け入れてきた。しかし転換の時代の学問が生成する成果は、こうした「非政治性」の自然化自体に批判的検討を加えるものである。考古学も実は現在の社会の問題を過去に投影しており、そうして生成された過去表象が現在のわれわれの社会に受け入れられることによって一定の機能を果たし、その結果、イデオロギーや政治のせめぎあう磁場を生成してきたことを明らかにする必要性に迫られている。

考古学という過去における人間のあらゆる営みの再構成にかかわる学問が、なぜ、そしてどのように現在の世界の変化と関係があるのか。以下では現在の「交流」を契機として、日本の考古学では議論されることのない、分断されている過去と現在の関係の回復が拓く批判的視座の可能性を、文化に関する隣接諸分野への浸透のなかで考える。その過程で、学問のあり方自体が現在、「誰が、誰のために、誰に向けて」語るのかという、研究者のまなざしと行為主体としての倫理性が問われており、過去の表象に対しての説明責任(アカウンタビリティ)が問われていることを提示する。

1. 「交流」の考古学とグローバリゼーション

歴史学や考古学における過去の再構成のあり方が、現在のわれわれを取り巻く社会の現状や問題点を反映したものであることは、社会構築論(構成主義)の立場では当然のこととして受け取られている。考古学者が遺跡に残された過去の残滓

から当時の人びとの生活を復元する際の再構成のあり方は、その考古学者が生きる世界が現在直面している問題に左右されていると考えることができる。そして考古学における問題設定自体も、われわれを取り巻く世界の状況の変化に応じて新たに改編されていく。たとえば地球環境の危機が叫ばれるようになった70年代以降、先史狩猟採集社会のイメージは、自然環境に対する知識を豊富にもち、決して自然を傷つけない、環境と調和した生き方を選択した社会として描かれ、農耕化・文明化の過程をたどって今日の都市文明・情報化社会へと至るわれわれの社会とは対極的な位置にある社会として表象されてきた。学問的世界におけるパラダイムの変革は、人びとを取り巻く世界の動揺や時代の転換を目の当たりにして、それまで自然で揺ぎないものと考えてきたわれわれ自身の世界観に対する懐疑から始まる。80年代以降の世界の変化に応じて、人間の文化に関するさまざまな研究分野はパラダイム転換の時期を迎えている。このような時代や世界観の大きな転換への契機となったものが、「交流」のあり方の変化であった。

時代の変革や転換を否応なく意識せざるをえない時期にあたって、同時に考古学という学問のあり方にも懐疑の眼を向けなくてはならない時期にあたって、考古学における「交流」の問題を論じる際にまず考慮しなくてはならないのは、80年代後半から現実世界を大きく揺さぶってきたグローバリゼーションの浸透である。情報化や輸送手段の飛躍的な発展は、国境を越えた経済的・政治的、そして文化的・社会的な交流と相互依存をそれまで以上に拡大してきた。世界各地が瞬時に連動し反応する金融市場、国境を越えた巨大多国籍企業の経済活動、個人のレベルで世界を結ぶことを可能にしたインターネットがもたらす高度情報化社会、大型航空機による人や物資の長距離大量輸送など、近年の科学技術の発達とともに、人・物・情報が国境を越えて世界中のあらゆる場所に瞬時にもたらされることにより、われわれの経験世界は大きく変貌した。しかしグローバリゼーションがもたらした経験世界の変化は必ずしも明るい未来を約束するものばかりではない。酸性雨やオゾン層の破壊、放射性物質やダイオキシンなどの産業廃棄物によって引き起こされる地球規模の環境問題、戦争や貧困が引き起こした大量の難民や移民(外国人労働者)問題、急激な人口増加と巨大化する第三世界の都市問題、エイズなど地球規模で人類の存続を脅かす伝染病の出現など、国境を越えて解決に取り組みなくてはならない深刻な問題も新たに立ち起こっている。グローバリゼーションはわれわれの経験世界を大きく変えるとともに、未来への漠然とした不安をももたらしている。

現代の「交流」はグローバリゼーションの過程で、さまざまな方面に変化の連鎖を誘発している。通信輸送手段の発達によって人や情報が世界のすみずみにまで行き渡り、国境を越えた「交流」が飛躍的に拡大したことによって、地域世界の日常生活レベルにおける習慣や生活スタイル自体にも大きな変化をもたらした。西欧的な生活スタイルという「想像上」のスタンダードは、地域レベルでの衣・食・住のあり方を一元化、均質化する方向へと導いている。これまで共通の経験の基盤をもたないと考えていた、地球の「裏側」で生活する人びとが自分と同じ問題を抱え、互いに影響し合っているという認識が急速に広がってきている。このように世界の距離の短縮、経験や問題の共有がグローバリゼーションの認識の根底にある。

しかしながら世界の一元化や均質化は、グローバリゼーションという用語で表現される近年の諸現象によってはじめて引き起こされたものではなく、元来、近代という時代の所産であった。西欧によって構築された世界システムの浸透は、世界各地で地域的価値観や規範、制度を解体・改編し、国民国家と植民地へと空間を分断して行った。境界線が明確に策定された個々の国民国家のなかで、国民経済や国民文化はそれぞれの国家領域をひとつの単位とするように創造され、他の国民国家との差異や「独自性」「固有性」を強調するようになる。こうした新たな単位への改編は国民国家の誕生とともに世界中で進行し、同時に自国の「独自性」を互いに主張しあうようになった。しかし国家形体の同質性と国家ごとに強調される差異性といういっけん相矛盾する国民国家の性質も、世界システムによってもたらされたものであり、啓蒙主義や合理主義などの西欧近代思想における普遍性の理念の基で、西欧スタンダードへの一元化・均質化を前提としていたのである。世界システムと国民国家は普遍性と特殊性とを奇妙にも逆説的に接合するものであった。

にもかかわらず、すでに近代において世界システムの浸透とともに拡大していった世界の一元化・均質化が、80年代以降グローバリゼーションという用語でことさら強調されるのは、人・物・情報の移動・伝達手段の発達のみならず、国家の領域を越えた地球規模での問題群の深刻化や冷戦構造崩壊後の国民国家を基盤とする近代世界秩序の動揺が、さまざまな分野に大きな転換をもたらしたという共通の認識を背景としているからである。

## 2. 「交流」の考古学と本質主義

考古学に隣接する文化に関わる研究分野では、こうした転換に敏感に対応し、自らの研究姿勢や研究者と研究対象との

関係性を問いなおす作業を開始しているのが現状である。しかし日本の考古学は、グローバリゼーション以降の時代の転換に対応した、ひとつの学問分野としての取り組みを開始しているとはいえない。世界システムと国民国家という、それまで自然なもの、揺るぎないものと考えられてきた近代の諸機制や価値観が、グローバリゼーションや交流を契機として動揺をきたし始めたことによって、それら諸機制のもとで機能してきた、西欧世界で創出された規範や制度、すなわち啓蒙主義、合理主義、進歩主義、普遍主義、民主主義、人権論などの近代を支えてきた権威や規範にも疑念の眼が向けられるようになった。ここに現実の転換・変化が近代世界の枠組み自体の再検討を促した契機を求めることができる。こうした再検討の動きは社会科学全域に及び、哲学・思想史、文学、歴史学、文化人類学、社会学など文化を研究する諸分野にわたると同時に、諸分野を横断するさまざまな分析諸概念(オリエンタリズム批判、ジェンダー、サバルタン、ディアスポラ、国民国家など)も提示されている状況にある。

これら再検討の潮流には、ポストモダニズム、ポスト構造主義、ポストコロニアル批判、カルチュラルスタディーズなどさまざまな名称が与えられているが(註1)、いずれもが近代の機制のなかでそれまで自然なものと考えられてきたカテゴリーに疑念を發し、それらカテゴリーのなかに還元されてきた多様性を回復し、差異を見出し、それらを増幅・拡張することによって、カテゴリー自体が一定のイデオロギーや権力によって「發明」されてきたことを明らかにしていく作業を担っている。これまで民族、国家、伝統、文化、古代など近代の機制のなかでつくられたカテゴリーは、他民族・他国家などと自らを分かつ明確な境界線が設定され、さらにその中心には本質(エッセンス)が想定されてきた。これらカテゴリーの内部に必然的に存在するはずの多様性や差異も、ひとつのカテゴリーのなかに還元され、あたかも一枚岩の磐石さをもつものとして提示されてきた。こうしてわれわれはカテゴリーを、いつしか近代以前から存在してきた自明の、自然な、揺るぎないものとして受け入れてきた。そしてこの受容の過程は、近代の機制をとおして、われわれの身体に自然化・実体化していくものであった。しかし世界システムや国民国家などの近代の機制が揺らぎをみせはじめ、身体すらも臓器の「交流」(移植)を行われるようになってカテゴリー自体の自律性や境界線が曖昧なものになると、近代の機制を支えてきた諸カテゴリーの脱自然化、解体の作業が開始されるようになり、それまでカテゴリーによって代表され、隠蔽されてきたカテゴリー内部の多様性や差異が明らかにされるようになった。さらに、これまで「事実」として受け入れてきたもの、検討作業の前提や枠組みとなってきた機制や規範自体が、近代という特殊なコンテクストをもつイデオロギーや権力関係のなかで「發明」「創造」されてきたということが歴史的に位置づけられるようになった。

文化の研究におけるこのような潮流は、特定の民族や国民を成立させる本質を脱自然化し、カテゴリーのなかにおさまりきらない多様性と差異を増幅するかたちで、「民族の本質」「国民の本質」を解体してきた。これまで民族や国民はその規範の本質に規定され、独自の文化を表象し、伝統を保持するものとされてきた。このような本質主義の立場は、近代以降、外部からの影響を受けて民族や国民自性が「汚染」されるという危機感を契機として、伝統や文化のなかに民族や国民の「真性」で、「純粹」な本質やアイデンティティを追求するというアプローチを提示してきた。民族・国民や文化は歴史に規定された「伝統的本質」に還元され、境界線が明確な民族像・国民像が浮かび上がり、他の民族・国民との相違が強調されてきた。しかし、グローバリゼーションに代表されるような「交流」を契機として、こうした本質主義的で静態的な民族、国民、文化のカテゴリーを、はたして実体として容認することができるであろうかという疑念が生じてきた。これまで特定の民族・国民や文化に還元されてきた個人すべてが自己を一枚岩の「民族性」に同一化するようなアイデンティティを形成するとは想定しがたい。そこには全体化による抑圧が隠蔽されている。多様で横断的な個人々のアイデンティティは民族や国家の枠を超えて異種混交的に錯綜する。そして民族・国民や文化の本質にはおさまりきらない差異が、それまでとは逆に逸脱というかたちでカテゴリーを解体していくことになる。グローバリゼーション以前に近代世界システムのなかで、すでに民族や国民という本質のカテゴリーは解体過程にあったが、そのことが広く認識されるにはグローバリゼーションを待たなくてはならなかった。

1978年に刊行された『オリエンタリズム』の著者サイードが文化の研究に対して投げかけた批判は、研究者と研究対象の関係が一方的に「他者」として表象する/される関係として成立し、近代の知、あるいは思考の枠組みとして体系化されていることに向けられている。サイードは、西欧世界とそれ以外の地域との関係が政治・経済的な権力構造を背景として成立しており、この傾斜的關係のなかで西欧世界が「他者」に対する学問を体系化してきたことに批判の目をむける。世界システムや国民国家における権力関係を問うことなく、杉本が指摘しているように、東洋に対して後進性、不変性、受動性、停滞性、官能性、奇矯性、曖昧性、敵対性、被浸透性、非合理性といったさまざまな負の表象が画一的・総括的に割り当てられ、しかもそれが政治的権力と学術的権威とによって繰り返し強制されて、オリエントのオリエント化が進

められていった(杉本 1993:348)。このような負の表象を東洋に対して画一的に徹底して与えつづけることで、西洋は自己のアイデンティティを獲得していった。「他者(東洋)」はその差異や多様性を西洋によって本質主義的に画一的な表象へと還元される。しかもその還元の成立は、自己と「他者」との権力関係を背景としている。サイドのオリエンタリズム批判以降、文化をめぐって繰り広げられてきた表象の本質主義的還元の問題が明らかにされ、「他者」への一方的な表象を可能にしてきた、権力構造解体への新たなアプローチが文化を研究するさまざまな分野で開始された。これまで「他者」を画一的なカテゴリーへ還元してきた本質主義的解体のアプローチは、社会構築論(あるいは構成主義)と呼ばれている。

### 3. 「交流」の考古学と「カラハリ論争」

文化研究における本質主義的解体、あるいは他者表象の問題は考古学にとっても無縁なものではない。本書の筆者論文で述べているように、東南アジア先史狩猟採集社会は考古学者によってどのようなコンテクストをもってモデル化され、イメージされてきたであろうか。これら東南アジア先史狩猟採集社会のモデルやイメージは、現実世界の変化とともに、「野蛮な他者」から「高貴なる野蛮人」までの振幅のなかで揺れ動いてきた。そして「カラハリ論争」も狩猟採集社会の歴史と表象をめぐる論争として位置づけることができる。カラハリ論争は狩猟採集社会が過去において近隣に生活していた、技術的背景が異なり、社会的統合度が高い社会(農耕社会、都市や国家)と交流をもっていたとする「修正主義者」と、それを否定する「伝統主義者」との間で、狩猟採集社会の「隔離」か、「交流」か、をめぐった対立を発端とする(池谷 1996、ステュアート 1996、小川 1999)。その争点は狩猟採集社会が研究上伝統的に、外的世界からの「隔離」によって人類で最も古い生業技術体系を保持しつづけた社会であるというカテゴリーに還元されてきた点にある。いい換えるならば、狩猟採集社会が、「文明」の側にある研究者によって、「非文明」の代表として、「文明」の対極として本質主義的に表象されてきた点にある。「文明」と「非文明」の二項対立は、一方的な政治・経済的不均衡のなかで成立しており、「文明」の側が掌握する支配的パラダイムのなかで繰り広げられてきた。狩猟採集社会は多様性と差異を包摂しているにもかかわらず、*Man the Hunter* (Lee and de Vore 1968)以降の世界各地の考古学では、生業における採集食物の重要性、採集活動における女性の高い貢献度、余暇の存在など、モデルの生産と消費をとおして、画一的なカテゴリーに還元されてきた。「文明」の側が「非文明」を一方的に表象するという、自己の写し鏡として「非文明」社会を「発明」する行為は、いかに環境に調和した存在であったとして狩猟採集社会にプラスのイメージを付与しても、それは「高貴なる野蛮人」と等価のイメージ生産以上のものではなく、本質主義的還元であることに違いはない。

しかし「カラハリ論争」を契機として、歴史のなかで世界の狩猟採集社会の多様性と差異が認識されるようになると、画一的なモデルの一般的性格を、より地域的で特殊なコンテクストのなかで再考する試みが始められるようになった。すなわちカラハリ砂漠のブッシュマンの事例をもとにしてつくられたモデルを、世界中の先史狩猟採集社会に適用したという、モデルの一般化に対する反省を踏まえ、世界各地の狩猟採集社会の多様性と差異を増幅することによって、狩猟採集社会の本質主義的還元が解体され、さらには狩猟採集社会の「発明」、「文明」と「非文明」の二項対立的表象の生産とその背後に隠された、西欧とその他の世界との権力関係が明らかにされるようになった。こうした「論争」の成果は「伝統主義者」にも受け入れられるようになり、狩猟採集社会の過去を「豊かな社会(affluent society)」として「伝統的」な狩猟採集民モデルをあてはめるのでもなく、しかしながら狩猟採集社会の現状のすべてを世界経済システムに「強要された」結果とみるのでもない、という視点を得ることが可能となった。モデルはつねに「現状」に制約を受けるが、「現状」を「過去」に無理強いしないことが必要であると認識されることとなる(小川 1996)。

こうしてカラハリ・モデルにおける本質主義的性格が社会構築論(構成主義)によって解体された。しかし他者表象の問題は、国外のみに特有な問題ではない。日本考古学も巨大な表象を生産しつづけ、外国考古学と同様に、ここで提示した他者表象の問題を抱えている。日本考古学は他者と同様に、自己の過去も本質主義的に表象し、国内の多様なコンテクストをもった諸機軸の権力や権威の関係性のなかで再構成してきた。すなわち、国中の考古遺物を縄文人や弥生人といった本質主義的カテゴリーに還元することをとおして、日本先史時代の「固有性」や「純粋性」を主張し、そのことによって「日本人」としての自己同一性=アイデンティティの確立を達成してきた。しかし「固有性」や「純粋性」はいったん歴史のなかで批判されると、「文化の生産」「伝統の発明」の過程が明らかにされるようになる。また考古学者が本質主義的に表象する「固有性」や「純粋性」によって策定された先史文化の境界線は、学問的議論の境界線へいつしか変貌を遂げ、文化に関する他の隣接分野との対話を不可能にしている姿も明らかになってくる。社会科学ですでに、社会構築論の立場からの「文化の生産」や「伝統の発明」が共通の認識となっており、そのことの指摘自体が陳腐なものとなさえている。しかし日本



考古学は国民国家の機制を脱し、学問としての新たな考古学の再生を賭した試みが開始されているとはいいい難い現状にある。学問は現在、「誰が、誰のために、誰に向かって」述べているのかという研究者と研究対象との間で、代表・代弁=表象の責任や倫理についての問いかけをめぐって変貌を余儀なくされていることを認識する必要がある。

「文化の生産」、「伝統の発明」が社会構築論(構成主義)の立場から明らかにされ、すでに社会科学を中心とするさまざまな学問分野で共通の認識となっているとはいえ、本質主義自体が姿を消したわけではない。グローバリゼーションの浸透によって国民国家の枠組みが脆弱になってきたと認識されることによって、むしろ国民文化の「独自性」や「固有性」、「純粋性」が本質主義的に強調されるような反動的議論が声高になっているのが現状である。考古学も含めて文化をめぐる議論が、イデオロギーの取り結ぶ政治的磁場、あるいは政治的な闘争の場となってきている。むしろこれまで文化についての学問が非政治的であるという認識を自然なものとして受け入れてきたこと自体が幻想であったと考えることができる。そして日本考古学もまた文化の非政治性を自然なものとして受け入れてきた。このような本質主義の脱自然化が学問としての日本考古学再生の第一歩となるであろう。

#### 4. 「交流」の考古学と政治的ジレンマ

構成主義が解体(脱構築)や脱自然化のキーワードのもとで、本質主義が隠蔽してきた規範や制度の機制を明らかにしても、本質主義は依然として力を持ち、構成主義との対立を深めている。本質主義に隠蔽された権力関係や政治性が明らかになるにしたがって、両者の対立はさまざまな論争の場を生み出している。

本質主義と構成主義の対立が顕在化しているのは、小田が指摘しているように、被抑圧者ないしマイノリティの対抗的文化的創造というコンテキストにおいてである(小田 1996)。この問題は非西欧の土着主義的な民族主義や伝統復興運動、エスニシティ運動だけでなく、フェミニズムや同性愛者の解放運動においても対立を生み出している。問題はマイノリティが自分たちの権利を主張する際にも、西欧の支配的文化が使用したのと同じしかたで「伝統の発明」が本質主義的に行われ、その現象を構成主義の立場の研究者が指摘すると、植民地的状況にある周辺世界の人びとのアイデンティティや「伝統の真正さ」を否定するものだと逆にして非難される点である。研究者がそれまでオリエンタリストが行ってきたような一方的な他者表象を反省し、「文化の構築」や「伝統の発明」の本質主義的側面を徹底して批判すると、その批判は被抑圧者の解放の希望に対する挑戦として批判されるという政治的ジレンマに直面することになる。

この政治的ジレンマは考古学者にも突きつけられている問題である。筆者がフィリピンにおいて外国人としてフィリピン先史時代を研究し、語り、表象するとき、フィリピン人考古学者の前でその語りはどのような「政治的正しさ」(小田 1996:843)をもってなされるのかという問題である。どのような資格をもって、誰のために、誰に向かって語るのかという問題である。これまでどおり近代の機制の権力関係を隠蔽したまま他者の歴史として表象することは論外だとしても、「政治的な正しさ」を要求するマイノリティや現地の民族主義者に筆者が共感するかたちで彼らの提唱する「文化の真正さ」「伝統の純粋性」を肯定し、植民地主義による「文明」の語りから隠蔽された「歴史の回復」をめざすのか、あるいは現地の声も一枚岩ではなく多様であるとして批判をかわしながら差異を見出し、「真正さ」や「純粋性」を解体していくのかという問題である。現地の声に共感する立場は、植民地主義に対抗する「政治的正しさ」を認識し、「フィリピン文化」の「固有性」「純粋性」を主張する本質主義につながる。現地の声も多様で差異があるとする立場は、民族主義者や権利回復運動の指導者層とは別の、表面には現れてこない従属層(= サバルタン、例えば周辺化された狩猟採集社会など)に国民国家とは別の「固有の場」を見出し、実体化する立場である。

筆者はこれら2つの立場のいずれかを二者択一的に選び取るものとは考えていない。いずれの立場を選び取るにしてもともに「政治的正しさ」を要求されるのは、これらが本質主義と構成主義の政治的対立をめぐって議論されており、いずれも近代以降の「想像の共同体」という「固有の場」に対して自己を同一化するアイデンティティの政治学から抜け出せていないからである(小田 1996:814)。さらに、このような二者択一を迫る選択を本質主義対構成主義の対立としてとらえ、この選択をめぐって身動きできないニヒリズムに陥る危険性を示唆している(小田 1996:832)。しかし「何もいえない」、あるいは逆に「何でもいえる」というニヒリズムは回避しなくてはならない。さもないと「従軍慰安婦はいなかった」、「南京虐殺はなかった」と主張する歴史修正主義者を批判することもできなくなってしまう。

この問題をいま一度、フィリピンでフィールドワークをつづける筆者の立場で考えると、フィリピン先史時代を現在におけるフィリピン国民文化の枠組みのなかで、植民地主義と世界システムによる周辺化によって抑圧されたフィリピンの現状を癒し、未来への投企として語るのか、それとも現状の癒しや未来への投企としてフィリピン先史時代を語ること自

体を、全体性に包摂された多様性や差異を隠蔽するものとして批判し、解体しつづけるのか、という選択に迫られていることになる。そしてそれらいずれの立場を選択したとしても、「政治的正しさ」という観点からの批判を回避することはできない。いずれの立場に立ったとしても表象をめぐる政治性を批判されるとすると、いったい何を語るかが正しいといえるのかという自問で身動きができなくなり、倫理的に語ることをやめてしまう。しかしそれでもなおニヒリズムやシニシズムに陥ることなく、「人道主義」や「民主主義」といった近代の「普遍性」の基準とは別の「真正さ」の基準を設定し、語ることをやめないということが必要である。

そのためには「何が正しいか」という基準がなくてはならない。そして小田はその基準が「生活の場における実際に見聞きした「事実」への信憑＝真正さ」(小田 1996:833)にあるとしている。その「真正さ」は「オリエンタリストや民族主義者たちが確保しているような、ネーションやエスニシティの伝統文化を規格化したり客体化する場所 (中略) を奪われている人々が、生活の便宜によって作り出したり変えたりしていく融通性のあるもの」であり、「近代のアイデンティティの政治学にもとづく本質主義によるものではなく、全体化され固定化されたら失われてしまうものである」といってもいい。つまり、全体を見通すというレトリックによる一貫した知(定型的な近代知)が創り出す「真理」への欲望によっては捉えられないような真正さである」(小田 1996:842)としている。

「固有の場」や同一性を解体するために、断片的で同一性をもたない事象や声に耳目を向け、それを差異として認識し、増幅していくこと。そうすることによって啓蒙主義的な近代の知に囚われることなく、考古学の新たな研究分野を拓くことが可能となる。そしてこの問題は、国民文化の枠組みのなかで物語を創造し、自らの歴史の回復として語っている日本考古学も共有しており、筆者がかかわる東南アジア考古学だけではなく、考古学全体における新たな研究分野を拓く可能性を秘めている。その可能性は過去の人間生活の残滓をもとにしてノスタルジックに再構成され、国民国家の全体性のなかに包摂され、ひとつの物語として語られることによって未来へと投企されるようなものではなく、これまで全体性のなかに隠蔽されてきた多様性や差異を掘り起こし、増幅することによって見出されるものと考えられる。

## おわりに

80年代後半以降、世界におけるグローバリゼーションの浸透が誘発した近代知の解体によって、学問における研究者の語り場が倫理的に問われるようになった。日本考古学においてもグローバル化以降の「交流」は国内外でさまざまなかたちで進行している。しかしそれはただ単に研究者同士の交流が促進されたということだけが結果として残ったのであれば、学問的にグローバリゼーションに代表される「交流」の「荒波」を真正面から受けて立つたことにはならない。現状は、ますます政治性を強める表象のあり方に対して、日本の考古学者としての責任と倫理性が世界に問われている時期にあるといえることができる。

文化についての研究分野が直面する本質主義と構成主義の対立と規を一にするように、現実世界でもグローバリゼーションの浸透にともなって、均質性と差異性をめぐって政治的な二項対立が現出している(伊豫谷 1998)。国家の分裂や民族の対立は激しさを増し、国際間での富の不均衡ばかりではなく、国内でも情報へのアクセスをめぐって人々を分断する境界がいたるところに浸透しており、従来のように一定の地域を背景とした相互の結びつきが崩壊してきており、均質性と差異性の二項対立の乗り越えが大きな課題となっている。同時にこれまで固定的に策定されてきたカテゴリーの境界線やアイデンティティにも揺らぎを生じ、首尾一貫した啓蒙主義的な近代知によって操作された文化自体が批判されるようになった。このような時代を迎え、考古学の再編が表象の倫理性をめぐって問われていると考えることができる。

## 註

1:ここでは現代思想の潮流を考古学者に向けて啓蒙的に提示し、思想や知を消費の対象とすることを意図しているのではない。「思想のカタログ(大沢 1998: 200)」を提示したところで、現代の消費社会においては商品としての思想や論文の相対的差異しか生みだすことができないのは明らかであり、カタログ化には重要なことはなにも示されてない。日本の考古学が直面している問題は、その学問が生産する物語の倫理性であり、考古学者がその物語をどのような位置から語っているかである。

## 文献目録

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補 想像の共同体・ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳 NTT出版

池端雪浦

1994 「フィリピン国民国家の原風景 ホセ・リサールの祖国観と国民観」『アジア・アフリカ言語文化研究』46-47:43-78

- 池谷和信  
1996 「伝統主義者」と「修正主義者」とのあいだの論争をめくって-カラハリ・サン研究の事例-」『民博通信』No.73:64-77
- イ・ヨンスク  
1995 『国語という思想 近代日本の言語認識』岩波書店
- 伊豫谷登士翁  
1998 「グローバリゼーションとナショナリズムの相克」、伊豫谷・酒井・スズキ(編)『グローバリゼーションのなかのアジア』:233-242、未来社
- 岩竹美加子  
1996 『民俗学の政治性』未来社
- 上野千鶴子  
1998 『ナショナリズムとジェンダー』青土社
- 大沢真幸  
1998 『戦後の思想空間』ちくま新書
- 小川英文  
1999 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』63-2:192-202
- 小熊英二  
1995 『単一民族神話の系譜 - <日本人>の自画像の系譜』新曜社
- 小田亮  
1996 「ポストモダン人類学の代価 - ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」『国立民族学博物館研究報告』21-4: 807-875
- 春日直樹(編)  
1999 『オセアニア・オリエンタリズム』世界思想社
- 加藤剛  
1993 「民族誌と地域研究 - 「他者」のまなざし」矢野暢編 『地域研究の手法』: 97-140、弘文堂
- クリフォード、ジェームス ジョージ・マーカス(編)  
1996 『文化を書く』春日・足羽・橋本・多和田・西川・和爾訳、紀ノ国屋書店
- 古城泰  
1999 「縄文中期におけるチャートの交換組織」『考古学研究』45-4: 89-100
- 小森陽一・高橋哲哉(編)  
1998 『ナショナル・ヒストリーを越えて』東京大学出版会
- サイド、エドワード  
1993 『オリエンタリズム』上・下、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社  
1998 『文化と帝国主義』1、大橋洋一訳、みすず書房
- 酒井直樹  
1996 『死産される日本語・日本人 - 「日本」の歴史-地政的配置』新曜社
- 酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁(編)  
1996 『ナショナル리티の脱構築』柏書房
- 清水展  
1998 「植民地支配の歴史を越えて - 未来への投企としてのフィリピン・ナショナリズム」西川長夫・山口幸二・渡辺公三編 『アジアの多文化社会と国民国家』: 148-172、人文書院
- 清水昭俊  
1992 「永遠の未開文化と周辺民族-近代西欧人類学史点描-」『国立民族学博物館研究報告』17-3: 417-488。  
1999 「忘却のかなたのマリノフスキー 1930年代における文化接触研究」『国立民族学博物館研究報告』23-3: 543-634
- 清水昭俊(編)  
1998 『周辺民族の現在』世界思想社
- 杉本英明  
1993 「オリエンタリズムと私たち」、サイド『オリエンタリズム下』:343-377、今沢紀子訳、平凡社
- スチュアート ヘンリ  
1996 「序」、スチュアート ヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』:3-10、言叢社
- スピバック、ガヤトリ  
1998 『サバルタンは語るることができるか』上村忠男訳、みすず書房
- 土屋健治  
1991 『カルティニの風景』めこん
- 中川敏  
1996 『モノ語りとしてのナショナリズム - 1997 理論人類学的探求』金子書房
- 西川長夫  
1995 『地球時代の民族=文化理論 - 脱「国民文化」のために』新曜社  
1998 『国民国家の射程 - あるいは<国民>という怪物について』柏書房
- 日本記号学会(編)  
1999 『ナショナリズムとグローバリゼーション』東海大学出版会
- 山下晋司・山本真鳥

- 1997 『植民主義と文化 - 人類学のパースペクティブ』新曜社  
ロサルド、レナート
- 1998 『文化と真実 社会分析の再構築』椎名美智訳 日本エディタースクール出版部
- Baugh, T. G. and J. E. Ericson (ed.)
- 1994 *Prehistoric Exchange Systems in North America*. New York and London: Plenum Press
- Earle, T.
- 1991 (ed.) *Chieftoms: Power, Economy, and Ideology*. Cambridge: Cambridge University Press
- 1997 *How Chiefs Come to Power*. Stanford: Stanford University Press
- Lee, R. B. and I. De Vore (eds.)
- 1968 *Man, The Hunter*. Chicago, Aldine.

狩猟採集社会と農耕社会の交流：相互関係の視角  
Prehistoric Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers  
- special reference on the interdependency

小川英文 Ogawa, Hidefumi

## はじめに

本稿では熱帯地域の考古学で議論されている、狩猟採集社会と農耕社会社会間の交換をめぐる議論について考察し、東南アジア熱帯雨林地域における考古学資料をもとにしながら、技術的背景が異なる社会間の交流のあり方について考える。先史時代における資源の交換は、自分たちの集落を取り巻く微小環境では入手できない食料などの生活必需品から、装飾品など遠くから運ばれてきて付加価値が高くなったものまでさまざまである。特定の資源についての情報と集団間のネットワークをもとにして近場から遠距離まで、モノをとおした交流が存在したことを証拠づけるさまざまな考古資料が得られている。しかし、交流や交換の実態には単なるモノの交換をこえた、考古学で得られる証拠からは窺い知ることのできない諸側面がある。世界の熱帯地域における現在の狩猟採集社会と農耕社会との間にみられる相互関係には、交換をベースとした経済的、社会的そして政治的関係があることが、文化(社会)人類学的研究によって明らかとなってきている。これまで東南アジア考古学では、なぜ狩猟採集社会が現在まで存続してきたのか、という疑問に対して、さまざまなモデルが提示されてきた。そして文化(社会)人類学の成果を反映して最近議論されているのが、狩猟採集社会と農耕社会間の食料、土地、労働力の交換を媒介とした「相互依存関係モデル」である(註1)。

このモデルが提出されるや、考古学者に人類学者を交えてその妥当性が盛んに議論されるようになった。その背景には、当時(80年代後半)、*Man the Hunter*以降、世界の狩猟採集社会研究を席卷した、自己完結的に生業を営む「伝統的」狩猟採集社会像に対する疑問と、そこから発展した「伝統主義 vs 修正主義」論争の争点に、このモデルの論点が直接関わっていることがあった。この論争はその後、文化そのものに対する研究者の見方に大きな変革を迫るものへと発展するが、同時にこの論争の解決には、狩猟採集社会の外界との接触・交流を、歴史過程のなかで追求する以外にないことが確認され、その研究分野である考古学に対して、人類学から大きな期待が寄せられるようになった。ひとときの盛り上がりには比べると、論争は現在一応の終結をみかけたかのような静けさを迎えているが、論争の行方はむしろ考古学による検証にゆだねられたと考えたほうがよいであろう。それゆえ考古学がこの期待に対して果たすべき責任は重い。人類史のなかで「文明」へとは向かわなかった狩猟採集社会の生存戦略のひとつとして、交換のもっている(もっていた)意味が、考古学の内外から同時に問われているといえる換えることができる。

これらの議論を踏まえ以下では、東南アジアの先史時代において、狩猟採集社会と農耕社会が、交換をとおして経済的・社会的交流を維持してきたとするモデルを検討することによって、熱帯雨林狩猟採集社会の歴史の再構成に必要な理論的枠組を模索する。具体的には、まず東南アジア考古学における相互依存関係を示唆する考古学的状況を、フィリピンの調査事例を用いて検討する。次に、これまで狩猟採集社会と農耕社会の相互関係について提出された3つのモデルの問題点を検討することによって、狩猟採集社会と農耕社会の同時存在の歴史が、「文明」によって周辺化されていると同時に、狩猟採集社会の歴史の研究枠組も構築されていない現状を指摘する。最後に、「相互依存関係モデル」の適用が、「文明」によって隠蔽された東南アジア狩猟採集社会の歴史に、新たな研究領域を拓くものであることを提示する。

## 1. 東南アジア先史時代における考古学的コンテキストとはどのようなものなのか？

### 1. 石器の出土状況

東南アジアの先史時代において、狩猟採集社会と農耕社会の間に交流が存在した可能性があると考えられる契機となったのは、東南アジアにおける石器研究にあった。当時東南アジアの石器研究を行っていた筆者は旧石器時代から新石器時代にかけての石器の形態や製作技法の変化、そして石器組成の変化に特定のパターンを見出そうとしていた。しかしそこで困ったことは、報告書にはしばしば層位や共伴遺物が明確に記述されていないことであった。さらに層位や共伴関係がある程度わかっているにもかかわらず、石器の形態や組成パターンの違いが出土層位間で明確な違いを示しているような事例を見つけれなかった。そこには石器の形態自体が不定形であるため、その形態に特定のパターン変化を見出して時代的変遷、例えば

旧石器時代から新石器時代への変化や自然環境に対する生業戦略の変化を追えないという点が大きな障害となっていた。その結果、剥片石器の刃部の機能に注目して石器群全体の機能を割り出すというかたちに研究の方向を軌道修正するほかなかった。この当時(80年代初頭)には顕微鏡の倍率の大小を使い分けて石器刃部の使用痕を分析する手法が多く提示され、石器の機能分析が大きく前進した時期とも符合していた。しかし機能の問題は時間の観念をいったん捨象した土俵で取り扱われるものである。時間的変化について判断停止といった側面が機能研究で強調されるのは、研究対象である石器群が層位的に位置づけられていない、そして近隣の諸遺跡の調査が進んでおらず考古学的状況が明確でない場合に、やむおえず非常手段として遺物の議論を行う場合である。その当時東南アジアの石器研究はまさにこのような状況にあった。もちろん日本の調査例の多さと比較することはできないが、東南アジアではすでに調査されている遺跡間の距離は、それら遺跡間の関係を議論するには適当でないほど地理的に大きな隔りがあった。しかしこの問題を解決するため、一つの盆地や渓谷に分布する遺跡全体を総合的に調査する方法が70年代から東北タイや中部フィリピンで行われるようになった。

## 2. 同時存在の可能性

地域全体の遺跡調査が進展しても、石器の出土状況は依然として不明瞭で、土器やときには陶磁器と共伴するものであった。近隣の洞穴の調査が進んでも、石器の形態が不定形であるという性格には変わりがなく、形態パターンの変化を層位的に追って石器群間の違いを捉え、そこに自然環境や社会関係の変化を見出し、説明するのは困難であることが明らかとなった。では不定形石器群には時間的流れを捨象した機能論しか語れないかということ、それだけではないはずである。その形態に特定のパターン変化を見出して時代的変遷を追えないという点、そして石器と土器、ときには陶磁器との共伴という考古学的状況を事実として受け止めるならば、むしろこのような状況を生み出した要因を探ることに関心を向けるべきであろう。そこでこの要因として熱帯の自然環境がまず検討された。石器が資源獲得のために直接働きかける自然の側に、石器の形態や組成を変化させない要因があるはずだとする考え方である。さらにもうひとつ、自然環境とは補完的関係にある要因として考えられたものが、本稿で中心的課題となっている狩猟採集社会と農耕社会の同時存在である。

狩猟採集社会が現在においても消滅することなく、東南アジア各地の丘陵と山地を生活の場とし、生活規範としての遊動性や、社会規範としての平等主義を維持しながら存続していることを過去に遡って考え合わせるならば、農耕という技術が出現して以降の数千年間にわたる狩猟採集社会と農耕社会の間の社会的・経済的な関係の歴史を再構築できるのではないか。そして石器と土器あるいは鉄器・陶磁器の共伴という考古学的状況については、この地域で農耕が開始されて以降、「文明」への方向性を示す発展段階的な技術の変遷を示唆する一方で、石器を道具として資源開発を行う、より古い技術も同時に存続したとは解釈することはできないか。そして、狩猟採集社会が現存する事実から過去へ遡ると、石器と土器さらには鉄器や陶磁器という技術発展の段階の異なる遺物が共伴する考古学的状況を説明することが可能ではないか、という考え方が東南アジア各地で地域的総合調査を行ってきた研究者から提示されるようになった(タイ東北部: Gorman 1971, Kennedy 1977, 中部フィリピン: Hutterer 1976, 1982, 1983)。

先史時代における狩猟採集社会と農耕社会の相互依存関係のモデルが東南アジア研究者によって提出されるようになった背景には、このような考古学的脈絡に対する新たなアプローチがあった。しかしこの新たなアプローチも、70年代以降の東南アジア熱帯雨林に生活する狩猟採集社会と低地農耕社会との関係について、文化人類学者が提示した「相互依存関係モデル」に大きく負っている。このモデルの議論はその後、紆余曲折を経て今日に到り(その変遷については後の節で論じる)、狩猟採集社会と農耕社会の相互依存関係の歴史の変遷を考古学的に追求すること(すなわちモデルの検証)を目的とした地域的総合調査がいくつか試みられている。そのうちのひとつ、フィリピン北部ルソン島のカガヤン河下流域の調査を事例としてみていきたい。

## 3. カガヤン河下流域の遺物出土状況

南シナ海と太平洋が合流するバシー(Bashi)海峡には、北部ルソン島最大の河川であるカガヤン(Cagayan)河が注いでいる。カガヤン河はルソン島北部山岳地帯の水を集めて北流するフィリピン屈指の河川で、流域には広大な沖積平野を擁するカガヤン渓谷を形成している。このカガヤン河の下流域には、河口から遡ること45km地点までの両岸に大小の貝塚群が分布している。70年代初頭の遺跡発見以降、80年代後半から継続的に調査を行い(青柳・田中 1985, 青柳他 1988, 1989, 1991, 1993, 1996)、現在の調査地域は河口から20~30kmに位置するラロ(Lal-lo)の町域を中心としたカガヤン河両岸の河岸段丘と沖積平野、そして河岸から10kmまでの東岸丘陵地域である。

これまで発掘調査が行われた個所は7遺跡11カ所である(田中1993, 1996, 1997a, 1997a, 1998, Ogawa 1998, 1999b)。これらの遺跡の性格は、河岸の貝塚遺跡群、同じく河岸の伸展葬墓群、河岸石灰岩台地上の貝塚、そして石灰岩丘陵上の洞穴遺跡である。河岸段丘上の貝塚の規模は最大のもので長さ500m、幅100m、深さ2mにもおよび、東南アジア屈指の規模をもつ貝塚群である(東南アジア考古学会1994)。貝塚の上では現在でも貝採集を行っている人びとの村が営まれているが、採集された貝は村外に売りに行くのが一般的で、限られた量の自家消費や貝を加工して身だけを取り出した貝殻を大量に廃棄するという事は現在では行われていない(小川1997)。河岸段丘の後ろには平野が数キロ続き、水田として利用されている。この平野のなかでも貝塚が3カ所確認されているが、限られた数量の石器以外、遺物は表採されていない。低地平野部は河岸から5kmほどの地点から、南北に走る石灰岩丘陵へと徐々に移行する。発掘された洞穴遺跡は河岸から直線で約10kmの石灰岩丘陵上に立地し、50年代の木材伐採後に始まった焼畑と二次林に囲まれている(Ogawa 1998, 1999b, 1999c, n.d.)。

これらの遺跡の発掘結果を総合すると、遺跡群全体の年代は、遺跡の立地、文化層の層位、石器、土器、陶磁器などの遺物の出土状況などから相対的に5期に区分することができる。すなわち赤色スリップ有文土器(R I) 赤色スリップ無文土器(R II) 黒色土器 I (B I) 黒色土器 II (B II) 貿易陶磁(14~17世紀)である(Ogawa 1998)。これらの遺物のほとんどは貝層中から出土するが、R IIは河岸貝塚貝層下のシルト層から出土する。これらの土器群にはいずれも方角石斧が共伴する。絶対年代はR Iを出土する遺跡で約BP3000年、B IIを出土する遺跡から約BP1000年というC14年代が得られている(註2)。貿易陶磁は16~17世紀に属する福建、広東製青花の碗と皿を中心とし、伸展葬墓群の副葬品として出土する。洞穴遺跡は現在まで1カ所のみで発掘であるが、河岸段丘上貝塚遺跡と同じ貝種(淡水産二枚貝)で構成された貝層中からR IIの土器とともにチャート製剥片石器群が出土している。また洞穴内攪乱層中(天地返し)からは方角石斧刃部再生剥片も得られている(Ogawa 1998, 1999b)。

調査開始から10年間ほどは、貝塚遺跡の発掘で剥片石器は検出されなかった。しかし最近になって、貝層下のシルト層にまで発掘調査が及ぶようになって、R IIの赤色スリップ土器群と同一の文化層からわずかに数点だが同一地点からまとまってチャート製剥片石器が出土するようになった。その後丘陵地帯の調査を開始して洞穴を発掘すると、わずかな発掘面積に対して多くの剥片石器が出土した(80点/1m<sup>2</sup>)。これらの剥片石器は洞穴内貝層中(貝種は河岸段丘上貝塚の主要構成種と同じ)から出土するが、R IIの土器と共伴している。河岸段丘貝塚の貝層下シルト層中から出土するR IIの土器は洞穴と同じように剥片石器を伴うことは上述したが貝を伴わない。洞穴内出土のR II土器が河岸段丘シルト層中の土器と同一時期とすると、洞穴の貝はどこで採集されたものが問題として残されている。

#### 4. 不定形剥片石器と土器の共伴関係をめぐって

調査開始から長い間剥片石器が検出されなかったため、狩猟採集社会と農耕社会の相互関係を議論する研究目的自体が誤りだったのではないかと思えた。混貝率90%に近い2m以上の深さをもつ貝層のなかに、大量の土器片や動物骨が含まれていても、剥片石器は出土しなかった。膨大な人員、時間、資金を投じて、掘ってみなくては詳細が判明しない考古学の性格上、研究計画の見直しも必要かと思えた。しかし最近になって河岸段丘上遺跡の貝層下、そして丘陵地帯の洞穴遺跡とともに不定形剥片石器群とR IIの土器片とが共伴することが確認された。遺物の整理、C14年代の結果などによって今後さらに両者の共伴関係をさまざまな角度から検証する必要があるが、ラオ地域の剥片石器と土器の共伴関係は、それぞれの技術の担い手が先史時代においてなんらかの交渉をもっていた可能性を示唆するものであり、そこに相互関係のモデルをあてはめ、検証していく道を開いたものと考えられる(註3)。

ここで議論してきた不定形剥片石器と土器の共伴関係は東南アジアに限らず世界の遺跡でも一般的にみられる現象と推測される。しかし考古学研究の場で取り上げられ、議論される遺物は往々にして、考古学者によってある一定の方向性をもつと解釈された遺物である場合が多い。これまでの考古学では遺跡から出土した遺物全体のなかからある特定の遺物のみが取り上げられ、強調され、再構成されてきたが、これはいわば「文明」の方向性に沿った遺物の取り上げ方、進歩の方向性に沿った遺物の選択の仕方であると考えられる(註4)。では逆に考古学者の取捨選択の網の目にかからなかった、たとえばここで問題としている狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の歴史過程を示すような遺物の再構成のしかたなどの研究方法の開発については、まさにこれからの課題であるといえる。

不定形剥片石器と土器の共伴関係なら世界中の新石器時代に共通にみられる現象で何も不思議なことではない。ただし旧石器時代から石器の形態と単純な製作技術に大きな変化が認められず、不定形な剥片石器がそのまま存続し、そこに磨

製石斧、土器、鉄器、陶磁器が共伴する考古学的状況がある。そしてこれに類する現象は世界の各地でもみられるに違いないと推測されるが、そのことがほとんどの場合強調されずに、むしろこれまで発展段階的な技術の進歩や「文明」の方向性を示す遺物が選択的に強調されてきた。そしてその際に無視され、正しく位置づけられてこなかった遺物の出土状況がある。このことがあまりにも問題にされてこなかったということを明確に提示する必要がある。

本稿は決して「文明」へと向かう人類史の方向性を追求する研究姿勢を否定するものではない。多くの場合、遺物の時間的連鎖は、発展段階的な技術の変遷を示す。そして発展的に技術の変遷を追求し、遺物の連続性をあとづけることがこれまでの考古学の中心的課題であった。しかしそのような考古学の議論の中心であった研究の方向性の陰で、東南アジアの先史時代においては、古い技術体系を保存するメカニズムが存在している。そして、それぞれの技術体系の担い手が同じ時代に存在しながら関係を継続させるようなシステムが、なぜ東南アジアの先史時代において助長されてきたのか、さらになぜこれまでこのような考古学的事例が「発展」という、「文明」の側からの一方的な見方でしか議論されてこなかったのか、という問題が提起されなくてはならない。前者の問題に関心が向けられなかった背景には、これまで後者の問題を不問に付してきた考古学自体が抱える問題が潜んでいる。すなわち、狩猟採集社会と農耕社会の同時存在と相互関係を助長するシステムのメカニズム解明という課題から目を逸らしてしまうような、無意識のうちに決定づけられた研究の方向性や、眼前に狩猟採集民が生活しているにもかかわらず、その存続と交流の歴史を、「文明」への方向性とは異なる学問的枠組のなかでとらえようとしなかった研究の姿勢こそが問われなくてはならない。そこでは事例を解釈する際に構築され、適用されるモデルを最初から規定するような、あるいはモデルを構築する考古学者の過去へのまなざしを、はじめから方向付けるような枠組自体の時代的制約が隠されている。このような研究の、無意識の方向性やその時代の支配的パラダイム(dominant paradigm)による制約を明らかにするためには、まずこれまでに狩猟採集社会と農耕社会の同時存在について説明を提示したモデルの時代的変遷を振り返りながら、これらを歴史のなかで批判する必要がある(Schmidt and Patterson 1995:2)。このため以下では、「同時存在」を示唆する遺物の出土状況に対する解釈や説明として、これまで提示されてきたモデルを歴史的に批判しながら検討する。

## II. 同時存在のモデルはどのように推移してきたか？

### 1. 隔離(没交渉)モデル

前項でとりあげた不定形剥片石器とは、原礫面や単剥離打面に直接打撃を加える単純な技法によって製作されたものである。石器組成はこのほかに石核石器、叩き石や磨石、石核、チップなどで構成されている。定形的なポイントやブレードなどを含まない石器群が東南アジア各地でみられるが、時期的、地域の特徴を捉えにくいいため、ただ長い間この地域に存続したと認識されてきた。そしてこのように単純で貧弱な技法や器種をもつ石器群についての解釈は、この地域の文化的「停滞性」を示すものとして受け入れられてきた。さらに石器の「停滞性」は現在でも東南アジア地域に狩猟採集社会が存続する理由と結びつけられていった。このような石器製作技法と狩猟採集社会についての解釈が戦前から戦後にかけて長い間通用してきた。しかし石器を使って旧石器時代さながらの生活をしている狩猟採集社会は存在していない。石器と狩猟採集社会の技術を文化的「停滞性」の名において短絡的に結びつけてしまう解釈は、大いなる「文明」の時代、植民地支配の時代に特徴的なものといえる。というのはこれらに解釈や説明を与えたのは、「科学」と「文明」のエヴァンジェリストとして植民地宗主国から派遣された考古学者、民族学者、植民地行政官であったからである。

これに対してハイネ・ゲルデルンは農耕社会に同化・吸収されることなく狩猟採集社会が存続してきたことについて一歩踏み込んだ説明を、「隔離(isolate)モデル」として提示した(Heine-Geldern 1932; Hutterer 1976 より引用)。そしてこのモデルは、東南アジアにおける狩猟採集社会は長期にわたる外部からの隔離状態が継続した結果、農耕に移行・同化するための技術を知らなかったというものである。さらにこのモデルは個々の民族集団の文化的特徴の違いや多様性についての格好の説明として長い間受け入れられてきた。その後の論文で狩猟採集社会の文化についてハイネ・ゲルデルンは、「見目の単純さのなかにも多様性が潜んでいる」そして「この多様性は環境への適応や他集団との接触によって、長い間に独自の文化的発展を遂げた結果」と述べている(Heine-Geldern 1958:13)。隔離モデル提示から25年を経たこの論文では、シュミットの「原文化(urkultur)」へ警告を発することによって(Heine-Geldern 1958:13)、伝播主義への決別を告げているかのようであり、また文化の多様性を強調する点では文化生態学への配慮を感じさせるものがある。しかし同時にこの論文には、現存する狩猟採集社会を依然として「文化的発展における過去の段階の最後の生き残り」として記述している。ハイネ・ゲルデルンも時代とともに研究の枠組を変えているかのようであるが、狩猟採集社会はいまだに過去の文化段階の「生



き残り」として認識されている。あたかも文化の方向性が一定であり、そこからはずれる者は過去に取り残された者であるという言説は、過去からのすべての事象を包み込む時間の弾道が、そのエネルギーのすべてを文明という一点の方向へのみ注いで突き進んできたかのような錯覚を与える。実際には「文明」とは別に人類が選択した道も、同じ時間の流れのなかで歴史を重ねてきたはずである。現在のわれわれ考古学者の視角は、狩猟採集社会を過去の生き残り、そして「純粋」な状態で外部から隔離されてきた社会とみることではなく、過去に他集団との緊張関係をはらんだ経済的・社会的関係を保ちながら現在に生き残ってきた社会としてとらえるところにある。ハイネ・ゲルデルンは、民族の多様性は環境への適応と外部との接触の長い歴史の結果と述べているにもかかわらず、同時に過去の生き残りとして狩猟採集社会を位置づけている点では矛盾しており、そこに隔離モデル破綻の自らの宣言を読み取ることもできる。しかしながら、時代的制約を乗り越えてまず最初に、技術段階の異なる集団の混在、民族の多様性に説明を加えようとしたことには大きな評価が必要であろう。

## 2. 均衡(静態)モデル

文化人類学者であるピーターソンは、フィリピン、ルソン島北東海岸パラナン(Palanan)で狩猟採集民ネグリト(註 5)と低地農耕社会との間にみられる食料、土地、労働力などの交換を軸とした両者間の社会的関係について調査し(Peterson 1978)、そのデータをもとに考古学者である夫とともに、先史時代から現在までのプロセスのなかで両者間における交換をモデル化し、狩猟採集社会の存続の問題に説明を与えようとした(Peterson and Peterson 1977)。このモデルがハイネ・ゲルデルンの「隔離モデル」と大きく異なるのは、過去から現在に到るまで狩猟採集社会は農耕社会などの技術レベルの異なる集団と交流をもっていたとする点である。

ピーターソンが調査を行ったパラナン地域のネグリトはアグタ(Agta)と呼ばれ、70年代初頭の人口が約800人であった。当時、アグタは狩猟、漁撈を生業の中心に置き、小規模な焼畑耕作も行ってた。一方農耕民は人口約1万人で、焼畑と水稲耕作を行って、トウモロコシとヤムイモを主要作物とし、その他にコメ、バナナ、パイナップル、野菜などをつくっていた。家畜の保有は各家族平均で、水牛4頭、ニワトリ30羽、ブタ1頭である。家畜は現金収入と儀礼の際の供犠用であり、日々の食卓に供するものではない。アグタの狩猟と漁撈によって得られる肉の量は1家族で1月平均イノシシ12kg、シカ3kg、魚類43kgである。しかしこれとは対照的に採集活動で得られる植物性食料は少なく、野生の果実類、根茎類を補足的に採集している。焼畑も小規模で、そこから得られる作物の量も予備的な量しか供給できず、移動に際しては放棄されるのが一般的である(Peterson 1978)。

ピーターソンが注目するアグタ社会と農耕社会との間にみられる交換の特徴は、まず食料交換によるエネルギーの高い相互補完性である。アグタのほとんどが炭水化物の70~100%を農耕民に、そして農耕民の3分の2がタンパク質の30~50%をアグタに依存している。そのほかに土地と労働力も交換の対象となっており、アグタの焼畑を農耕民が利用する場合や、植え付けと収穫作業にアグタが労働力を提供する場合、農耕民は農作物や現金をアグタに支払っている。主食、土地、労働力の交換は資源の相互依存関係を確立させているが、さらにピーターソンが強調するのは、交換が社会的に規定されている点である。アグタと農耕民が交換を行う際には、原則的にイバイ(ibay)と呼ばれる擬制的親族関係を結んでいる特定のパートナーとの間で行っている(Peterson 1978:90)。イバイは親から子へと受け継がれ、アグタと農耕民との相互依存関係を長期にわたって安定させている。

このようなパラナンにおけるアグタ社会と農耕社会の相互関係を、ピーターソンらは「交換適応(exchange adaptation)」という名でモデル化するとともに、これを先史時代へ適用することを提言している(Peterson and Peterson 1977:554)。このモデルは、技術的背景が異なる集団間で、それぞれが得意とする技術を用いて資源利用を行い、互いに競合(コンペティション)せずに、不足する側面を補い合う生業戦略によって、結果的に2つの集団が適応を果たしていくというものである。ボズラップの農耕発展モデルでは、定住と農耕を開始し、農耕社会が成立して以降、増加した人口を支えるためには、絶えず労働投下量を増大し、技術革新を推進して、環境収容量を増大させなくてはならない(Boserup 1967)。集約化と膨張による適応戦略はその後、「文明」を築き上げて現在へと到る人類史の一つの大きな方向性となった。一方、「交換適応」では労働投下量を低く抑え、技術革新をことさら推し進める必要がなく、絶えざる集約化や膨張の方向をたどることから免れている(図1)。このモデルでは低い技術レベルで環境収容量を維持する一種の均衡をつくりあげることが可能となるが、これが先史時代から現在まで東南アジアに狩猟採集社会が存続した要因であるとされた。

しかしながら、「隔離モデル」を否定し、先史時代における狩猟採集社会と農耕社会との相互依存関係をはじめてモデル

化して、一見異なった技術的背景をもつ社会の同時存在を説明しているかにみえるこのモデルにも問題点がないわけではない。それは、社会関係が安定的で、変化を誘発する契機に欠けるという点である。先史時代から現在までの長い時間にわたって、技術を低いレベルにとどめておけるほど社会が安定した状態を維持することが可能か疑問である。ピーターソンらはアグタ社会と農耕社会の二者間のみの閉鎖系をモデル化したただけであって、両集団の外の世界との関係の連鎖を想定してはいない。交換を軸として「正のフィードバック」(この場合、集約化)をうまく抑えた「交換適応」は、あまりに安定的・静的で、外部からの変化の誘因を想定していない点ではかたちを変えた停滞論ということもできる。こうしたモデルの性格は70年代における研究者に課せられた時代的制約、すなわちその時代の支配的パラダイム(dominant paradigm)による制約に起因しているものと考えられる。ベトナム戦争以降輝かしい「文明」へ投げかけられた疑問は、「非文明世界」における自然と人間の調和にユートピアモデルを築かせる直接的要因となった。すなわち新たな「高貴なる野蛮人」イメージを狩猟採集社会に重ねることとなった。しかしながら、厭世的モデルもこの時代には、文明への反省という確固たるイデオロギーとしての意義をもっていた。研究者は研究対象が自然との関わり方に研究者の属する世界とは異なる考え方をもっていることを理想化し、新たな狩猟採集社会のイメージを生み出した。これが広く世界中の狩猟採集社会に共通するイメージとして受け入れられることになる。その端緒は *Man the Hunter* (Lee and De Vore 1968) にみることができ、新たなイメージを広める伝道師としての役割をサーリンズ(1972)にみることができる。現在のエコ思想や周辺民族がわれわれとは異なった自然観をもつという認識、そして現在周辺民族が唱える戦略的本質主義の言説(註6)などは基本的にこの時期に生み出されたものと考えられる。

「交換適応」モデルでピーターソンが提示したような、閉鎖的なシステム内で完結するメカニズムが、外界からの影響を受けず、先史時代から現在までの長期にわたって、変化せずに存続してきたと想定することは容易ではない。システムの安定的な「均衡(equilibrium)」を壊すものがなければ変化を迎えることができない。70年代末からの科学分野でカタストロフィーやエントロピーの理論が議論される頃、狩猟採集社会研究では世界システム(松井1991)の周辺に位置づけられた存在としての狩猟採集社会の現実をベースとしたモデル構築が必要となってきた。それでもなお研究者に根強く残る自立的狩猟採集社会のイメージへのチャレンジがカラハリ論争へと発展して行く。

### 3. 相互依存(動態)モデル

ヘッドランドのモデルにおいて狩猟採集社会と農耕社会の同時存在の問題は、先史時代に熱帯雨林で生活していた狩猟採集社会の自立性、そして外界から「汚染」されていない純粋性(authenticity)への疑問として提示されている。すなわちアグタ社会と農耕社会の交流が歴史的に継続してきたことを、さまざまな学問分野の状況証拠をもとにして検証することによって、隔離モデルやカラハリ・モデル(Lee and De Vore 1968)が生産してきた「自立的」で「伝統的」な狩猟採集社会像を覆そうとするものである。

ネグリトの生業調査を70年代後半から開始したヘッドランドは、その後言語学者のリード(L. Reid)とともに、ネグリトと農耕社会との「相互依存共生関係(interdependent symbiotic relationship)」が少なくとも3000年前から続いていたとする仮説を提出している(Headland and Reid 1989)。ヘッドランドの調査地はパラナンからルソン島東海岸を南へ100km下ったカシグラン(Casiguran)である。ここでもネグリトはアグタと呼ばれており、人口は1961年で1000人、1984年には600人に減少している。一方カシグランの農耕民はこの20数年間に1万人から3万5千人に増加している。アグタの減少に比べて農耕民が増加しているのは、元来ここに暮らすカシグラニン(Casigranin)の人口増加とルソン島各地からの開拓移民の流入によるものである。農耕民の人口増加や流入はアグタの生業のベースである自然環境を悪化させている。この環境下でアグタは籐(ラタン)の採集と農業労働を生業活動の中心に据えている。アグタ男女が18カ月間に従事した、生業活動別の労働投下の時間配分は籐採集、農耕民の農地での労働、自分たちの農地での作業、農業労働以外の賃労働、集落での道具の維持・管理、狩猟、そしてもっとも時間配分が少ないのが植物性食料の採集という順になっている(Headland 1986:557-562)。

このような労働投下の実態はアグタが摂取する食料にも反映されている。5カ月間の食事調査の結果、アグタが主食にコメを食べた回数は90%以上を占めていた。副食では魚貝類53%、野菜12%、缶詰9%、狩猟で獲った肉が5%の順であった(Headland 1986:553-556)。主食のコメはアグタ自身が耕作した焼畑で取れるオカボではなく、籐を売って得た現金で購入したか、農耕民から賃金の代わりに得たものである。このようにカシグランのアグタの生業の実態は、調査時に十数年のひらきがあるが、ピーターソンが描いたパラナン・アグタの生業活動の実態とはかなりかけ離れたものである。両

者とも農耕民との食料や労働力の交換システムを確立しているが、カシグラン・アグタの方はより農耕民への依存度が高く、狩猟・採集活動に割かれる時間とそれによって得られる食料の量が低くなっている。さらにカシグラン・アグタの生業活動は確実に世界システムのなかに組み込まれている。アグタの生業のなかで最も長い労働時間を充てて採集される藤は農耕民に売られ、さらに町の商人や家具製作者、そしてマニラの業者を経て海外へ輸出される。このように狩猟採集社会の一般的イメージからほど遠い、世界システムの周辺に位置づけられたカシグラン・アグタの生活実態については、文明社会からの「汚染」と考えるのではなく、これも技術的背景が異なる集団間の交流のひとつの事例であり、その振幅の幅のなかで農耕社会への依存の度合いが高いケースとして理解すべきであろう。

カシグラン・アグタの生業実態をベースにしてヘッドランドが提示している「相互依存共生関係」モデルの性格は基本的にピーターソンの「交換適応」となるものではない。すなわち農耕民と狩猟採集民という2つの生業形態が異なる集団がそれぞれホームグラウンドとする自然環境に労働を特殊化し、食料、土地、労働力の交換を契機として互いに生計上の欠損部分を補い合い、その結果、全体としてひとつの生態システムを構築しているというものである。異なる点は両者が描く民族誌の質的違いである。「交換適応」の場合は「安定的」で「神話的」であるが、「相互依存共生関係」は「不均衡」で「現実的」である。ヘッドランドはアグタの生業が世界システムのなかで周辺化・隷属化しているという現状認識から出発し、これまでの狩猟採集社会のイメージからは逸脱するが基本的に「遊動」や「平等主義」といった生活・社会規範を変えない狩猟採集社会の生業実態を、農耕社会との共生(生物学上の意味での「共生」、註7)関係のバリエーションの一例として動的にモデル化しているものと考えられることができる。

アグタ社会と農耕社会との相互依存関係の歴史的深度についての展望を議論するとき、ヘッドランドは「隔離モデル」が唱える狩猟採集社会の熱帯雨林内での「自立性」(self-sufficiency)に対して疑問を提出し、言語学、考古学、文献史学そして炭水化物食料の欠乏という観点から検討した。そして結論として、熱帯雨林では先史時代においても、現在と同様に自立的に生業を営むことは不可能であり、アグタなどの狩猟採集社会はいまから3000年前には、現在知られているような農耕社会との相互依存関係を確立していたという仮説を提示している。

ヘッドランドは言語学者のリードとともに「相互依存共生関係」モデルを先史時代に適用し、狩猟採集社会と農耕社会の交流の歴史がどれくらい古さをもっているか検討した(Headland and Reid 1989)。フィリピンの先住民と考えられるアグタなどのいわゆるネグリティ系狩猟採集民は、2~3万年前にフィリピン諸島へ移住してきたとされている。一方、オーストロネシア語族が東南アジア島嶼部へ南下を開始したのは5000年ほど前で、その過程で彼らは農耕の文化要素を携えてフィリピン諸島へも移住してきた。アグタと農耕社会との関係はまず言語的影響関係にみることができる。フィリピンのネグリティ系狩猟採集民は、現在すべてオーストロネシア語を話している。低地農耕民もオーストロネシア語を話す。両者の言語は互いに通じ合わない。これはかつてオーストロネシア語族との接触や交流において、自らの言語を捨て、オーストロネシア語を受け入れたが(自分たちの言語を放棄し、他言語を受け入れることに関しては、理論的に、3~4世代のうちには可能; Headland and Reid 1989:46)、その後分化して個別に変化したことを示唆している。アグタが農耕社会から言語を受け入れた背景には、交換だけにとどまらない、密接な交流があったものと予測することができる。その後、両者の密接な関係が途絶え、アグタの言語は別個に変化のプロセスをたどり、現在のかたちとなったが、このプロセスには言語学的に1000年以上の時間が必要であると考えられている(Headland and Reid 1989:46)。

農耕社会の存在を示す、北部ルソンの考古資料では、土器の出現が5000年前(Snow and Shutler 1985:1)、そしてコメの出現が3400年前(Snow et al. 1986)という資料が得られている。これら言語と考古両方の資料からヘッドランドらは、アグタと低地農耕社会との交流が、1000年以前、少なくとも3000年前には始まっていたものと考えている(Headland and Reid 1989:46)。

また、ヘッドランドらが提示しているように、タンパク質よりも炭水化物食料の獲得が困難である熱帯雨林に対して、農耕社会との社会的・経済的関係なしに狩猟採集社会が進出することはほとんど不可能であったという仮説は(Headland and Reid 1989, 1991)、アグタ社会と農耕社会との間に認められる相互依存関係に歴史的深度を与える可能性を秘めている。この仮説の検証もまた、狩猟採集社会の「隔離性」、「自立性」、「純粋性」の神話解体の試みである。

熱帯雨林の環境下では人間が食用として利用可能な植物資源が、同じ熱帯の季節林やサバンナの環境下と比較しても非常に限られている。熱帯雨林は豊富な日射量と高温・多雨という気候条件に支えられて、単位面積当たりの膨大な生物量や生産量、種の多様性には目をみはるものがある。しかし熱帯雨林全体が、栄養の分解、摂取、循環のサイクルが非常に速く効率的に行われるシステムを形成しているため、人間が食用としてこのシステムからもち出し可能な果実、葉、花と

いう再生産機能をもつ器官の生産に対して、栄養が十分に分配されていない(Hutterer 1982:121-2)。しかも、それらは高い樹冠の上に位置している。さらにはアルカロイド、タンニンなどの毒やトゲで防御されている。栄養分の多くは木質部に蓄えられ、地下の根部にはわずかしが蓄えられていない。このことが熱帯雨林が「緑の砂漠」と呼ばれるゆえんである。季節性に乏しく、光、熱、水分供給の条件がほぼ安定している熱帯雨林では、水分供給が年間を通じて一定でない熱帯季節林のように再生産が雨期に一齐に起こり、それを人間が集中的に利用できるというわけにはいかない。種の多様性は食物利用の可能性を広げているようにみえるが、一定の範囲内で同一種が分散して互いに距離をおいているため、利用の際にはかなりの距離を移動しなくてはならないというコストがかかる。このように炭水化物の摂取には多大な困難が伴う(Hutterer 1982:135)。

熱帯雨林の基本的性格を踏まえてヘッドランドが提示したのが、農耕社会との交換システムを確立して炭水化物食料の不足を補えるようになるまで、狩猟採集民は熱帯雨林へ進出することができなかったという仮説である。この仮説は後にアマゾンで同じ問題を研究をしているバイレーとともに提示され、世界の熱帯雨林狩猟採集社会研究者によって検討された(Headland and Bailey 1991)。このときには熱帯雨林では現在でも周囲の農耕社会から自立して生活する狩猟採集社会が存在するという意見が多く、二人の仮説に対する反応は否定的であった。これまで一般的に受け入れられてきた熱帯雨林狩猟採集社会の「隔離性」「自立性」「純粋性」を即座に「相互依存性」へと転換することはむずかしい。それにはこれまで狩猟採集社会の考古学が分析の基本的単位としてきた、人間による環境利用のあり方に対して、根本的に研究視角を設定し直すことが必要となる。そして視角の設定変更には理論的枠組の再構築という多大な努力が要求される。同時にわれわれ考古学者が熱帯の狩猟採集社会に投げかけるまなざしの方向性を「自立性」から「相互依存性」へと転換するためには、「野蛮な他者」として表象してきた狩猟採集社会像についても根本的な変革が必要である(小川 1999a)。

ヘッドランドとバイレーによる問題提起は、まさに同時期にカラハリ砂漠の狩猟採集社会研究で白熱していた「伝統主義 vs 修正主義」論争と論点を共有しており(池谷 1996)、提出された問題点も狩猟採集社会研究にとどまらず、文化概念の再検討、世界システムのなかで周辺化された民族の政治・経済学的問題など、文化についての研究の枠組や研究姿勢を大きく揺るがすものであった。

#### 4. 相互依存モデルが提起する諸問題

カラハリ論争の概要を述べると、カラハリ砂漠のブッシュマン研究の成果から導き出された狩猟採集社会のモデルは生業における採集食物の重要性、採集活動における女性の高い貢献度、余暇の時間の存在など、それまでの狩猟採集社会に対して抱いていたイメージを大きく変えるものであった。その成果をまとめた *Man the Hunter* (Lee and De Vore 1968) が世に出ると、カラハリ・モデルは世界中の狩猟採集社会研究に適用されるようになった。この傾向は先史時代狩猟採集社会が残した考古遺物の解釈においても同様に見られ、カラハリ・モデルは狩猟採集社会の過去と現在双方の研究者のものの見方を決定づけ、新たに築かれた「自立的狩猟採集社会像」が一人歩きをはじめようになった。しかしカラハリ・モデルの影響力の強さは、その帰結として、地域的で特殊な自然・社会環境などのコンテクストの軽視や性急な一般化を招く結果となり、まるではじめに理論やモデルがあり、それに対して地域的で特殊な諸条件が解釈の場で迎合する事態が生まれるようになった。ショットは、例えば、北アメリカのパレオ・インディアン社会の復元に際して、特に考古資料が少ない場合、カラハリ・モデルを元にして復元作業を行ってきた問題を指摘している(Shott 1992:860)。この事例は、モデルをコンテクストにあてはめるのではなく、コンテクストをモデルにあてはめるという逆転が生じるようになったことを示している。この矛盾に気づいた研究者によって、カラハリ・モデルには歴史的な視点が欠如しているという批判にさらされるようになる。カラハリ・モデルを批判する修正主義者によれば、かつてのブッシュマンはアフリカ東海岸の交易集団との交流をもち、インド洋交易の末端で原材料の調達に携わっていたが、大航海時代以降このネットワークが断ち切られてから、徐々に現在のような「自立的」生活をおくるようになった。けっして先史時代からずっと他集団との交流をもちに生活していたわけではないとウイلمセンらは主張している(Wilmsen and Denbow 1990:499-503)。この批判はその後、「伝統主義 vs 修正主義」論争へと発展し、狩猟採集社会の「純粋」な「伝統性」の保持か、喪失かをめぐる激しい議論の応酬が展開する(Wilmsen 1989, Solway and Lee 1990, Wilmsen and Denbow 1990, Silberbauer 1991, Lee 1992, 論争の概要と争点をめぐると問題については、以下を参照：Shott 1992, Kent 1992, 清水 1992:466-68, スチュアート 1996a: 7-9, 池谷 1996)。論争の決着は過去に近隣の世界と交流をもっていたことを示す遺跡と現在の狩猟採集社会との間になんらかの関係を検証することに求められ、伝統主義者と修正主義者双方から考古学へ強い期待がかけられている。

伝統主義者にみられるように、より「自立的」、「伝統的」で、外界から「隔離」された、「純粋な」狩猟採集社会をさがし求め、それをモデルとして過去を再構築しようとする姿勢の背後には、狩猟採集社会の周囲に存在するさまざまな社会的統合のレベルにある諸社会との「交流」を、「伝統」や「純粋性」の「汚染」とみなす視角が潜んでいる。目の前の狩猟採集社会から「伝統項目」だけを恣意的に抽出し、外部世界からの「汚染」を排除して先史時代にあてはめるためのモデル構築の材料にするとしたら、それは世界システムのなかで周辺化されている狩猟採集社会を現実から切り離す一方的な態度にすぎないであろう。文化(社会)人類学では現在、民族の文化には本質があってこの本質を表象したものが文化であるという考え方、すなわち文化に対する本質主義(エッセンシャルイズム)への反省がうながされている(サイード 1993、清水 1992、クリフォード、マーカス 1996、ロサルド 1998)。これまでのような文化や民族についての見方では、民族の現状、すなわち「民族」が国民国家のなかで再編成されたり、あるいは他国へ移民することによって、他の価値観や世界観をもつ「民族」と混在し、たがいに影響しあうなかで新たに形成し、表象する「文化」やエスニシティをとらえきすることはできない。これまで調査や研究の「対象」として、また「静的」なものとして、研究者の側から一方的なまなざしを受けてきた「民族」は、国家のなかで「国民」やあるいは新たなかたちの集団(エスニック・グループ)へとダイナミックに再編成されつつあるのが現状である。

カラハリ・モデルはこれまであまりにも多くの研究者を巻き込んできたために、カラハリ論争が狩猟採集社会研究に与えた衝撃は大きかった。それはカラハリ・モデルが現在ですでにこれら周辺民族の現状を記述し、説明するには十分ではなくなったということをも意味している。修正主義者の問題提起は、モデルが依拠しているような「伝統的」で、外界から「隔離」された、「自立的」な狩猟採集社会自体が、現在存在しているのかという疑問から発している。狩猟採集社会像は研究者がイメージしたものであって、実態とかけ離れてしまっているのではないかと、いうところに論争の焦点がおかれている。論争のエッセンスは、研究者が「文化」に対してどのような研究の枠組をもって対応してきたかという大きな問題にまで踏み込むことになったが、論争の決着には細かいデータの積み重ねが必要である。しかも、それは歴史的に解決されなくてはならないことが確認され、その手段である考古学への期待は大きい。

### III. 結論：同時存在の考古学が提示する可能性とはどのようなものなのか？

狩猟採集社会と農耕社会という、技術的背景が異なる社会間の交流を視点として、先史時代から現在に到る両集団の同時存在を想定し、その可能性を、与えられている考古資料とこれまでに提出されているモデルを材料として検討した。そしてその過程で、この議論にはさらに重要な問題提起があることが明らかとなった。それはいまだに根強く残る、外部の世界から「隔離」され、「汚染」されていない「純粋な」狩猟採集社会像に対して見直しが迫られているというものであった。そしてこの見直しの論点のエッセンスには、カラハリ論争の主旨と相通するものがあることが理解できた。また同時に狩猟採集社会と農耕社会の交流の視点を検討する過程で、研究者の側からとらえたアグタの姿が、「残虐な野蛮人」から「高貴なる野蛮人」へ、そして世界システムのなかで周辺化された現実を生きる狩猟採集社会へ、という変遷をたどってきたことが明らかとなった。過去 60 年間に現れたそれら 3 枚のアグタ像は、それぞれ狩猟採集社会像の新たな側面を現前させているかのような違いを提示している。しかしその陰で、「野蛮な他者」として、われわれの一方的なまなざしを受ける存在としての狩猟採集社会像が、時代を超えて繰り返し再生産され、現在でも払拭しがたい力を秘めて残存し、消費され続けていることも理解することができた。

われわれ考古学者はこれらの理解を確認した上で、「文明」の方向性とは別に熱帯雨林狩猟採集社会がたどった歴史を再構成する理論的枠組を構築しなくてはならない。現時点では理論構築への道のりは遠いが、そのためのいくつかの道標については、3 つのモデルを検討する過程でみつけることができた。その第 1 は、東南アジアの先史時代における狩猟採集社会と農耕社会の相互依存関係を前提とした研究の方向性が、今後も有効な展望となりうることである。自立性や純粋性という狩猟採集社会に与えられてきた「固有の立場」を問い直し、相対化する際、交流という相互関係の概念がもつ積極的意味が問われなくてはならない。「固有の立場」はけっしてアグタの自己主張によって獲得されたものではなく、「文明」の側によって与えられたものである。そして与えられた「固有の立場」とは「未開」の状態である。こうして熱帯雨林狩猟採集社会は、先史時代と現代の双方において、「文明」と対峙する関係のなかで固有性を付与され、同時に歴史において、人類の初源的段階に位置づけられた。しかし、農耕以降の人類史のなかでの狩猟採集社会は、主役の座を新たに出現した農耕社会に譲り、あたかも存在していないかのように、その歴史を隠蔽(すなわち抑圧)されてきたのである。アグタ・農耕社会間の交流、そしてそれによって引き起こされた両社会の変容の歴史を再構成する試みは、固有性の付与や歴史の隠蔽

が、誰によって、どのような意図をもってなされてきたかを明らかにしていく試みでもある。

第2は、日本の考古学は、「文明」へと向かう人類の足跡の物語以外の語り口をもっていなかった、ということである。日本の考古学はこれまで、先史時代の社会の諸要素である考古遺物のなかから、各時代の先端的要素を見出し、それらを連続させ、「文明」への足跡として提示してきた。そして、時代ごとの技術的先進性・先端性を代表する遺物とその連続性を中心に語り、同時代に存在している狩猟採集社会についての語り口をもたなかった。「輝かしい文明」への方向性をもたない社会についての研究方法は開発されてこなかった。ではなぜ、日本の考古学は、狩猟採集社会の歴史を物語る語り口をもたなかったのか。その理由には、狩猟採集社会が、現代ばかりでなく、先史時代においても「周辺化」され続けてきたことが考えられる。そして「歴史の不在」を容認する「周辺化」には、ある種のイデオロギーが関与しているものと考えられる。そのイデオロギーとは国民統合のイデオロギーにほかならない(Jones 1997, Diaz-Andreu and Champion 1996, Schmidt and Patterson 1995)。国家イデオロギーとして、「文明(あるいは文化)」が機能を発揮することに関しては、「国民国家」の相対化・脱自然化の過程で議論されている(アンダーソン 1997, ウォーラースティン 1991、西川 1995)。

近代に成立した国民国家は、政府や軍隊といった統治のための装置とともに、学校や博物館といった国民統合のための装置をもつことが必要である。日本や東南アジアの国々など、国民国家の建設が「遅れた」諸国も、このような西欧的な「文明」の装置の整備を急いだり、あるいは植民地国家の遺産をそのまま継承した(アンダーソン 1997:第X章)。近代に成立した諸学問分野も、国民国家の維持に資するイデオロギー装置として存在してきた。そのなかで考古学は、国家や国民の独自性と優越性を示す根拠を探求し、その神話を生成する役割を与えられている(Veit 1989, Jones 1997:Chapter I, Härke 1998)。重層的な文化を過去に向かって掘り進み、より深く時間を遡ることによって、「純粹」で「固有」な文化が姿を現す。発掘された「伝統」は、遠い過去から語り継がれてきたものとして、国民のアイデンティティを支える拠り所となる(Jones 1997:2-3, Diaz-Andreu and Champion 1996:18-19)。こうして生成された「国民文化」的な神話は、歴史的深度と連続性によって保証された新たな「伝統」として、国家の空白を均質に埋めながら、イデオロギー的統一を助け、維持していく(西川 1995:202-8)。

このような性格をもつ国民国家において、狩猟採集社会は文化的にどのように位置づけられてきたであろうか。国内的な同質性と対外的な異質性を強調しながら、国民統合をめざす文化イデオロギーは、国内の異質なものと多様性・差異を表象するものに対しては、抑圧や差別を生み出す。文化的統合の過程で、異質なものは、同質なカテゴリーへと無理矢理に編入されていく。そして無理に編入されたときに生じるズレは覆い隠され、異質性・多様性を目立たないものにしていく。こうして狩猟採集社会は、文化的に周辺化され、抑圧の歴史を生きることになる。

狩猟採集社会は、国民国家ばかりではなく、同時に世界システムによっても抑圧と差別を受ける。すなわち、いずれの国民国家においても、国内では純粹、固有な価値をもつ「国民文化」は、他国に対しては、優越性や排他性を強調される。諸国家は、互いに自国の純粹性、固有性、優越性を主張し合いながらも、世界システムに接合・包摂されている。世界システムの分業体制に組み込まれることによって、諸国家の資本主義的構造と文化イデオロギー的構造は、ともに類似した構造をもつようになっていく。世界システムにおける<中心・半周辺・周辺>(ウォーラースティン 1991:9-12)という抑圧的・差別的構造のなかで、諸国家は自国の経済的な地位向上のために、文明化の装置を駆使し、「神話」によって国民を動員して近代化を図る。こうして「文明」の概念は、国民国家内にとどまらず、世界システムのネットワークに互いに結びつけられた諸国家間で普遍的な概念となり、世界のいたるところで進行する「文明化(=近代化)」の過程で、狩猟採集社会は世界システムによって成立した国家間ネットワークによっても、国内で受けたと同様の抑圧と差別を経験するのである(西川 1995:152)。

「文明」への連続性が歴史として語られるのは、国民国家の神話においてである。そこでは、狩猟採集社会の歴史時代における足跡が語られることはない。では考古学は、狩猟採集社会の連続性を、どのように語ることが可能であろうか。国民国家と、その成立に直接関与している世界システムの相対化の議論へ考古学者が積極的に参加することが、当面の方向性を示しているものと考えられる。狩猟採集社会が歩んだ、「非文明」の歴史の再構成は、文明への異議申し立ての過程で可能となる。この過程で、狩猟採集社会のたどった「非文明」の歴史過程の研究が、「文明」を相対化し、「文明史観」とは異なった別の史観を可能にするであろう(Schmidt and Patterson 1995, Jones 1997:10, Layton 1989)。しかしさらに重要なことは、異議申し立てを行うのは考古学者自身であって、抑圧されている狩猟採集社会ではない、ということである。すなわち多くの考古学者が、カラハリ・モデルを解釈に援用しながらも、「伝統主義 vs 修正主義」論争以降明らかとなったこのモデルの問題点を、考古学自体の問題として背負うことなく、人類学にまかせてしまった時のような責任回避は許されるものではない。考古学者も現実の問題を直視する必要がある。抑圧され、差別されている狩猟採集社会の現実の問題に対

して、考古学者自身もともにこの現実に向かい合わなければ、狩猟採集社会の隠蔽されてきた歴史を再構成する資格はなく、研究者自らが過去と現実双方の問題の隠蔽に加担してしまうこととなる(註8)。

もの言わぬ遺物との対話からはみえてこない社会間の関係の実態とその変化を考古学的に検討するには、どうしてもより妥当性の高いモデルを構築して遺物による検証を重ねていく以外に方法はない。そして上で検討してきたように、モデルは研究者を取り巻く世界の状況の変化に応じて変化する。大航海時代以降の世界システムの展開とともに周辺化された狩猟採集社会の現状をモデルとして、世界システム成立以前の実態を検証すること自体が時代的制約を受けていると指摘しても議論ははじまらない。はじめから制約があることを前提として議論を豊かにする方が、考古学にとっては実り多いものとなる。しかしその際注意すべきは、これまで考古学者がいったん過去へ遡り、そして現在へ立ち返るときには、「文明」の方向性を道標としてきたということ、そして狩猟採集社会の歴史を再構成するときには、未だ「非文明」の方向を指し示す道標がないということである。

本稿で議論してきた遺物や狩猟採集社会研究のあり方いずれもが、世界の考古学ではこれまでほとんど見過ごされてきたものである。見過ごしていいものであるという審級性を与えてきた者は考古学世界の中心的存在であり、それによってわれわれが議論してきた資料も周辺化されてきた。しかし周辺化された「取るに足らない」資料であるがゆえに、中心が提示する研究の方向性を見直す力を秘めている。そしてこの力こそが、本稿の中心的課題である東南アジア考古学の可能性と考えることができる。

## 註

1:筆者はこれまで先史時代における狩猟採集社会と農耕社会の関係性を議論する際のモデルとして「共生」という用語を用いてきたが(小川1996)、現在の国際社会では、世界秩序の崩壊と民族紛争、開発と環境破壊などの世紀末の不安のなかで、新たな秩序構築の理念として「共生」が唱えられることがしばしばみられる。理念自体が本来もつ良いイメージと、現代の国際社会が抱える人類共通の問題群の乗り越えとして「共生」が唱えられる脈絡は、生物学用語としての本来の「共生」の意味あいや先史時代における人間集団間の関係の変遷についての議論にはややなじまないものがある。これらは自然をめぐる人間集団間の問題群としては議論の場を共有しているが、新たな秩序構築の理念としての「共生」は未来への提言である一方、ここで用いられる「共生」は現代の問題自体が発生する過程を考える契機となる用語である。両者の混同を避けるため、「相互依存関係」という用語をここでは用いることとした。しかしどの用語を用いるにしても、過去から現在までのいかなる時点においても、理念が与えるプラスのイメージによって覆い隠されている人間集団間の緊張関係は常に存在し、先史時代においても狩猟採集社会と農耕社会の関係がけって生やさしいものばかりではなかったことは念頭に置いておかななくてはならない。

2:C14年代測定値は、マガピット(Magapit)貝塚で2点:2800±140BP(N-5396,半減期5730年)、2760±125BP(N-5397,半減期5730年)、カタヤワン(Catayauan)貝塚で1点:1060±290BP(N-5398,半減期5730年)が得られている(青柳他1991)。

3:土器を出土する河岸貝塚遺跡のほとんどでこれまで剥片石器が出土しなかったことは、河岸と丘陵という遺跡が立地する微小環境(micro-environment)の違いと、それぞれの微小環境に対して資源利用を行う遺跡の担い手の基本的技術の違いを逆に強調する証左と考えられる。

4:これは考古学的事象の「接ぎ木作用」と呼べるかもしれない。もちろんその作用を及ぼしているのは考古学者である。「文明」という現在の到達点から研究対象となっている時代へと遡り、そこから折り返して今一度現在へと舞い戻る。返ってくる際に考古学者がたどった道筋は時間の流れに沿って、必ず一定の方向性をもっている。断続的で飛び石をたどるように、散在している考古学的事象を、ひとつの意味ある方向へと「接ぎ木」しながら現在までの道程をこなしていくのである。ここで問題となるのは、考古学者の「接ぎ木作用」は、すべての事象を包み込む時間の弾道が、あたかもそのエネルギーのすべてを「文明」という一点の方向へのみ注いで突き進んできたかのような錯覚を与える点である。「文明」の力を信じてきた時代には、世界のさまざまな地域で、競って考古学的事象の「接ぎ木」が試みられた。その反面、「飛び石」や「接ぎ木」の過程で考古学者に無視された考古遺物も数え切れないほどある。アンダーソンは、考古学の「接ぎ木作用」を「シリーズ化(serialization)」と呼び、国民国家出現以前の遺跡や歴史上の人物が、ナショナリズムの先駆として表象され、現代に結びつけられる過程を描き出している(アンダーソン1997:298-301)。このことは考古学という学問が近代、とりわけ国民国家の成立とその後に行われた諸制度の整備の時期と緊密な関係にあることを示している。考古学の見直しが行われるべき現在、「飛び石」や「接ぎ木」に代わる考古学実践とはどのようなものであろうか。それは少なくとも「文明」への方向性を志向した考古学者によって過去へ置き去りにされ、無意識であれ、意図的であれ、隠蔽されてきたものを拾い上げることにあると考えても間違いない。「制度」としての考古学は、その成立から現在までの歴史のなかで一度批判を試みる必要に迫られている。その試みは、文化の問題を取り扱う他の学問分野では、自らの再生を賭した論争を呼び起こすというかたちですでに始まっている(例えば、清水1992、小田1996、クリフォード、マーカス1996、ロザルド1998)、日本の考古学では未だ始まっていないのが現状である。

5:ネグリトとは「小さな黒人」を示す。差別的用語としてネグリト以外の呼び方が用いてきたことばであると考えれば、ここで用いるのは適切ではない。アグタ、イタ、アエタという集団ごとに表記すべきだが、ここでは北部ルソン熱帯雨林狩猟採集社会の総称として便宜的に用いたことをお断りしておきたい。

6:国家のなかでマイノリティとしての立場におかれている先住民族が、国家に対して先住権(土地権、自治権や生業権など)を主張する際、狩猟、採集、漁撈などの生業活動は、彼らの権利主張の重要な根拠になっている(スチュアート1996b:143)。実際には社会福祉制度の充実や賃金労働の機会増加などによって、「伝統的」生業活動の意義が低下している場合にも、先住民が、欧米とは異なる自然観や生活様式を依然として保持していることを強調し、先住権を主張する際に、「伝統的」生業活動を政治的レトリックとして用いることがある(スチュアート1996b:144)。戦略的本質主義の言説とは、このときマイノリティ社会が用いるレトリックによって生み出された言説を指す。

戦略的本質主義の言説は、先住民の権利主張のためにのみ重要性をもっているのではなく、むしろより重要な研究課題は、その際レトリックとして表象される生業活動などの「伝統の再生産」が、失われかけている先住民の社会関係や民族アイデンティティの維持、すなわち先住民社会の「文化的サブパイル」に重要な役割を果たしているという点である(スチュアート 1996b:145-6)。戦略的本質主義の言説が生成される契機や条件としては、まず国家が先住民の諸権利の擁護を政策として謳っているという環境が整備されていなくてはならない。いわゆる先進国ではその条件に適合する国々が多いが、第三世界の国々では必ずしも先住民の権利が尊重されていない場合もある(国家が先住民を抑圧、搾取する構造を「第四世界」と呼ぶ場合もある)。また同時に、戦略的本質主義の言説が、国家の側に受け入れられる素地がなくてはならない。すなわち、「欧米流」の自然保護思想(エコ思想)によって、先住民の生活は「西欧文明」とは異なり、自然と調和したかたちで営まれてきたという、「先住民 = 自然保護者」的なイメージがある程度定着している必要がある。さらに、先住権の主張の際に、政治的レトリックとして表象される「伝統項目」(狩猟、漁撈などの生業活動やシエアリングなどの社会規範等)がもっとも効果的なものとして選択されなくてはならない。そして「伝統項目」の選択には、先住民以外の、第三者(自然保護団体や研究者など)からの情報や助言が重要な役割を果たしていると考えられる。民族誌からの情報は、先住民の若い世代が、「伝統的な」社会規範や生活様式についての情報や知識を、かつて先祖が研究者に語った民族誌に「発見」することによって得られる。この行為は「リードバック(readback)」と呼ばれている(Burch 1994:444)。戦略的本質主義の問題として清水展は、フィリピンの狩猟採集民ピナトゥボ・アエタ(Pinatubo Aeta)の調査をとおして、平地民化したアエタが現金獲得のために弓矢を製作して売り歩く戦略の本質主義の実践が、放浪する「未開人」という偏見に満ちた先入観を他の人びとに強化する効果をもつ危険性があることに注意を喚起している(清水展 1996:292)。さらに戦略的本質主義は現在、マイノリティ社会と国家のみならず研究者との間にも政治的な対立軸をつくりだしている。特定の「伝統項目」を強調して、土地権や生業権、そしてアイデンティティをめぐる政治的状況を有利に展開させようとする先住民などのマイノリティ社会の戦略的本質主義の主張や「対抗的文化の創造」は、ポストモダン人類学(小田 1996: 811)が批判する本質主義の「伝統の発明」「文化の構築」と同義である。このためマイノリティ社会は自らの主張を妨げるものとしてポストモダン人類学を政治的に批判するような事態が生じた。研究者が研究対象を「他者」として観る「まなざしの政治性」を自ら批判することからはじまったポストモダン人類学のアプローチは、本質主義への批判をめぐって皮肉にもマイノリティ社会からの批判に晒されることとなった。小田が指摘するように、本質主義と構成主義(文化の構築論)の対立をめぐって研究者が直面している政治的ジレンマは、マイノリティ社会の戦略的本質主義をも批判することができるかというものである(小田 1996: 812)。こうした対立やジレンマによって、研究の方向性がマイノリティ社会の意向にそったかたちで提示されるという事態を招いていることも確かである。またこれまでマイノリティ社会や研究者から一方的に批判の矢面に立たされてきた国家は、マイノリティ社会の主張を「多文化主義」などの国家政策の一部として取りこみ、国際社会における国益の主張と擁護のための国家戦略として利用する巧妙さもみせている(鈴木 1997、杉本 1997)。研究者がフィールドで直面するこのような政治的ジレンマは、文化人類学にのみ惹起した現実ではなく、日本考古学にも現前している問題である。これまで日本の考古学者は、文化を「生きる」人びととフィールドを「生きる」考古学者の間に起こるさまざまな問題を、学問に内在化させるかたちで議論を深めることなく、考古学が政治性からは独立して存在すると前提しながら過去の再構築を続けてきた。考古学者によってノスタルジックに、現実を「脱コンテクスト化」して再構築された過去は、考古資料とそれを生きた人びとを「分析対象」「他者」としてみなすことによって生み出された本質主義的な表象である。われわれが目指すものは、ふたたび小田が指摘するように、本質主義と構成主義の対立というナショナリズム = 「アイデンティティの政治学」の枠内で行われる二者択一を超えたものでなくてはならない(小田 1996)。

7:ヘッドランドは共生関係についての生物学上の定義として以下のバリエーションがあるとしている。すなわち相利共生(mutualism)、協同(cooperation)、片利共生(commensalism)、すみわけ(amensalism)、競合(competition)、捕食(predation)、寄生(parasitism)である。生物学上の「共生」概念では互いに五分と五分の利益を得る関係から、一方的な隷属・捕食関係までを含んでおり、一般的にわれわれが想像する「互いの利益を尊重し合う親和的關係」だけではないということを中心に留めておく必要がある。相互依存共生関係モデルでヘッドランドが想定している狩猟採集社会と農耕社会の關係は、上の生物学の定義による「共生」のバリエーションのうちのいずれかに該当する。

8:「非文明」の歴史過程についての研究法の開発は、狩猟採集社会のみならず、いわゆる第三世界のポストコロナリアル状況のなかで、抑圧されている人びとや社会(その思想も含む)の歴史に対しても同時に行われなくてはならない。その際、抑圧され、周辺化された人びとや社会の歴史が、これまで第一世界の研究者が適用する支配的パラダイム(dominant paradigm)によって隠蔽されてきたことを理解できる感性は、第三世界をフィールドとする研究者にとって重要な資質である(Schmidt and Patterson 1995:2)。日本との経済格差によって視覚化された第三世界の抑圧的状況に対して、考古学者が少なくともも研究の分野では文化的収奪を行わないと、自らを律する倫理観を個人的に設定することは、支配的パラダイムに替わる理論的枠組を構築するための契機にはなっても、その確立に向けた力にはならない。個人的倫理観の感性を学問的枠組に内在化させることによって、支配的パラダイムによって隠蔽されてきた歴史を掘り起こす理論的枠組の確立が可能になるものと考えられる。

## 文献目録

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳 NTT 出版

青柳洋治・田中和彦

1985 「カガヤン川流域の貝塚土器をめぐる二、三の問題」『上智アジア学』3:81-129

青柳洋治・M. L. Aguilera, Jr.・小川英文・田中和彦

1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』6:63-104

1989 「ラロ貝塚群の発掘(2)」『上智アジア学』7:101-131

1991 「ラロ貝塚群の発掘(3)」『上智アジア学』9:49-137

Aoyagi, Y. M. L. Aguilera, Jr. H. Ogawa and K. Tanaka

1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell Midden in Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9:127-155.

青柳洋治・小川英文・田中和彦

1996 「フィリピン北部、マガビット貝塚の発掘と出土土装身具」国分直一先生米寿記念論文集 劉茂源編 『ヒト・モノ・コトバの人



類学』:372-383、慶友社

- Aoyagi, Y., H. Ogawa and K. Tanaka  
1998 Excavation, and Ornaments Discovered at the Magapit Shell-midden Site, in Northern Luzon. 『上智アジア学』 15:167-180.
- Boserup, E.  
1967 *The Conditions of Agricultural Growth*. Chicago : Aldine. (1975 『農業成長の諸条件』安沢秀一、みね子訳、ミネルバ書房)
- Burch, Ernest, Jr.  
1994 The Future of Hunter-Gatherer Research. In Burch, E., Jr. and L. J. Ellanna (eds.) *Key Issues in Hunter-Gatherer Research*:441-455. Oxford: Berg Publishers.
- クリフォード、ジェイムス ジョージ・マーカス(編)  
1996 『文化を書く』春日・足羽・橋本・多和田・西川・和爾訳、紀ノ国屋書店
- Diaz-Andreu, M. and T. Champion (eds.)  
1996 *Nationalism and Archaeology in Europe*. London: UCL Press.
- Gorman, C.  
1971 Prehistoric Research in Northern Thailand: A Cultural Chronological Sequence. Unpublished Ph. D dissertation, University of Hawaii.
- Härke, Heinrich  
1998 Archaeologists and Migrations. *Current Anthropology* 39:19-46.
- Headland, T. N.  
1986 Why Foragers Do Not Become Farmers: A Historical Study of a Changing Ecosystem and Its Effect on a Negrito Hunter-Gatherer Group in the Philippines. 2vols. Unpublished Ph.D dissertation. University, Microfilms International, Ann Arbor.  
1987 The wild yam question: How well could independent hunter-gatherers live in a tropical rain forest ecosystem? *Human Ecology* 15: 463-491.
- Headland, T. N. and R. C. Bailey  
1991 Introduction: Have Hunter-Gatherers Ever Lived in Tropical Rain Forest Independently of Agriculture? *Human Ecology* 19:2:115-122.
- Headland, T. N. and L. A. Reid  
1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30:43-66.  
1991 Holocene foragers and interethnic trade: A critique of the myth of isolated independent hunter-gatherers. In Gregg, S. A. (ed.) *Between Bands and States*: 333-340. Center for Archaeological Investigations. Southern Illinois University at Carbondale. Occasional Paper No.9.
- Heine-Geldern  
1932 Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier. *Anthropos* 27:543-619.  
1958 A Special List of Tribes of Primitive Hunters and Food-Gatherers. *Bulletin of International Committee on Urgent Anthropological and Ethnological Research* Vol. 1: 13-47, International Committee on Urgent Anthropological and Ethnological Research, Vienna.
- Hutterer, K.  
1976 An Evolutionary Approach to the Southeast Asian Cultural Sequence. *Current Anthropology* 17: 221-242.  
1982 Interaction between Tropical Ecosystem and Human Foragers: Some General Considerations. Working Paper. Environment and Policy Institute, East-West Center. Honolulu.  
1983 The natural and cultural history of Southeast Asian agriculture. Ecological and evolutionary considerations. *Anthropos* 78: 69-212.
- 池谷和信  
1996 「伝統主義者」と「修正主義者」とのあいだの論争をめぐって-カラハリ・サン研究の事例-」 『民博通信』 No.73: 64-77
- Jones, S.  
1997 *The Archaeology of Ethnicity. Constructing identities in the past and present*. London and New York. Routledge.
- Kent, S.  
1992 The Current Forager Controversy: Real Versus Ideal Views of Hunter-Gatherers. *Man* 27: 45-70.
- Kennedy, J.  
1977 A Course toward Diversity: Economic Interaction and Cultural Differentiation in Prehistoric Mainland Southeast Asia. Unpublished Ph.D dissertation. University of Hawaii.
- Layton, R.  
1989 Introduction: conflict in the archaeology of living traditions. In Layton, R. (ed.) *Conflict in the Archaeology of Living Traditions*: 1-31. London and New York: Routledge.
- Lee, R. B.  
1992 Art, Science, or Politics? The Crisis in Hunter-Gatherer Studies. *American Anthropologist* 94: 31-54.
- Lee, R. B. and I. De Vore (eds.)  
1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine.
- 松井透  
1991 『世界市場の形成』岩波書店
- 西川長夫  
1995 『地球時代の民族 = 文化理論 - 脱「国民文化」のために』新曜社
- 小田亮  
1996 「ポストモダン人類学の代価 - ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」 『国立民族学博物館研究報告』 21-4 : 807-875
- 小川英文  
1996 「狩猟採集民ネグリの考古学- 共生関係が提起する諸問題 -」 スチュアート ヘンリ(編) 『採集狩猟民の現在』 : 183-222、

- 言叢社
- 1997 「貝塚洪水伝説－フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」 『東南アジア考古学』 17: 119-166
- 1998 Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest. 『東南アジア考古学』 18: 123-166
- 1999a 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」 『民族学研究』 63-2:192-202
- 1999b Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学』 19: 93-114
- 1999c 「東南アジアと日本の貝塚の比較」 『季刊考古学』 66: 29-34
- 1999d 「東南アジア 発掘の歴史と考古学」 吉村作治(編) 『東南アジアの華 アンコール・ボロブドゥール』:平凡社
- 2000 (ed.) *Excavations of Lal-lo Shell Middens - Archaeological Studies on the Prehistory of the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines*. Report presented to the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Tokyo.
- Ogawa, H. and M. L. Aguilera, Jr.
- 1992 Data Report on the Archaeological Explorations in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. *Journal of the Institute of Religion and Culture* 10: 41-113, Kokushikan University, Tokyo.
- Peterson, J. T.
- 1978a *The Evolution of Social Boundary*. University of Illinois Press.
- Peterson, J. T. and W. Peterson
- 1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In Allen, J., J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul*: 567-599. New York: Academic Press.
- Russell, L.
- 1997 Focusing on the Past. Visual and Textual Images of Aboriginal Australia. In Molyneux, B. L. (ed.) *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology*: 230-248. London and New York: Routledge.
- ロサルド、レナート
- 1998 『文化と真実 社会分析の再構築』 椎名美智訳 日本エディタースクール出版部
- サイド、エドワード
- 1993 『オリエンタリズム』上・下 板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳 平凡社ライブラリー(1978 *Orientalism*. New York: Pantheon.)
- サーリンズ、マーシャル.
- 1972 *Stone Age Economics*. Chicago: Aldine.(1984 『石器時代の経済学』 山内昶訳、法政大学出版局)
- Schmidt, P. R. and T. C. Patterson
- 1995 Introduction: From Constructing to Making Alternative Histories. In Schmidt, P. R. and T. C. Patterson (eds.) *Making Alternative History. The Practice of Archaeology and History in Non-Western Settings*: 1-24. Santa Fe: School of American Research Press.
- Shott, M. J.
- 1992 On recent trends in the anthropology of foragers : Kalahari Revisionism and its Archaeological Implications. *Man*. 27(4): 843-872
- Silberbauer, G. B.
- 1991 Morbit Reflexivity and Overgeneralization in Mosarwa Studies: Reveiw of E. N. Wilmsen 1989. *Current Anthropology* 32: 96-99.
- 清水昭俊
- 1992 「永遠の未開文化と周辺民族-近代西欧人類学史点描-」 『国立民族学博物館研究報告』 17-3: 417-488.
- 清水展
- 1996 「存亡の危機から民族の新生へ」 『民族学研究』 61-2: 277-294
- Snow, B. E. and R. Shutler
- 1985 *The Archaeology of Fuga Moro Island: New Approaches for the isolation and explanation of diagnostic ceramic assemblages in Northern Luzon, Philippines*. Cebu City: San Carlos Publications.
- Snow, B. E., R. Shutler, D. E. Nelson, J. S. Vogel and J. R. Southon
- 1986 Evidence of Early Rice Cultivation in the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 14: 3-11.
- Solway, J. S and R. B. Lee
- 1990 Foragers, Genuine or Spurious?: Situating the Kalahari San in History. *Current Anthropology* 31: 109-146.
- スチュアート ヘンリ
- 1996a 「序」 スチュアート ヘンリ(編) 『採集狩猟民の現在』 : 3-10、言叢社
- 1996b 「現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義」 スチュアート ヘンリ(編) 『採集狩猟民の現在』 :125-154、言叢社
- 杉本良夫
- 1997 「ポスト・エスニック・マルチカルチュラルイズム」 西川長夫他(編) 『多文化主義・多言語主義の現在』 : 224-242、人文書院
- 鈴木清史
- 1997 「文化を創造する人びと」 西川長夫他(編) 『多文化主義・多言語主義の現在』 : 200-211、人文書院
- 田中和彦
- 1993 「フィリピン完新世・先鉄器文化編年研究序説」 『東南アジア考古学会会報』 13:173-209
- 1996 「ルソン島北部における方角石斧に伴う土器の検討－沈線による連続菱形式土器の検討－」 『東南アジア考古学』 16:149-160
- 1997a 「カトゥガン貝塚の発掘調査」 『東南アジア考古学』 17:210-225
- 1997b The Kite Photography of Bangag I Shell-midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学』 17: 197- 209
- 1998a Preliminary Report of the Archaeological Excavation of Catugan Shell-midden (Dombrique Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『千葉敬愛短期大学初等教育科紀要』 20: 149-177

- 1998b 「サン・ロレンソ III 貝塚(シリバン遺跡)の発掘調査とその問題」『東南アジア考古学』18:263-289
- 1998c Problems and Excavation of San Lorenzo III Shell Midden (Siriban Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Bulletin of Showa Academia Musicae* 18: 109-135.
- 1998d 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガグ I 貝塚の発掘調査と若干の問題」『上智アジア学』16: 171-211
- 1998e 「ルソン島北部、カガヤン川中流域、サンタ・マリア町、キナビガン村の土器作り」『環境情報研究』6: 123-152
- 1999a 「フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果」『季刊考古学』66: 75-78
- 1999b The Archaeological Excavation of Bngag I Shell Midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学』19: 71-92
- 東南アジア考古学会(編)
- 1994 『東南アジア・南中国貝塚遺跡データ集』東南アジア考古学会
- Veit, U.
- 1989 Ethnic Concepts in German Prehistory: a case study on the relationship between cultural identity and objectivity. In Shennan, S. J. (ed.) *Archaeological Approaches to Cultural Identity*: 35-56. London and New York: Routledge.
- ウォーラーステイン、イマニュエル
- 1991 『世界経済の政治学 - 国家・運動・文明』田中治男・伊豫谷登土翁・内藤俊雄訳、同文館
- Wilmsen, E. N.
- 1989 *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Kalahari*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Wilmsen, E. N. and J. Denbow
- 1990 Paradigmatic history of San-speaking peoples and current attempts at revision. *Current Anthropology* 31: 489-524.

## 狩猟採集民 Hunter-Gatherer Society

小川英文 Ogawa, Hidefumi

### 他者、そして過去表象としての狩猟採集社会

大航海時代以降、ヨーロッパ世界は新に「発見」された非ヨーロッパ世界の人々やその社会を、自己を規定するための認識対象として設定してきた。大航海時代以降の非ヨーロッパ世界は、ヨーロッパの自己認識のための「写し鏡」として「発見」された、一方的にまなざしを受ける「他者」としての位置づけを与えられていくこととなった。非ヨーロッパ世界における狩猟採集社会もその例外ではない。「他者」としての非ヨーロッパ世界の位置づけは、その後両者の「優劣」の差異として認識され、さらにその差異は時間における先後関係に布置されることとなる。他者認識におけるこのような枠組みは、近代の諸制度・システムが現在機能しているかたちに整備される時代、とくに19世紀以降に顕著である(Trigger 1988)。

大航海時代以前においても、ヨーロッパはすでに十字軍の遠征など、イスラム世界との関係において自己認識を共有しながら精緻化し、他者をまなざす主体としての位置を確立していた。しかし大航海時代を契機として、新大陸やアフリカ、アジアなど、イスラム世界以外の他者という認識対象がヨーロッパにもたらされることとなった。大航海時代の幕開けの時期においては、イスラム世界はヨーロッパよりも「進んだ」世界であった。しかしヨーロッパ世界は自己よりもさらに「遅れた」社会を新大陸やアフリカ、アジアなどに見出すことによって自らの先進性を確認していく。こうした大航海時代以降のヨーロッパの他者・自己認識の枠組みは、やがて武力によるイスラム世界の撃退によってさらに強化されることになる(加藤 1993)。

ヨーロッパが獲得した、先進性による他者・自己認識のかたちは、やがて19世紀に植民地主義の時代が到来し、ルイス・モーガン(『古代社会』1877)やフリードリヒ・エンゲルス(『家族、私有財産および国家の起源』1884)による社会進化論に立脚した「科学的客観性」によっていっそう強化される。すなわち非ヨーロッパ世界は「分類」の対象としてヨーロッパの「知」の認識枠組みに組み込まれ、「支配」の対象へと変貌していくこととなる。植民地支配の時代以前には、狩猟採集や農耕という生業の別、あるいはバンドや部族社会、また王国という社会的統合の度合いに対して「科学的」な関心が向けられることなく、非ヨーロッパ世界は一概に、裸身で、偶像を崇拜し、首狩りや食人の風習をもつ「野蛮人」の社会としてのイメージが増幅されることとなった。これら2つの世界は、野蛮に対する理性、「未開」に対する「文明」という二項対立の図式によって規定されていた(岩尾2000)。

しかしながら、他者としての非ヨーロッパ世界は、つねにヨーロッパ世界の否定的なまなざしに曝されてきたわけではない。トマス・モアの『ユートピア』やジャン＝ジャック・ルソーの「高貴なる野蛮人」イメージに描き出されているように、非ヨーロッパ世界の純粋・無垢で、自由で清純なイメージは、ときには自らがヨーロッパ世界に批判のまなざしを向ける認識枠としても定位されている。このように「未開」の非ヨーロッパ世界は、西欧世界にとっての「野蛮」と「高貴」という両義性の振幅のなかで対極的に認識されてきた(小川 1999a)。そして狩猟採集社会をはじめとする非ヨーロッパ世界諸社会のイメージに付与された肯定的イメージは、啓蒙主義の時代において終焉を迎えたわけではなく、下で述べるようにのちの時代になっても、「文明」に対して批判を加える際の対応物として仮構され続けてきた。

その後、植民地主義の時代に入ると、非ヨーロッパ世界は「支配」の対象として知の体系に組み込まれ、「科学的客観性」の醒めたまなざしに曝されながら、詳細に調査され、微細に分類され、緻密で膨大な資料として体系的に蓄積されることになる。そして民族誌がフィールドワークをもとにして記述され、人類学者の「主観的」解釈を排した科学的、客観的な他者へのまなざしの所産が、知の領域から公的に承認されるようになる。他者記述の構築物である民族誌は、専門的に「正しく」訓練された者の専有物となり、もはや植民地行政官や宣教師、旅行者の記述には価値がおかれなくなる。

他者表象の「科学的」方法が民族学において確立される頃にはすでに、社会進化論に立脚したモーガンやエンゲルスなどによって、非ヨーロッパ世界の多様な民族を時間の尺度のなかで体系化する作業が進められていた。そのなかで狩猟採集社会は、科学によって仮構された時間のもっとも「遅れた」時点に固定されつづけてきた。現在、われわれがいつも簡単に成し遂げてしまうような他者の了解のしかた、すなわち他者と自己との差異を時間的尺度に置き換え、自らの過去に布置する想像のしかたがこの時期に獲得されることとなる。博物館展示のガラスケースには狩猟採集社会が限られた時

代にしか登場してこない。国民国家を単位としてひとびとの「固有の来歴」が語られる近代以降の博物館展示においては、狩猟採集社会は石器や骨格標本、当時の生活の想像図やジオラマとともに、考古展示の最初のガラスケース、すなわちその国の歴史の初源に展示されている。しかしそれ以降の時代に関しては展示ケースに登場することはまずない。東南アジアなど、国内に狩猟採集社会が現存する国々であっても、考古展示では農耕開始以降のその国の歴史には登場してこない。博物館での狩猟採集社会の展示は、技術的差異を優劣の差異に置き換え、それを近代になってわれわれが獲得した単線的な時間の流れに配置するという他者の解釈のしかたを明確に反映している(小川 2000a)。

近代国民国家が成立して以降、イデオロギー装置としての役割を担った博物館において、考古展示で強調されるのは、国民文化の「純粋性」が歴史を遡って発見されるのとは逆に、むしろ、初源の「原始性」からいかにして今日の文明へとたどり着いたかという道程の方である。国民文化が他の国民文化との差異において希求する「純粋性」や「固有性」は、現在の狩猟採集社会の世界システムにおける周辺的位置にも過去の「原始性」にも帰着することはない。狩猟採集社会が国民の歴史の最初のガラスケースに登場する姿は、ただその国の来歴の古さを強調するためである。「はじまり」と「現在」以外の時間においては、「歴史」の存在を認められていない狩猟採集社会研究の現状は、ポスト植民地主義と国民国家の枠内における考古学研究的限界を示している。農耕社会に歴史の主役の座を譲って以降、「文明」への方向性をもたない狩猟採集社会の今日までの足跡は、国民国家の歴史から排除・隠蔽され、研究のための理論的枠組みすら構築されていない状況にある(小川 1999a, b)。

考古学研究的場で取り上げられ、議論されてきた遺物は、考古学者によって「文明」の方向性をもつと解釈された遺物である。考古学では遺跡から出土した遺物全体の中からある特定の遺物のみが取り上げられ、再構成される。その際「文明」の方向性に沿った遺物の取り上げ方、技術の進歩の方向性に沿って選択された遺物のみが強調されているのが現状である。では逆に考古学者の取舍選択の網の目にかからなかった、たとえば農耕社会出現以降の狩猟採集社会の歴史過程における遺物の再構成の方法や理論的枠組みについては、これまでほとんど議論されることはない。たしかに発掘された遺物を時間の経過にそって並べてみた場合、遺物に反映される技術的变化は発展的な様相を示すのが一般的であるが、考古学者が遺物の技術的变化を発展の連鎖として提示するとき、「文明」へとねらいを定めてばく進する時間の弾道の軌跡に技術体系や社会を位置づけようとする意図を見出すことができる(小川 1999a, 2000a)。

### 狩猟採集社会の両義的他者イメージとカラハリ論争

すでに上で述べたように狩猟採集社会は、西欧世界によって他者として表象される際に、「野蛮」と「高貴」という両義性の振幅のなかで対極的に認識されてきた。その後、民族学(文化人類学)がフィールドワークをベースとする科学として確立され、考古学が文字以前の国民国家の来歴を現在へと結びつける役割を担う時代以降も、この他者の認識枠組みに変化はない。この点についてフィリピン考古学における近年の研究事例をみてみよう。

フィリピン、ルソン島北東部のパラナン(Palanan)で狩猟採集民アグタ(Agta)の民族・考古学の調査を行っていたウォーレンとジェーン・ピーターソン夫妻は、今日アグタと農耕民との間にみられる食料、労働力、土地の交換による相互依存関係をもとにして、狩猟採集社会が先史時代から現在まで存続してきた歴史過程を説明する「交換適応」モデルを提示した(Peterson and Peterson 1977, 小川 1996, 2000a)。このモデルは狩猟採集社会と農耕社会が、それぞれの技術によって、競争(competition)を避けながら異なった自然環境(低地と山地)を利用し、互いに不足する資源を交換によって補い合うという生業戦略で、結果的に2つの社会が適応、存続していくというものである。交換を媒介として互いに労働投下量を低く抑え、技術革新を推し進めることなく、生産の絶えざる集約化から免れ、低い技術レベルで人口を環境収容量(carrying capacity)内に維持することが可能となる。このような相互依存の適応戦略によって、狩猟採集社会と農耕社会はひとつの共存のシステムをつくりあげてきたため、結果的に狩猟採集社会が現在まで存続したとピーターソン夫妻は説明する。交換適応モデルは、ボズラップが提示した、農耕と定住の結果増加した人口を支えるため、絶えざる技術革新と労働の集約化を必要とする、農耕社会の発展モデル(ボズラップ 1967)とは際立った違いをみせている。農耕を開始した人類はその後「文明」を築き上げることになるが、生産の集約化という絶えず「膨張」するシステムを維持し続けなくてはならなかった。いっぽう交換適応モデルでは、狩猟採集社会と農耕社会がひとつのシステムとして「膨張」を抑えた、経済的・社会的均衡(equilibrium)状態を獲得することが可能となる。

しかしこのモデルの問題点は、狩猟採集社会を安定的で、静態的な、変化のない社会に封じ込めようとしている点である。交換を媒介とする相互依存関係が農耕社会との間で実践されるため、それまで東南アジアの狩猟採集社会の存続の説

明としてハイネ・ゲルデルンによって提示されていた「隔離モデル」とは異なり、狩猟採集社会と外部との機能的関係を説明しているようにみえるが、実際は狩猟採集社会と農耕社会をともにひとつの閉鎖系のなかに封じ込めている。「交換適応モデル」は、プロセス考古学の新たな研究の枠組みによって、隔離モデルを乗り越えるという目的をもっていたが、それにもかかわらず相互依存関係で結ばれた、技術的背景の異なるふたつの社会を、ひとつの安定した、長期間にわたって均衡状態を保つシステムとして提示したため、そのシステム外部との影響関係を論じていないという点では、かたちを変えた「停滞論」すなわち「時空間の均質性」の提示となってしまった。隔離モデルの停滞論を打破しようとして構築された交換適応モデルが提示したものは、結局かたちを変えた隔離モデルとなってしまった。

その理由を考えるために70年代の狩猟採集社会研究の潮流を振り返ってみよう。*Man the Hunter* (Lee and De Vore 1968) でリチャード・リーらによって提示されたブッシュマン社会のモデルは世界中の考古学者に多大な影響を与えた。その結果、このモデルが生み出した、狩猟採集社会が低い労働投下量で高い生活水準を享受し、自然環境の諸条件に密接に適応するかたちで柔軟に構成された平等主義的共同体であるというイメージは、考古学者に好意的に受け入れられ、世界各地の先史狩猟採集社会研究に導入された。リー自身は現在の狩猟採集社会を「石器時代の生き残り」とすることは慎重に避けているが、それでも過去から現在まで変化のない社会とみなす時間の観念(timeless sense)で狩猟採集社会をとらえていたという指摘もある(Shott 1992:845)。またこの時期からはじまる民族考古学(ethnoarchaeology)によって生み出されたモデルもカラハリ・モデルの影響を強く受けており、交換適応モデルもその一例と考えることができる。さらに時代的風潮としてこの時代の人びとに影響力をもっていたのは、ベトナム戦争以降、輝かしいはずの「文明」へ投げかけられた大いなる疑問や幻滅である。それによって多くの考古学者が「非文明世界」における自然と人間との調和や均衡的關係にユートピア像を想い描く原因となり「高貴なる野蛮人」イメージを狩猟採集社会に重ね合わせるようになったものと考えられる。

西欧世界が「文明」社会に幻滅や疑問を感じるようになって、狩猟採集社会は依然として自己(西欧=文明)と対峙する「野蛮な他者」の世界として表象されつづけてきた。西欧世界が自己認識の投影物として、狩猟採集社会のイメージを野蛮とユートピアの間に往還させても、それは西欧という主体のなかで繰り返し広げられる対象の一人歩きの虚しい運動であった。プロセス考古学によって新たな理論的枠組みと方法が導入されても、東南アジアにおける狩猟採集社会と農耕社会が同時に存在し、相互関係を保持してきた可能性のある数千年間の歴史は隠蔽されたままであった。狩猟採集社会の「隔離性」や「均質な時空間」の虚構性に対する議論が活発になるには - 例えばカラハリ論争のように -、これまで科学的客観主義によって研究対象とされてきた狩猟採集社会自体から、一方的な表象のあり方に対する異議申し立てが盛んとなり、それに対して研究者が反応するようになる時期までまたなければならなかった。

ここでカラハリ論争の概要を説明しよう。リーらによって構築されたカラハリ・モデルを批判する修正主義者によれば、かつてのブッシュマンはアフリカ東海岸の交易集団との交流をもち、インド洋交易の末端で原材料の調達に携わっていたが、大航海時代以降このネットワークが断ち切られてから、徐々にカラハリ・モデルで展開されているような「自立的」生活をおくるようになったとされている。けっして先史時代からずっと他集団との交流をもたずに生活していたわけではないとウィルムセンらは主張している(Wilmsen and Denbow 1990:499-503)。カラハリ・モデルで展開されるブッシュマンの生活は、リーらが行った調査時にのみに適合する一事例であって、それ以前のブッシュマン社会は外的世界との接触によってさまざまな影響を受けながら生活してきたのであって、けっして旧石器時代から隔離されてきたのではないとしてカラハリ・モデルの修正を迫るものであった。狩猟採集社会の「純粋」な「伝統性」の保持か、喪失かをめぐる激しい議論の応酬が展開する(Wilmsen 1989, Solway and Lee 1990, Wilmsen and Denbow 1990, Silberbauer 1991, Lee 1992, Kent 1992, 池谷 1996)。論争の決着は過去に近隣の世界と交流をもっていたことを示す遺跡と現在の狩猟採集社会との間になんらかの関係を検証することに求められ、伝統主義者と修正主義者双方から考古学へ強い期待がかけられることとなった。

伝統主義者が行ってきたように、より「自立的」「伝統的」で、外界から「隔離」された「純粋な」狩猟採集社会をさがし求め、それをモデルとして過去を再構築しようとする姿勢の背後には、狩猟採集社会の周囲に存在する社会との「交流」を、「伝統」や「純粋性」の「汚染」とみなす視角が潜んでいる。目の前の狩猟採集社会から「伝統項目」だけを恣意的に抽出し、外部世界からの「汚染」を排除して先史時代にあてはめるためのモデル構築の材料にするとしたら、それは世界システムのなかで周辺化されている狩猟採集社会を現実から切り離す一方的な態度にすぎないであろう。これは近代の影響による「汚染」を狩猟採集社会から防ぐために、「民族誌的現在」という静止した時間に閉じ込めて観察、記述する方法を用い、他者表象をつづけてきたわれわれの問題として提示されなくてはならない(清水 1992)。

文化(社会)人類学では現在、民族の文化には本質があってこの本質を表象したものが文化であるという考え方、すなわち文化に対する本質主義(エッセンシャルイズム)への反省がうながされている(サイード 1993、清水 1992、クリフォード、マーカス 1996、ロサルド 1998)。これまで調査や研究の「対象」として、また「静的」なものとして、研究者の側から一方的なまなざしを受けてきた「民族」は、国家のなかで「国民」やあるいは新たなかたちの集団(エスニック・グループ)へとダイナミックに再編成されつつあるのが現状である。

カラハリ・モデルはあまりにも多くの狩猟採集社会を研究する人類学者や考古学者の心をとらえてきたために、論争の衝撃は大きかった。それはカラハリ・モデルが現在ですでに、これら周辺民族の現状を記述し、説明するには十分ではなくなったということをも意味している。修正主義者の問題提起は、モデルが依拠しているような「伝統的」で、外界から「隔離」された、「自立的」な狩猟採集社会自体が現在世界に存在しているのかという疑問から発している。われわれが取るべき論争のエッセンスは、研究者が研究対象である社会や文化に対して投げかける他者へのまなざしの問題、われわれの自己認識の枠組みを獲得するために他者を発明してきたという大きな問題にまで踏み込むことになった。しかし論争の決着には細かいデータの積み重ねが必要である。論争は歴史的に決着をつけなければならないことが当事者双方で確認され、その手段である考古学への期待とそれを担う責任は大きい。

## 文献目録

ボズラップ, E.

1967 『農業成長の諸条件』安沢秀一、安沢みね子訳 ミネルバ書房

岩尾龍太郎

2000 『ロビンソン変形譚小史』みすず書房

加藤 剛

1993 「民族誌と地域研究 - 他者へのまなざし」、矢野暢編 『地域研究の手法』: 97-137, 弘文堂

池谷和信

1996 「伝統主義者」と「修正主義者」とのあいだの論争をめくって-カラハリ・サン研究の事例-』『民博通信』No.73:64-77

Kent, S.

1992 The Current Forager Controversy: Real Versus Ideal Views of Hunter-Gatherers. *Man* 27:45-70.

クリフォード、ジェイムス ジョージ・マーカス(編)

1996 『文化を書く』春日・足羽・橋本・多和田・西川・和爾訳、紀ノ国屋書店

Lee, R. B. and I. De Vore (eds.)

1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine:

小川英文

1996 「狩猟採集民ネグリの考古学-共生関係が提起する諸問題-」、スチュアート ヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』: 183-222, 言叢社

1999a 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』63-2:192-202.

1999b 「東南アジア 発掘の歴史と考古学」、吉村作治編 『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』: 75-89、平凡社

2000a 「狩猟採集民と農耕民の交流 - 相互関係の視角 -」、小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店

2000b 「総論 交流考古学の可能性」、小川英文編 『交流の考古学』: 1-20、朝倉書店

ロサルド、レナート

1998 『文化と真実 社会分析の再構築』椎名美智訳 日本エディタースクール出版部

サイード、エドワード

1993 『オリエンタリズム』上・下、板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳、平凡社ライブラリー

Shott, M. J.

1992 On recent trends in the anthropology of foragers: Kalahari Revisionism and its Archaeological Implications. *Man* 27(4): 843-872.

Silberbauer, G. B.

1991 Morbit Reflexivity and Overgeneralization in Mosarwa Studies: Reveiw of E. N. Wilmsen 1989. *Current Anthropology* 32: 96-99.

清水昭俊

1992 「永遠の未開文化と周辺民族-近代西欧人類学史点描-」『国立民族学博物館研究報告』17-3: 417-488.

Solway, J. S and R. B. Lee

1990 Foragers, Genuine or Spurious?: Situating the Kalahari San in History. *Current Anthropology* 31: 109-146.

Trigger, B.

1988 *A History of Archaeological Thought*. Cambridge: Cambridge University Press

Wilmsen, E. N.

1989 *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Kalahari*. Chicago: The University of Chicago Press.

Wilmsen, E. N. and J. Denbow

1990 Paradigmatic history of San-speaking peoples and current attempts at revision. *Current Anthropology* 31 : 489-524.

## ナショナリズム Nationalism

小川英文 Ogawa, Hidefumi

ナショナリズムという語を見て、読者はすぐに戦前の日本の超国家主義やドイツのナチズムを思い浮かべ、少々過敏に反応されるかもしれない。そして戦前の反省から出発した戦後の日本考古学の動向(=非政治性の標榜: Faucett 1995, Tsude 1995, Habu and Faucett 1999)から判断して、なぜいまナショナリズムと考古学との関係を議論しなくてはならないのかという疑問を抱くかもしれない。ここでは戦前の極端な事例を非難することが目的ではない。極限の事例をことさらとりあげても、日常性のなかに潜む問題は解決されない。むしろ、現在われわれがどのようなしかたで「過去」についてのイメージを生み出しているのか、そしてその際、どのような学問的枠組み(支配的パラダイム)がわれわれに影響しているかを考察し、自らが「自然なもの」、「自明なもの」として、これまで問題とされてこなかった部分を明らかにするほうが、考古学の将来の可能性に寄与するものと考えられる。

考古学がどのようにナショナリズムと関係しているのかを考えると、近代国民国家とナショナリズムの成立、ナショナリズムの性格と機能、そして現在におけるナショナリズムの変貌と限界について言及しなくてはならない。そして過去へさかのぼって歴史を再構築するという考古学の営みが、近代のはじまりから現在まで、ナショナリズムとどのような関係を保ってきたかを解き明かす必要があるだろう(Kohl and Faucett 1995, Diaz-Andreu and Champion 1996, Molyneux 1997)。

考古学がナショナリズムに関与するのは、考古学者によって過去が「再構成」される際に起こる問題、すなわち表象の場における問題である。過去はどのような場=空間において表象されるのか。考古学が近代国民国家において誕生したことを想起すれば、その回答はおのずと明らかである。しかし国民国家において多様な性格をもつナショナリズムが「過去表象」を生み出すメカニズムについては、やや複雑な説明が必要となる。

ナショナリズムとは何か、一言で述べるとすれば、それは国民国家における国民のイデオロギー的統合(国民化)のための思想であり、またその運動といえることができる。そして国民のイデオロギー的統合において、「文化」が重要な役割を果たしてきた。この場合「文化」とは、国民国家内の空間において均質化・同質化されるべき「国民文化」を指し、言語、習慣、服装、宗教、時間感覚、味覚、音感、身振りなどから、思想、知識、芸術、文学、科学に至るまで、本来、多様な人びとの生活基盤の領域を、国家にとって最も望ましい方向へと統合された「文化」のことである。そして国民国家成立後に設けられた国境の内側に住む多様な人びとやその文化を均質なものに変え、ひとつの「国民文化」に統合していくためには、ナショナリズムというイデオロギー装置だけでは不十分である。それには文化的統合を可能なものにする諸制度が整備されていなくてはならない。それらの諸制度、すなわち国家装置には、政府、学校(教育)、軍隊、裁判所、警察、刑務所、戸籍、病院、交通・通信網、税制、貨幣、土地制度、度量衡、新聞、博物館、劇場、博覧会、祝祭などがあげられる。民衆や大衆を「国民化」するためには、生活のあらゆる局面にわたる身体的・イデオロギー的な管理・維持と再生産を可能にする諸制度・装置が不可欠となる。

ナショナリズムが国民国家において文化的、イデオロギー的な国民統合(=国民化)を推し進めるとき、もうひとつ考慮に入れておかななくてはならない要素は、国家や国民への自己同一性(アイデンティティ)である。民衆や大衆が、生れ落ちた「国家」や「国民」に自らを同一化する際には、彼らによってアイデンティティが自然に表明され、「国民」としての共属意識が形成される必要があった。そして国民としてのアイデンティティは、上で述べたようなイデオロギーと国家の装置によって創出され、より強化されていく。その際、国民的なアイデンティティには、「民族」としての「歴史的な連続性」と「純粋性」、「伝統文化」の「固有性」などとの強い結びつきがしばしば強調される。ひとつ事例をあげて考えてみよう。ドイツの哲学者フィヒテは、ナポレオンの軍隊に占領され、打ちひしがれたドイツ国民の士気を鼓舞するため、14 回にわたる愛国的講演を行った(『ドイツ国民に告ぐ』)。この講演でフィヒテは、ドイツ国民としての歴史的な古さ、民族的純粋性、ドイツ語の言語的純粋性、そして他の国民に見られない「生命の根本的源泉」の存在を強調する。さらに、個人の生が根本的源泉に合流することによって永遠の祖国愛を獲得し、「根源的民族(Urvolk)」としての固有性と自由な精神によって、新たな世界の建設に貢献することを呼びかけた(鶴飼 1997)。この有名な講演は日本でもたびたび翻訳され、近代日本の決定的な節目でしばしば肯定的に参照されて、新たな「国民の創生」に重要な役割を果たしてきた(西川 1995、イ・ヨンスク 1995)。しかしここで重要なのは、近代国民国家形成の出発点で、国民と国家の「原初性」と「永続



性」が強調され、過去の歴史と伝統が「国民」のアイデンティティの拠り所となっていることである。

国民国家成立以前までは、地域的共同体の成員としての共属意識やアイデンティティしかもちあわせていなかった民衆・大衆が、新たに「国民」として「創生」されるときには、国民国家の国境内における民衆・大衆の歴史的記憶が動員され、伝統的文化の独自性・固有性が強調される。このような記憶や伝統の均質化は、国民国家創設とその維持にあたって、たびたび呼び起こされてきたために、われわれもそれらに十分慣れ親しんでしまっていて、すでに国家の歴史的正当性、民族(国民)の純粋性、文化的伝統性を「自然なもの」として受け入れてしまっており、そのこと自体が「事実」なのかということに疑問を差し挟もうともしなくなっている。その後、西欧で作られた国民国家モデルは世界中で受け入れられ、今日、国家間では互いに自らの独自性や固有性を主張しあう事態が現出するようになってきている。そして「国民」としてのアイデンティティは、「伝統の創出」と「差異」を国際的に競いあうことによって、より強固なイデオロギーとして鍛え上げられる(Jones 1997:2-3, Diaz-Andreu and Champion 1996:18-19, Kohl 1998)。

さて考古学とナショナリズムとの関係を述べる前に、前提となる国民国家やナショナリズムを取り巻く国家システムについて説明を長々と続けてきた。「国民の創生」には、国家とイデオロギーのさまざまな装置を駆使することによって、それまでの地縁的共属意識を、国民としての新たなアイデンティティへと変換することが要求される。愛国心や国への忠誠心を国民の心や身体に浸透させるとき、民族の過去と現在との歴史的連続性や文化的伝統の継続性が強調された。その際、考古学は「国民の来歴」を過去から現在まで、「正しく」跡づける役割を担っている。考古学がナショナリズムに関与するのはまさにこの点についてであり、考古学も国民国家におけるイデオロギー装置の一部として、国民意識の維持・強化を図り、ナショナリズムの思想と運動に寄与しているといえる。遺物や遺跡が展示される博物館を例に考えてみよう。アンダーソンが述べているように、博物館が国ごとに造られ、そこで「国民の来歴」の物語を展開するかたちで制度として成立して以来、国民文化的な神話の生成と流通に重要な役割を果たしてきた(アンダーソン 1997: 第 X 章)。「固有な」国民性は、「過去に向かって掘り進めれば進むほど」(西川 1995:156)純化されていく。抽出された国民性のエッセンスは、少数民族の「伝統」や考古遺物のなかに今日的残滓として保存されており、それを国民全員が共有していることを、博物館を訪れる人々に認識させる。博物館は、「固有な来歴」をもつ国民が共に暮らす、「均質な空間」を創出する強力な媒体として存在してきた(吉見 1992, Russell 1997)。

以上述べてきたように、それまで自明なもの、自然なものとしてきた「国民国家」自体を相対化することが可能となったのは、実はごく最近のことである。国民国家が分析概念として脚光を浴びることとなったのは、80年代以降のことであった。その背景には、冷戦構造の崩壊をはじめとする80年代の歴史の激動があるが、それらの経験を通じてはじめて、「国家」が「宿命」としてのあり方から「脱自然化」されることとなった(上野 1998: 32)。巨大な国家の崩壊をひとつの契機として、市民社会の理想や理念に反して肥大化した国家の今日的役割や市民社会の自律性に対する疑念が、国民国家の相対化をいっそう助長していった。そして国家の崩壊は、冷戦の一方の側のみが現実に経験したものだけではなく、われわれが属してきた国家や社会をも含めて、国境線を越えようとする国内外のさまざまな人びとの動きによっても引き起こされている。国境を挟んで行われる人びとの大量移動や情報の伝達は、国家を超えた問題群に対してグローバルな視点から対処する必要性をわれわれに迫っている。こうした現実世界での大きな変化を経験することによって、80年代以降、ポストモダンの諸思潮が生まれ、そのひとつとして国民国家やナショナリズムの研究が大きな奔流を生み出している。国家が「宿命」としてのあり方から「脱自然化」され、ようやく広い視野で見ることができるようになったという解放感と喜びが、国民国家論に生気を吹き込むこととなった。

こうしたポストモダンの思想の影響を受けた新たな国民国家論の枠組みのなかで、ナショナリズム研究も大きな進展を向かえることになった。ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』のなかで、近代国民国家という均質な空間と同質的な文化を生きる「国民」が創出される過程について論じている。そこでは国家とイデオロギーの装置によって、同じ言語、同じ時間、同じ記憶が形成・維持され、それらを国民が共有する。さらに国民国家の「均質な空間」を維持するためには、印刷技術、言語空間、交通・通信手段などが一体となって国民化の国家装置を支えている。こうしてわれわれ国民は、今まで出会ったこともない人びとであっても、国家内の同じ空間に生活する以上、同じ心性・言語・記憶・経験を共有しているものと仮定、あるいは想像することが可能となっている。レトリックにおいて「提喻」と呼ばれる想像のしかた、すなわち個から全体を仮構する想像のあり方は、均質で透明な空間(国民国家)においてはじめて可能となる。

また国民的アイデンティティを支えている「伝統」や「歴史的記憶」が、実は国民国家の形成過程で「創造」「発明」されたものであることをわれわれに呼び覚ましたのはエリック・ホブズボームである(ホブズボーム 1992)。ホブズボーム

が提示する「伝統の発明」とは、国民国家を形成する主要な民族集団が、国民国家成立以前の彼らの歴史的記憶や文化要素が誇張されたかたちで「国民」の歴史や伝統としてクローズアップされる行為を指している(酒井 1993)。「伝統の発明」が公的な場や教育によってくりかえし「国民」に反唱されることで、「創られた伝統」が「自然化」されていく。

アンダーソンやホブズボームが「想像された共同体」、「伝統の発明」として提示する国民国家の虚構性に対しては、ナショナリズム研究における歴史主義的観点からの批判がアンソニー・スミスによってなされている(スミス 1999)。しかしそうした批判も含めて、ナショナリズム研究は現在、国民国家の境界線崩壊の危機、その内側に無理やりに押し込まれたヘテロフォニックな力の世界的噴出など、21世紀の問題に直面して、理論的な研究の進展が期待されているのが現状である(西川 1995, 1998)。

このような最近のナショナリズム研究の成果を参照しながら、われわれ考古学者が過去を表象する行為を振り返ってみよう。われわれは現在の到達点から、研究対象となっている時代へと遡り、そこから折り返して今一度現在へと舞い戻る。返ってくる際に考古学者がたどった道筋は時間の流れに沿っているが、しかしその道筋には必ず一定の方向性が定められている。すなわち断続的に「飛び石」をたどるように散在している考古学的事象を、ひとつの意味ある方向へと「接ぎ木」しながら現在までの道程をこなしていくのである。ここで問題となるのは、考古学者の「接ぎ木作用」は、すべての事象を包み込む時間の弾道が、あたかもそのエネルギーのすべてを「文明(現時点)」という一点の方向へのみ注いで突き進んできたかのような錯覚を与える点である。「文明」の力を信じてきた時代には、世界のさまざまな地域で、競って考古学的事象の「接ぎ木」が試みられた(あるいは今でも盛んに行われている)。その反面、「飛び石」や「接ぎ木」の過程で、考古学者に無視された考古遺物も数え切れないほどある。アンダーソンは、考古学の「接ぎ木作用」を「シリーズ化(serialization)」と呼び、国民国家出現以前の遺跡や歴史上の人物が、ナショナリズムの先駆として表象され、現代に結びつけられる過程を描き出している(アンダーソン 1997:298-301)。また、現在の特定の「民族集団」や「国民」が、特定の「考古文化」と安易に結びつけられる危険性も指摘されている(Veit 1989:42, Jones 1997:3-5, Härke 1998:56)。これらは考古学という学問が近代、とりわけ国民国家の成立とその後に行われた諸制度の整備の時期と緊密な関係にあることを示している。考古学の見直し、相対化が行われるべき現在、「飛び石」や「接ぎ木」に代わる考古学研究の実践とはどのようなものであろうか。それは少なくとも「文明」への方向性を志向した考古学者によって過去へ置き去りにされ、無意識であれ、意図的であれ、「隠蔽」されてきたものを拾い上げることにあると考えても間違いはない(Trigger 1984, Layton 1989, Schmidt and Patterson 1995)。「近代の機制」としての、そして国民国家のイデオロギー装置としての考古学は、その成立から現在までの歴史のなかで、一度批判を試みる必要に迫られている(小川 2000a, b)。その試みは、文化の問題を取り扱う他の学問分野では、自らの再生を賭した論争を呼び起こすというかたちですでに始まっているが(例えば、清水 1992、小田 1996、岩竹 1996、クリフォード他 1996、ロサルド 1998)、日本の考古学では未だ始まっていないのが現状である。

ナショナリズムのコンテクストのなかで歴史や伝統は国家という時空間において社会的に構築される。吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡など「地方」の遺跡の発見が、日本全体の「輝ける、栄光の過去」(中川 1996)として表象されるのは、一定の政治的意図として解釈できる。「地方文化」は国家に承認されるかたちで、公的な文化や歴史に組み込まれ、新たな国民国家の歴史として社会的に構築される。日本の政治的中心から比較的「周辺」に位置する両遺跡が「地方」の人びとによって「歴史の発見」として見出されるときには地方の文化アイデンティティ形成に寄与する。しかし、国家的なナショナリズムの政治的意図のもとで公的に承認された時点で、「地方」の歴史と文化は、国境で区切られた国家空間全体にまで押し広げられ、社会的に構築された「縄文文明」「稲作文化」という公的歴史観の先進性のなかに呑み込まれていく。

両遺跡から出土し、復元された柱のメタファーは、神の依代であり、天・地表・地下の3点を結ぶ宇宙の中心を示している。日常的な時空間に圧縮された特異な場が「史跡公園」という透明な空間に再生されることの意味が問われなくてはならない。両遺跡の発見を契機として、「宇宙の中心」が日本という国民国家の内部にいくつも出現したことは地方的文化ナショナリズムを活性化すが、ナショナリストのイデオログにとってこのことは国家的文化統合を脅かすような脅威にはならない。復元された「史跡公園」は、文化ナショナリズムをめぐる「地方」のポリフォニックな、あるいはヘテロフォニックな、さらには「政治的中心」との共犯関係において発せられる、さまざまな雑多な声を隠蔽している。

ナショナリズムはまた植民地主義のかたちをとって国境を越える。かつては「文明化の使命」の名の下に帝国意識をあからさまにして国境を越えた。しかし現在でも、世界システムの周辺に位置づけられた地域のポストコロナル状況において、「他者」へ投げかけるまなざしのオリエンタリズムは脈々と残存している(杉本 1993)。われわれが日本国内で経験する、国民文化のエッセンス(本質)の構築は、かつて植民地支配を経験し、現在国民統合の過程にある国々でも進行中

である。アカデミズムに根強く残存するオリエンタリズムの政治的まなざしや、国民国家において本質主義的に構成された「国民の来歴」を批判するわれわれ（構成主義的立場）には、逆にフィールドとしている国々で本質主義的過去表象を推進するナショナリストたちからの異議申し立てに直面する（小田 1996）。このような PC (political correctness=政治的正さ) 問題(ゴ-1999)は、海外のフィールドにおける本質主義と構成主義の対立のなかで、「他者」の過去を表象するわれわれ考古学者の政治的立場がつねに問われつづけている現状を示している。

## 文献目録

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補 想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版

イ・ヨンスク

1995 『国語という思想 近代日本の言語認識』 岩波書店

岩竹美加子

1996 『民俗学の政治性 アメリカ民俗学 100 年目の省察から』 未来社

上野千鶴子

1998 『ナショナリズムとジェンダー』 青土社

鶴飼哲他

1997 『国民とは何か』 河出書房新社

小川英文

1999 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」 『民族学研究』 63-2:192-202

2000a 「狩猟採集民と農耕民の交流 - 相互関係の視角 - 」、小川英文編 『交流の考古学』 :266-295、朝倉書店

2000b 「総論：交流考古学の可能性 - 考古学の表象責任をめぐって - 」、小川英文編 『交流の考古学』 :1-20、朝倉書店

小熊英二

1995 『単一民族神話の系譜 - <日本人>の自画像の系譜』 新曜社

小田亮

1996 「ポストモダン人類学の代価 - ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」 『国立民族学博物館研究報告』 21-4 : 807-875

クリフォード、ジェイムス ジョージ・マーカス(編)

1996 『文化を書く』 紀伊国屋書店

酒井由美子

1993 「ネイションとナショナリズムにかんする理論的研究の現在 - <モダニスト>的アプローチを中心として - 」 『法学新報』 Vol. 99, No. 9-10: 157-198.

清水昭俊

1992 「永遠の未開文化と周辺民族 - 近代西欧人類学史点描 - 」 『国立民族学博物館研究報告』 17-3: 417-488.

杉本英明

1993 「オリエンタリズムと私たち」、サイド 『オリエンタリズム下』 :343-377、平凡社

スミス、アンソニー

1999 『ネイションとエスニシティ』 名古屋大学出版会

中川敏

1996 『モノ語りとしてのナショナリズム - 理論人類学的探求』 金子書房

西川長夫

1995 『地球時代の民族=文化理論 - 脱「国民文化」のために』 新曜社

1998 『国民国家の射程 - あるいは<国民>という怪物について』 柏書房

ホブズボーム、エリック他(編)

1992 『創られた伝統』 紀伊国屋書店

ゴ-、リサ

1999 『私という旅 ジェンダーとレイシズムを超えて』 青土社

ロサルド、レナート

1997 『文化と真実 社会分析の再構築』 日本エディタースクール出版部

吉見俊哉

1992 『博覧会の政治学』 中公新書

Diaz-Andreu, M. and T. Champion (eds.)

1996 *Nationalism and Archaeology in Europe*. London: UCL Press.

Faucett, C.

1995 Nationalism and postwar Japanese archaeology. In Kohl, P. and C. Faucett (eds.) *Nationalism, politics, and the practice of archaeology*: 232-248. Cambridge: Cambridge University Press

Habu, J. and C. Faucett

1999 Jomon archaeology and the representation of Japanese origins. *Antiquity* 73: 587-593.

Härke, H.

1998 Archaeologists and Migrations. *Current Anthropology* 39: 19-46.

- Jones, S.  
1997 *The Archaeology of Ethnicity. Constructing identities in the past and present.* London and New York: Routledge.
- Kohl, P.  
1998 Nationalism and Archaeology: On the Constructions of Nations and the Reconstructions of the Remote Past. *Annual Review of Anthropology*. 27: 223-246.
- Kohl, P. and C. Faucett (eds.)  
1995 *Nationalism, politics, and the practice of archaeology.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Layton, R.  
1989 Introduction: conflict in the archaeology of living traditions. In Layton, R. (ed.) *Conflict in the Archaeology of Living Traditions*: 1-31. London and New York: Routledge.
- Molyneaux, B. L. (ed.)  
1997 *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology.* London and New York: Routledge.
- Russell, L.  
1997 Focusing on the Past. Visual and Textual Images of Aboriginal Australia. In Molyneaux, B. L. (ed.) *The Cultural Life of Images - Visual Representation in Archaeology.* London and New York: Routledge.
- Schmidt, P. R. and T. C. Patterson  
1995 Introduction: From Constructing to Making Alternative Histories. In Schmidt, P. R. and T. C. Patterson (eds.) *Making Alternative History: The Practice of Archaeology and History in Non-Western Settings*: 1-24, Santa Fe: School of American Research Press.
- Tsude, H.  
1995 Archaeological Theory in Japan. In Ucko, P. (ed.) *Theory in Archaeology: A world perspective*: 298-311. London and New York: Routledge
- Trigger, B.  
1984 Alternative Archaeologies: Nationalist, Colonialist, and Imperialists. *Man* 19: 355-370.
- Veit, U.  
1989 Ethnic Concepts in German Prehistory: a case study on the relationship between cultural identity and objectivity. In Shennan, S. J. (ed.) *Archaeological Approaches to Cultural Identity*: 35-56. London and New York: Routledge.

## 文明 Civilization

小川英文 Ogawa, Hidefumi

今日われわれは、日常的な生活のなかで接している「文明」という概念が、すでに「古代」から存在してきたかのように受け入れている。しかし今日用いられている文明の概念が歴史に登場するのは意外と新しく、近代の登場以降のことである。以下では、「文明」という概念が近代のはじまりとともにどのようなコンテキストで登場し、その後の歴史のなかでどのような変遷をたどって現在に到ってきたかについて、同じく近代に登場した考古学との関係のなかで考えていく。

### 1. 文明概念の登場

文明という概念は、近代国民国家における国民統合のためのイデオロギーとしての役割を担わされた用語、概念である。文明という語と概念が登場するのは、18 世紀後半、啓蒙主義の思想家の書物においてである。文明(civilisation)という語の初出は、フランスの重農主義者ミラボー(V. R. m. de Mirabeau)の『人間の友、あるいは人口論』(1757)とされている。それ以前の過去 3 世紀にわたって、文明の形容詞 civil (市民の、礼儀正しい)、動詞 civiliser (開花する、教化する)や過去分詞(civilise)が広く用いられていたため、その名詞形 civilisation (文明)が作り出されるのに抵抗はなかったとしても、「人間性」や「自由」と並ぶ重要な概念とあらず語の創出は、語史ばかりでなく、思想史においても一大事件である。西川長夫はミラボーなどの啓蒙主義者による「文明」の用法を検討するなかで、文明概念の基本要素のほとんどすべてがすでに指摘していることを指摘し、それらの要素を以下のように提示している(西川 1995: 50-52)。第一に文明という語が「美德」や「よき習俗」の完成という道徳的な主張と結びついて現れる点である。この点は今日のわれわれの文明観(「物質文明」と少しかけ離れていることが注目される。第二に、文明という語が啓蒙主義、あるいは進歩主義のコンテキストのなかで用いられている点である。そこでは文明は人間性の進歩の過程であると同時に到達目標である。すなわち文明という語は進歩史観というひとつの歴史観に結びつくというより、すでにひとつの史観の表明である。第三に、文明という語が現れるコンテキストでは、その論述の目的が国家や国民にあるという点である。すなわち当時の啓蒙主義者や経済論者にとって、文明を論じるということは、あるべき国家と国民について論じることであった。ただここで議論された国家と国民は絶対王政下のものであって、フランス革命以降の国家・国民とは内容が異なる。しかし市民革命の前夜、理想とすべき社会についての議論が、暗に絶対王政を批判しながら積み重ねられることによって、新しい国家・国民像が膨らんでいった。

現在われわれは「文明」を、「物質文明」で表現されるように科学技術の進歩とそれを享受する都市生活というかたちで受け止めている。しかし名詞化された「文明(civilisation)」という語が誕生した時点では、絶対王政下の腐爛した宮廷社会に取って代わる、倫理観をもつ洗練された市民によって構成される新しい社会を築こうとする政治改革の理念であった。

考古学も実は「文明」概念の出現とともに誕生している。その由来は、当時絶対主義の宮廷で繰り広げられていた美術・建築様式であるロココの華麗な装飾趣味と官能的快樂主義に反発する新古典主義に求めることができる。新古典主義が追い求める美意識の規範は、高貴な単純さや静謐な崇高さの美学であり、当時盛んに行われたギリシャ・ローマの遺跡発掘自体が「古代」の美学に対する憧憬から引き起こされたものであった。美術史の世界で「グリーク・リバイバル」と呼ばれる古代ギリシャの「再発見」は、スチュアート(J. Stuart) とレベット(N. Revett)による『アテネの古代遺物』の出版(1757 年以降)を契機としていた。さらにギリシャ芸術を最高の理想美に位置づけるウィンケルマン(J. J. Winckelmann)の古代ローマ遺跡の発掘によって、本格的に考古学的方法が実践されるようになる。考古学の基礎を築いたとして学史に名をとどめるウィンケルマンは、ローマやナポリの遺跡発掘を続けるなかで『ギリシャ美術模倣論』(1755)『古代美術史』(1764)を著し、新古典主義に精神的基盤を与えると同時に、広く当時の精神界・思想界に影響を及ぼした。

文明概念と考古学の登場には、啓蒙主義と新古典主義という、分野は異なるが同じく思想界・精神界における改革の場を共有していたことが理解できる。「文明」と考古学は、政治と精神の改革運動の過程でともに誕生した、新たな時代の到来を希求する理念と実践であった。文明という語の成立にかかわる一連のフランス語の語源がラテン語の civis (市民) や civitas (都市国家)に由来していることは、都市を中心とする洗練された市民によって構成された社会(= のちの「国民国家」)の意味とイメージが、考古学的方法による「古代の再発見」を契機として復活することと規を一にしている点で興味深い。

近代におけるフランスとドイツの国際関係を軸とする緊張関係において、しばしば「文明」の対抗概念として意識されてきたものに「文化」概念がある。エリアスによれば、ドイツ人が文化を選ぶにあたっては、はじめからフランス(文明)に対する対抗意識があったとしている(エリアス 1977: 80-87)。ドイツにおける文化概念も啓蒙主義の時代にフランスにおける「文明」と同じような概念として生み出されているが、啓蒙主義者にとって共通の批判対象であるべき絶対王政も、ドイツの宮廷ではフランス語が話されており、「文明」概念が支配的であった。ドイツの知識人や上層ブルジョワジーはそれに対抗するかたちで、自己の独自の価値を主張するために「文化」の語を選択したのであった。われわれも「物質文明」に対する「精神文化」という対立概念で「文明」と「文化」をとらえようとする傾向をもっている。このことは明治維新以降の日本の近代国家建設過程における西欧先進文化輸入の際に、ドイツの国家イデオロギー(ナショナリズム)が意識的に選択されたことと無縁ではないだろう。「文明」と「文化」はそれらの概念が誕生したときには民族主義的な主張をあらわにはしておらず、むしろ世界市民主義的であった。しかしその後フランス革命などの市民革命を経て、国境が明確に定められ、国民統合が推進されるなかで、「文明」と「文化」の概念は、国家と国民の存在理由を表明する近代国民国家のイデオロギーとして新たな意味の修正を迎えることになる。同時に考古学も国民国家の時代に移行して、その社会的機能性が変貌したことを予測できる。国民国家における考古学は、国民の純粋性や固有性の歴史的根拠を強固にする学問的手段として、国民意識(= ナショナル・アイデンティティ)の形成に寄与することとなる。

文明と文化の概念誕生以後におけるそれらの意味の対立関係は、ヨーロッパを中心とする世界における国民国家間の対立を反映している。ナポレオンのフランス軍に占領され打ちひしがれたドイツ国民に向けたフィヒテの演説、反革命の時代に国民国家を文明の名のもとに位置づけたギゾーの「文明史」、国民国家間の戦争という性格を明確にした普仏戦争におけるドイツの「文化の勝利」とフランスの「文明の危機」、「国民とは何か?」を問うことによって国民、さらには文明の再定義を行ったルナンの講演、第一次大戦によってもたらされた文明への懐疑、そして文明と文化の闘争というかたちをとることになった第二次大戦。大戦後、ドイツのナチズムや日本の国粋主義にみられる文化概念の極限的変形は、戦勝国側によって、文明の名のもとに裁かれることになる。さらには現在の民族紛争にみられるように、文明と文化の対立は国家が存在する限り、理念と現実のかたちを変えて現れてくるであろう。

## 2. 植民地主義の時代における「文明」概念

文明概念と考古学の関係をさぐる2つめの手がかりを、フランスの植民地主義の時代、とくにアンコール遺跡群の研究に求めてみたい。

フランスがカンボジアを植民地としていた時代において、アンコール遺跡群のみならずインドシナ全域の考古学調査の中心的役割を果たしていたのがフランス極東学院であったことはよく知られている。アンコール遺跡群が西欧世界に知られるようになるのは、1860年アンリ・ムーオの報告が世に出てからである。西欧世界はアンコール遺跡群の規模の壮大さと芸術性の高さに驚嘆し、この世紀の大発見に心を奪われた。1907年、フランス・シャム条約によってアンコール遺跡群がタイ領から仏領インドシナに組み込まれると、フランス極東学院による本格的な調査・修復が開始されることになる。フランス極東学院は仏領インドシナなどの植民地をはじめとする東アジアの歴史・文化・民族の総合研究機関として1900年ハノイに設置された研究所である。アンコール遺跡群での研究活動は遺跡の調査・保存・修復の過程で、碑文や美術様式の研究を行いながら、遺跡全体を史跡公園として管理・整備するというかたちで進められた。その成果として、碑文の発見やその解釈が進展することによって、各遺跡の建造年代とそれを建造した王の在位年代が徐々に明らかになって行った。碑文が残されていない遺跡についても、美術様式の変化に基づく相対編年が組まれることによって、徐々に時代ごとの変遷が明らかとなって行った。

このようにフランス極東学院の研究者によって少しずつ積み重ねられていった膨大な数にのぼる研究成果は、『フランス極東学院紀要(BEFEO)』に発表され、古代カンボジアの歴史・考古・美術・宗教などに関する細密な知見が、新たに構築されるようになった。このような研究に寄与したフランス極東学院の研究者の名を挙げるとすると、まず碑文研究により、古代タイ・カンボジアの歴史再構築に多大な貢献を成したセデス(G. Coedes)があげられる。セデスは長く極東学院院長を務め、さらにスマトラ、マレー半島にかつてスリウィジャヤ王国が存在したことを明らかにするなど、東南アジア史研究に多大な功績を残した。また、敦煌文書の研究で有名なペリオ(P. Pelliot)は、中国文献の研究の側からアンコール碑文資料の欠落を補っていった。この他にもパルマンチエやグロリエなど多くの優秀な研究者が極東学院を本拠として成果を発表していった。こうした極東学院を中心とする、組織的で緻密・詳細な調査・研究と膨大な資料の蓄積によって、アンコー

ル遺跡群をはじめとする古代カンボジア史の再構築が可能となり、現在わたしたちはアンコールの歴史や美術様式と遺跡の変遷についての年表を手にすることができるのである。

アンコールの崇高さや壮大さに対して大いなる驚きや疑問を発した西欧人の欲求は、われわれがじかにアンコール遺跡群を訪れて遠い過去に想いを馳せてみたいという欲求をはるかにしのぐものであった。西欧宗主国はひとつの巨大な知のシステムである『東洋学』(=オリエンタリズム)を組織し、植民地の歴史・言語・文学・建築についての細密で膨大な研究成果を積み重ね、植民地の過去を自らの知の領域のなかに対象化することによって、「古代文明」への驚きと疑問を解消していったのである。こうして植民地の過去を掘り下げ、歴史の新たな「発見」に興味が注がれ、東南アジアの「古代世界」を再構成するに足る膨大で、緻密な知識が蓄積されていった反面、研究者は自らが調査し、生活する植民地の、現在の社会や文化が生成するダイナミズムにはアカデミックな関心をはらっていない。西欧宗主国のアカデミズムの関心は、社会的、文化的、そして経済的に「停滞した」植民地の現状ではなく、宗主国がその当時に達成しえた「輝かしい文明」と同等の価値を与えるに足る、植民地の「古代文明」にあった。

ここで疑問なのは、宗主国フランスが19世紀に国民国家を形成していく過程で理想として構築した「文明」という概念が、なぜ植民地の「古代」という特定の時期にのみ適用されるのかという点についてである。フランスにとって「文明」概念は、自由や平等と同様に、国民国家の崇高な理念として規定されてきた。しかしフランスに限らず西欧宗主国は一般に、一方で植民地の現実に対しては「停滞」や「未開」という負の価値を与え続けたにもかかわらず、他方では植民地の過去には自らが誇る理想としての「文明」という価値を付与してきた。このパラドックスの理由はいったいどこに求めることができるであろうか。そこには宗主国が知の領域において植民地の過去を現在と切り離して自らのものとする意志を感じることができる。その知の行為は、西欧宗主国がかつて、自国の領域からは遠く離れたギリシャ・ローマの古代遺跡を発掘し、自らの「輝ける過去」として発見して、その歴史を自分たちの「現在」に結びつけた時と同質の行為として論じられなければならない。このように遠く離れた場所の、あるいは植民地の、「他者」の過去を、横滑りさせながら自らのものにしていく知的行為は、19世紀に創出された「国民」の新たな来歴を構築していくという「発明」的行為として位置づけられる。また同時に、植民地が保有する過去の遺産の「真の価値」を見出し、植民地の現状としての「貧困」や「無知」を克服して、「文明化」への道を達成するという、帝国主義的支配の正当化のレトリックとして理解することも可能である。そしてこのように宗主国と植民地で繰り広げられた、過去からの来歴、あるいは「伝統」をめぐる知の方法として考古学が構築されていったのである。しかしいったん「来歴」や「伝統」が知のシステムのなかに組み込まれると、いつしかそれらは遠古から実体として存在してきたかのように振る舞い、たかだか百年余前の19世紀に「発明」されたという経緯は、わたしたちの記憶の彼方に埋没してしまったのである。

植民地主義の時代における「文明」概念は、明確に国家イデオロギーとしての性格を帯びている。そして国家イデオロギーが植民地に与える差別や抑圧は、「文明化」の名のもとに巧妙に隠蔽されてきたのである。「文明化」の名のもとに行われた抑圧とその隠蔽に考古学も深く関与してきたが、それはすでに遠い過去のこととして忘れ去られる性質のものではない。現在の民族紛争などの極限状況から、日本が今日抱える失業や経済不況といった日常生活において経験可能な社会問題に至るまで、国際関係あるいは民族間の紛争の火種は絶えることがなく、国家という枠組みのなかで社会が機能しつづける限り、文明や文化の概念に依拠しながら行われる抑圧とその隠蔽はこれからいつでも頭をもたげてくることに注意しておく必要がある。

#### 文献目録

石沢良昭

1997 『アンコール・ワット』講談社現代新書

石沢良昭・生田滋

1998 『東南アジアの伝統と発展』中央公論社

エリアス、ノルベルト

1977 『文明化の過程・上』法政大学出版局

加藤剛

1993 「民族誌と地域研究・「他者」のまなざし」矢野暢編『地域研究の手法』: 97-140、弘文堂

ダジャンス、ブリュノ(石沢良昭監修)

1996 『アンコール・ワット - 密林に消えた文明を求めて』創元社

西川長夫

1995 『地球時代の民族=文化理論』新曜社

## ラロ貝塚群の発掘調査とその年代

Archaeological Research on the Lal-lo Shell Middens and its Chronological Context of the Sites.

小川英文 Ogawa, Hidefumi

### ラロ貝塚群調査の目的

フィリピンにおいて考古学調査を統括する国立博物館考古学部門は、70年代後半から、ルソン島北東部カガヤン河東岸のベニャブランカ地区一帯に広がる石灰岩台地における洞穴・岩陰・開地遺跡の総合的調査プロジェクトを開始し、現在までの調査によって剥片石器文化と土器の出現との関係や様々なバリエーションを持つ墓制等、当該地域の先史文化の様相が鮮明になってきた(Ronquillo and Santiago 1977, Ronquillo 1980)。こうしたフィリピン国立博物館による調査の方向性に呼応して、外人研究者による調査も当該地域で活発に行なわれてきた(Thiel 1980, 1989, 1990, Snow and Shutler 1985, 青柳 1977, 1979, Aoyagi 1983)。

カガヤン河下流域に 50km にわたって分布するラロ貝塚群の調査は、80年代後半からフィリピン国立博物館と日本人研究者との共同調査というかたちで開始された。80年代の終わりまでに河岸段丘上の貝塚遺跡の分布調査や試掘調査が実施されたが(青柳・田中 1985, 青柳・Aguilera・小川・田中 1986, 1988, 1989, 1991, Cabanilla 1972, Ogawa and Aguilera 1992, Orogo 1980) 90年代からは調査地域を河岸から丘陵地域に広げながら、洞穴遺跡の調査も貝塚と併行して実施している(Bautista 1996-1997, de la Torre 1995-2000, Garong 1996a, b, Ogawa 1996-2000, Orogo 1995, Tanaka 1996-2000, 樋泉 1999)。

ラロ貝塚群調査の目的は、

- 1) 貝塚の層位学的発掘によって得られた資料をもとに、年代測定値を援用しながらカガヤン河下流域の型式学的編年体系を確立し、周辺地域における諸文化との比較研究の基礎とする、
- 2) 貝塚や洞穴遺跡から得られた人工・自然遺物資料をもとに、低地や山地などの異なる微小環境における資源開発の生業パターンについての情報を蓄積する、
- 3) 最終的に農耕開始以降の当該地域における農耕社会、貝採集社会、狩猟採集社会という生業活動を異にする諸社会間の相互依存関係の歴史的プロセスを解明することである。

農耕開始以降、この地域における先史文化の様相は非常に複雑である。すなわち農耕社会と貝採集社会が低地で生業を営む一方、山地では人類史的に農耕以前の生業形態である狩猟・採集を営む人々が同時代的に生活している。現在両者は交流をとうして経済的・社会的な「相互依存関係」を確立している。カガヤン州内の狩猟採集民イタやアグタの事例にみられるように、異なる生業活動を背景とする社会間で現在実践されている相互依存関係は、過去においても存在していたと予想することができる(Peterson and Peterson 1977, Griffin and Griffin 1985, Rambo et. al. 1988, Headland and Reid 1989)。

過去から現在に至るまでの、技術的・経済的な背景を異にする諸社会間の交流や相互依存関係のあり方を考古学的に解明していくには、考古学調査で得られた遺物や遺跡の時空間的分布を時代ごとに正しく再配置する必要がある。当該地域の過去の生活の痕跡や環境の様相を時代ごとに整理し、生活の営みや自然環境の変化のパターンをとらえることによって、異なった生業基盤や社会規範をもつ諸社会間の相互関係に迫ることが可能となる。しかしそのためには考古学の方法だけでは十分とはいえない。自然科学のさまざまな分野の方法をはじめとして、文化人類学、文献史学など他分野にわたる方法を必要としている。ラロ貝塚群調査では日比両国の考古学をはじめとする、多分野にわたる専門家が協力して調査を継続している。

発掘調査によって得られた遺物や遺跡の情報に時空間の広がりや尺度を与える編年作業は、本研究の第一歩に位置づけることができる。しかしながらラロ貝塚群のあるカガヤン河下流域では、日本のように考古学の編年作業が整備されているわけではない。むしろ日本の考古学創世期さながらに、ひとつひとつの遺物、遺跡の先後関係を相対的に関係づけていなくてはならない。しかし創生期と大きく異なるのは、われわれには絶対年代の測定が可能なことである。測定によって得られた絶対年代と遺物による相対年代を組み合わせながら、カガヤン河下流域の地域的編年を構築中である。

### 遺跡分布と性格

カガヤン河は、ルソン島北東部を南北約 300km にわたって流れ、バブヤン海峡に注ぐ、フィリピン有数の河川である。



この河によって形成されたカガヤン渓谷は、東をシエラ・マドレ、西をコルディリエラ、南をカラバリオの各山脈に囲まれている。ラロ貝塚群は、このカガヤン河の下流域 40km に点在する。ラロの町は 16 世紀終わりにスペイン人が北部ルソン島経営の拠点を築いてヌエバ・セゴビアと呼ばれ、19 世紀までは広く当該地域の政治的、経済的、宗教的な中心として栄えていた。

ラロ貝塚群は河口からデルタの形成がはじまる 10km 遡った地点から、上流 50km 地点までの間のカガヤン河両岸に分布している(Fig.1)。現在までに確認されている貝塚は 20 ヶ所以上で、その規模は、長さ 500m、幅 100m、深さ 2m 以上の大規模なものから、直径 10m 前後の小規模のものまでさまざまである。貝塚の立地条件にしたがってその分布パターンを以下の 4 つに分類することが可能である。

1) 河岸の自然堤防上：カガヤン河に面した標高約 6 ~ 7 m、河面比高満潮時で約 3 m (干満の差 1.5m) の自然堤防上に位置する貝塚群である。その規模はいずれも大きく、最大のもので長さ 500m、幅 100m、深度 2m にも及ぶ。このような大規模貝塚は 5 ヶ所確認されている。さらにその内 3 ヶ所の遺跡では現在でも貝の採集が行なわれており、貝塚の形成が続けられる。遺跡を形成している貝種と現在採集されている貝種とはほぼ同じである。遺物は厚手の沈線文あるいは無文の黒色土器群を中心として、中国陶磁片、磨製方角石斧片が検出されている。貝以外の自然遺物には陸棲動物・魚骨が多種にわたって検出されている。貝層の年代に関しては Table 1 に提示したように、カタヤワン(Catayauan)貝塚のコンシソ(Conciso)、シソン(Sison)両遺跡の-30 ~ -145cm 深度で 957 ~ 1189 年の更正年代が得られている。

また貝層下のシルト層を掘り込んだ、黒色土器を副葬品とする伸展葬墓が 3 遺跡で検出されている。副葬品は台付の碗や小型の甕などの黒色土器を中心とし、腕輪用のガラスビーズも出土している。これらの埋葬地はいずれも黒色土器を副葬し、貝層直下に形成されていることから、貝塚が形成されていた時期と同じ文化層に属するものと考えられる。しかし墓壇内からは貝が検出されないことから、貝の廃棄場所と墓域を意識的に区別していた可能性が想定できる。埋葬地の年代は 2 遺跡で得られており(サンタマリア(Santa Maria)貝塚イリガエン(Irigayen)遺跡、カタヤワン貝塚コンシソ遺跡、Table 1)、更正年代で 1294 ~ 1560 年を示し、いずれも貝層形成期より古い年代となっている。

さらに貝層下のシルト層からは無文の赤色スリップ土器群が検出されている。遺物は他にも土製耳飾、磨製方角石斧片、チャート製剥片石器などが得られている。剥片石器の出土は洞穴遺跡で多く確認されているが、河岸段丘上では現在までにイリガエン遺跡でのみ数点が確認されている。しかしながら黄褐色のシルト層中では土色に基づく遺構の確認は困難で、赤色土器の他に少量の動物骨、炭化物がシルト層中から検出されるのみである。シルト層中無文赤色スリップ土器群の年代は、イリガエン遺跡の-80 ~ -135cm で 2972 ~ 3461 年の更正年代が得られている(Table 1)。

2) 内陸低地：河岸から約 1km、標高 3 ~ 4m の低湿地に位置する貝塚群が、カガヤン河東岸で現在までに 3 ヶ所確認されている。現在これらの貝塚はいずれも周囲を水田に囲まれているが、石灰岩台地にも近い。遺跡範囲は径約 50m、貝層断面の観察から深度は 2m 以上である。淡水産二枚貝のほか動物骨などの自然遺物が検出されているが、人工遺物は 1 ヶ所の貝塚から剥片石器 1 点が確認されているのみである。いまだ発掘調査が行なわれていないので年代については推測の域を出ないが、当該地域の土器出現以前に貝塚が形成され、その後カガヤン河の沖積作用で埋没した可能性が考えられる。

3) 石灰岩台地上：カガヤン河に面した標高約 50m の石灰岩台地上に位置する。発掘調査が行なわれたマガピット(Magapit)貝塚は台地上丘陵鞍部に位置し、その規模は径 10m、深度 5.5m である。遺物は沈線、刺突文をもつ赤色土器を中心として、磨製方角石斧、土製・骨製装飾品、動物・魚骨等が出土している。マガピット貝塚の年代は -1m 及び -2m 出土の炭化物 2 点を資料とする C 14 年代が得られており、いずれも BP2800 年となっている(マガピット貝塚：2800 ± 140BP：N-5396、2760 ± 125BP：N-5397)。

4) 石灰岩丘陵上：カガヤン河東岸から直線で約 10km の石灰岩丘陵上には洞穴が分布している。これまでに発掘調査されたマバゴッグ(Mabangog)洞穴内の遺物包含層には、河岸貝塚と同種の貝が遺物とともに出土することが確認されている。洞穴内の土壌は表面から岩盤まで 30 ~ 40cm ほどしか形成されていないが、暗褐色土に貝、無文赤色土器、磨製方角石斧片、チャート製剥片石器などが包含されている(小川 1999c)。

ラロ貝塚を主体的に形成する貝種は、カビビと呼ばれる淡水産二枚貝である。このほかに淡水産二枚貝 2 種、淡水産巻貝 1 種、陸産巻貝 3 種が見られる。これらの貝のうち淡水産二枚貝 3 種と淡水産巻貝 1 種はいずれも現在採集され、食用とされている(小川 1997)。

## 遺跡の編年

ラロ貝塚群中、現在までに発掘されたのは 11 貝塚 15 遺跡（河岸自然堤防上 9、石灰岩台地上 1、洞穴 1）である。これまでの発掘調査によって得られた遺物とその出土層位の関係をもとに相対編年を構築することが可能となってきた。すなわち、河岸段丘上の貝塚からは黒色土器が出土し、貝塚の下のシルト層からは赤色土器が出土する。貝層中から出土する黒色土器には有文（線刻文）と無文のものがある。有文の黒色土器はバガッグ(Bangag)貝塚で顕著に出土するが、その他の河岸段丘上貝塚ではほとんどが無文の黒色土器である。ただしカトゥガン(Catugan)貝塚からは有文から無文への黒色土器の変化が層位的に確認されている(田中 1997a)。

赤色土器に関しては、有文(列点文)のものが河岸石灰岩段丘上のマガビット貝塚から顕著に出土するが、河岸段丘上のシルト層中からはほとんどが無文で、列点文をもつものがこれまでにわずかに数点しか確認されていない。このように赤色土器の変化については、同一遺跡で層位的に確認することができていないのが現状である。最近の分析では有文、無文ともに赤色土器は器形、形成技術、胎土、焼成などに類似点が多いが、有文の赤色土器のほうが無文のものよりも器種構成のバリエーションに富んでいるという結果を得ている。無文の赤色土器は河岸以外にマバゴッグ洞穴からも出土している。しかしここでは赤色土器が貝や剥片石器とともに出土し、河岸の遺跡からの出土状況と異なっている。すなわち河岸では無文赤色土器はシルト層中から、有文赤色土器は貝層中から出土するが、洞穴では無文赤色土器が貝層中から出土する(小川 1998, 2000d)。このようにマバゴッグ洞穴の無文赤色土器の出土状況は河岸遺跡での赤色土器のそれと齟齬をきたしているが、発掘調査による資料の増加をまってこの問題を解決したい。

これまでの限られた発掘調査による遺物と層位との関係から相対的な編年を暫定的に構築するとすれば以下のように考えることができる。黒色土器は貝塚の形成とともに、有文から無文への変遷をたどる。貝塚が形成される以前のシルト層から出土する赤色土器については層位的にその変化を確認していないが、暫定的に有文から無文への変遷を想定してきた(小川 1998, 2000d)。

これらの相対編年と今回得られた年代測定の結果(Table 1)を比較してみると、新たな問題を見出すことができる。まずラロ貝塚群中最古と想定していたマガビット貝塚有文赤色土器の C14 年代 2800BP が、2972 ~ 3461 年の更正年代をもつサンタマリア貝塚イリガエン遺跡の無文赤色土器群と逆転する点である。この点についてはこれまでのマガビット貝塚の C14 年代測定値の精度が荒いため、今一度、同様の精度で資料を測定し、再度比較検討する必要が生まれてきた。黒色土器については有文から無文への変遷が層位的に確認されているが、C14 年代の測定値は得られていない。またこれら河岸の遺跡とマバゴッグ洞穴の赤色土器との関係も年代測定によって確認する必要がある。

以上のような問題点は、今後の発掘調査の結果をまたなくてはならないが、それは考古遺物の調査のみではなく、カガヤン河下流域の古地形の変遷、農耕・貝採集・漁労・狩猟・採集などの生業と環境変化との関係などの情報を獲得できるような調査デザインに基づき、本研究を継続することによって可能となる。年代測定はその基礎的な裏付けであることは言うまでもない。

## 文献目録

青柳洋治 (Aoyagi, Y.)

1977 「研究史・ルソン島及びその周辺諸島の考古学」『日本民族と黒潮文化 - 黒潮の古代史序説』黒潮文化の会編 角川選書 91: 187-199 (Archaeology of Luzon and its adjacent area. Black Current Culture Study Group (ed.) *Japanese and Black Current Culture-Introduction to the Prehistoric Culture of Black Current-*. Kadokawa Books. In Japanese)

1979 「ルソン島の古代史探訪」『新・海上の道 - 黒潮の古代史探訪 - 』黒潮文化の会編、角川選書 103: 108-125. (Prehistoric Survey of the Luzon Island. *New Maritime Road*. In Japanese)

1983 General Survey in Northern Luzon. In Shirakihara, K. (ed.) *Batan Island and Northern Luzon*: 69-87, 116-119, 157-161. University of Kumamoto.

青柳洋治・田中和彦 (Aoyagi, Y. and K. Tanaka)

1985 「カガヤン川流域の貝塚土器をめぐる二、三の問題」『上智アジア学』3: 81-129 (On the Pottery from Shell Middens in the Lower Cagayan River. *Journal of Sophia Asian Studies* 3:81-129. In Japanese.)

青柳洋治・M. L. Aguilera, Jr.・小川英文・田中 和彦 (Aoyagi, Aguilera, Ogawa and Tanaka)

1986 「カガヤン川下流域の貝塚」『上智アジア学』4: 45-91 (Shell Middens in the Lower Cagayan River. *Journal o Sophia Asian Studies* 4:45-91. In Japanese)

1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』6: 63-104 (Excavations of Lal-lo Shell Middens. *Journal of Sophia Asian Studies* 6:63-104. In Japanese)

- 1989 「ラロ貝塚群の発掘 2」『上智アジア学』7: 101-131 (Excavations of Lal-lo Shell Middens(2). *Journal of Sophia Asian Studies*7: 101-131. In Japanese)
- 1991 「ラロ貝塚群の発掘 3」『上智アジア学』9: 49-137 (Excavations of Lal-lo Shell Middens(3). *Journal of Sophia Asian Studies* 9:49-137. In Japanese)
- Aoyagi, Y., H. Ogawa and K. Tanaka  
1998 Excavation, and Ornaments Discovered at the Magapit Shell-midden Site, in Northern Luzon. 『上智アジア学』15: 167-180.
- Bautista, A.  
1996a Animal/Human Remains from Bangag I, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
1996b Animal Remains from Dombrique Site, Catugan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
1996c Field Report on Lal-lo Archaeology Project, August-September 1996. Typescript, National Museum, Manila.  
1997 Zooarchaeological materials from Bangag Archaeological Site. Typescript, National Museum, Manila.
- Cabanilla, I.  
1972 Neolithic Shellmound of Cagayan: The Lal-lo Excavation. National Museum of the Philippines. Field Report
- De la Torre, A.  
1995 Brief Report: The Lal-lo, Cagayan Archaeological Project 1995. Type script, National Museum, Manila.  
1996 Brief Report: Cagayan Valley Archaeological Project, Santa Maria, Lal-lo, Cagayan from February 7 to March 3, 1996. Typescript, National Museum, Manila.  
1997 Rapid Cave Assessment Report of Mabangog Cave located at San Mariano, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
2000 Preliminary Report of the Lal-lo, Cagayan, Archaeology Project: Clemente Irigayen Property Site (II-1995-O), Santa Maria, Lal-lo, Cagayan. 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』20
- Garong, A. M.  
1996a A Report on the Archaeological Excavation in Fausto Sison Sr., Shell Midden Site in Barangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.  
1996b Progress Report on the 1996 Archaeological Excavation of the Conciso Property Shell Midden Site in Brangay Catayauan, Lal-lo, Cagayan. Typescript, National Museum, Manila.
- Griffin, P. B. and A. Estioko-Griffin (eds.)  
1985 *The Agta of Northeastern Luzon*. Cebu: San Carlos University. Press
- Ogawa, H. and M. L. Aguilera, Jr.  
1992 Data Report on the Archaeological Explorations on the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines. 『国士館大学宗教・文化研究所紀要 (Journal of Institute of Religion and Culture)』10: 41-114
- 小川英文 (Ogawa, H.)  
1996a 『狩猟採集民ネグリの考古学 - 共生関係が提起する諸問題 -』スチュアート ヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』:183-222, 言叢社 (Archaeology of the Negrito Hunter-Gatherers - the archaeological problems on the Symbiotic, Interdependent relationships between Hunter-gatherers and Farmers. In Henry Stuart (ed.) *Gatherer-Hunter, Today* : 183-222. Tokyo: Gensosha. In Japanese)
- 1996b 「東南アジア考古学への招待」、吉村作治編 『世界考古学』: 65-108、有斐閣 (Introduction to Southeast Asian Archaeology. In S. Yoshimura (ed.) *World Archaeology*: 65-108. Tokyo: Yuhikaku. In Japanese)
- 1997 「貝塚洪水伝説 - フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」 『東南アジア考古学』17:119-166 (Shell Midden was made by the Noachian Deluge.-Ethnoarchaeology of the Shell Middens and Shell Gatherers in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines-. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 17: 119-166. In Japanese)
- 1998 Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest - 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』18: 123-166
- 1999a 「東南アジアと日本の貝塚の比較」 『季刊 考古学』66: 29-34 (The Comparison between Southeast Asian and Japanese Shell Midden Sites. *Quaternary Journal of Archaeology* 66: 29-34. In Japanese)
- 1999b 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」 『民族学研究』63-2: 192-202 (Archaeologist's Image Representation of Hunter-Gatherers in Southeast Asia. *The Japanese Journal of Ethnology* 63-2: 192-202. In Japanese)
- 1999c Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学 (Journal of Southeast Asian Archaeology)』19: 93-114.
- 1999d 「自然と生業」上智大学アジア文化研究所編 『新版 入門東南アジア研究』: 23-35、めこん (Natural Settings and Subsistence of Southeast Asia. In Institute of Asian Cultures, Sophia University (ed.) *Introduction to Southeast Asian Studies, new edition*: 23-35. Tokyo: Mekong. In Japanese)
- 1999e 「東南アジア 発掘の歴史と考古学の課題」、吉村作治編 『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』: 75-89、平凡社 (Southeast Asian Archaeology - its history and issues. In S. Yoshimura (ed.) *Ankhor and Borobudur*. Tokyo: Heibonsha. In Japanese.)
- 2000a 「狩猟採集 社会と農耕社会の交流 - 相互関係の視角 -」、小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店 (Prehistoric Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers- special reference to the Interdependency. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*. (Archaeology Today Series Vol. 5), Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese).
- 2000b 「総論 交流考古学の可能性」、小川英文編 『交流の考古学』: 1-20、朝倉書店 (Introduction - Perspectives in Archaeology of Interaction. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*. (Archaeology Today Series Vol. 5), Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese).
- 2000c 「狩猟採集民」、「ナショナリズム」、「文明」、安齊正人編 『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: 131-141, 187-198, 227-234, 同成社 (Hunter-Gatherers, Nationalism, Civilization. In M. Anzai (ed.) *Method and Theory in Archaeology Today* Vol.3: 131-141,

- 187-198, 227-234. Tokyo: Dohseisha. In Japanese).
- 2000d (ed.) 『ラロ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査 - Excavation of the Lal-lo Shell Middens』 269 pages、文部省科学研究費報告書 (Report for the Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research) of The Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Monbusho), In English).
- Orogo, A.
- 1980 The Archaeological Excavation at the Cortez Site, Camalaniugan, Cagayan. National Museum of the Philippines. Field Report.
- 1995 Preliminary Report: Result: Result of Archaeological Exploration and Excavation conducted at Lal-lo, Cagayan Province, July 28 to August 26, 1995. Typescript, National Museum, Manila.
- Peterson, J. T. and W. Peterson.
- 1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In Allen, J., J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul*, New York: Academic Press.
- Headland, T. N. and L. A. Reid
- 1989 Hunter-Gatherers and their Neighbors from Prehistory to the Present. *Current Anthropology* 30:143-66.
- Rambo, A. T., K. Gillogly and K. L. Hutterer (eds.)
- 1988 *Ethnic Diversity and the Control of Natural Resources in Southeast Asia*. Michigan Papers on South and Southeast Asia No. 32. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Ronquillo, W.
- 1981 *The Technological and Functional Analysis of the Lithic Flake Tools from Rabel Cave, Northern Luzon, Philippines*. Anthropological Paper No.13. Manila: National Museum of the Philippines.
- Ronquillo, W. and R. Santiago
- 1977 Archaeological Caves and Open Sites Exploration at Penablanca, Cagayan Province. National Museum of the Philippines. Field Report.
- Snow, B. A. and R. Shutler, Jr.
- 1985 *The Archaeology of Fuga Moro Island*. Cebu: San Carlos University Press.
- 田中和彦(Tanaka, K.)
- 1996 「ルソン島北部における方角石斧に伴う土器の検討 - 沈線による連続菱形土器の検討 -」 『東南アジア考古学』 16: 149-160 (The Typological Analysis of the Pottery associated with the Quadrangular Stone Adzes excavated in Northern Luzon - The analysis of the pottery with the incised diamond pattern and a circular impression in each diamond pattern-. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 16: 149-160. In Japanese)
- 1997a 「カトゥガン貝塚の発掘調査」 『東南アジア考古学』 17: 210-225 (Preliminary Report of the Excavation of Catugan Shell-midden, Lal-lo Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 17:210-225. In Japanese)
- 1997b The Kite Photography of Bangag I Shell-midden Site, Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 17:197-209.
- 1998a Preliminary Report of the Archaeological Excavation of Catugan Shell-midden (Dombrique Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『千葉敬愛短期大学初等教育科紀要』 20: 149-177
- 1998b 「サン・ロレンソ III 貝塚(シリバン遺跡)の発掘調査とその問題」 『東南アジア考古学』 18: 263-289
- 1998c Problems and Excavation of San Lorenzo III Shell Midden (Siriban Site), Lal-lo, Cagayan, Philippines. *Bulletin of Showa Academia Musicae* 18: 109-135.
- 1998d 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガッ I 貝塚の発掘調査と若干の問題」 『上智アジア学』 16: 171-211
- 1998e 「ルソン島北部、カガヤン川中流域、サンタ・マリア町、キナビガン村の土器作り」 『環境情報研究』 6: 123-152
- 1999a 「フィリピン、ラロ貝塚 - 巨大貝塚の発掘と成果」 『季刊考古学』 66: 75-78
- 1999b The Archaeological Excavation of Bangag I Shell Midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学(Journal of Southeast Asian Archaeology)』 19: 71-92
- 2000 「長距離交易とフィリピン低地社会の社会統合過程」、小川英文編 『交流の考古学』、岩崎卓也監修 『シリーズ 現代の考古学』 第5巻、朝倉書店 (Long Distance Trade and Process of Social Integration in the Philippine Lowland Society. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*. (Archaeology Today Series Vol. 5), Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese).
- 樋泉岳二 (Toizumi, T.)
- 1999 「Batissa childreni の季節的成長パターンと死亡季節査定の可能性(予察)」 『東南アジア考古学』 19: 57-69. Identification of the Seasonal Growth Pattern and Death Season of *Batissa childreni*. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 19: 57-69.
- Thiel, B.
- 1980 Subsistence Change and Continuity in Southeast Asian Prehistory. Ph.D. Dissertation, University of Illinois.
- 1989 Excavations at the Lal-lo Shellmiddens, Northern Luzon, Philippines. *Asian Perspectives* XXVII, No. 1: 71-94.
- 1990 Excavations at Arku Cave, Northern Luzon, Philippines. *Asian Perspectives* XXVII, No.2: 229-264.

## Summary

### **Archaeological Research on the Lal-lo Shell Middens and Chronological Context of the Sites.**

**Ogawa, Hidefumi**

Lal-lo shell midden sites are located on the riverbank of lower Cagayan River, extending from the mouth of the river on the northern coast of Luzon Island for a distance of 40 kilometers upriver. These shell middens are categorized into four groups by its geological location; 1) riverbank shell middens, five to eight meters above M.S.L. (Dummon, Gattaran Centro Sur, Aggunetan, Aguiguican, Bangag, San Lorenzo, Alaguia, Catugan, Santa Maria, Catayauan, Tocalana, Lal-lo Centro, Dugo, Camalaniugan Centro), 2) inland shell middens, one to two kilometers east from river bank, seven to eight meters above M.S.L. (Bagumbayan, Dalaya, Catayauan II), 3) on the limestone hill beside the river, 50 meters above M.S.L. (Magapit, Bangag II), 4) limestone hill cave, four kilometers away from river bank, 40 meters above M.S.L. (Mabangog). These shell middens are formed predominantly by one freshwater bivalve shell, locally called Kabibi (possibly, *Battisa childreni*). Other shell species from middens are two freshwater bivalves, three freshwater conical shells and land snails.

Cultural materials revealed from those sites can be classified also by these geological settings. The riverbank shell middens produce the black pottery with and without decoration. The riverbank sites also produce the cultural materials under the shell deposit, the silty clay layer. From the silty clay layer, the red pottery without decoration can be revealed. The inland shell middens don't produce pottery, and so far, we collected limited numbers of stone flakes and its core. The limestone hill shell midden, Magapit site produces the red pottery with decoration. The cave site, Mabangog Cave is also formed with shell deposit, and produces the chert and andesite flakes and red pottery without decoration.

By these excavations of the sites, it becomes clear that the potteries can be divided at least into four types. The chronological sequence of different pottery types in this research area could be as following;

1. Red-slipped pottery with decorations (Red I): Magapit sites, from shell middens of riverbank sites
2. Red-slipped pottery without decorations (Red II): from silty clay layer under the shell midden of riverbank sites
3. Black pottery with decoration (Black I): Bangag and Catugan site, from shell middens of riverbank sites
4. Black pottery without decorations (Black II): from shell middens of riverbank sites

The results of C14 datings recently acquired (Table 1) present some crucial issues on the chronological sequence of Lal-lo Shell Middens. It was supposed that the cultural sequence of Lal-lo shell middens began from Red I of Magapit site and it has changed to Red II in the silty clay layer of riverbank sites. The C14 date of Magapit site acquired in late 80's indicates 2800BP (2800 ± 140BP : N-5396). The recent results of C14 dates indicate the inversion of this sequence. The calibrated C14 dates from the Red II cultural layer indicate the dates from 2972 to 3461BP. The redate of Magapit site with the same accuracy of C14 dating will resolve the reverse problem of the sequence.

フィリピン民族博物館  
Museum of the Filipino People

小川英文 Ogawa, Hidefumi

1998年6月、フィリピン革命百周年記念式典の一幕として、国立博物館の新たなギャラリーがオープンした。これまで国立博物館は、アメリカ植民地期に建てられた旧国会議事堂の建物(本来、博物館を目的として建てられたものだったが)の2、3階に鉱物、動・植物、民族、考古、建築、美術、天文など、フィリピンの自然・歴史・文化全般にわたる資料を展示してきた。しかしフィリピン独立革命百周年(1998年)を期に、リサール公園の北端に位置する旧大蔵省の建物を全面改装して、新たに考古と民族の展示を中心に据えた『フィリピン人博物館(The Museum of the Filipino People)』を開館した。

新たな博物館へリサール公園に面した中央入口から入ると、そこは3階建ての博物館の2階にあたる。この階にはフィリピンにおける水中考古学の最近の成果が3つのギャラリーに展示されており、そのうち2つは、オランダとの海戦で沈められたサンディエゴ(San Diego)号というスペイン船から引き上げられた遺物が展示されている。

スペイン船サンディエゴ号は16世紀末、商船として使用されていたが、マニラ湾に攻め込んでくるオランダ艦隊を迎え撃つために、急遽、戦艦に改装された。この海戦でスペイン艦隊の指揮を執ったのは、当時マニラで総督代理を務め、のちに『フィリピン諸島誌』(大航海叢書、岩波書店)を著したアントニオ・モルガであった。1600年12月14日、マニラ湾口でオランダ艦隊との間に始まった海戦は、その舞台を徐々に南の海上へと移していった。しかし決定的な勝敗がつかないまま、サンディエゴ号は現在のバタンガス州西方海上に沈められた。沈没からかるうじて逃れたモルガであったが、彼はのちにこの海戦に勝利を収めたと記している。

サンディエゴ号の発掘は1991年から93年にかけて、フランスの調査隊とフィリピン国立博物館が共同で行った。出土品には中国製を中心とする陶磁器や陶器が各4000点、フィリピンやペルーの土器1400点、象牙6点、大砲14門や砲弾200発、その他、剣・ヘルメットなどの武器、動物骨や植物種子など船員食料の残滓などが見られ、当時の交易品や船の中での生活、そして沈没前の戦闘のようすを生々しく伝える遺物が2つのギャラリーに展示されている。これらの展示によって、アジア交易の覇権をめぐるスペインとオランダの争いという歴史的事実ばかりでなく、16世紀末のアジアと新大陸、ヨーロッパを結んだ交易の実態を知ることができる。

サンディエゴ号の展示は1階にギャラリーにも続き、ここではサンディエゴ号が海底に沈んでいた様子を再現した展示を見ることができる。

2階のもうひとつのギャラリーでは、スペイン、オランダなどヨーロッパ勢力が到来する以前、11世紀から16世紀中頃までの5世紀の間アジア交易に携わり、フィリピン沿岸で沈没した5つの船から引き上げられた遺物を展示の中心に据えている。これらの遺物のほとんどは交易品として用いられた陶磁器や陶器で占められている。陶磁器・陶器は中国をはじめ、ベトナム、チャンパ、タイで製作されたもので、5世紀にわたる時代それぞれの特徴を示している。沈没のほとんどは中国製ジャンクと考えられており、中国人が東南アジアの海域で果たした重要な役割を示唆するものである。これら沈没のうち、パラワン島南部パンダナンで発見された沈没の積荷は、14世紀後半から15世紀はじめにかけての中国、ベトナム、チャンパの陶磁器7000点で占められていたことから、当時の交易船がさまざまな港で取引を繰り返しながら、東南アジアの海域を縦横に駆け巡っていた様子をうかがうことができる。なかでもチャンパ陶磁(青磁碗・褐釉壺)4500点は、ヒンドゥー王国チャンパの都ヴィジャヤ(現在のベトナム中部ビンディン省郊外)で焼かれたものであることが確認されており、チャンパ王国とフィリピン諸島との関係を考える上で重要な資料を提供している。

3階には、フィリピン人の来歴と未来をテーマとして、考古と民族の資料が3つのギャラリーに展示されている。フィリピン人の来歴については、旧石器時代(約数十万年前から1万年前)から新石器時代(1万年前から2000年前)、鉄器時代(2000年前から1000年前)、そして陶磁器の時代(9世紀から15世紀)まで、これまで調査された各時代の代表的遺跡から得られた考古資料を、限られたスペースでコンパクトにまとめて展示している。展示の手法には小・中学生の来館者に配慮して、単に遺物の羅列ではなく、AV装置による説明、遺跡が発見されたときの状況を再現したジオラマや、遺物を実際に手にすることができるような工夫がなされている。

フィリピン人の現状をテーマとしたギャラリーでは、代表的な民族の住居をいくつか復元し、そこに生活用具を配置して、日常生活の様子を再現している。さらに民族ごとの楽器や服装、農耕や漁労などの生業用具がところせましと展示されている。来館者はこの展示を見ることによって、フィリピン人、そしてフィリピンの文化の多様性を実感することが可能となっている。

3階のギャラリーでフィリピン人の来歴と現状を学んだ後、フィリピンの国民意識を高める仕上げとして25分間の映画が用意されている。この映画は「フィリピン人の物語」と題され、老人が孫たちの疑問、「フィリピン人はどこからやってきて、どこへ行くのか」に答えるかたちで、先史時代から現代までの歴史的事実や文化遺産を振り返るものとなっている。

フィリピン独立革命百周年を期に、国立博物館はフィリピン人としての国民意識の育成と高揚を明確に打ち出すかたちで新たにオープンした。その背景には百周年記念事業を推進してきたラモス前大統領夫妻の尽力があった。大統領府には国立博物館新設のための特別委員会が設置され、ラモス夫人が率先して資金援助を民間に求める活動を展開してきた。その結果としてフィリピン人としてのアイデンティティを確立するための啓蒙・教育に特化した博物館が実現したのである。

しかしひとりの来館者としては、博物館全体の展示スペースの中でなぜサンディエゴ号に半分近くが割かれているのかという疑問が残る。新しい博物館がフィリピン人の国民意識の形成と強化を目的とするのであれば、なぜスペイン船の展示にこれほどまでに力を入れたのであろうか。

実はサンディエゴ号の遺物をめぐっては開館前から、テレビや新聞を舞台とした国民的な議論が持ち上がっていた。発掘調査が終了したサンディエゴ号の遺物は旧国会議事堂で小規模な展示会が開催された後、フィリピン国外に持ち出され、1994年にまずパリで、続いてマドリッド、ニューヨーク、ベルリンと毎年のように欧米で展示会が開催され、1997年暮までフィリピンに戻ってくることはなかった。これに対してメディアは敏感に反応し、新聞紙上やテレビ番組の中で、なぜフィリピンから出土したものを海外でこれほどまでに長く展示するのかという問題が取り上げられた。その結果、国立博物館の館長宛てに多くの人々から投書が寄せられ、サンディエゴ号の展示は国民感情を慎重に配慮して検討され、現在のように広い展示スペースを確保するようになったという経緯があった。

しかしそれでもなお、なぜスペインの遺物をフィリピンの文化遺産として取り戻そうとするのかという疑問が残る。サンディエゴ問題が議論されていた90年代中ごろは、独立革命百周年を迎えるにあたって国民意識を見直そうとする機運が高まった時期であり、シンガポールでのフィリピン人メイド死刑判決を契機として、フィリピン人が海外で不当な扱いを受けていることに対する国民の不満が政府へ向けられた時期でもあった。こうした国民意識をめぐる議論には、たとえスペインの遺物であっても、フィリピン国内で発見された以上フィリピンの歴史の一部であり、フィリピン人としてのアイデンティティ確立のための文化遺産として、その歴史的意義を認識していこうとする姿勢をうかがうことができる。それは、スペインがかつて植民地宗主国としてフィリピン諸島の人びとを4百年にわたり支配してきた事実さえも消し去ることなく、多様な歴史的経緯を自らの歴史として認識し、取り込んでいこうとする姿勢である。そしてそのような国民的アイデンティティをめぐる議論自体が、フィリピン人としての国民意識を形成していく長い道のりのひとつの過程なのではないだろうか。

## 都市と地方の生活 Life in City and Province

小川英文 Ogawa, Hidefumi

わたしが考古学の調査を行っているのは、ルソンの東北部を流れるカガヤン川の下流域にある貝塚群である。マニラからは国道5号線をバスで北上して約600km、12時間ほどかかるカガヤン州ラロという町に貝塚はある。カガヤン川はラロの町域で500m以上の川幅をもち、周囲の山々から集めた水を湛えてゆったりと流れ、ルソン島北端のアパリの町で海に注ぐ。ラロはかつてヌエバ・セゴビアと呼ばれ、16世紀後半のスペイン人到来以来、19世紀のはじめまでカガヤン州の州都であり、また大司教座が置かれるなど、ルソン島北部経営の中心地であった。しかしそれも遠い昔のこと、現在ではスペイン人の血を濃く残す数家族の存在や、タバコ工場跡、古い教会などがかつてをしのばせるのみである。最近の出来事では、70年代に一時木材業で活況を呈し、町に多くの製材所が操業していたが、90年代に入って森林伐採が禁止されてからは電動ノコの音も絶えた。しかし70年代以降に整備された灌漑用水路のおかげで、二期作が可能となり、米作を中心とした農業が盛んである。そしてカガヤン川に面した村々では貝の採集や漁業を営む人びとがいる。貝塚はカガヤン川を何千年にもわたって生活の拠り所としてきた人びとによって築かれた遺跡である。

貝塚は先史時代のひとびとが貝を採集して食料とし、あとに残った貝殻を廃棄したものが、長年の間に積み重ねられたゴミ捨て場の跡である。それがラロでは300年前から続き、いつのまにか東南アジア最大の規模をもつ遺跡となった。貝塚には貝殻だけではなく、動物や魚、植物の種など、当時のひとびとの食べ残しが貝殻とともに廃棄されている。もちろんそのほかにも考古学になじみの深い、破損した土器や石器が含まれている。貝塚は人びとの生活の痕跡が記録されたタイムカプセルといえることができる。

しかしラロ貝塚からは何千年も昔のものばかりが出てくるのではない。現在でも貝塚の上に人びとが住み続けているためにゴミの集積が続けられており、貝塚の一番上の層にはビールの栓やコーラ瓶のかけらなどが出てくる。そのなかで最近、ハンバーガーやピザショップなどのビニール袋を目にするようになった。この理由は90年代以降、ショッピングモールやファーストフードショップが、地方都市に続々と進出してきたことによる。ラロ町の中心であるラロ・セントロでは、マニラで見かける名前のハンバーガー屋の屋台がいくつも見られるようになった。以前はマニラでしかお目にかかれなかったハンバーガーやピザの店に地方の人びとが日常的に接し、ファーストフード文化の「洗礼」を受けるようになってきた。冷めたピザが町から村へと持ち帰られることはないが、ビニール袋のほうはどんどん入ってくる。実際、最近のフィリピンにおけるショッピングモールとそれに付随するファーストフードチェーンの地方進出は目を見張るものがある。マニラやセブなどの大都市で飽和状態となったチェーン店が、ドッと地方に押し寄せた観がある。発掘現場に見られる最近のゴミの傾向が示す消費文化の浸透は、都市と地方の間の溝を埋めつつあるかのようである。

都市と地方の生活はしばしば対比されて語られてきた。都会ではいつも忙しく働いてお金を稼がないと食べては行けないが、地方ではのんびりとしたテンポで、少々お金がなくても生きていけるとか、都会ではいつも新たな刺激に満ちているが、地方ではゆったりとした日常が繰り返されているなどと語られることが多い。確かに、地方にはマニラの交通渋滞も林立する高層ビルもない。しかし消費文化の浸透はマニラとの距離を埋め、携帯電話やケーブルテレビの普及は情報社会の中に地方を確実に取り込んできている。地方ではまだ限られた人びとしか消費文化を享受できないにしても、電力、通信、交通などのインフラが徐々に整い、田舎の人とはいえ都会についての情報は豊富に持っている。地方の人びとは決して情報から締め出されている閉鎖空間に生活しているのではない。

いっぽう、地方の町から都会へと教育や生活の場を求めていく人びとも多い。半日がかりのバスの旅でラロの町とマニラはつながっている。故郷を出てマニラに生活の場を求め人びとは、まず家族のメンバーや親戚、友人など、すでにマニラに出て生活している人をたよることになる。そうした人びとが徐々に増加して、マニラにはフィリピンのさまざまな地方から出てきた人びとが集まってできた地区がいくつもある。そのような地区には故郷の名前が付けられているので、その地区名でどの地方から出てきた人びとが住んでいるのかすぐにわかるようになっていく。故郷で培われた絆をたよってマニラに生活基盤を築いていくわけだが、地方から出てきた人びとすべてに安定した職場が提供されているわけではない。マニラも他の発展途上国同様に過剰都市化傾向を示しており、都市に出てきた人びとすべてを抱え込めるほど産業整



備が進んでいるわけではない。こうして職にあづけた人びとは地方に U ターンするか、マニラにおける故郷との絆、すなわち家族、親戚、友人との相互扶助的結合関係に、経済的な支援を求めながら生活を続けていくことになる。こうして生活基盤をマニラに置くようになった人びとも、地方と切り離されずに、故郷との絆を確かめ合いながら生きていく。クリスマスなどの休日を利用して帰郷した際には、マニラでいま何が起きているか地方にさまざまな情報がもたらされる。

都市と地方は決して分離された空間ではないが、確かに両者の間には埋められない溝もあるだろう。例えば地方を対象とした開発の問題である。フィリピンにおける開発についてはすでに経済学から文化人類学まで、それぞれの専門家がさまざまな視点からの議論され、また実際に NGO の活動などで主体的な関わりをもつ人びともいるので、考古学者であるわたしが専門的な領域に口をはさめるものではない。ただフィリピンの一地方に長く住んでいて思うことは、いつも地方から遠く離れたマニラで地方の開発が計画され、語られていて、はたしてどれだけ地方の人が開発の恩恵に浴することができるのだろうかということである。開発は地方の人びとの人生に幸福感をもたらしているのだろうか。開発がしばしば地方の人びとの利害に合致していないといわれるのは、国家という枠組みの中で、中央と地方が対立的に捉えられており、周辺には利益も情報も流れにくくなるという必然性があるからだろう。国家どうして境界線が決められ、そこに住む人びとが知らないままにいつのまにか「地方」が誕生してしまった。考古資料の示すラロのかつての姿は、海に開かれた地の利を生かし、数千年前から連綿としてアジア諸地域と交流を繰り返してきたというものである。現在のラロの人びとは地方に暮らす自分を見定め、マニラとの往復の中で、新たな人生の模索を続けている。

## Archaeology and Archaeologists' Image representation for the Past.

Ogawa, Hidefumi

### Introduction

My topic is about the problems, which occur when an archaeologist tries to imagine the past of his research area. My discussion will focus on my own experience in the fieldwork, presenting archaeological "discoveries" as a limitation for archaeological studies. The second topic will shift on the problems that the Image of hunter-gatherers was constructed as a diametrical opposite of civilization in the dominant paradigm, and the archaeology has significance only when it contributes to the civilization or the myth of nation states. And at the end, I will present the necessity of change in archaeologists' recognition or epistemology as a perspective of new possibility of archaeology.

#### 1. Problems of Archaeological "Discoveries"

Please allow me to begin by sharing with you my personal experience in the field. I realized that the archaeological method I had learned in Japan was useless. I started the archaeological research in the Lower Cagayan River, Northeastern Luzon, in 1982, and it continued intermittently since then. From 1985 to 1988, I had lived in a village on the Lower Cagayan River for three years to conduct the research on shell midden sites. The objective of the research is to reconstruct the historical process of interactions between hunter-gatherer and farmer societies using the model built by the data from the ethnoarchaeological research, and verify this reconstructed model by the archaeological materials. On the first stage of the research, I had explored the shell midden sites along the river to find the scattered materials on the surface ground, like broken pottery or stone adze, and plot the site area on the map. After two years of site exploration, 20 shell middens sites were discovered distributed from Aparri on the Babuyan Channel to the upriver for 40km. The types of shell middens vary from small one, 10 meters diameter, to big one, 500 meters long and two meters deep. The results of research were published in English.

The problem started when I distributed the copies of the report to the foreign archaeologists. Actually, we archaeologists' aim at making discoveries and informing the world about it. That is to say, a struggle with archaeological works will accomplish the high evaluations of discoveries and the worldwide fame. Even though I discovered significant archaeological materials from the research I conducted, still, these were excavated in the properties of the Philippines. Ethical issues were raised as to whom these materials belong? To whom the academic results belong? Political issue concerning archaeological discoveries became a problem. I was questioned by the chief staffs of the Archaeological Division of the National Museum to whom I had sent the copies. But they did not blame me for doing such. Perhaps I already had a good relationship with them or its one of the Filipinos way of showing their hospitality. Although they didn't blame me nor criticized my decision but I felt that I have no right to continue the discoveries and publish the results under my name.

My regret that I had sent the copies of report which had hurt Filipino archaeologists' feelings badly has changed the way my research work should be since. There are some ways to avoid the political problems concerning the archaeological materials. The way I chose was not to keep the discoveries to myself, but to share the results with us all. I was in a dilemma between study and moral.

I was worried that I wanted to continue my career as archaeologist on one hand and I wanted to avoid the political problems caused by archaeological discoveries on the other.

After being worried about this, I realized that the private morals didn't resolve the political problem. And it would rather be necessary to criticize the nature of archaeological "discovery", then turn to grope for another possibilities of archaeology.

Back in Japan, I learned what I needed to do to be an archaeologist was a series of works, such as struggling with archaeological explorations and excavations in the field, making some discoveries, informing the results to the world by the contribution to well-known journals, and then to be recognized as an archaeologist. Even enthusiastic efforts or hard workings in study had been done, if these results would cause the political problems on the archaeological discoveries and hurt the feelings of Filipino

archaeologists, the archaeology, as a science itself must be questioned.

## 2. Image shift to the hunter-gatherer society

In this way, the archaeological research method, which is triggered by discovery, has been maintained from the beginning of the study. This conventional method was applied to the Philippines and I was caught in a dilemma between the study and ethics. However, at first, I had no intention of solving this dilemma through studying archaeology. And I could not find the method to solve the dilemma instantly. I set my own ethical restrictions in that I would not release my solo paper and my public announcement concerning this archaeological discovery.

However, I have to write a paper as a scholar, I published a paper that discussed the theoretical examination modeling the economical relationship between a hunter-gatherer society and an agricultural society. And I verified the model using archaeological evidence. In those days, between the late 1980s and the early 1990s, the "Kalahari Controversy" had arisen.

That controversy had the possibility of exploding the Kalahari model, which was widely accepted as a model of prehistoric and present hunter-gatherer society. By researching this controversy, I gradually understood the limitation of "archaeological discovery".

Until that time, the image of hunter-gatherer society was introduced from Kalahari Model which made by the research resulting from "Man The Hunter" (Richard Lee and De Vore, 1968), the "bushman" study\* in the Kalahari Desert in the late 1960s. This image was characterized by a high contribution by women in gathering activities or the existence of long leisure time. Before the study "Man the Hunter", the image of the hunter-gatherer society was that of a people who were always hungry and wandered from place to place searching for foods.

Once the study result of Lee et al was published, this image was changed to that of a flexible "self-sufficient (independent)" egalitarian community. They said that the hunter-gatherer society had a low labor occupancy ratio but people maintained a high life standard and that they were well adapted to natural environmental conditions. It was favorably accepted by archaeologists and was introduced as the model for the prehistoric hunter-gatherer society for everywhere in the world.

I question the concept of "independence" or self-sufficiency. Because I am trying to elucidate the prehistoric interdependence of hunter-gatherer society and agricultural society, which had the different subsistence background, the independence is not convincing to me. The concept of independence gives a biased and preconceived notion that the prehistoric hunter-gatherer society had developed without affecting the agricultural society since the Paleolithic era. However, the "independence", to put it in other words, the "purity" of hunter-gatherer society is very convenient to archaeologists who advocate the simple model, which eliminates the noise from the outside world.

Lee's hunter-gatherer social model was criticized for several years. The point of controversy was exactly the concept of "independence". The revisionist, who criticized Lee's Kalahari Model, insisted that prehistoric bushman had traded with an Indian Ocean trading group on the African east coast and that the Bushman had managed to supply raw materials to them, however, this network was broken off after the Age of Great Voyages, therefore, the bushmen were forced to change their life gradually to adopt the "self-sufficient (independent) life". They said that the prehistoric Bushman had definitely not been independent and had communicated with other societies and that they had traded with the other societies since the prehistoric age (Wilmsen and Denbow, 1990:499-503). Lee himself carefully avoided defining the Kalahari Model of the bushman's society as a survivor of the Stone Age. However, it contains some problems. His theory was consistent with "timeless sense (Shott, 1992:845)" in that he assumed the hunter-gatherer society had not changed since the prehistoric age. Also his model had not considered the historical background of the Bushman.

Furthermore, it is possible to indicate the problem of the Kalahari Model as the dominant way of the construction and representation of the hunter-gatherer society or "Others" by the viewpoint of essentialism. Archaeologists, including me, who accepted the Kalahari Model, intend to look for the independent, isolated and pure hunter-gatherer society in their fiction or the realm of dominant paradigm and use this illusion as a model for the reconstruction of the hunter-gatherer society's past. In the background of their way of reconstruction of others' past, it is concealed the viewpoint that the interactions between hunter-gatherer society and the surrounding societies shall contaminate the cultural tradition and purity of the society.

When the specific model is created by extracting "traditional elements" arbitrarily from the hunter-gatherer society and by

applying it to their prehistory eliminating the "contamination" of the outside society, it should be a biased approach which will only result in isolating the hunter-gatherer society from the reality, peripherized in the World System. This way of research must be indicated as our archaeologists' problem in that we have studied real hunter-gatherer society by eliminating the "contamination" of the modern society in order to observe and describe it in the timeless sense of "ethnographic present". It was an essentially biased observation applied to the hunter-gatherer people as a Savage Others.

The essential characteristic of the Kalahari Model reflected a periodic trend, restriction of researchers in the 1970s, and the "dominant paradigm" at that time. After the Vietnam War, the skepticism on civilization, which should bring a bright future, became the primary factor to make us archaeologists to built the utopia model in the "non-civilized world" that must be a harmony of nature and human. That is to say, that skepticism became the primary factor in creating the new concept of "Noble Savage" in the hunter-gatherer society. However, at that time, this pessimistic model had a firm meaning with an ideological background to reflect on the civilization. The researchers tried to create the ideal world where the people had a good relationship with nature, which was different to that existing in the real world to which the researcher belongs. Finally, they created an image of the "independent", "pure" and "traditional" hunter-gatherer society. And it is now accepted as the common and prevailing image of the hunter-gatherer society. The beginning of this trend can be seen in "Man the Hunter". Also Salins (1972) could be the evangelist to disseminate the new image. The current ecological ideologies, the understanding of peripherized societies having their own natural philosophy, and a discourse of strategic essentialism, which advocated peripherized societies, are all recognized in the 1970s.

Back in the Philippines, in the 1970s, using ethnoarchaeological methodology, a new model of prehistoric hunter-gatherer society was built. However, it was strongly influenced by the Kalahari Model. The "exchange adaptation" model, which explains the mechanisms of the prehistoric interdependence between the hunter-gatherer society and the agricultural society in the tropical rain forest area, tried to supersede the isolation model put forward by Heinegeldeln. Mr. And Mrs. Peterson presented this model, when they were researching at Palanan, Isabela (Peterson and Peterson, 1977).

However, this model was also based on the limited conditions whereby the social mechanism was completed in a closed system without being affected by the outside world. It was based on a model advocating stability from the prehistoric age till the present, with static "equilibrium" maintained without any alteration. It is more natural that dynamic movement destroys the stability and equilibrium of a society and produce new change in the society.

On the other hand, Dr. Tom Headland, the revisionist of the Kalahari Model, had struggled to remove the image of the independent hunter-gatherer society, which still strongly exists among archaeologists. Headland had researched in Agta of Casiguran, Aurora on the Pacific coast of the Sierra Madre for a long time. He found that it was impossible for the hunter-gatherer society of the tropical rainforest areas in the prehistoric age to have survived without exchange with agricultural societies to obtain carbohydrates. He researched also prehistoric archaeological sites in the tropical rainforest area prior to the immergence of agricultural technology to attest to his hypothesis. He made clear that there were no archaeological sites of the Paleolithic age in tropical rainforest area except on the Malay Peninsula. However, many archaeologists who study tropical areas not only Southeast Asia but also South America and Africa had opposing ideas. Namely, they still recognized the hunter-gatherer societies as maintaining an "independent", self-sufficient" and "pure" society.

The hunter-gatherer society has been represented as a "Cruel" Savage or a "Noble Savage". After all, the archaeology represents the hunter-gatherer society as an essential image, which is the "diametrical opposite" to civilization. However, there is little movement to change the direction of the study by reflection on this representation. It is necessary to question why the hunter-gatherer societies are represented as a diametrical opposite to civilization at the epistemological level and to fumble for a new direction for prehistoric hunter-gatherer social study.

### **3. Archaeologists who contribute to create the myth of "civilization" and "nation State"**

The essentialistic recognition of others originates in the recognition of the hunter-gatherer society as the diametrical opposite of civilization. At the same time, the history of the hunter-gatherer society has been essentially represented as a mirror of others, which reflects and confirms our own civilization. And Archaeology, which traces the footprint of "civilization", has existed and functioned to contribute to the nationalism and national culture, which have essentially constructed the national history. When an archaeologist

goes back to a past and then returns to the present time, he/she reconstructs essentially his/her own national history along with the direction of civilization. Specifically, archaeologists including me who reconstruct the past of foreign countries without considering Japanese prehistoric cultural relationships with the one of the Philippines have a further strong responsibility regarding the colonialistic representation of others' past.

It has to break through the present situation that the image of the others' past is constructed by the inference of a contemporary social context. And it is necessary for the archaeologist to quest for other possibilities in archaeology. At the present situation where own and others' past are essentially represented by reflecting the social context of the minorities and the majority within the nation states and relationship between the center and periphery of the world system, the archaeologist will never be free from political dilemma caused by the "archaeological discovery", as I have already experienced.

As archaeology contributes to nationalism and national history, my past faults are bound to be repeated by other archaeologists. Of course, I have no intention of blaming archaeology for my failure.

### Conclusion

Finally, I would like to conclude the aforementioned assertion. When I had realized that archaeological discovery brought political dilemma, my research method and direction drastically changed. Also, through the discussion of the Kalahari Controversy, I acquired the method of criticizing the archaeologists' framework of recognition and the problem of the dominant paradigm from the standpoint of a social constructionists' view. Furthermore, I noticed the necessity to build a concrete archaeological social model that allows for the prehistoric dynamic movement of social interaction. These epistemological viewpoints gave me the academic perspectives that I should start to discuss the problems of political dilemma produced by archaeological discovery beyond the private ethical problems affecting Filipino archaeologists. These perspectives can present the new archaeological possibilities both in the Philippine and Southeast Asian archaeology. However, it is accurate to forecast the occurrence of political confrontation between essentialism and social constructionism. I cannot find the solution for this problem yet. By posing this problem, I would like to close my discourse.

### References

Headland, T. N.

1986 Why Foragers Do Not Become Farmers: A Historical Study of a Changing Ecosystem and Its Effect on a Negrito Hunter-Gatherer Group in the Philippines. Two vols. Unpublished Ph. D dissertation. University, Microfilms International, Ann Arbor.

1987 The wild yam question: How well could independent hunter-gatherers live in a tropical rain forest ecosystem? *Human Ecology* 15: 463-491.

Headland, T. N. and R. C. Bailey

1991 Introduction: Have Hunter-Gatherers Ever Lived in Tropical Rain Forest Independently of Agriculture? *Human Ecology* 19:2:115-122.

Headland, T. N. and L. A. Reid

1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30:43-66.

1992 Holocene foragers and interethnic trade: A critique of the myth of isolated independent hunter-gatherers. In Gregg, S. A. (ed.) *Between Bands and States*: 333-340. Center for Archaeological Investigations. Southern Illinois University at Carbondale. Occasional Paper No.9.

Lee, R. B.

1992 Art, Science, or Politics? The Crisis in Hunter-Gatherer Studies. *American Anthropologist* 94: 31-54.

Lee, R. B. and I. De Vore (eds.)

1968 *Man the Hunter*. Chicago: Aldine

小川英文 (Ogawa, H.)

1996a 『狩猟採集民ネグリの考古学 - 共生関係が提起する諸問題 -』スチュアート ヘンリ(編)『採集狩猟民の現在』183-222, 言叢社 (Archaeology of the Negrito Hunter-Gatherers - the archaeological problems on the Symbiotic, Interdependent relationships between Hunter-gatherers and Farmers. In Henry Stuart (ed.) *Gatherer-Hunter, Today*: 183-222. Tokyo: Gensosha. In Japanese)

1996b 「東南アジア考古学への招待」、吉村作治編『世界考古学』65-108、有斐閣 (Introduction to Southeast Asian Archaeology. In S. Yoshimura (ed.) *World Archaeology*: 65-108. Tokyo: Yuhikaku. In Japanese)

1997 「貝塚洪水伝説 - フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」『東南アジア考古学』17: 119-166 (Shell Midden was made by the Noachian Deluge.-Ethnoarchaeology of the Shell Middens and Shell Gatherers in the Lower Cagayan River, Northern Luzon, Philippines-. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 17: 119-166. In Japanese)

1998 Problems and Hypotheses on the Prehistoric Lal-lo, Northern Luzon, Philippines - Archaeological Study on the Prehistoric Interdependence between Hunter-Gatherers and Farmers in the Tropical Rain Forest - 『東南アジア考古学(*Journal of Southeast Asian Archaeology*)』18: 123-166

- 1999a 「東南アジアと日本の貝塚の比較」『季刊 考古学』66: 29-34 (The Comparison between Southeast Asian and Japanese Shell Midden Sites. *Quaternary Journal of Archaeology* 66: 29-34. In Japanese)
- 1999b 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」『民族学研究』63-2: 192-202 (Archaeologist's Image Representation of Hunter-Gatherers in Southeast Asia. *The Japanese Journal of Ethnology* 63-2: 192-202. In Japanese)
- 1999c Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学 (Journal of Southeast Asian Archaeology)』19: 93-114.
- 1999d 「自然と生業」上智大学アジア文化研究所編『新版 入門東南アジア研究』: 23-35、めこん (Natural Settings and Subsistence. In Institute of Asian Cultures, Sophia University (ed.) *Introduction to Southeast Asian Studies, new edition*: 23-35. Tokyo: Mekong. In Japanese)
- 1999e 「東南アジア 発掘の歴史と考古学の課題 「古代」への「あこがれ」が取り結ぶイデオロギーの磁場」、吉村作治編『東南アジアの華 アンコール・ポロブドゥール』: 75-89、平凡社 (Southeast Asian Archaeology – its history and issues. In S. Yoshimura (ed.) *Ankhor and Borobudur*. Tokyo: Heibonsha. In Japanese.)
- 2000a 「狩猟採集社会と農耕社会の交流 - 相互関係の視角 -」、小川英文編『交流の考古学』: 266-295、岩崎卓也監修『シリーズ 現代の考古学』第5巻、朝倉書店 (Prehistoric Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers- special reference to the Interdependency. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*. (Archaeology Today Series Vol. 5), Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese).
- 2000b 「総論 交流考古学の可能性」、小川英文編『交流の考古学』: 1-20、岩崎卓也監修『シリーズ 現代の考古学』第5巻、朝倉書店 (Introduction - Perspectives in Archaeology of Interaction. In H. Ogawa (ed.) *Archaeology of Interactions*. (Archaeology Today Series Vol. 5), Tokyo: Asakura Shoten. In Japanese).
- 2000c 「狩猟採集民」、「ナショナリズム」、「文明」、安斉正人編『用語解説 現代考古学の方法と理論 III』: 131-141, 187-198, 227-234、同成社 (Hunter-Gatherers, Nationalism, Civilization. In M. Anzai (ed.) *Method and Theory in Contemporary Archaeology* Vol.3: 131-141, 187-198, 227-234. Tokyo: Dohseisha, In Japanese).
- 2000d (ed.) 『ラオ貝塚群の発掘調査 - 東南アジア島嶼部先史時代の考古学的調査 - Excavation of the Lal-lo Shell Middens』269 pages、文部省科学研究費報告書 (Report for the Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research) of The Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Monbusho), In English).
- Peterson, J. T.  
1978 *The Ecology of Social Boundary*. University of Illinois Press.
- Peterson, J. T. and W. Peterson  
1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In Allen, J., J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul*: 567-599. New York: Academic Press.
- Sahlins, M.  
1972 *Stone Age Economics*. Chicago: Aldine. (1984 『石器時代の経済学』山内昶訳、法政大学出版局)
- Shott, M. J.  
1992 On recent trends in the anthropology of foragers: Kalahari Revisionism and its Archaeological Implications. *Man* 27(4): 843-872.
- Wilmsen, E. N. and J. Denbow  
1990 Paradigmatic history of San-speaking peoples and current attempts at revision. *Current Anthropology* 31: 489-524.

## 邦文

### 考古学、考古学者そしてそれらが表象する過去

#### 小川英文

#### はじめに

これからの話は、考古学や考古学者がフィールドの過去を想像する際の問題点についての提示です。

そのために、まずわたしのフィリピンでの考古学のフィールドワークの経験から話をはじめ、「発見」を契機とする考古学の限界性を問題とします。つぎに、「発見」を棄てたわたしの研究が、理論やモデルづくりに向かう過程で、狩猟採集社会のイメージが支配的パラダイムのなかで築かれ、文明の対極として描かれてきたこと、そして考古学が文明と国民国家の神話に寄与するかたちでしか存在意義をもてないという問題を提起します。最後に、考古学の新たな可能性の模索の試みとして、考古学者自身の認識の転換が必要であるということを提示します。

#### 1. 「発見」を契機とする考古学

まず恐縮ですが、個人的な話からはじめます。それは、わたしが日本で学んだ考古学の方法が使えなかったという衝撃です。わたしは1982年からカガヤン州で考古学調査を開始し、今日まで断続的にほぼ20年近く、考古学調査を続けてきました。特に85年から88年までは3年間、カガヤン河下流の村に住み込んで調査していました。調査の目的は、狩猟

採集社会と農耕社会との相互関係のメカニズムを歴史的プロセスとして、考古学的手法で跡付けていくことです。そこでカガヤン河の両岸を毎日歩き、貝塚を中心とする遺跡をさがし、土器のかけらを拾い、遺跡の範囲を地図に落とす作業をしていました。2年間ほどこの作業を続け、遺跡がバブヤン海峡に面したアパリの町から40kmカガヤン河をさかのぼった地点まで、両岸に20ヶ所以上点在していることが明らかになりました。これらの貝塚は径10mの小さな規模のものから500mにおよぶ巨大なものまで、いくつかのタイプに分けることができました。それからこの調査の英文報告書をつくりました。

ここで問題なのは、その報告書をフィリピン以外の海外の研究者に送ったことです。もちろん考古学では、考古学者個人の「発見」を世界に知らせることが学問的な目的となります。すなわち考古学という学問に熱意をもって取り組むということ自体が、「発見」を評価され、この世界で有名となることで達成されていくわけです。しかし実際には、「発見」された遺物はフィリピンで掘り出されたわけです。これが誰のものであるのか？学問的成果は誰に帰するのか？このとき出土遺物をめぐって政治的な問題が立ち起こってくるわけです。わたしが「発見」の報告書をフィリピンから海外へ発送したことは、「いったいどこに送ったのか」というかたちで国立博物館では問題になったと認識していますが、すでに博物館の人びとは友人関係を築いていましたので、面と向かって抗議・非難されることはありませんでした。非難されなかったからといって、しかしそれではこのままわたしがなんの痛みもなくフィリピンでの「発見」を学問的熱意をもって調査し、発表し続けてもいいということにはなりません。

このときのわたしの行為に対する反省と、フィリピン人考古学者の心情を傷つけてしまったという悔恨は、その後のわたしの調査・研究のあり方に大いに影響することになりました。こうした政治的問題を回避する手段はいくつか考えられますが、わたしが採ったのは「発見」を自らのものとしなさいというものでした。考古学者として生きていきたい、しかし感情をめぐって政治的な問題を起こすような調査はしたくない、というジレンマは、学問と倫理というハザマでわたしの悩みの種でした。

しかし長い間悩んだ末に、考古学者としての個人的な倫理性だけを問題にしてもこの政治的問題は解決することはないということに気づきました。むしろ「発見」という考古学という学問が宿命的に抱えている問題を批判的に捉え、新たな考古学的方法を模索する必要があると考えるようになりました。考古学が学問として成立するために、熱意をもって調査を続け、一定の「発見」を特定の学術雑誌で発表するということによって、職業的考古学者として独り立ちできるという日本で学んだ方法が、フィリピンでは政治的問題を喚起すること、フィリピン人の心情を傷つけてしまうことを、考古学の中から学問的に問い直されなくてはならないというように考えるようになったわけです。

## 2. 狩猟採集社会のイメージの転換

このように「発見」を契機とする考古学の研究方法は、その誕生以来現在まで引き継がれているものですが、そうした考古学の方法自体がわたしにとっての外国フィリピンで展開されたとき、学問と倫理のジレンマに悩まざるを得ませんでした。しかしながらこのジレンマをはじめから学問的に解決して行こうという意図をもってはいたわけではありませんでしたし、その方法もすぐには見つかりませんでした。むしろ自らに倫理的拘束を与え、調査はしても単著のかたちで「発見」の第一報を世界に発信することはやめました。それでも論文は書かないといけないので、狩猟採集社会と農耕社会との経済的相互関係を考古学の資料を用いて検証しながら、社会的・政治的關係へとアプローチするためのモデルづくりという理論的考察で論文を書いていました。ちょうどその頃、80年代末から90年代初めにかけて、これまで先史狩猟採集社会のモデルとして一般に受け入れられてきたモデルを覆す、カラハリ論争が起きていました。この論争を追っていくうちに、「考古学的発見」の限界が徐々に見えはじめてきました。

それまで狩猟採集社会のイメージは、リチャード・リーらによるカラハリ砂漠のブッシュマン研究の成果である *Man The Hunter* (Lee and De Vore 1968) から60年代末以降に導き出されてきました。そのイメージは、生業における採集食物の重要性や採集活動における女性の高い貢献度、そして余暇の時間の存在などによって決定付けられました。*Man The Hunter* 以前には、いつも腹を空かせ、食料を求めて移動する人びとというイメージが狩猟採集社会を覆っていました。しかしリーらの研究成果が世に出ると、実は狩猟採集社会は低い労働投下量で高い生活水準を享受し、自然環境の諸条件に密接に適応するかたちで柔軟に構成された、「自立的(自律的)」な平等主義的共同体であるというイメージが広まりました。この狩猟採集社会のイメージは南アフリカの現在のブッシュマン社会から導き出されたものでしたが、考古学者に好意的に受け入れられ、世界各地の先史狩猟採集社会研究にモデルとして導入されました。ここで「自立的」というのはわ

たしにとって重要です。なぜならわたしは狩猟採集社会と農耕社会という生業基盤が異なる集団間の相互関係、相互依存関係の歴史プロセスのメカニズムを解明しようとしていますので、「自立性」はわたしにとって都合が悪いわけです。旧石器時代からその社会が変化なく現在に到ったという先入観を与えてしまうからです。しかし狩猟採集社会の「自立性」あるいは「純粋性」は考古学者にとっては好都合です。なるべくシステム外部からの雑音が少ないほうがモデルづくりは容易だからです。

リーらの狩猟採集社会モデルが批判され、数年におよぶ論争の争点となったのは、まさにこの狩猟採集社会の「自立性」をめぐってでした。リーらのカラハリ・モデルを批判する修正主義者によれば、かつてのブッシュマンはアフリカ東海岸の交易集団との交流をもち、インド洋交易の末端で原材料の調達に携わっていたが、大航海時代以降このネットワークが断ち切られてから、徐々に現在のような「自立的」生活を送るようになった。けっして先史時代からずっと他集団との交流をもたずに生活していたわけではないと主張しているわけです(Wilmsen and Denbow 1990:499-503)。カラハリモデルについてリー自身は現在のブッシュマン社会を「石器時代の生き残り」とすることは慎重に避けてはいますが、それでも過去から現在まで変化のない社会とみなすような時間の観念(timeless sense)で狩猟採集社会をとらえていたこと、あるいはカラハリモデルの歴史性の欠如を指摘することができます(Shott 1992: 845)。

さらにカラハリ・モデルには、狩猟採集社会を、あるいは他者を本質主義的に想像することの問題も指摘することができます。カラハリ・モデルを受け入れた考古学者たち(わたしも含めて)が行ってきたように、より「自立的」で、外界から「隔離」された「純粋な」狩猟採集社会をさがし求め、それをモデルとして過去を再構築しようとする姿勢の背後には、狩猟採集社会の周囲に存在する社会との「交流」を、「伝統」や「純粋性」の「汚染」とみなす視角が潜んでいます。目の前の狩猟採集社会から「伝統項目」だけを恣意的に抽出し、外部世界からの「汚染」を排除して先史時代にあてはめるモデル構築の材料にするとしたら、それは世界システムのなかで周辺化されている狩猟採集社会を現実から切り離す一方的な態度にすぎません。これは近代の影響による「汚染」を狩猟採集社会から防ぐために、「民族誌的現在」という静止した時間に閉じ込めて観察、記述する方法を用い、本質主義的な他者表象をつづけてきた、われわれの問題として提示されなくてはなりません。

カラハリ・モデルの本質主義的性格は70年代における研究者に課せられた時代的制約、あるいはその時代の支配的パラダイム(dominant paradigm)による制約に起因しているものと考えられます。ベトナム戦争以降、輝かしいはずの「文明」へ投げかけられた疑問は、「非文明世界」における自然と人間の調和にユートピアモデルを築かせる直接的要因となりました。すなわち新たな「高貴なる野蛮人」イメージを狩猟採集社会に重ねることになりました。しかしながら、厭世的モデルもこの時代には、文明への反省という確固たるイデオロギーとしての意義をもっていました。研究者は研究対象が自然との関わり方に研究者の属する世界とは異なる考え方をもっていることを理想化し、新たな狩猟採集社会のイメージを生み出したわけです。これが広く世界中の狩猟採集社会に共通するイメージとして受け入れられることになりました。その端緒は*Man the Hunter* にみることができ、新たなイメージを広める伝道師としての役割をサーリンズ(1972)にみることができます。現在のエコ思想や周辺民族がわれわれとは異なった自然観をもつという認識、そして現在周辺民族が唱える戦略的本質主義の言説などは基本的にこの時期に生み出されたものと考えられます。

70年代には、民族考古学(Ethnoarchaeology)の手法による狩猟採集社会の過去の復元モデルがつくられました。それでもカラハリ・モデルの影響を強く受けています。パラナンで調査を続けていたピーターソン夫妻によって提示された、先史狩猟採集社会と農耕社会との相互依存関係のメカニズムを説明する交換適応(exchange adaptation)モデルは、ハイネゲルデルンによる狩猟採集社会の「隔離モデル」を乗り越えようとするものでした(Peterson and Peterson 1977)。しかしそれも、閉鎖的なシステム内で完結するメカニズムが、外界からの影響を受けず、先史時代から現在までの長期にわたって安定的で、静的な「均衡(equilibrium)」が変化せずに存続してきたという説明に終わっています。安定性や均衡を壊す動態が、社会の変化をもたらしたと考えた方が自然です。

いっぽう、カラハリ・モデルの修正主義者であるヘッドランドは、今でもなお研究者に根強く残る自立的狩猟採集社会のイメージにチャレンジしました。シエラマドレの太平洋岸で長年アグタの調査を続けてきたヘッドランドは、熱帯雨林の先史狩猟採集社会が農耕社会との交渉なくして、炭水化物の供給なくして存在することは不可能であったことを提示しました。このために彼は農耕社会出現以前の時代における世界中の熱帯雨林内の遺跡を調べ、マレー半島を除いて旧石器時代の遺跡が熱帯雨林に存在しないことを明らかにしました。しかしこれに対し、熱帯地域を研究する多くの考古学者たちは否定的でした。すなわち、考古学者の認識のなかでは、狩猟採集社会はいまなお「自立的」で「純粋」なものとして



捉えられていることは明らかです。

狩猟採集社会はこれまで「残虐な」あるいは「高貴な野蛮人」のいずれかのイメージで描かれてきましたが、いずれにしても考古学は「文明の対極」という本質主義的なイメージで狩猟採集社会を描いてきました。そしてそのことに対する反省から新たな研究の方向性を見出すような動きはほとんどありません。そのためには、なぜ狩猟採集社会を文明の対極というイメージに閉じ込めてきたのかという問いから発した、認識論のレベルでの問題の提示と、新たな先史狩猟採集社会研究の方向性の模索が必要となります。

### 3. 「文明」、「国民国家」の神話づくりに寄与する考古学

本質主義的な他者認識は、狩猟採集社会を「文明の対極」として捉えるしかたに起因しています。同時に本質主義的な他者表象は、わたしたちが築いてきた文明を確認するための「写し鏡」として狩猟採集社会の歴史を見てきたということを示しています。そしてわれわれの歴史、すなわち「文明」の足跡を追う考古学は、「国民の来歴」を本質主義的に構築するナショナリズムあるいは国民文化に寄与する学問として成立し、機能してきました。考古学者がいったん過去に遡りそして現在へ戻るとき、文明の方向性に沿った「国民の来歴」を作り上げています。わたしのように、日本との先史時代の文化的関係をまったく視野に入れずに、外国の過去を再構成する考古学者は特に、植民地主義的な「他者」の過去表象という問題に対して、さらに重大な責任を負っています。

他者のイメージや過去が、考古学者が生きる現代の社会のコンテクストに左右されながら構築されている現状を抜け出して、新たな考古学の可能性を模索する必要があります。国民国家のなかのマイノリティとマジョリティ、世界システムの周辺と中心という関係の中で、過去が表象されている現状では、「考古学的発見」を契機とする考古学にはわたしが経験した政治的ジレンマの問題が絶えることはありません。ナショナリズムや国民の来歴に寄与する国民国家の考古学が存在しない現状では、わたしが犯した過ちは繰り返されることとなります。わたしの過ちを考古学のせいにするわけではありませんが。

### おわりに

最後に以上の議論をまとめると、考古学的発見が政治的ジレンマを生むということに気づいてから、わたしの調査・研究の方法は大きく変わりました。そしてカラハリ論争をつうじて、考古学者の認識のワク組みや支配的パラダイムの問題に、社会構築論的な立場からの批判が可能となりました。考古学的には、交流という動態を視野に入れた、具体的な社会関係のモデルをつくる必要性に気づくことができました。これらの認識論的な旅を経ることによって、フィリピン人考古学者との関係における個人的な倫理の問題から、考古学的発見をめぐる政治的ジレンマを学問に内在化させる方向性を見出すことはできました。こうした学問の方向性はフィリピン、あるいは東南アジア考古学の可能性として提示することができます。しかし、その際おのずと発生することが予測される、本質主義と社会構築論との政治的対立をどのように乗り越えていくかという問題は未解決のままです。この問題を提起してわたしの発表を終わります。